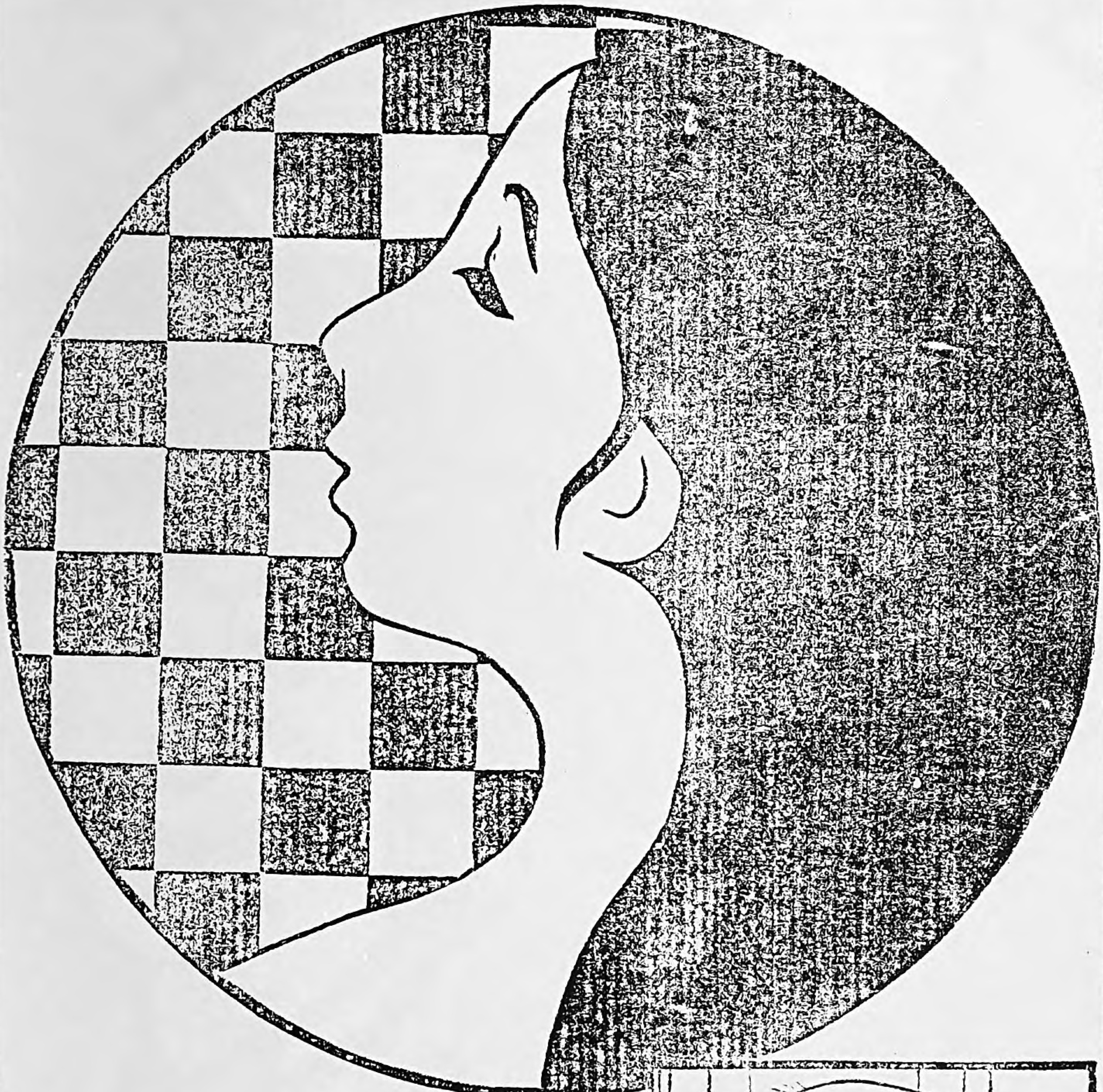
女子文壇

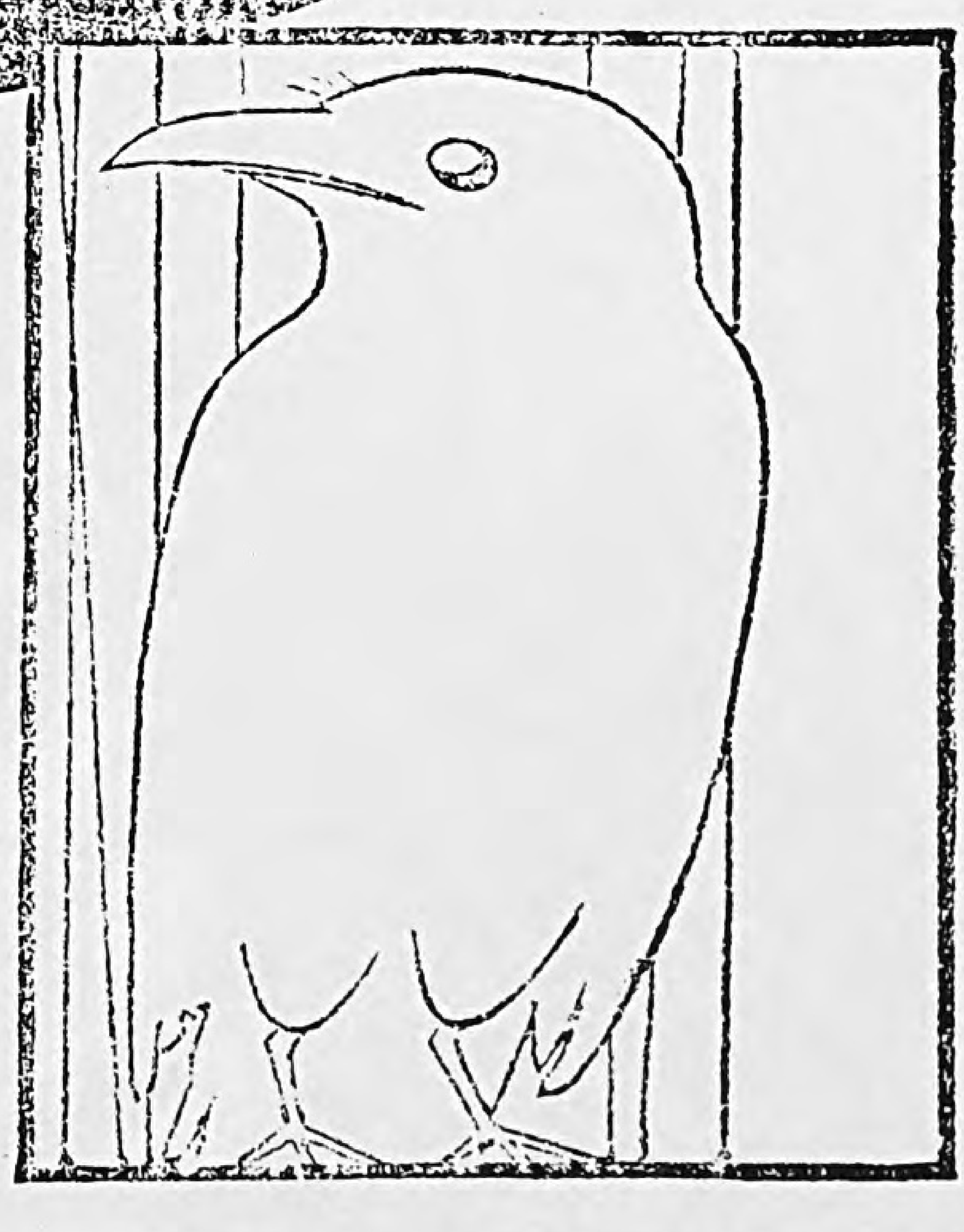
第七年第拾號



明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

東京女子文壇社發行





少女



一日發刊 八月號 三巻八號 要目

紙數百餘頁
定價一冊 金拾錢 送料壹錢
半年 送料とも 六十三錢
一年 送料とも 一圓廿錢
口繪挿繪美

發行所 東京市京橋區大鋸町 振替口座壹七貳九番 女子文壇社

▲本社に取揃あり 賣捌全國雜誌書店

女子文壇八月號（第七年第拾號）目次



以下九種の書は百年後でも三重縣桑名矢田磧弘報館で販賣す

萬物 製法秘術寶典

代價郵税共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目録、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●燐寸玉●齒磨●石鹸●洗粉●白粉●香水●紙石盤●のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣枕●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●鑵詰●ラムネ●リモナーデー●ジンジャエル●蜜柑水●甘酒●味噌●醤油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術** 器械不用 **早印刷法**等**百**餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は藥店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金** 又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書籍廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても慥に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目録鬼火の妖術●口中より火焔を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を呑む法●皿廻しの術●かるた逆立術●銀貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●籠に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黒いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鷄卵を踊らせる法 附錄 **驚神的大魔術** 其他尚面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齡を當る法●顔を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺惡き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●歌がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢(郵券代用は廿五錢)

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目録天に文字を顯す術●白雲を闇黒にする術●夢に天國に遊ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止る術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙術●**切支丹バテレン**集の妖術●モルモット術●金錢自由吸術●繩拔の妖術●火渡の奇術●竹折術●武道**隱身術**●人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●棒を掌につけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて六人を自由に揚げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如しそして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跳足で逃げ出す術ばかり。

禮法及婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前夜●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出産死亡居其他澤山。郵税共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の内容は秘密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。(他人に見えぬやう密封にて送ります) 定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵税共廿二錢

道具不要輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で米より費用少くて美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵税共廿四錢

簡易 素人治療法

感冒●胃病●痔●痳病●子宮病●眼病●寢小便●男女陰部諸病●頭痛●凍腫●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髮を黒くする法●其他萬病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

●振替貯金口座番號東京第六九八番　三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

◎割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割増

羽仁もと子主筆

婦人之友

八月一日發行　**第三號**　一冊金十五錢 郵税一錢五厘　（六冊前金九十錢 十二冊一圓七十五錢）郵税共

◎忙しく暮す私の日々……北尾夫人
◎母乳の外に嬰兒の食物はない……加藤博士
◎規則正しき授乳のしかた……羽仁もと子
◎子供のきものは何がよきか……同
◎かうして子供に食事をさせる（女中訓）
◎中流の家庭に於る交際費……羽仁もと子

◎呪はるゝ女子教育……文學博士三宅雪嶺
◎かくして眞の夫婦生活に入る　羽仁もと子

◎千五百圓で出來る洋風住宅
◎掃除のしかた（納戸のかたづけ方）
◎恰好よき着物の仕立方……延子
◎ネクタイの編方……寺西綠子
◎私どもの子供の夏帽子（二人分で七十錢）
◎新案の寢冷知らず懸賞當選發表

▲夫の放蕩に苦める妻へ……
▲名畫にあらはれし子供……星野
▲假名文字の習ひ方……大下藤次郎
▲鉛筆畫の習ひ方
▲文藝その月々……河井醉茗
▲フロスの水車場……松本雲舟
▲表情術と日常生活……三枝
▲夏のお化粧……のぶ子
▲暑中の客あしらひ……たづ子
▲三杯酢とそぼろ……みどり
▲八月一杯の總菜獻立……羽仁もと子
▲家政問答……

▲大洗海岸（中澤弘光筆）
▲わが巣（リヒテル筆）
▲英國王子の魚釣（寫眞）
▲三宅雪嶺博士の家庭（寫眞）
▲少女の一日（寫眞）
▲はらから（寫眞）早起（寫眞）
▲子供の髮かたち（寫眞）
▲誕生より入學まで（寫眞）
▲子供のあるらしき家（寫眞）
▲學校園のいろ〳〵（寫眞）
▲夏の玩具のいろ〳〵（寫眞）
▲愛犬クロ（寫眞）

初號四版　二號再版

東京小石川區雜司ヶ谷町　振替口座東京壹壹六〇〇
婦人之友社

櫛と笄と簪

御婦人頭髪用装飾品は
最も流行せる御品を御用ゐ遊ばすをよしとす。

△御婚禮に必要なる本鼈甲花付櫛笄(八十五圓以上)あり。
△丸髷用としては蒔繪又は割具入櫛笄(二圓以上)あり。
△ハイカラ向としては佛國製束髪用櫛(一圓以上)あり。
△土佐珊瑚(四圓以上)又は古渡珊瑚玉簪(廿五圓以上)あり。
△夏向として如何にも涼さうな翡翠の根掛(十圓以上)あり。
△御孃樣、女學生向としては巾廣のリボン(一尺廿錢以上)あり。
△三越の新案にして大評判なる飛行機簪(二十五錢)あり。

三越は最も信用を重んず
三越へ御出での上安心して御求め遊ばされたし。

東京駿河町

三越呉服店

盛粧

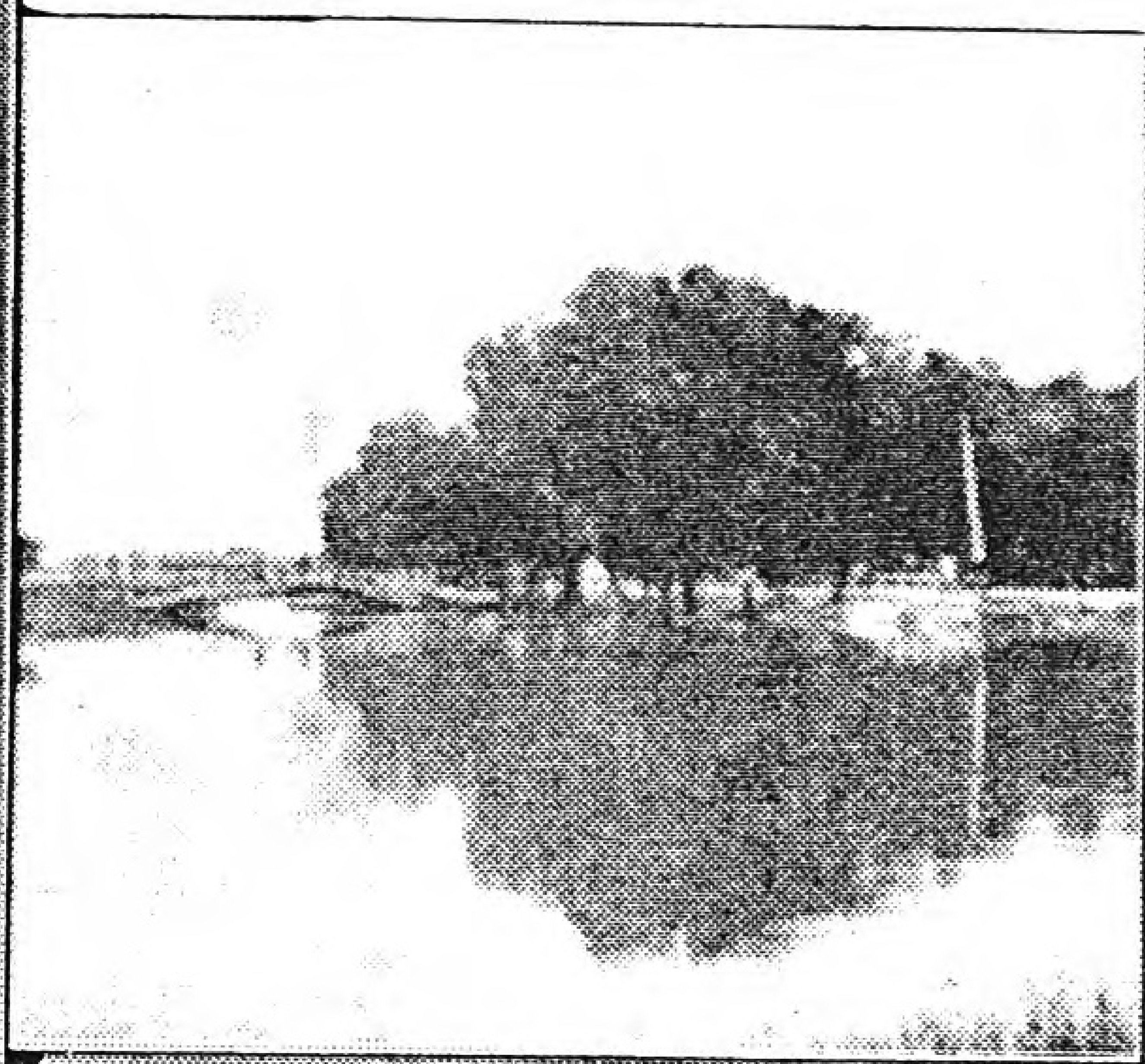


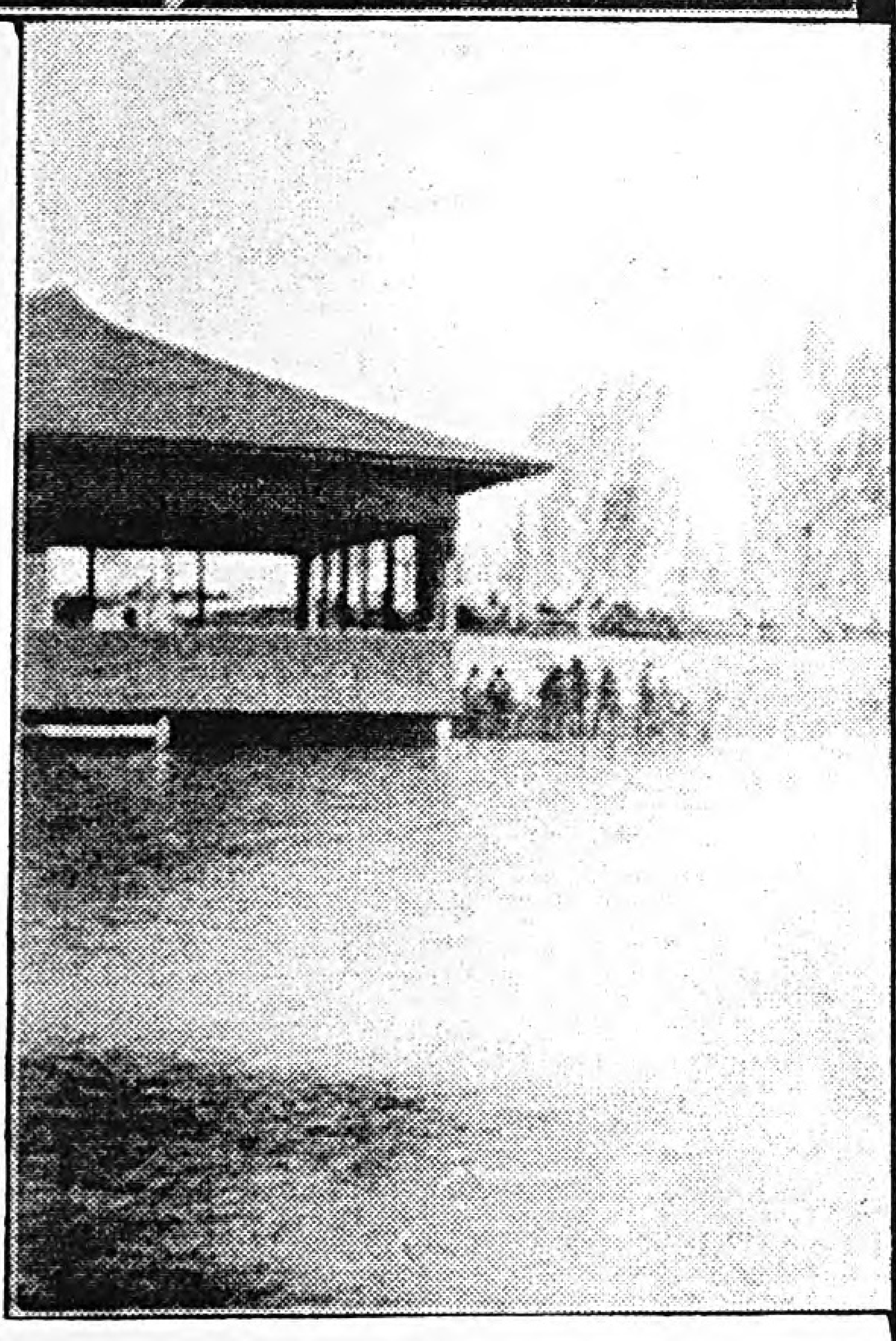
日本銀行總裁男爵高橋是清氏令孃和喜子孃

波光



理學士三宅恒方氏夫人やす子







井上ドクトル令弟温氏夫人

新學期開始

和歌講義錄

◎本會は眞面目に短歌を研究し試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的智識を供給する。短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人々の入會を待つ！

本會執筆講師 ―― 尾上柴舟 ○金子薫園 ○水野葉舟
太田水穗 ○岩野泡鳴 ○三木露風
窪田空穗 ○若山牧水 ○前田夕暮
其他有名大家數名擔任

此際至急入會者に限り**入會金を免除す**

見よ!!! 舶來ラフ紙印刷は本講義錄唯一也

全國新聞批評一斑

◎近年敷島の道を學ぶ者都鄙益々多きを加へ來れるは喜ぶ可き事なるも其作往々杜撰に流れて傑作を得るに難きは屬界の通弊たり今や大日本短歌會なる者設立され之が好指導たらんとす、其内容に輯錄せる材料悉く時代の要求を滿し、講述叮嚀眞箇初學者の良師友たり(小樽)◎新派和歌を學ばんとする者の好楷梯たるべし(山梨)◎苟くも和歌研究者には無二の良師友たり(北海タイムス)◎中學生程度の短歌初心者に便利なる點多し(新每)◎和歌講義錄として斯程新しく面白きは類ひ稀なり(福民)◎我國歌壇の名士が揃へて講義振り頗る親切なり(根室)◎作歌法の指導に頗る懇切を極む、國風に志す者の是非とも必讀すべきものなり(北國)

見本附き會則申込次第無代呈送

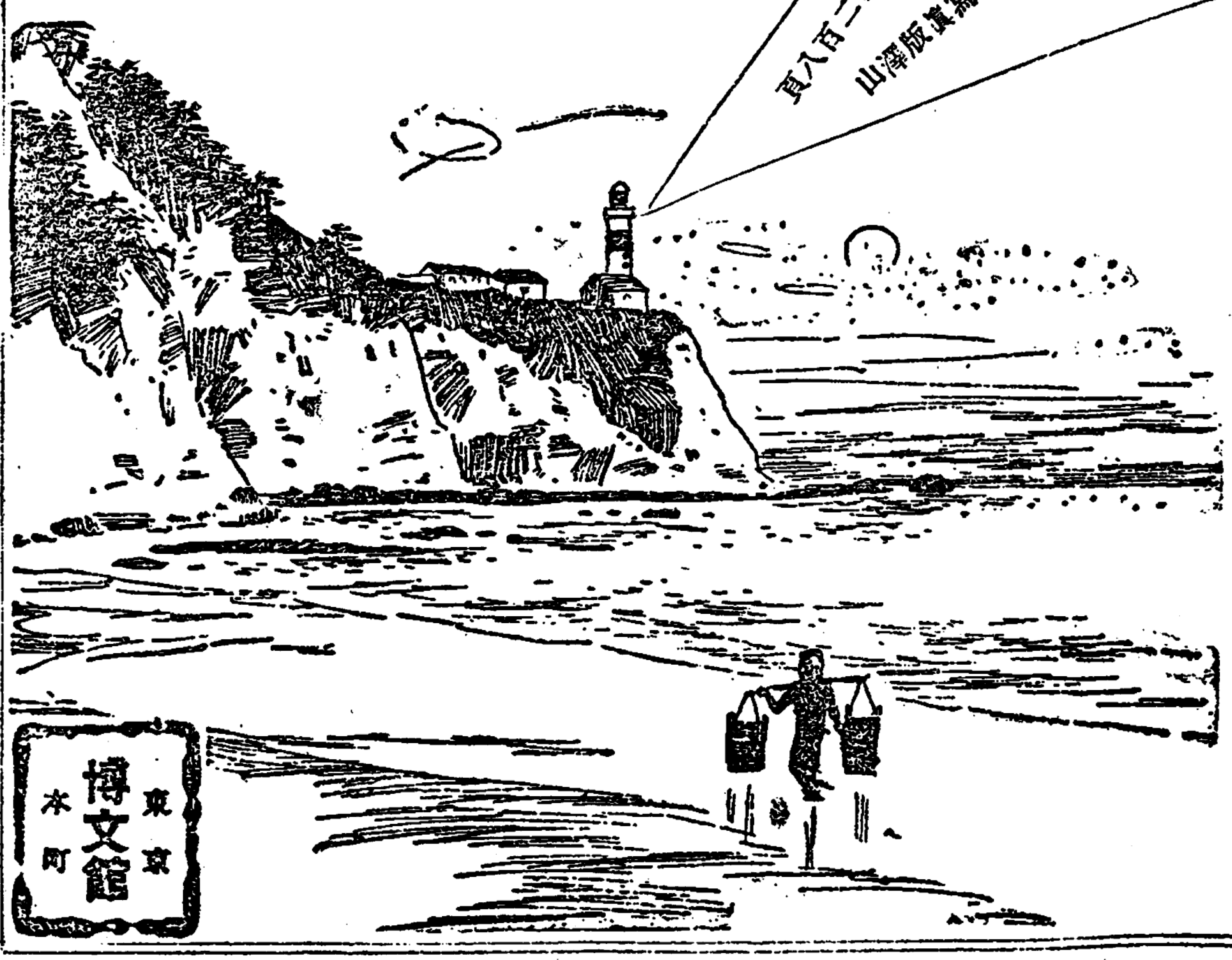
東京市神田區旅籠町一丁目
大日本短歌會
振替東京一九五五番

女學世界

第拾壹卷第拾號

▷記事◁

洋裝菊判紙數二百八十頁
口繪石版寫眞版凸版



定價二十錢
郵税二錢

八月一日發行

東京本町 博文館

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蝴蝶



向て右より田邊㖅子孃、宮本慶子孃、齋藤好子孃、荻島近子孃、（孰れも東京女學館出身）

美音

我邦の聲樂家として有名なる柴田環女史は目下帝國劇場の需に應じて其美音を發揮しつゝあり



柴田環女史近影



現代婦人百人一首

上は有栖川宮妃殿下の絶調を初め奉り各宮妃殿下御五方、九條公爵夫人以下華族の令夫人、宮中女官、婦人教育家、軍人、實業家其他名流の夫人一百名の得意の和歌一首宛を收む、挿入するに此等作歌者の寫眞及び筆蹟を以てす、單に此の『現代婦人百人一首』のみにても永く保存するの價値は充分にあり

山崎紫紅作『祇王』（脚本）

（三十二頁）

帝國座初舞臺に脚本『頼朝』を書き下して才名一時に擧りたる新進の脚本作家山崎紫紅氏が、本誌の爲に執筆されし新脚本にして、題材を平家物語中の祇王祇女佛御前の事蹟に取り、表白は凡て現代語を用ひ、舞臺面の變化等も逐一注意したれば、居ながら新時代の一幕物を觀るの興味あり

婦人月旦 與謝野晶子論

上田博士をして平安朝の紫式部、清少納言に優るとも劣らずと斷言せしめたる當代異數の天才與謝野晶子女史を或は歌の方面より、或は生活の方面より評論したるものにて、論者は凡て名ある畫家文士なれば所論孰れも根柢あり、與謝野晶子は如何なる人なるかと云ふことを知らんと欲するものは是非此一篇を熟讀せざるべからず

我が好む演劇と音樂

史劇、社會劇、喜劇、西洋劇、義太夫、長唄、箏、西洋樂等其他の分類の下に、我が好むものは何なりと題目を擧げたれば、一目にして其人の嗜好を知り、全體に於て現代娯樂趣味の傾向を知るを得べし、之を擧示したる人は文士、劇評家、詩人、音樂家、畫家等凡て四十八人の名流のみなり

有益なる一覽表

▲世界百文豪
▲日本百文豪
▲女庭訓

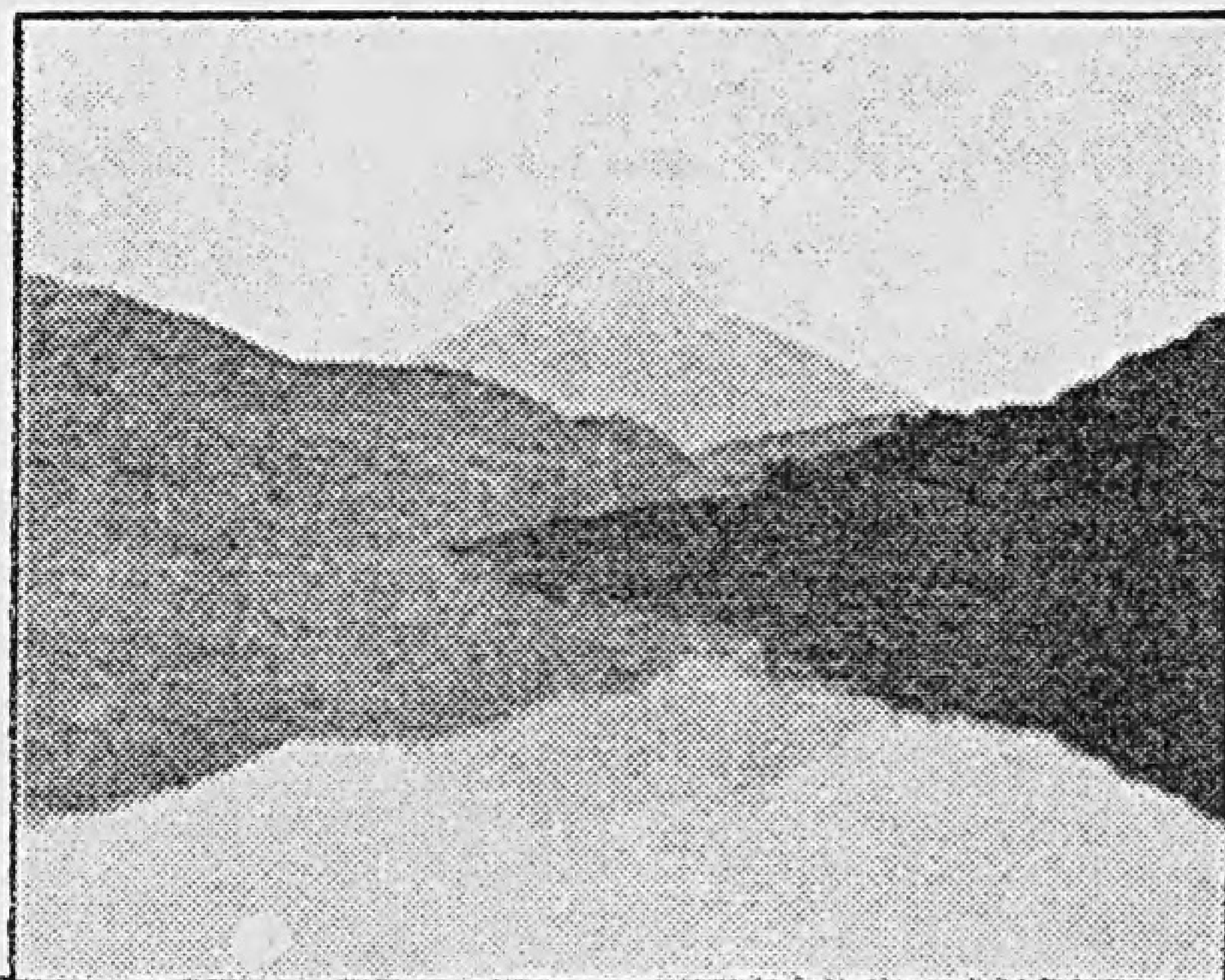
新浮世繪 木版極彩色奉書刷

『滿願の日』竹久夢二筆

以上の一つを得るも優に新しき智識と、豊かなる趣味とを享受すべし、況して之を一册の中に合せ得らるゝ『女子文壇紀念第百號』を見免すは讀物を愛する人の迂濶と云ふべし

●紙數三百二十頁、木板、寫眞版口繪及挿畫澤山挿入
▲定價金三十錢……送料二錢五厘（五月一日既刊）
●全國到る處の雜誌書に取次販賣致して居ります
若し最寄書店になくば◎東京京橋區大鋸町女子文壇社へ宛直接に御申越下さい着金次第速に送本します

高山の雪





實業家高梨萬藏氏令嬢靜枝子嬢（跡見出身）



實業家西川忠亮氏令嬢近子嬢（女學館出身）



海色





畫家　翠舟高木石子女史



實業家川口惣八氏令孃京子（立教女學出身）



青年に最も愛好せらる本誌は女子も又一讀の價値あり

秀才文壇

拾壹巻第十號　**八月號**

正價一冊 拾參錢　三ヶ月六十三錢　半年一圓廿五錢

内容刷新　本欄擴張　青年文壇の盛觀は東洋第一也

發行所　東京神田旅籠町一　文光堂　（振替口座東京一九五五）　賣捌全國書店

◎肺病患者を救ふ

東京府下大森海岸八幡電車停留場上の川名助次郎といへるは數年來自身に最も激烈なる肺病を憂ひ京濱の大醫にさへ見はなされたるが偶然にも一大奇藥を發見し之れが爲め九死に一生を得たるを喜び爾來同病者の救濟に努むる十年一日の如く服用者の中既に全治せる者四千六百餘人に及べりと云ふ返信附照會者には詳細を告ぐる由なり

秘訣 リウマチス全治

妾儀多年「リウマチス」病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悦に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候御遠慮なく申込あれ

東京府大森停車場東大畑 河奈とめ女

新劑 毛ぬき

從來脫毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脫毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脫毛劑ヘルーピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脫毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘルーピン
定價 壹圓
特製 參圓
內地送料十五錢
海外 三十五錢

飲んで色白くなる藥

藥名ビオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
內地送費十五錢

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し內服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の淸血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を淸淨とし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

東京市牛込區北山伏町壹番地 百合園製藥所

伯爵溝口直正氏家庭



（前列向テ右ヨリ）溝口竹五郎氏夫人、伯爵夫人、伯爵直正氏、大倉喜七郎氏夫人久美子、直亮氏令弟、（後列）直亮氏令弟、
伯爵令嗣、直亮氏、五島子爵、溝口竹五郎氏、増山子爵、諏訪子爵、前田伯令嗣、直亮氏令弟

誌友會



五月七日岐阜に於て開かれたる女子文壇誌友會の撮影にして幟を掛けたるは幹部の人なり、向つて左端篠田さみ子



同日京都に開かれたる女子文壇第二回誌友會の撮影にして後列向つて二人目は幹事要司村福子

婦人畫報

八月一日發行 八月の卷 一冊廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共貳圓八拾八錢

~~畫　報~~

□繃帶卷をせさせ給ふ兩妃殿下

□御着英の東伏見宮並同妃兩殿下御一行

□東宮妃殿下の御歸京

□英皇帝戴冠式の壯觀

□九條公爵令孃の學校通ひ

□新婚の建部文學博士と夫人久子 池田輝方氏と榊原蕉園女史

□花にまがふ拾數名家令孃

御前揮毫……
女學生の歸省
貴婦人の洗濯
……へんめん……
ベールの立すがた
名流夫人と新婚……
涼風袂に通ふ水の邊
少女の合作と揮毫……
新聞賣の孝子と節婦
自働車上の小西夫人
跡見花蹊女史の今と昔
米婦人色々と朝鮮の婦人
東宮妃お附の烏丸華子孃
夕涼みの小笠原伯の家庭

優鮮明寫眞

八十有餘

美人倚窓
石川寅治筆二頁大
三色版

~~讀　物~~

暑中と子供……倉橋學士
女の嫉妬……源學士
大久保の女……戸川歎骨
老母會……小金井きみ子
新橋の一時間……尾島菊子
美人となる食物……額田醫學士
名家の家庭……一記者
夏の化粧と化粧品……ふみ子
冗費と廢物利用……井上秀子
海岸より都の友へ……はる子
夏の女の髪とこの頃の料理……
手紙の書方……岡山高蔭
日本橋高女の一時間……
貝殻の採集……妹尾學士

□時間の經濟……中島博士

□上流婦人と家事……小河博士

□墮落者と私生兒……上杉博士

□男の運命と女……大町桂月

□女の淺智惠……今井學士

□本居宣長の母……上田博士

□其日其日……三宅花圃

東京麹町區飯田町四丁目四番地 東京社 電話番町二三三九番 振替口座一一八一八番

八月號

婦女界

一册十五錢郵税一錢五厘六册九十錢十二册一圓七十五錢

東京神田 同文館

◎美人論

△時代から見たる美人……佐々醒雪
△整齊の美……白柳秀湖
△体育は美人を生む……井口あぐり
△表情は美人の一資格……藤島武二
△注意すべき婦女子の姿…田代義德
△美人とは如何なるものか…久保田米齋
△遺されたる京美人……大道雷淵
△美人に對する各國人の理想…桑谷定逸

◎女と宗教 平岩愃保

△海事思想と主婦の責任……肝付中將
△踊は立派な藝術である……田中博士
△再び向氏の忠孝論を排す…加藤學士
△親に對する娘の希望一定の開放を望む 野路の雨

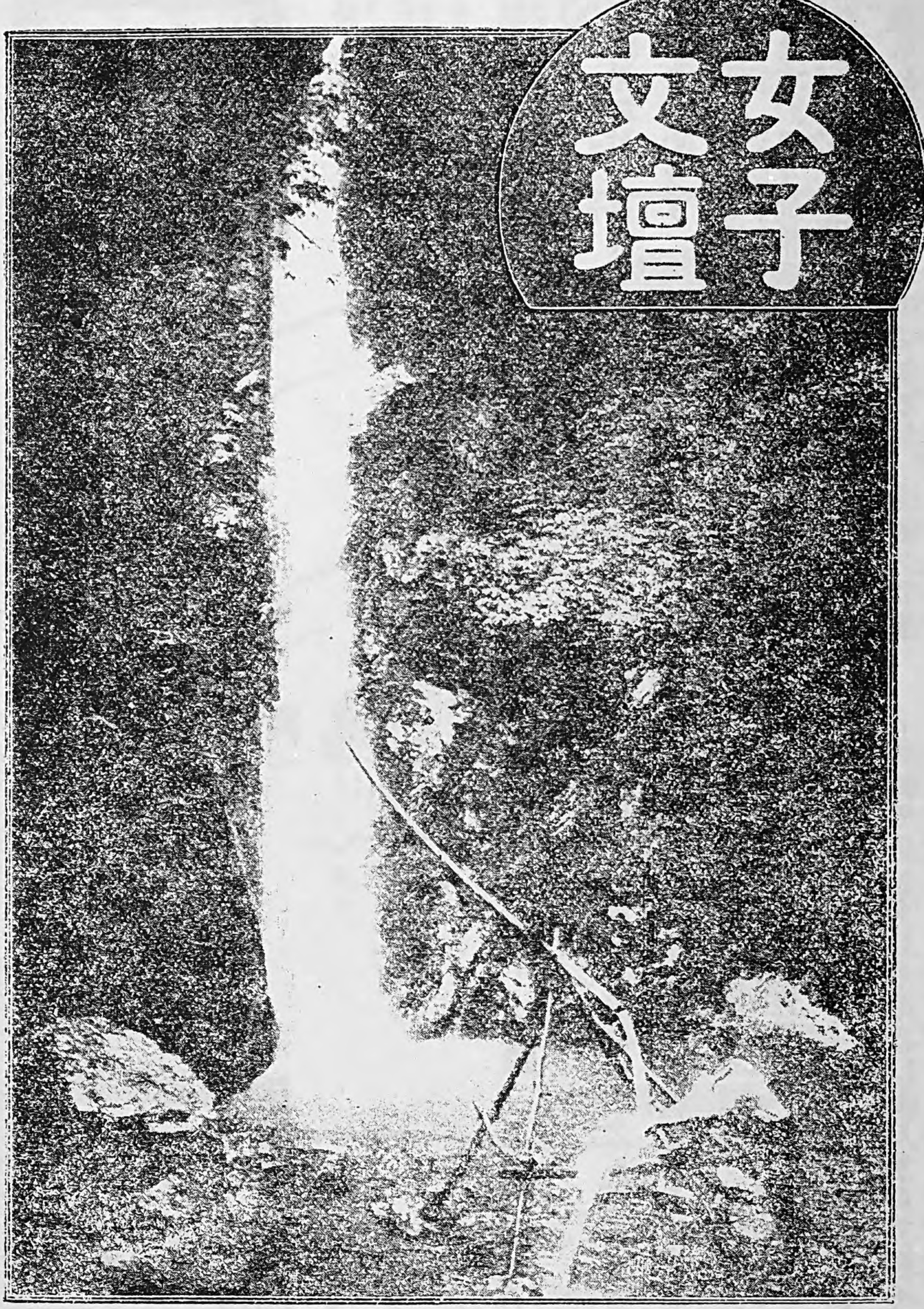
◎見合ひ論 宮田脩

◎月夜 泉鏡花
◎とみくじ 内田魯庵

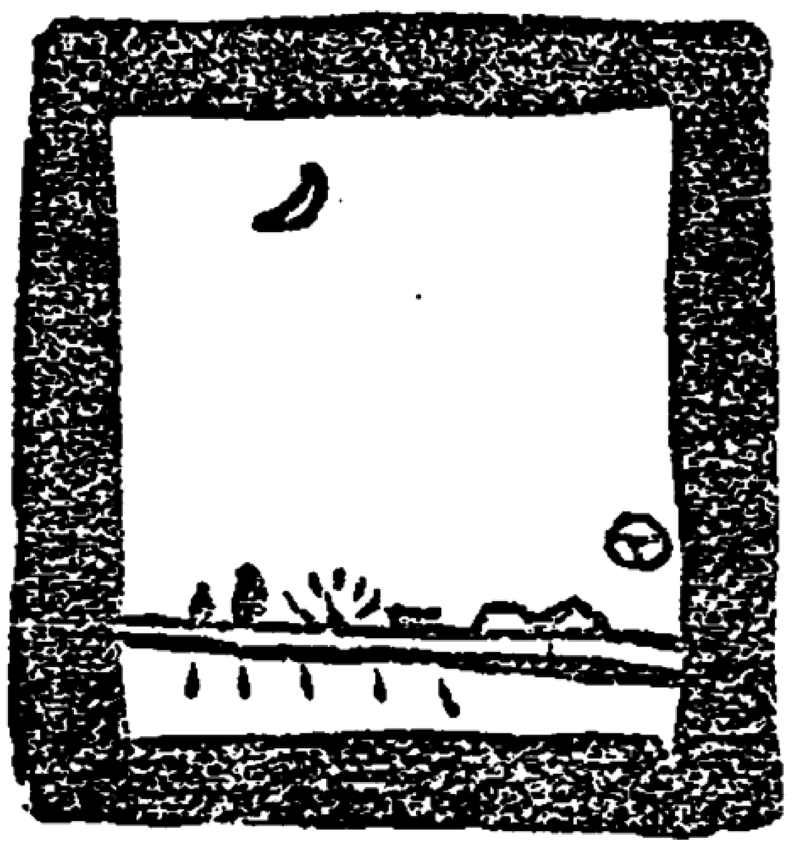
◎臺所の經濟は如何にすべきか 大西よし子
◎千倍に擴大したる人の顔 安藤秋三郎

△小兒衞生…豊福醫學士
△文藝其月々 沼波文學士
△英詩と婦人 若月文學士
△名畫解説 瀧村文學士
△英詩「海邊」仙石四郎
△夏の流行△豆腐料理

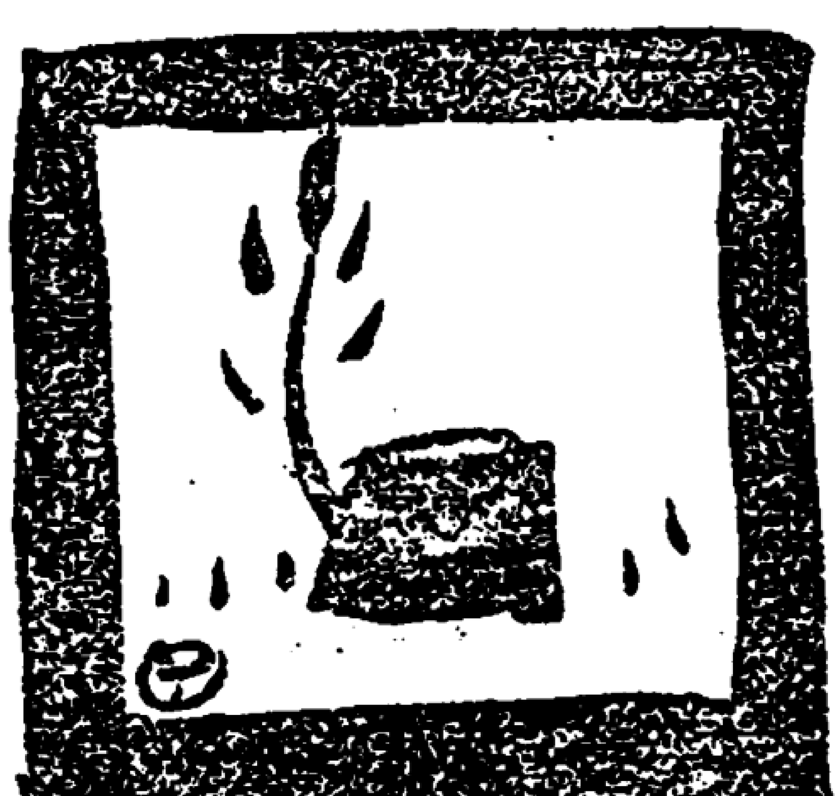
懸賞新題一等五圓 外數等 ◎ 和歌 俳句 習字 繪畫 一等三圓 其他數等



明治四十四年八月一日第七年第十號發行



婦人の交際



人を見れば善人なりと思へ

遞信大臣夫人　後藤和子

交際と云ふものは、多くの人に交際へば交際ふだけ為になるのでございます。お互に品格が高くなり、それと同時に又、人と人と接しますと、禮讓の心がけが出來て參ります、且又同情の心が盛んになります、所謂吉凶禍福を共に分つと云ふことになりまして、何事にも思ひ遣りが深くなるのでございます。それと反對に多くの人に交際もせず、深窓の下に獨居してをりますと、單に眼前の衣食住の慾念にばかり心を奪はれまして、婦人の價値を充分に表はすことが出來ないやうに思ひます。そればかりでなく、婦人の智識は單純になるばかりで、見る世界も、聞く世界も狹くなり、何事も一家の內を出ない、人情に疎く、事理に暗くなると云ふことは免れません、勢ひ男の方から婦人に、大事を共に議ることは出來ないと、不甲斐ないものに見

限られて了ふのでございます。

幸に交際する方面が廣うございますと、社會上の智識が附いて來る許りでなく、人情にも、物の道理にも明るくなつて參ります。自然に卑屈でなくなり婦人に忌むべき種々の性癖が除かれるのでございます。

交際の方法等に就いては、何んなにすれば好いかと云ふことは、只今一概に申上られません、それは今のやうな過渡時代には、家庭の有樣も千狀萬態、人々の思想、習慣なども個々別々のやうですから、これこそ理想の交際であると斷定することは出來ないのでございます。

福澤先生は、人を見れば善人なりと思へと訓へられたさうでございますが、眞に達人の語であると思ひます。錦にも裏があり、鏡にも裏があり、物には凡て兩面のある如く、人にも表面と裏面とがございます。眼をつぶつて差支のないところと、眼を開いて能く見るべきところとがございます、人と交際致しますに就いても、その表面の長所、美所を尊敬して交際致したいものでございます。



榛名湖

序に此も社交に關係のあることでございますから、一寸思ひ出したまゝ申ますが、近頃は何の婦人雜誌にも、美しい方の寫眞が口繪に入つて居りますから、電車や、汽車や、また途中などで、一回もお目にかゝつたことのない奥樣やお孃樣に出逢ひましても、あれは何處の方だと云ふことが直ぐ分りまして、お話の端緒がつき易く、早く親密になるやうでございます、口繪に寫眞を出すことをお嫌ひになる方もございますが、それも考へやう一つで強ち不可い事とも限らないやうでございます。

流行を逐はず舊習に泥まず

伯爵夫人　寺島京子

私の實家は御承知の通り舊家（京都三井源右衛門氏）でございますから、幼少からの教育や、習慣がございまして、交際社會へ出ると申しましても、宛然井の中の蛙が大海へ飛出したやうなもので、一向分らないのでございます。尤も主人が外務省に勤めて居りました時は、何かと引ぱり出されましたが、當節では勤務も退きましたから、自然社交界へ立入る場合も少いのでございます、その代り以前よりは子供等との交際も深くなりまして、家事なども人任せにいたして置きました時よりは、結果は宜しうございます。子供でございますか、六歳の娘と、二歳の男子で二人でございます、社交界に出ましても、身分相應が、何よりでございます、それにつけても戊辛の詔勅にもございます通り服裝や携帶品に心を用ゐ、虛榮を廢し、遊惰に流れぬやうに、惡習を止めて淸き美き交際をいたしたいと思ひます。それにも職分を忘れてまで社交に耽つてはなりませぬ。忠實に家庭の業をつとめ、質約に家産を治むる傍にいたしたいものでございす。

服装でございますか、凝つた縞柄や、あまりはでな模様は避けて居ります、要もないのに贅澤な服装をしたり、高いお金をかけて、綺羅を飾つたりしないで、なるべく清潔と優雅とに心がけて居ります、いづれにしましても、あまり廢れたものを用ゐたり、馬鹿げた最新流行を追つたりいたしますと、目立ち過ぎまして變りもの丶やうに見られて不可ません。

　歐米各國の交際社會では、それ〴〵の規則もありまして、夜會には何々、晝會には何々、その他冠婚葬祭には何うといふやうに、習慣が出來て居りますから、調子はづれになるやうなこともなからうと思ひます。

　歐米と我國との富を比較して見ますと、彼方の富は非常でございまして、我國は外國から二十八億圓も借金があると云ふ始末でございますから、この點から見ましても、質素にせねばなりませぬ。さうでありますのに、やゝもしますと無暗に新流行を逐ふとなさる丶方などがありまして、いろ〳〵と苦心して居らつしやいますが、一家の主人の迷惑は、一通りでないと思ひます、これは私どもも、大に省みねばならぬことでございます。

遠慮は無用

代議士夫人　日向きむ子

　お互に交際して居りましても、表面では大變に内氣で淑やかに、もつともらしくしていらつしやつても、その裏面はなか〳〵さうでなく夜叉のやうな方がございます、私は第一に此の表裏なく交際いたしたいと思つて居るのでございます。

　御當人は大變努めて應接して居られる積でも、それが表面ばかりでありますと、直ぐに察しられまして、來なければよかつたものにと云ふやうな惡感情を起さ

せるのでございます、それはその筈にて、眞心から出た應接でなければ、人に感動を與へませんもの。

一寸他家に訪問しまして、そのお方が出かけられる所に參りましても、お上り下さいと申されるものですから、お出かけになると云ふ事を知らずに上りますがその當人になつて見ると、出かける所ですから、早く歸つて來れゝば宜いにと思ひつゝ應接して居るその樣子が表情に見え透いて、もつと話して居やうと思ふても、どことなく居難くなりまして、お暇するやうになります。

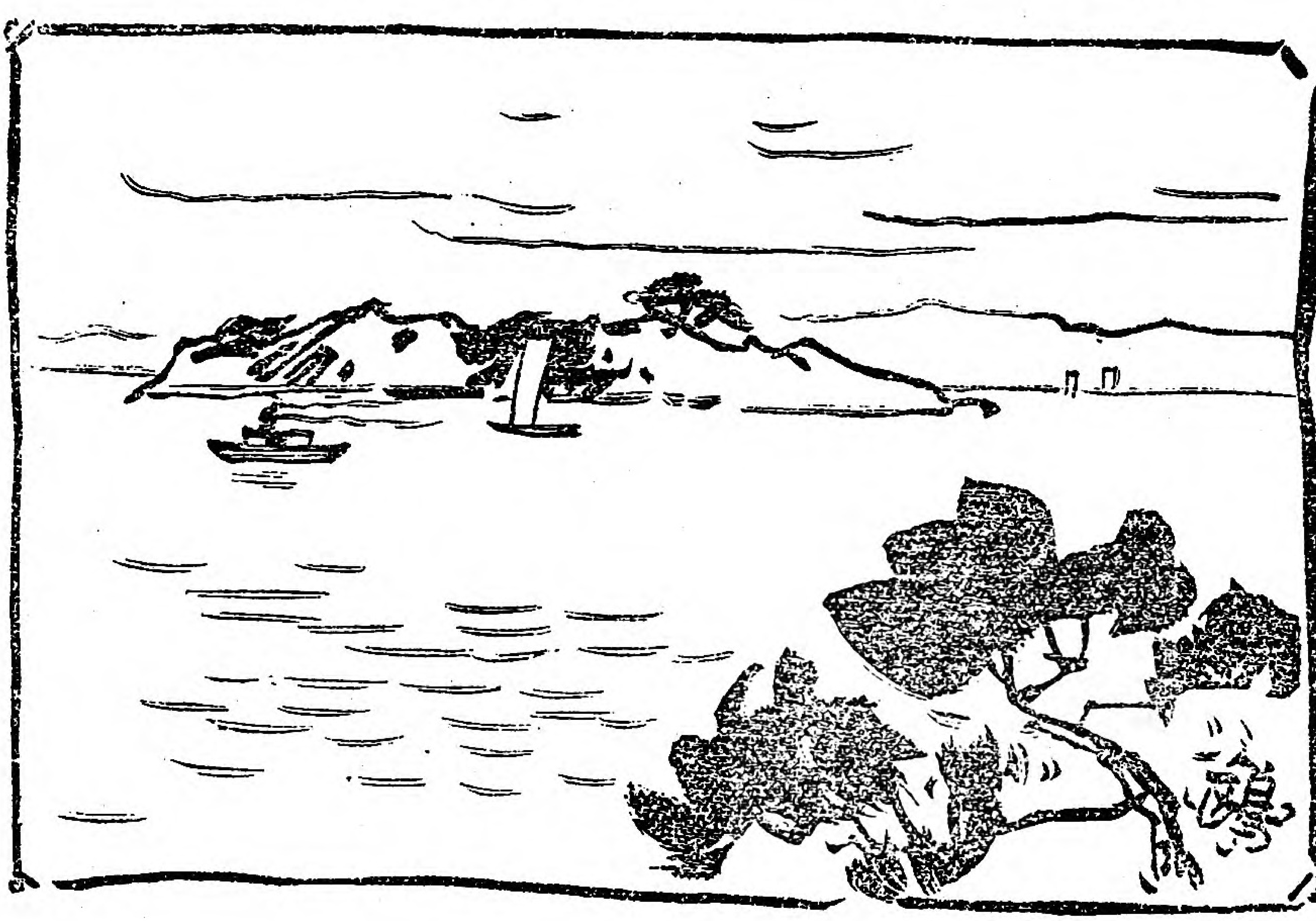
私も出かけやうと思つて居る時などに、よく訪問を受ける事がございますが、そんな時には私は今出かける所ですが、で一所に行ける行ならば道々話をしませうと申して打あけてかゝります、それで私は斯ういふ事のないやうにと、面會日を金曜日に定めて、この日は朝から晩まで、どなたにでも御目にかゝつて、お互に打寛いで居ります、交際して居ながら、遠慮して、打寛ろぐことの出來ないのは面白くないことでございます。

謙遜、會釋、遠慮、なる程これらは婦人の美點でありますが、つまり程度問題で、時代によつて變つて來て居ります。

さま〴〵の場合に婦人が出過ぎるのは感心はいたしませぬが、また遠慮過ぎるのも、あまり褒めた話でないばかりか、却つて不利益でございます。

姑と嫁との不和、繼母と繼子の不折合は、隨分世間にありますが、その原因の多くは、双方意地惡の衝突よりも、却つて互ひの遠慮にあると思ひます。交際もそれと同じで、互ひに遠慮する　すると水臭くなる、水臭くなると不平が起る、その不平が正面から訴へられなくて、裏面、側面、當の相手より、却つて他人に洩らされる、それがまた當人に分る、するときいた當人は、それを直接に耳にしたより、氣まずく成る、しやくにさはる、遂に互に不和となり、不折合となります。これを思ひますと。遠慮ほどつまらないものはありません、短氣は損氣であるやうに、遠慮は損慮でで

ざいます。
私は皆様と交際するにも、姑に事ふるにも、決して遠慮はいたしません、遠慮するのは、つまり猫をかぶるんですから、この猫かぶりだけはやめて貰ひたいものといつも思ふて居ります。
友達の處に參りましても、また友達が參りましても、足が痛ければ、足を投げ出すとか、横になるとか、少しも隔てなく、交際して居りますがそれで先方が失禮なやつだ、禮儀を知らないやつだと交際して下さらなければ、そんな人にはまだ求めて交りもいたしません。



小豆島より

姑にも生母と同じで、姑の側に鋏がありましたら、かあさま鋏取つて下さいといふて取つて貰ひますが、人によりましては、遠慮してづうと廻つて取つて來る、すると姑はお前言へば取つてやるのにと必ずいふでせう。姑がお前疲れたであらうから、足でもお出しと云はれても、いゝえ疲れませんと云ひながら、姑が出ていつたあとで、足を投げ出して、あと戻りでもして姑が見たら、何んと思ふでせうすべて表裏ある人だと思ふでせう。
私の知つて居ります外國婦人が時々茶話會をやるからと

招かれて參りますが、多數は外國人で、お互に握手したり、言葉を交して居りますし、その婦人は、私はこれから約束がありますから外出します、皆さん多忙のところよく來て下さいましたと、それきりです。愛憎氣のない、なんだか物足りないやうな、どことなく追出されるやうで、氣持が惡うございます。

如何に遠慮の無いのが宜いと申しても、此んなにそつけない取扱ひ方も、交際としては感服しません、交際となれば、矢張皆が打ちくつろいで、我儘にした方が交際の意義があります。西洋の交際は餘りに規則的で、謂はゞ藝術化した交際術の發揮です、何事もあんまり規則的になると興味が乏しくなり、却つて誠意を缺くやうになります。交際のことも一に其處の手加減が大切だらうと思ひます。

若き女どうしの友情

與謝野晶子

男でも女でも未だ異性との交際の味ひを知らない間は、同性の友を大層慕ひ合ふと云ふことが一般の人情のやうですね。兩親や兄弟の愛情以外に友情と云ふものが現はれて、新しい世界を見せてくれる。人は秘密を好むと共に、その秘密を何處にか洩す事をも好む性情を持つて居て、家內の人には云ひ難い事をお親友には打ち明ける。餘り秘密にする程の價値の無い事でも其れを親友同志だけで話すと、さも大事件の樣に高い調子が出て來る。又人の素性として孤獨を嫌ふ所から自分の心を他人の心に投げ掛けて其反應が見たい。他人の心をも自分の心に引き入れて、新しい刺激を受ける事に由り、內部生命の琴の緒を跳らせたい。二人の心がしつくりと融け合つて、共鳴する時には、同心一體だとも、戀人同志の心持だとも思はれる位に親友の情

味交感が絶頂に達する。

夢見る如き空想と奔放なる熱情とのみが熾んな時期で、未だ冷靜な批判の意識が頭を揚げない所ですから、親友の一言一行は皆靈と匂ひと力とに滿ちて、神聖、清淨、快活の感が伴ひます。兩親に對して我儘な者も、親友に對しては非常に謙虚推讓の美德を示し、屢親友のためには犧牲となつて水火の難に赴くことをも辭しない程の勇氣が出て來る。



其れなら親友の關係は全く自己を沒して居るかと云ふと、恐らく人間の心理狀態に如何なる場合でも自己を沒すると云ふことは無いでせう親友に對して他人行儀を撤して居ると見えるのは、其れだけ自我が擴大せられ白熱の高度を以て親友をも我が內心に溶解し、包容して居ると見るのが至當で、對し

て居る者は親友で無くて擴大せられた「自己」なのである。單性の自己では何となく淋しくて滿足が出來ず、複性の自己を作つて其れに陶醉するのが、友情とか戀愛とかの心理でせう。自己を沒して居ない證據は「自己」情念中の最も危險性である「嫉妬」が常に此友情の一面に隨從して居るのでも解ります。

男子には斯う云ふ親友を得る機會が比較的多い樣ですけれど、女子には交際の範圍と自由とに制限があるのと、從來の女子の習慣として孤獨の自己を庇つて他から見透かされるのを厭ひ、人前を繕らつて寡言になり、偶ま話し合つても皮相的なお世辭ばかりで、眞實を交換しない所から、親友となり得る友をも唯平凡な普通の交際で濟して仕舞ひ、從つて親友の味ひを知る機會が少いやうに思はれます。

極の親友と云ふ者は、異性に對する戀愛關係と齊しく、唯一人しか無い者の樣にも思はれますが、然うまでなくとも凡そ十四五歳頃から二十前後へ掛けて得た親友は、女子の心理の複雜な面白い變動期を共にする丈、兩人の間で語り合ふ秘密も多く、互に益する所も多い所から、親、師匠、戀人、わが子と併せて生涯の中に切放し難い五大情愛の一つです。親友は大抵偶然に意氣が合つて成立つものですから、修身のお話で聞く樣に然う初めから選擇して掛かれるものでもありません。志操や學藝に秀でた親友を得るのと得ないのとで、自分一生の幸不幸に大變に影響がある事を考へると自己を愛重する婦人程その友人を選擇する事に注意せねば成りません樣ですけれど、良い親友を得るのは七分までは運ですね。あとは矢張自分の人格に由る事で、偶ま益友に出會ひながらも、自分の素質が其益友を見分ける見識や、其益友と意氣の合ふ所が無ければその益友は自分から遠ざかつて仕舞ひます。黄金の脈へは黄金が吸はれて集る樣に、互に秀れた素質同志ならば自然相引かれて親友となり易いでせう。

わたしは不幸にも窮屈な田舎の家庭に育つたので、二十二三までは殆ど親友と云ふ者を知らずに過しましたが、其後は反對に澤山の友人を男にも女性にも持つ

て居る。大抵文學の方の友人ですから、然う屢顔は合はさないで居ても互に細かな感情が通じ合つて居る積りですが、併しそれは文學を介して丈ですから、學校の寄宿舍で知り合つた永年の親友などと云ふ情味に比べると、何處か改つて他人行儀な所があり、心の融け合はない所が餘されて居ります。大人らしくなつた人、殊に文學の方面の人などは互に際立つて個性の尊嚴を維持しようとするからでせう。

十四五の頃の親友は雙方が單純ですから、一點の陰翳もない睦じさで交ることも出來ますが、其後の交際には如何に親友の間でも嫉妬や邪推が混り衒氣や掛引も加はる。其れ丈互の心理が複雜になつて來たのですから、從つて其交際の情味も曲折波瀾が多くて、ますます面白いのです。其代り何うかすると親友が親友にならずに手の裏を返す樣な厭な目にも逢ひます。それも考へ樣では眞實の世相に觸れたものと見て、又敎へられる所があると思ひます。

* * * * * * *

家に居て世間を知る

法學博士夫人　江木榮子

一般の婦人が交際に就いて心得て置く事は、何であるかといふと、婦人に有勝ちの、互の間に隔心をするなど云ふことであります。心に墻壁を築くといふことはよくありませぬ、どんな階級のものと交はらうとも共に胸襟を披いて、それでこそ心の奧底を明かにして、話を爲るといふやうにせねばなりませぬ。

併し家事の相談などは禁物でありますが、その他は心置なく話合ふやうにいたしたいと思ひます。人によりますと、二三の知己のみには、とやかくと隔心なく話を交へて居ながら、その他のものとなりますと、た

とへ傍に居つても、途を行く見ず知らずの人かのやうに少しも打とけて話をしない方があります。お互に一緒にゐてもその不愉快さ加減といふものはありません一體交際し談話するといふ事は、自らどんなにそれが爲に樂むかといふよりも、まづどんなに、人を樂ましめるか、どんなにしたら人を不愉快に導かぬやうに爲ることが出來るかといふ事を先に思はねばなりません自分自らが樂む爲に交際するといふのではなくして、先づ對手のものに快感を起させる爲にするのであるといふ考でかゝらねばなりません。

話振も話題も面白い邪氣のないものを選び、さうして、滿座の人々に滿足を與へるやうにしなければなりませぬ。

交際と申しましても、毎日〳〵朝から晩まで、何々會とか、何々氏訪問とかいふて、外出するばかりが交際でなく、それも出られる方は出るのもよいでせうが一家を持つて居るとか、子供でもありますと、思ふやうに出られるものでありませぬ。それかと申して内に引込んで居れば、交際が出來ないかといふとそうでもありません。私はあまり外に出たことはありません、それかといふて交際せぬのではありませぬ。内に居りましても、朝から晩まで、來訪者の絶えたことはありません、私のやうなものにも、面會してやらうと思ふて、わざ〳〵たづねて來て下さるその皆様の厚意に對しても會はないで居られません、どんな用事をして居りましても、又男の方でも、女の方でも、凡て差別なく面會して居ります。時によりますと、一時に四五人も重なり會ふ事があります。思ひ〳〵の談話が盛んになつて、面白うでございます。それですから皆様のおかげで、家に居ながら、いろ〳〵各方面に渡つて事情を聞かせて貰ひ、智識を與へて貰つて居ることも少ないと思ひます。こんな我まゝを云ふて、交際して居るものも、たくさんないでせう。人は社交的のものでございますから、交際せずして、一人で人生の幸福を得ることはむづかしいことです。互に感情を和らげ、智識を交換して進んで行かねばなりません。

何事もなかほどが大切

女子商業學校學監　嘉悦孝子

女學生の間は、年中學課に逐はれて居りますし、一週間一度の日曜にも、やれ洗濯だの、復習だのと、迚も交際などに心を配つてゐる暇もありますまいから、女學生間の交際と云ふことに就いては、表面も裏面もなからうと思ひます。

今日の所謂上流社會の交際の樣子は、私などから見ますと熱度が高過ぎて、其處に通弊がありさうです、と云つて昔の婦人生活のやうに家に計り引籠つて居てはなりません、内助の功を收めると同時に、時としては良人を助ける爲に客の應接をするとか、外へ出て一寸した使ひを足すとか、暑さ寒さの時候見舞に知人の家を廻るとか、婦人にも出來るやうな外の交際は努めて爲すべきものでせう。

此の交際と云ふことも、口では誠に造作なく言ひますけれど、いざ實地に當つてみると、餘程世事に長けて居なければ出來ないことで、單に何處其處の女學校を出たからと云つて、然う巧みに交際が出來るものではありません、また只表面の交際が巧みだからと云つて其人に表面と裏面とがあるやうでは、矢張信用が出來ません、世間の人も許さなくなりますから、やはり交際上にも大切なことは根本の心の修養です。

社交界の腕利と云はれる婦人でも、表裏あるやうに評判されると云ふも畢竟は右に云ふ精神修養が足りないせいでせうが、それにはまた西洋思想にかぶれすぎて、東洋思想を忘却してゐることが、一つの大いなる原因でせう。

私は此頃四書、五經を初め孔子の言行を書いたものは好んで讀んで居ります。現今の方は古い教と云ふと

一概に笑ひものにして排斥されるやうですが、教としては古昔のものにも立派なものがあります。今時のものよりは整つてゐて、健全なところは勝つてゐます。私も古い教を讀んで居ります中にいろ〳〵と考へました、此を其まゝ今時の若い人に讀ませやうとするのは困難でせうが、其中より今時の人にも適切なこと、分り易いことを拔いて來て、一冊の書物として出版したいと思つてゐます、それが出來たら世間の方にも讀んで頂きたいし、又私の學校の生徒丈けにでも讀ませたいものだと思つてゐます。

西洋の思想は自らどん〳〵入つて來ますから、其處に東洋思想も注入して、中道の思想を取つて行きたいものです、何事にも中道ほど大切なことはありません、極端は危險でもあり、實際にも遠い、熱帶に住む人はなまけ易く、寒帶に住む人は活動が出來ず、やはり溫帶が一番人の住む場所に適してゐる如く、中道と云ふことは何事の上にも大切です。

交際のことなども、やはり此中道を主として實行して貰ひたいものです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一時の熱よりも永久の溫み

芝浦製作所取締役夫人　岩原武子

交際上のことで一番大切であり、且一番むづかしいのは談話でございます、談話があつて初めて交際が成立つので、談話は交際の無形の機關でございます。

談話を致すにしても、また談話を聞くにしましても身振や擧動を輕忽してはいけません、あまり身振や聲色をげう〳〵しくすると、不愉快になります。談話は其話の内容に氣を附けて、日々の出來事、世間のこと又は政事上のことゝか、歷史上のことなどを話すにも

あまり突飛なことや、くだらぬことは言はないやうに而かも六かしいことは避けて、なるべく心やすく親しく語り合はねばなりません。

沈默は黄金なりと云つて、堅く沈默を守り、己を人に知らさぬやうにすることは、交際の本意ではなからうと思ひます、要らぬことを餘計に喋るのは無論愚かな業で言ふべき事を何處までも言ふのが本當ででざいませう。



それから今一つ交際上に注意すべきことは、一時に熱し過ぎるよりも、永く溫かに續けることでございます。餘り一時に親しみすぎると、お互ひにあらが分りすぎて、直ぐ離れるやうなことがございます。執拗くつきまとはれるのはうるさいものでございますから、つい餘所々々しくなるやうな場合もあり

ます、交際の初めに注意すると云ふ事も一つの必要な條件ですが、交際した以上は、直ぐ飽いたり、飽かれたりするのはつまらないことでございます。親子夫婦の關係のやうな緊切しい關係もないにせよ、友人間は友人間で情誼を貴び、感情を和げ、道理を正しくして永く交際するやうに心懸するのが第一です。

　途でも餘り歩かなければ雜草が生へます、友人の間でも餘り遠ざかつて了ふのは宜くありません、例へ住む場所は遠く隔つても、友情を交すことを忘れては不可ません。然うでないと從來は只利己的の見地から親しくしてゐたと云ふことに取られても仕方がないのでございます。能く外國に居る友人などから、手紙や雜誌を送つて呉れましても、私は直ぐ返事を書きます、今日は明日はと延して置く中に、つい御無沙汰のお詫を澤山書かなければならぬやうなことになります。ですから友人から手紙なり其他の消息を受取つた時には直ぐに返しを出すと云ふ習慣に努めて居ります。

　以上、七婦人のお話は、婦人の交際に就いては有益なお話です、初め記者は若い女どうしの交際に就いてお説を聞く筈でしたが、若い間は學校の學課もあり、あまり世間とも接觸しないから交際の機會も少なからうし、隨つて交際の可否なども擧げるほどではないと云ふ方が多うございました。成程一理あるお説です。

　けれども若い間は全然交際の必要がないかと云ふに決して然うではありません、既に學校へ通ふ以上は、學友と云ふものが出來る、其中では親しいものと、親しくしないものとが出來てくる、自然友情も伴ふわけです。此友情が將來一家の主婦となつた場合、社交的にも發展してゆくので、學校時代の友情は極く淡泊なものながら矢張大切なものです。

　學校を出てからも、主婦となる以前に友達どうしの交通があるでせう、而して此友達どうしの交通が、智識の上にも感情の上にも大いな影響を與へます、吾人は此等の友情の裡から、好い影響を見出したいと希つてゐる一人であります。（記者）

立ち涼み
腰すゞみ
さても
涼しさよ

涼み話

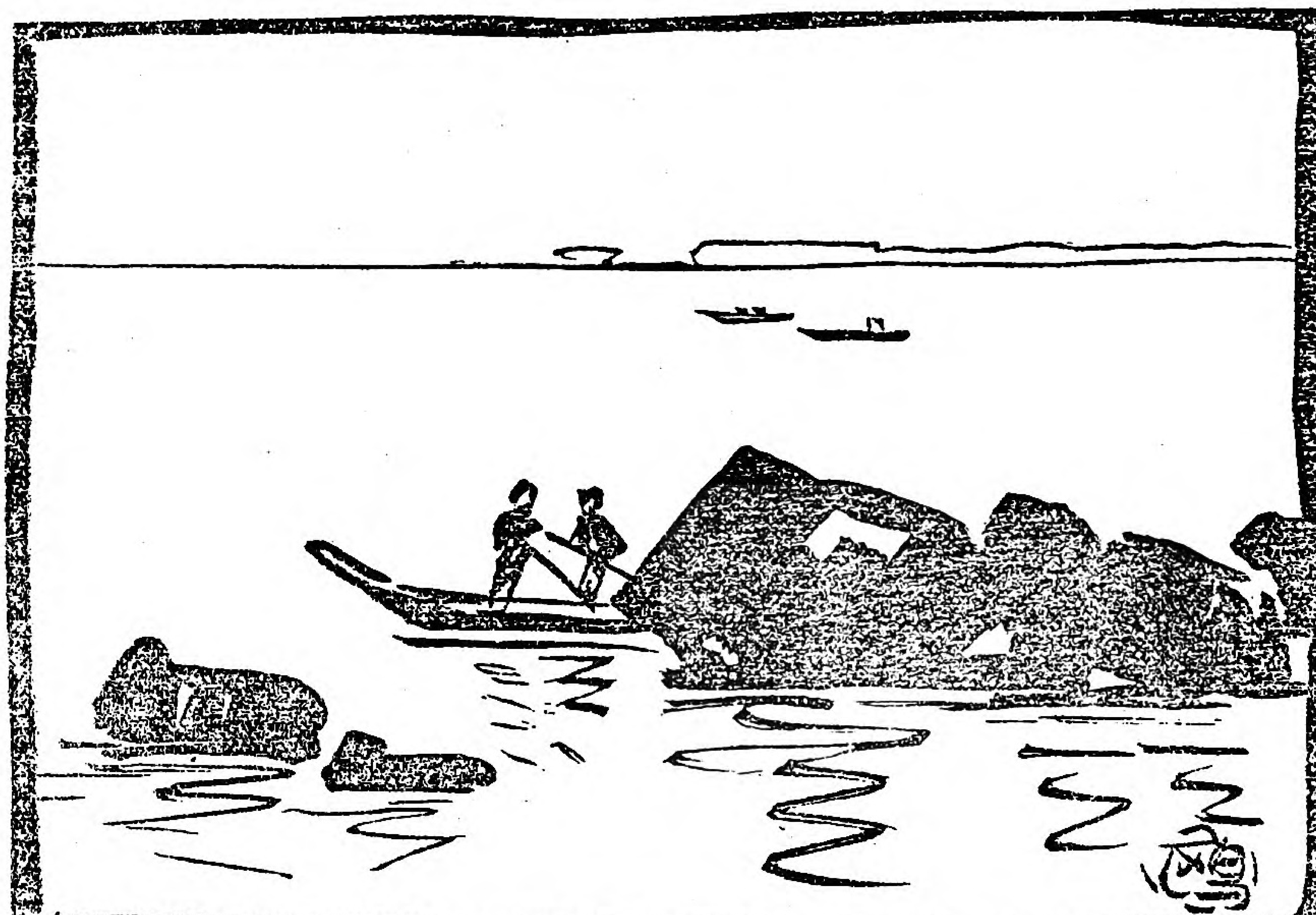
坂東太郎

屋根替は
屋根で
涼みの
うはさかな

米國ブレスコットのエラルーンと呼ぶ十五の女、未曾て男子に接吻せしことなく、よし氷海に無花果の花は咲くとも妾が口の蕾はよも開かじと誇つてゐた。それをスローンといふ物好き男が面憎がりて、或夜會の場で機を得て飛つき、思ひのまゝにキスして退けた。ルーンは紅顔さつと燃ゆると共に手早く帽子のピンを拔取て男の胸を刺した、針の尖が折れた。男は病院へ擔ぎこまれたけれどたうと助からなかつた。●新ジーランドに新夫より送られた結納のリングを右の足の第四指にさした女がある、兩腕とも無いからだ。先年寄席に出た大阪の腕無し藝者——妻吉はどうしたらう、戀しい男が有つても抱くことが出來ないと歌つた女だ。●シカゴに蛙の卵で顏を洗ふときれいになると聞いて毎日池から採て來て洗つてるうちに、兩眼とも潰れさうになつた女が二人まである。●ミツワ石鹸を使ふ力士は常陸山、梅ヶ谷、太刀山、駒ヶ嶽、皆强いと廣告にあつた。それをまた女に押賣しようとするのだから蛙の卵を使へといふよりは一層罪が深い。●この月九日の名古屋新聞に尋常五年生の身もちになつたことが出てゐた大分縣には十二になるお母さんが子が泣出すと手にをへなくなつて一しよに泣くといふのがあつた。●も一つ日本の事を書く、織田信長が秀吉の細君をタキツケた手紙に、「それのみめぶりかたちまでいつぞや見參らせ候よりは十の物廿ほども見上候、藤吉郎不足の旨申すのよし言語道斷曲事に候、いづ方を尋ね候ともそれ樣程のは又再あひ求めがたきあひだ……」大いに尻に敷いてやれとあるのだ。先生その晩のコツカレ方想像するにあまりあり●深川首無女の犯人だつたか知らん先達情婦との結婚を獄中から願出で許されたとあつたが、エルバゾに住めるフエレシスタテルといふ少女は死刑の宣告を受けたガーシヤと牢獄で結婚式を擧げて擧げ終ると共に絞首臺に送らるゝ夫に永久の告別をした。●戀人に欺かれて自殺せんとしたミユラニツヒの男、思ひなほしてわれとわが手で命を斷つよりか政府の役人に死刑に處して貰ふつもりで罪も報

ひも無き十になる女の兒をたゝき殺した●蘇生法師が六月號に林檎とキスの事を書いたのは、ビアモントモルガンの八歳の時の話である。モルガンに一つづゝ林檎をやつてキスを買つた男の子は二十七人だつた●相思の男から手紙で結婚を申込まれて喜んで返事をしたらそれから音沙汰が無かつたため悶死した女がある。男の手に其承諾書の届いたのは九年の後であつた●シカゴで女の泣きつこ會があつた。時間は五分。三十一滴の涙をこぼした女が一等二百弗になつた。悲しくも辛くもないのに人の一滴よりもより多くこぼさうとした努力は買つてやらねばならぬ。●メキシコのメルセデスレベスの有する髪は九呎八吋に達す、立つて四方に垂るればよく全身を包みて前よりも後よりも其裸體を見るを得ず。むぐらもちぢやあるまいし。●レベスの毛髪は發生はやくして月一回づゝ切りて髪商人に賣るともあるから、土龍ぢやなくて羊の性を受けたかも知れず。光秀の妻は髪を切つて酒を買つたが爲に賢婦傳中に傳へられつゝある、レベスも貧人の妻である。●コリンスのアスシリキカリヲドジといふ女、勿驚身長六尺七寸五分。待乳山親方(大砲萬右衛門)より大きいことまさに七寸。●瑞典の上流貴婦人に非結婚倶樂部あり、破約者は除名される上に結婚式には會員一同を招待する義務あり、せめて一人ふみ留まればいゝが。●スバルのむく鳥通信にスカートの裏へ卷煙草を縫ひつけて密輸入を謀つて莫大の罰金をとられた貴婦人のことがあつた。いつかもオステンドよりドーヴアに上陸した一貴婦人の樣子がをかしいので、調べたら裾の下に一匹の犬をかくしてゐた、犬は沒收された。●ニユージヤー州で、往來で男子が公然婦人に對してキスしたり、からかつたり秋波を送つたり、するのを嚴禁した爲、細君に告別を惜んだ夫まで捕縛さるゝこともあるので、既婚男子は一定の徽章をつけることにした、との名案がある。それはよいが所謂既婚男子のキスした婦人が、彼の妻であるか、どうかを巡査はどうして知り得べきやと心配してるものがある、斷つておくが私ではない。日本なら丸髷が女の方にあるけれど、その男の妻か人の妻君かはやつぱり巡査にはわかるまい、●一年間に英國婦人の裝飾用として賣らるゝ猫の尾は一百噸に上る。少くとも百七十九萬二千匹の猫は殺されるだらうといふ。病氣で死んだ猫は毛が脫けるからね。●パタゴニアの女は男の通りの馬の乘り方をする、巴御前もさうであつた。珍らしくもない。

●キルギス人は娘の時は辮髪だけれど、夫を持てば白き毛おり物にて頭をつゝみ、決して人に髪を見せない。越後から巖手青森の地方へかけてはこの頃てそやゝ廢れたが、年より達は今でも島田の上へ手拭の冠り通しだ。●カイロ府には二十人に對する一人の盲人あり。雪多き越後には眼の惡いものが非常に多い。●アンチヤンチ國王は三千三百三十三人の妻をもつてゐた。一肌一容、盡態極妍漫立遠視、而望幸焉、有不得見者三十六年、どちらも少々はおまけあるべし。●英國にて一年間に發送せらるゝ手紙に其起語なるヂアサーと結字のユアスツルリイの四字を一々ペンにて書かんとすれば三千七百年を



興津

要すといふ、もし人ありて日本國中一日に喰べる飯粒の數をかぞへるとしたら何年かゝるか、知つてる者はお手を上げて下さい●赤蛙は疳の藥だといふのでよく子供に喰はせることは誰も知つてるが、印度では子供が病氣になると母親が二匹の生きた小魚を其子の口の中へさし込むまじなひがある、時々しつぽを放すやつがあつて魚はつるりと咽へ入つて死ぬ兒がある。●支那の人口は四億(四萬萬)なのに四億萬と數へる先生は小學校に多い。百圓と百萬圓をおなじにするのだから始末が惡い●南亞戰爭の英軍の損害を、戰死三百十八萬六千百八十八人内士官六萬人捕虜にされた士官は八千人兵は十九萬人、失へ

る大砲二千百六十門と數へて、おまけにケーリケンニー將軍は其頭を割られたること三囘、ロバーツ元帥は其五本の脚と九本の右腕を失ひたりと書いた新聞記者が在る。●くろいぬのことをおくれとの手紙を受取つて遠いところを眞黑な犬ころを夫に送つた女がある。●其ダホメーの男達は親密なる愛情を表はす方法として其愛人の頰ぺたをピシャと撲りつけることになつてゐるやどは此頃少しも私をたゝいてくれませんと警察へ泣きこむだ女がよくある相だ、日本ハ奧さんは幸福だ●最近一佛國人はマダカスカル島に產する一種の蜘蛛から糸を取り黃金色の絹布を製することを發明し其の爲めに立派な工場まで設立して居る、これは野生の蜘蛛の腹を機械に着け、十二匹から一度に絲を引き、之を適當の太さに撚つて絲卷に捲く、七百の蜘蛛から約二ポンドの絲が取れる、一度絲を取つた蜘蛛も、之を一箇月も野に放つて置くと再び機械に着けて絲を取る、これは少々奇拔過ぎて受けとれない、よしんば織物にしたところで御婦人には氣味が惡いばかりだらう、尤女郎蜘どろ棒蜘などの絲はたしかに强い、見上るような高い所に巢をかけてるのを叩きおろして、尻についてる絲の端を引くといくらでも出るからそれをV字形の木の枝にからみとつてラケットのようにこしらへて蟬、蝶、蜻蛉など捕つたものである。のみならず私はそんな子供の時だつたけど『三才圖會』で何とかいふ小蜘の絲を人のからだの或部分に卷ととれなくなつてそこから腐るとあるのを讀んでゐたので、氣味が惡かつた。實際林の中を步いて遊離せる絲のはしへ顏などあてようものならねばり着いて全く始末にならない。でも尻を機械にかけてつむいだらどうか知らぬが、我々の經驗では人間があいつの尻から手ぐり出した絲はさうねばらない。それにしても白縫物語の若菜姬を工女にかゝへる智惠も無いくせに二ポンドの絲を得るために七百匹の蜘を捕るのがコトだらう。脚が八本も有るからね。「虻は蜘を常食とする」とあつた。蝱蝒の蝱がバウとよまれる時は蛙のことだから、虻をアブでなくてかへるかも知れぬ。それもナミの蛙では靑ぞらへ梯子及びもつかぬ、雨蛙ならと思へど梢から梢へ宙にぶらんこをやつてる蜘に飛びつくわけにはいくまい。そしてフロリダには小鳥を捕つて喰ふ蜘が居る。●庭園税をおこさうとして地主に反對され、鏡つきの衣裳箪笥に課税しようとして奧さん達にコッカレた佛政府は、人口減退の結果を危ぶんで、夫婦者を多から

しむれば子孫も從つて繁昌するだらうと思つてかどうか、獨身者に課税する案を立てるかも知れないといふ

●極地にて水を氷の上へぶちまけると氷がすぐに割れる。白瀬中尉の開南丸はまだ行き着かないが、いづれ何年かの後には其珍現象を見るだらう。流動體は皆凍るから水を撒



きたくも有るまいとなら、Shōben があるぢやないか但しての Shōben シベリヤの木こりが落した斧を取りに下りるのがいやさに樹の上からしかけると奔流忽つららとなるから手ぐり上げて斧をとらうと企んだ昔話のやうに、中尉のもぶちまける途中から氷とならぬとも限らぬ。

世界の漂浪者と生活を共にする記

市子

「〇〇さんも△△先生に許は叶はないと見える」と私の我儘を知つてる人はよく云ふ。私は自分が學んでる學業を是非終り度いと思つて居る。それには社會に於けると同樣に、才覺も努力も物質も必要であると共に、社會に於て先輩と後輩、上級と下級の人々の間に於ける如く、敎師と生徒の間にも理解が要る、殊に私共の學校の樣に他から這入つて見られない或る一種の大氣の中に同性同志で敎師と生徒と云ふ分界線を隔てゝ、住んで行くには理解は非常に大切で、時としては私共の運命をも試み樣とする。

それがある期間丈、きまつた期間丈を一片の告辭でつき放された時には、檻に入れられた獅子の沙漠を慕ふ樣に、時と自由とに飢えてた私は、もうわけもなく樂な安らかな快樂を味はつた。

此處に來て私は初めて外國人――普通の外國人の生活を知る事が出來た。これ迄私の接した人は大抵は宣敎師で――嚴かな敎令、食料と着物と住むべき家を與へる敎の內に四角に住んで居る宣敎師で、それも大抵は特別の場合で、招待された茶席か、クリスマツリーに瓦斯に輝く金銀の星美しき夜か、兎も角一種ある種の空氣と感情に先づ包まれて、私共は眞の其人々を知らなかつたのが、近く其眞面目な捕はれない世界の流浪人とも云はる可き生活を見て私は私自身にある一種の姿を見る樣な感がしだした。その爲か私の生活法も大變な變り方をした。

二階には朝はバタ付のパンにミルクと紅茶が行く。晝は二種位の肉類に野菜物が二皿位とスープが付く。夜食は簡單なもので、ビールに卵が二ツと菓物で終ふ事もあれば、三番町の私共の間にブルーレストランと呼ばれて居る料理屋ですまして歸る事もある。

休みになつてから私も可成暢氣な生活をして居る。朝御飯は裏の家から御飯と一所にもつて來て呉れるお汁にうづらの三錢位か卵で喰べてお乳の一合はかゝさずにのむ。洒掃と云つても三疊の方を一寸はく丈で、勉强室の方はテーブルや棚を一寸拭く丈で別に面倒な事は入らない。それで大抵は七時過ぎには髮迄すんで終ふ。七時半からは裏の家に行つて半時間讀方を習つて半時間日本語を敎へて歸る。

それから午砲のなる迄は涼しい室を明つぱなしで仕掛けの仕事をする。午砲がなつてから裏の家で取つておいて呉れる肴か肉かを料理して、別に野菜も造らへてお晝飯をたべて、遲くも一時半にはあと片付け迄すまして圖書館に出掛ける。五時半迄は仕事の參考書を見ることも有り、又よんで置き度いと思つてる古い物を借りることも有る。新らしい雜誌も大抵は讀む。



五時半に歸る時には何故か足が棒の樣になつて居る。矢張り終日腰掛けることは私共にはむづかしいと思はれる。夜食には紅いお茶でお茶飯を戴く。

時には（ブルーレストラン）一所にブルーレストランでオムレツかフラ

イかに野菜の一皿とつてサイダーですまして歸る事もある。歸路には能く角の氷屋に二人で入る。大抵は覆盆子か否か林檎に札は落ちる。私はよく金時を喰べると笑はれる。九段の夜は矢張なつかしい。若い櫻の一葉二葉を誘ふ風は、軒の風鈴に形なき姿を歌はせる。私は二階から貸して下さる新着の英字雜誌に讀み耽ける。

先月の女學世界で晶子女史は、今の若い獨身の詩人乃至は文士が紅燈の下に生きてるを仰有つて「何故若い女達は、あれらの人々を解して、あんな不潔な場所より救はないのか」と、仰有つた。私共は　私共より前に生れて前に墓に下つた多くの女の血を受けて、元より異性とは放れてるとの感をもつて居て、機會さへあれば、自分を入れて呉れる男の魂を見付け樣としてる故かも知れないけれ共、男性、殊に若い心眼の開いた人は懷しいと思ふ。それ故に少なくともそれらの人を解して居る積である。然し悲しきかな。日本では　私共より全く離れた場所で離れた心をもつた女にそれらの男に近寄る特權を與へられて居る。私共と同じ肉體と同じ容貌とを持つた女に、卑しい男の心を引き付ける媚を許して有る。私共がその特權を得る爲には、心ある人の笑と社會の指彈とを忍ぶ丈の税なくては許される事の出來ない媚を許してある。私はそんな意味で先月來運動の有つた矯風會の廢娼運動に贊成して署名した。

人と生れて己れを祝福する事の出來る人位幸福な人は有るまい。

「私はよく生れたものだ」と近頃は思ふ。と云つて私は決して美しくは生れなかつた。腕の中で生れなかつた代には、錦の褥をも使ひ慣れては居らぬ。然し少なくとも丈高く眼輝く女と生れ、美しい詩の斷片を絶えず吟さむことの出來る女に、「私はよく生れた」と自己を祝福することの出來る女に、尚其上に何が望まれ樣。私は決してヤコブの樣に死に瀕して居る族長を欺いてイスラエルの長子權を奪ひもしまい。「我を祝福し給ふに在らざれば君を行かせじ」とも天使に逢つても云ふまい……決して。只願はくば我が歌の常に若かれかし。我眼の常に好き姿を寫せかし。

「あなたは此家に住つておいでになるんですか」と初めて來た人は怪しむ位、私の部屋には飾がない。私自身も時としてはおかしくなつて終ふことがある。氣取つたテーブルと椅子が五脚、外には二世紀も前に何處

かの田舎の寺の住持の晴の法衣だつたらうと思はせる法衣の窓掛がある丈で、一時は壁に張つて有つた縫入の打敷も、先月の大風の折に外した儘で飾らないことにした。私は私一人の香と色と響で此の薄暗い陰氣な部屋を明るくすることが出來るか否かを試みて居る。そして之れは少くも私の前途を占ふものと思つて居る。若し此室に來る人が私一人に滿足して、四周の色彩に不足を感じないなら私は今此儘の私で一個の「私」として立つてとが出來やう。若し此室に來る人が私を補ふ色彩を思ふならば、私は未だ「私」丈では立てないのだと思つて居る。暗きをも明るくし、死をも生にかへす事の出來る愛なくば、樂園を追はれてアダムは生きなかつたらう。

私には決斷力が非常に缺けて居る。私の血管をめぐる日本の女の血に、男の奴隷となつて甘んじて居た性根の流の傳つて居る故か、私には決斷力が缺けて居る自身の事を定め樣と友達に尋ねて、敎師に占ふ、時には緣もない人に是非を占ふて却つて失望を購ふ事さへある。そしてそれが解ると共に私はとても獨身では暮されないと思ふことが有る。夜雨先生は戀する女を呪へ、子を生む女を呪へと仰有つた。私はそんなに戀しやうとも思はない、子を生まうとも思はないが私は確に結婚するだらうと思ふ。けれども私の夫となる人（それは祝福された人か呪はれた人かは知らない）は決して歌や畫のわかる人ではないと思ふ。私の考へてる事、仕て居る事は少しもわからないで、只それを喜んでくれゝば可いと思ふ。私のシンシーヤな愛情を其儘に受けて、極めて幸福な夫で有つてくれゝば好い、そして私のむら氣な感情を笑はないで、自由に泣かせて笑はせてくれゝばいゝ。それで居て二人の線が一にならなくとも構はないから、其間に外界に見る事の出來ないなつかしい色と、かぐはしいパルフユームとを含むスペースを挾さんで行き度い。藝術に行く人のセンスと私のセンスの間には餘りに共通の處が有つて、私は自分の姿を見て行く樣な氣がする爲で有らう。

秋には同居の人は紐育に歸ると云ふ、私共二人で形づくつて居る玩具的家庭の九段に消えるは間も有るまい。

そして私は又何處に草枕を移すやら。萬事を知る人のみ知り給ふ。



名つけ親

磯萍水

一

つひ貰つて了つた、何時ともなしにお腹が大きくなつてしまつた、たうとう赤ん坊が產れてしまつた。名を附ずばなるまい、まだ赤ん坊でも役所の屆は濟むが、それではお婆さまが承知をなされぬ、何とか名をつけずばなるまい。

貰はずふくれず、飛び出さずの、以前の私は今のやうな、赤ん坊の顏を見て初めて名を考へてやるやうな、そんな世間並の男ではなかつた、まだ山の神の御降嫁なされぬ前に、整然赤ちやんの名はつけてあつた。朗、何とよい名ではないか、溫か味のある、ふくよかな、慕しげで、威嚴のある、誰が何と謂はうともうこれに極めてしまつた、產れる兒が男でも女でもこれで間に合せる、實の處、その名がつけたいばかりに赤ちやんが欲しかつたのだ、赤ちやんになつてその名を、自分の有にしてしまひたかつたのだ。

私は世の中と謂ふものはよくも斯う脊負投を喰はせるものだと、染々感じた、產れる二三日前だ、母さまは近年稀な眞面目な顏をなされて、朗と謂ふ字は『らう』と讀むのかいと仰有る、此方は何の氣もつかない、ええ朗ですよ、お前眞實かねと念を押される、今度は面倒だから合點をして見せる、すると母さまは開きなほつて、よしませうよ、お前緣喜でもない、朗が朗なら磯朗ぢやないか、(私は初めての孫を食客になんかしたくありません、)以ての外の斜めな御機嫌。

成程と思つた然し口惜かつた、そして探つたいやうな感じがした、これは母さま獨創の發見ではない、影には山の神がある、だから女の生學問は厭だと謂ふのだ。

食客ときいて百年の戀もさめはてた、自分の手落だつたとは知りながら、山の神が怨めしくつて仕方がなかつた、今日で四日口をきかない。

然し何とか名をつけずばならない、自分で拵へた兒の名は自分でつけるのが本來だ、仲人だの、嫁の親達なんぞにつけて貰ふのはよく／＼の無能だ、その位ならば兒も拵へてもら



へば世話はない、まして家主や課長づれに心にもないお賴みをするに至つては親として自分の兒を侮辱するものだ、自分で出來した事件は自分で始末をつけるのが當然だ。

よく名なんぞは何でも好いと謂ふ人がある、名は符牒ぢや然だ符牒ぢや、然し同じ符牒にもしろ、美しい符牒がつけたい、戒名でもよいのがつけば喜ばれる、名なんぞどうでも好いと心配しない輩は名なんぞどうでも好い形ばかりの粗品を有つて居るからだ、美しい兒には美しい名がありたい私の兒は美しい、私にも女房どもにも似て居ない、お

ばばさまに能くも似て居るぢや、齒のない工合なぞその儘ぢや、いや彼の儘でも困る、今に瓢の種のやうなのが美しく並ぶであらう、何にしても好い兒ぢや、八幡冥加あらせ給へ、然し名がなくては困る、苗氏と合ふのでありたい、子をつければ二音で、つけなければ三音、同じ語音のまじらない、アクセントの氣分のよい、名をきいて直ぐその主がどんな人かと直覺できるやうな、もし年頃になつてどこかの若人と戀が成立つて、沈丁花のかをり漂ふ宵闇に名をよび交すにしても河馬子さんですかでは氣分が美くない、名をきいたばかりでそこに美い姿が髣髴するのでなければ不可い。姓が海に限られて居るだけに狹くつて困る、乙姫、千鳥、巴、夕凪、どうもお姫さまのお供で、花道に並びさうで困る、さざら江、（八郎御曹司の終りの戀人）人物としても好きだが、呼びにくい、『さざら江ちやん遊びませんか』どうも時間がかかりすぎる。

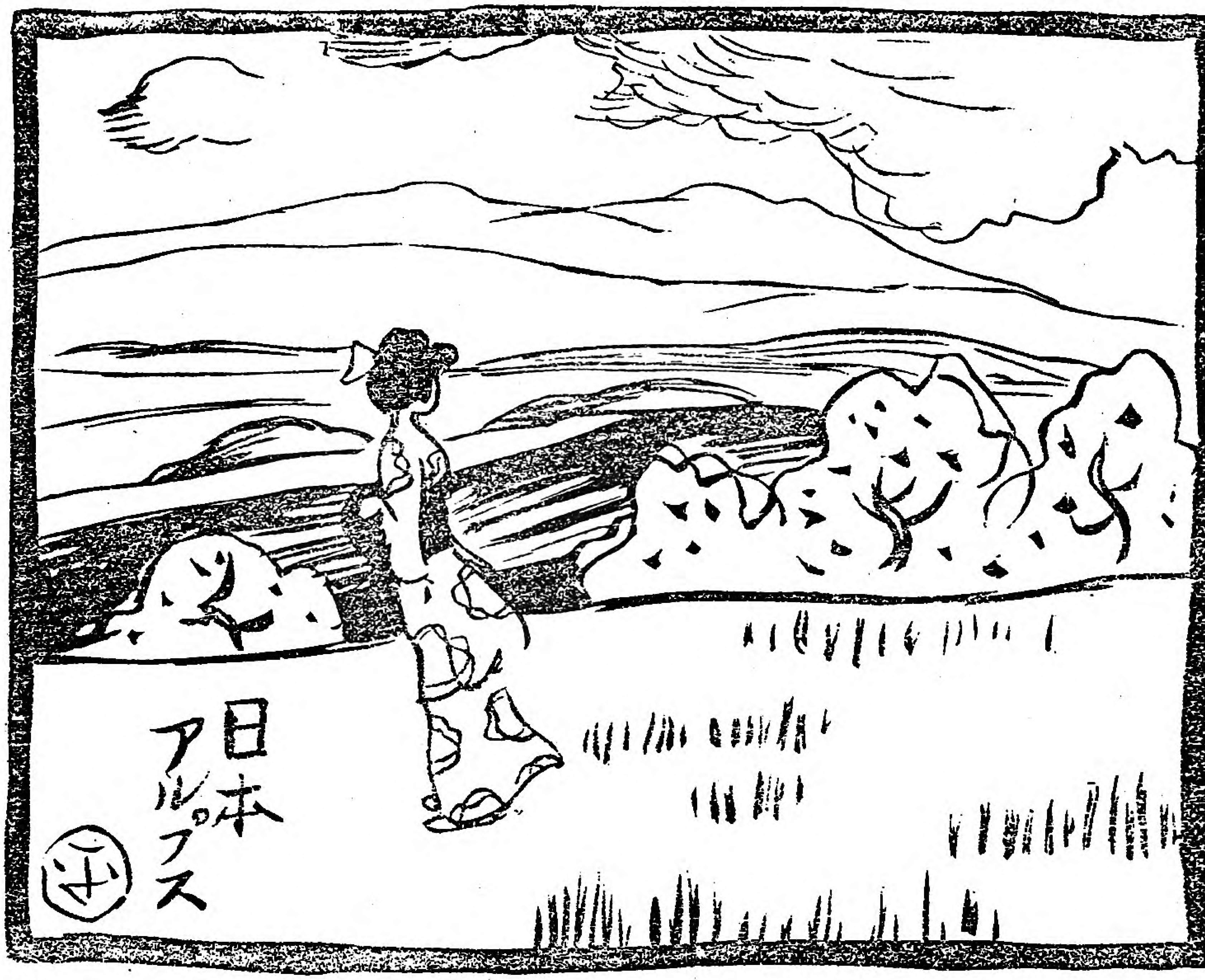
母樣は、威勢のよい、長命をしさうな、お目出度い名にしてくれと謂はれる、なほ難しい、いつその事、春限無々々々がよからう。

暮の二十五日だ、こんな思案投首で歩いて居ると、定めし金に困つて首を縊る軒でも見つけて居ると思ふだらう、笹の立つた師走の往來を赤ン坊の名を見つけに歩いて居る新米の親父の煩悶を誰が知らう。

神樣は私を助けて下さるらしい、向ふから名つけ親にはお誂ひの人が來た、斯うした場合には、この梭魚の干魚のやうに瘦せかたまつたのも、阿羅々仙人ほどの尊さに見える、裾長い外套も、襟の毛皮も、萠黄の毛が獅子毛のやうに巴卷きしたアルプス式の帽なぞは、古羅馬カップチヨオの高僧が出現した程に有難がります南無聖母さまお助け下さりませ。

假に人間の姿を現しても、役の行者を筆頭として、春日坊、豐前坊、丹波太郎、奈良二郎、泉小二郎、近江小太郎、日本國中の山神天狗雲男から盆暮の付屆が來て、木精石魂を腮で追使ふ、稀代の行者、山の聖、人間に名つけを賴むのは如何にも殘念だが、山法師ならば神も同じだ、氣に入る入らぬは別問題として、別

に費用のかゝらない事だまづこれに口をかけて見やう。
『やア。』
『やア。』
『どこへ。』
『どこと謂ふ事もなしにたゞぶら／＼。』
『君御願ひがあるのですがねエ。』
暮の十五日に往來でつかまへてお願ひと來ては大抵の者なら金だなと直ぐ眼の色が變るのだが有繋は山神氣配にも見せない尤も此方借金にしては威勢がよすぎた。
『何です。』



『赤ン坊が產れましてね
『それはお目出度、何日です。』
『ざつと、今日で四日になりますがね。』
『女ですか、男ですか。』
『女です。』
『初めに女が順ですつてね、一姫二太郎つてね。』
『處でお願ですがね、名をつけてくれませうか。』
『僕でよければ、喜んでつけます。』
『貴下にかぎるのだ、他の奴には賴みたうない。』
『女の兒さんですね。』
『女です。性とつく、美しい直覺のある、子をつ

ければ二音、つけなければ三音、威勢のいゝ、長命をしさうな。』
『難かしいね。』
『まあとにかく願ひます。』
『氣に入るか入らないか、まあ考へて見ませう。』
別れる時に山の聖者は帽をとつた、とたんにぱつと年には可憐さうな禿が光つた、けれど私には神さまの御光ほどに尊く拜まれた。
自分の仕事を人に任せたので、急に好い氣分になつて反身になつて歩いた、咖啡店によつてココに酒をませて二杯までのんで、方々素見して歸つた、歸つてから今夜は埃及研究會へ行く爲めに出たのだつたにと氣がついた、今からは遲い十一時だ。

二

明る日又しても母や妻は赤ン坊の名を請求をした、私は、もう大抵見當はついた、今日明日の中には何とか捉るだらうと、泥棒を捕へるやうな事を謂つて親父らしい顏をして見せた。
私も山の聖者も、店は異ふが同じやうに或る銀行に奉公して居る、日曜と大祭をのぞくの外は、朝から日の暮まで他人の金の勘定をして知行を頂戴して居る。午休みを少しすぎて聖者の使ひが來た、一封の手紙は私の手に落ちた、開いて見た、赤ちやんの名が澤山並べてある、よくも斯く直ぐと考へついたものだ、やはり凡夫ではなかつた、有難や聖者アルプス上人さま、はてどれにしやうぞ、一人では思案にあまる、誰ぞ相談したいものぢや、いや〳〵、髭こそ立派に利口さうに見せかけて居ても、いづれもいづれ文明の生蠻だ、月給と女の噂の外には何の智惠もない、折角の可愛ゆい娘の名にけちをつけられては、娘の出世の障りにもなる、聖者さまにも濟まない、見たい、考へたいのを辛抱しながら、幾度となくそれをいれてあるポケットを上から撫でては時計を見た、今日の日の永さ。
今私は歸つたばかりだ、帽子だけぬいで外套も着たまゝで、鼠をのぞくの外の總ての家内中の生とし活け

る者共を身の廻りに呼びあつめた、と謂つても大した人數ではない、爺さま、婆さま、女房に娘に、當家内膳の職たるお春殿、以上四人と半。

皆は首をペンギン鳥の樣にして待構へて居る私は這う謂ふ場合には成るべく落着いて、勿體らしく、分別らしく、人の親たり一軒の主らしく見せておかなければ、後々の爲めにならない、また從つて娘の示しにもならないと思つたので、周章たいのをやけに泰然と構へ込んだ。

『昨夜は途上にて意外なる御註文にあづかり一寸戸まどひ致し候、書物の名を選ぶとちがひ人間の名はあまり手がけず候へば手心わかりかね候へども、左に見本を陳列致し候へば其中より御氣に召したのを御使用被下たく被下らなく候も苦しからず候。

但し昨夜御話の中の、朗さんと謂ふのは、母上の御不同意が至極御もつとも小生も存せられ候、なせと申すに、ほがらかちやんと呼ぶ時は、一寸、ちやちやらかちやんとも聞えて二十七八年頃流行の唄のやうにて面白からず候、年頃におなりなされて小學なぞにて戯はれる因に候、御斷念然るべしと存じ候』

但し『昨夜』からは口の中で讀んだ、聞せてはまた物笑ひの蒔きなほしになる、むにや〱と呑み込んで了つて、てれ隱しに見本書の方を廣げる敵陣の地圖が手に入つたやうに、我勝ちに首をのぞき込む。

『鴉子。』

『何かになふやうで可笑いね。』

『涙子。』

『不如歸にあるよ、姑に虐められて、離縁されて、肺病で死ぬのなんか、鶴龜〱、七里結界。』

御姥さまは史實にお精しい

『田鶴子。』

『あら不可ませんわ、大阪毎日で自殺をしましたわ。』

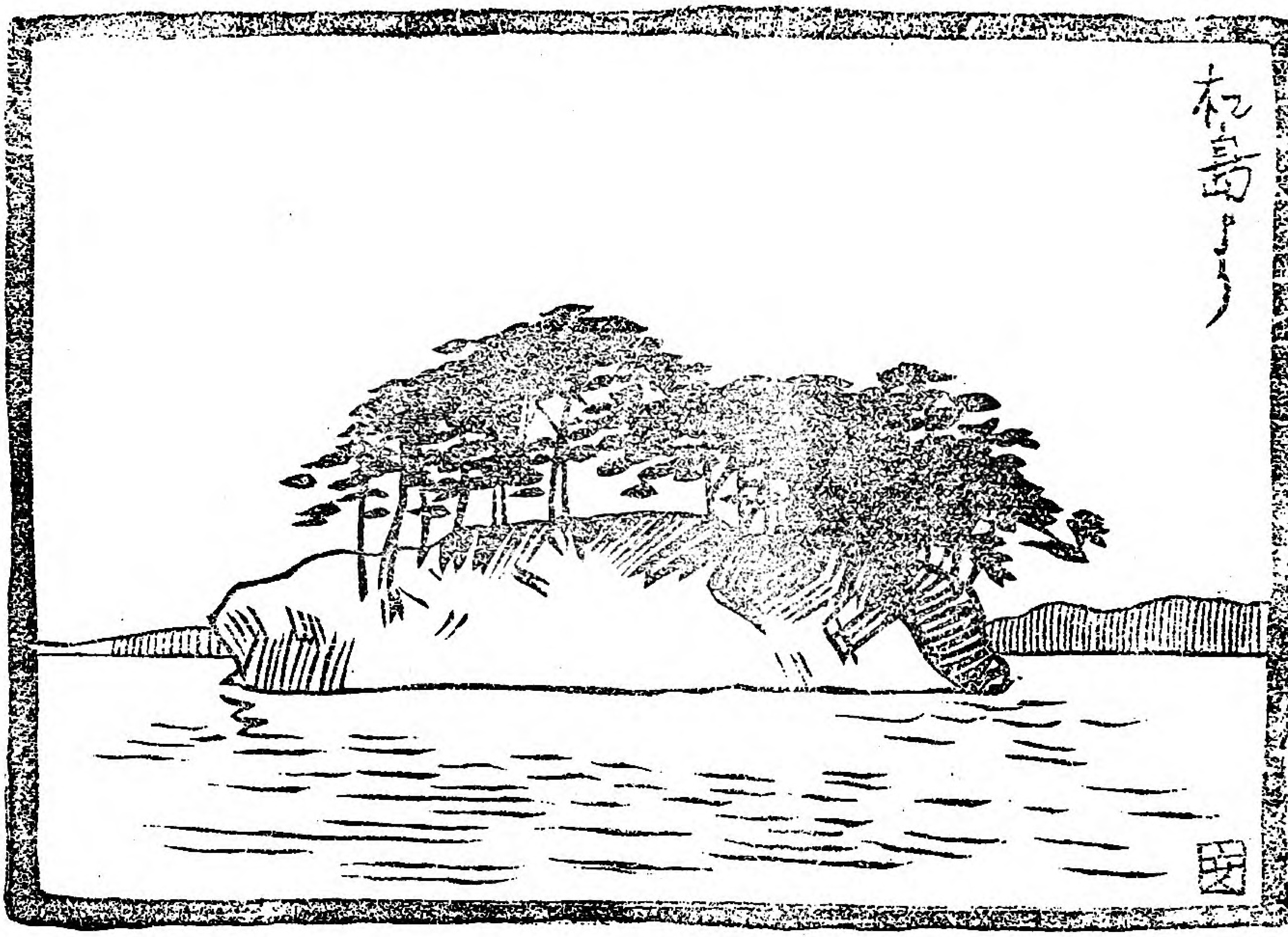
『まあ可憐さうに、何歳で、どうして。』

『お母さんお讀みにならないの、面白いのですよ、そりやア。』

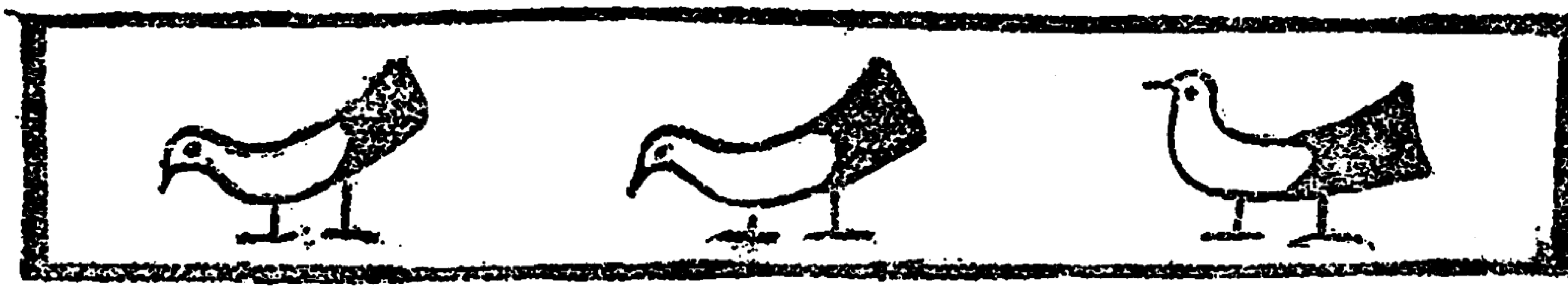
『人が死んで何が面白い事があるものか、莫迦な奴だ』

『何の話だい。』
『いゝえ新聞の小說ですの。』
『何だ莫迦〱しい、オイ名はどれにするのだよ。』
『まあお見せ、どれ〱。』
團扇ほどもある蟲眼鏡を腰間にさぐつて母さまは名前書を見分におよぶ。
『澪子。』
『何だか憐れつぽう御座ますね。』
『珊瑚。』
『面白いね、珊瑚が。』
『珊瑚樹の珊瑚ですね』
『さうだ。』
『よさゝうだね、片名に呼んでもおさんだから、紙治のお神さんだ、實があつていゝね、けれど亭主で苦勞させるのは厭だね。』
『それよりかお母さん、どんをつけるとおさんどんになりますわ。』
『片名に呼ぶからだ、たゞ珊瑚やと呼べばいゝ。』
『三五屋か、株屋のやうだな。』
此度はお爺さまが突きくづす。
『これは何と讀むね、若。』
何さま老眼では如何に蟲眼鏡でもお讀めにはなるまい達者にまかせて洋紙にペンの走り書き、雲の湧くやうな、砂上の鳥の跡のやうな、字か、書に近い、然り埃及文字であらう。
『若、何だらうな、讀めない、下に何か書いてある、白縫物語の大立物、小生大の贔負の女性なり。』
謎をときなやんで小首を傾ける間もない、母さまは鍵を打たれたピヤノのやうに直ぐさま應じた。
『若菜姫さ。』
『あア、若菜姫か。』
『若菜、謂ひいゝね。』
『さう發音が好いわ、それに如何にも若々しくつて、美しさうで。』
『ふむ、それがよからう。』
一同思はず顏を見合せる。

『それにおし、草雙紙の名をつけるのもいゝ、いつそ面白いよ。』
『さうしませうよねエ貴下。』
鋭鋒を轉じて徐ろに、
『お母さんはどうします。』
『お前の兒だもの、お前さへよければ。』
『おやアいゝでせう、私も面白いと思ひます。』
有難やアルプス上人さまの御蔭によつて、私の娘は漸く人の名を得た。
お姥さまは睡むる赤ちやんの顏をなでながら、
『赤ちやんや、今日からお前さんは若菜と謂ふのだよ。』
授けられた名が意に叶はぬのでか、赤ちやんは突如泣きだ



した、練習中の若いお母さんは慌て抱て乳房を含ませた。
姫は名なぞより乳の方がほしかつたのだらう、實際名なんかと謂ふものは、何時まで口にして居たつて、腹こそへれ腹のたしになるものではない名をつけて了つてから私は思つた、人に名があればこそ、そこに涙だの笑ひだの戀だの怨だのがある、私の娘はいつそ名なぞのない方がよかつたこの天地の間で、どの人間にも名のない人間はない、だから、一人ぐらゐは名のない人間が在つてもよからう、あるのも面白いと思つた。
然しもう遲い。



朝顔夕顔

軍馬　　公爵夫人　一條悦子
ますら雄がひく若駒ぞいさむなるあだのとりでもふみくだくべく

折にふれて　　故伊藤公爵夫人　伊藤梅子
をさな子の數そふ宿のにぎはひを聞くわれさへに嬉しかりけり

藤　　侯爵夫人　徳川英子
はるかぜの吹きくるたびに朝露をこぼしてゆらぐ藤の花ぶさ

戰時　　伯爵夫人　大木雪子
友にあふもまづいひいづる言の葉は大御軍のうへにぞありける

藤　　伯爵若夫人　上杉房子
むらさきのゆかりの色やしたふらむあたりはなれぬあぶのひとむれ

松　　伯爵夫人　佐野尚子
よろづよとよぶこゑすなりてゆるぎの磯の松原風やふくらむ

蟲　　伯爵若夫人　大隈光子
秋はぎの花のしづくにぬれながら月夜さやかに蟲ぞなくなる

深夜水鳥　　子爵夫人　保科武子
みづどりのよなきの聲にいくたびかしもよの夢をむすびかへけむ

心　　子爵夫人　牧野信子
國をおもふ心はいかにかゝはるべきをしへ草つむをとめなれども

朝顔　　子爵夫人　田村貞子
賤が家のかきねはなれし軒端までさきかゝりたる朝がほの花



いたづら日記

竹村　千枝子

『暗き御目の悲しさは、月日の影も水鳥の賀茂の川岸波越えて、ゆいの夕べを松坂や消えてそかへれ粟田口いつを便りにたはつけの我黒髪のさね葛、逢坂山にぞ着きたまふ』

と蟬丸の唄を、思ひきり大きな聲して唄ひながら、綠陰暗き飛鳥山を、誰はゞからず大意張で通りぬけてお師匠樣の宅へ行く、八時着。お清さんの腰紐のほどけたのをこれ幸と、たすきをたして物尺や座布團を結び附けて置く、『お師匠樣如何で御座いませう』と立つと其れがずる〱と引ずられたので五人ながら哄然笑ひ頽れた。

『千枝さんおぼえて被在い』私可笑しくて、可笑しくてたまらない、お腹かゝえて笑つた。

『千枝さん又おいたを……』とお師匠樣、私兄樣だらうが、お母樣だらうが、お小言つても平氣だが、お師匠樣に一言云はれると、ぴりつとする、さすがは、お師匠樣と、感服する。

夏の日永の五時迄、ちく〱針を運んで居るのだから、あきちやつて、あきちやつて、たまにはいたづらもやつて、欠伸を防いで居る、が今日土曜で半日、十二時半歸宅。

まぐろのおさしみで、さら〱とお晝飯をかつこんで、大急ぎでブランコに飛乘つた、一二三と一生懸命こいで居ると兄樣、便所にお出でになつたやうだ、こういふ時に一ついたづらと、思つてぬき足さし足、息を忍んで錠を下ろした、中からあかないで、

『おい千枝さん、明けないか』つて、窓の竹につかまつてどなつて居る樣子は、まるで動物園の虎だ、棚の中でウーウーとやつて居る、丁度あれだ。

『東西〱、このところ御覽に入れますは虎の七うなり』つて笑ひこけて居ると、弟がちよこ〱と走しつて來て、戶を明けたから、

『何をよけいな眞似するの』つて、頭に一つお見舞申した、兄樣におつかけられて、裸足で庭中逃げ廻つた

夜、小兄樣に、

『渡米の野球隊どうして』つて伺つたら、

『八日に、菅瀬が投手で、ウイスコンシン州のノートル大學と戰つて、九對五で負けた』

『三田のヘボ』

『何ッ失敬ナッ、リッポン大學と戰つて、二對一で勝つたぞ、慶應の健兒の腕を知らんか、生意氣言ふな』

『勝つたの、あゝうれしい、慶應萬歲』

『野球狂』ッて笑はれた、でも嬉しくて嬉しくて……私の好きなお方も渡米してをるのですもの、女の念力岩をもとほすと言ふから、私も陰ながら大祈り。

（十日）

朝六時起床、梅の若葉が落ちて庭一面の青疊、裸足で竹箒を持つて、えつさ〳〵掃いて居ると、によつきり疣蛙が顏を出した、あんまり吃驚さして口惜しかつたから、思ひ切り竹箒でなぐつてやつた。

『おーい千枝さん御飯だよ』ッて、小兄樣のお聲、知らん風をして、お稻荷樣のわきをせつせと掃いて居ると、庭下駄つつかけて、飛石づたひに來るから、箒にぬれ泥を含まして、石の陰からひよいと出すと、小兄樣驚いた事〳〵、其のひようしに、白地の浴衣に泥がついて、霞の袖模樣、今迄堪へ〳〵た可笑しさを、一時に破裂させて、箒をほうり出して逃げ出した。

『千枝てう、いたづら』ッて、口惜しがつて居る。

朝飯を頂きながら、一人で思出し笑ひをしてた。

お琴を復習してると、小兄樣が來てさつきの敵打ちと言ふわけで、後で色んないたづらをする、とう〳〵紅葉賀を半分でよして、しまつた、皆なが面白がつて笑の連發をやる、口惜しくつて〳〵すねて〳〵泣いて泣いて、布團を被つて泣寢してしまつた。

夜はもう仲がなほつて、權現樣からお稻荷樣の方を小兄樣とぶらついて、西洋料理の前迄來た時に、向ふから五ッ紋の羊羮色の紋付を着た、いやに紳士を氣取つて居る貧士らしいのが悠然としてやつて來た、すると西洋料理の犬がいきなり其の紳士に吠えついた、紳士元來犬が御嫌ひと見えて、一方ならず驚いた、どゝ西洋料理の亭主をどなりつけた。

『イヽエ何もしやしません、大丈夫です』

『何にもしないつて平氣で居る奴があるか、馬鹿ッ』

『馬鹿とは何です、失敬ナッ』

『失敬とは貴樣のこつた、こんな犬を出しとくとは、怪しからんじやないか。』

『馬鹿の事をお言ひなさい、どこへ行つたつて、犬を戶棚へでもしまつて置く家があるもんか』

見兼ねて女將が出て來た、

『何ですね、そんな手古變な風をしてるから、吠えるんでさアね』

『何だ怪しからん』

『何が怪しからんです、犬は吠えるのが商賣ですよ、ほえるつて字は口へんに犬ですよ、何だ馬鹿々々しい、くいついたと言ふじやなし』

『怪しからん奴だ、派出所へ來い』



『犬で交番へ行く奴があるもんか』

貧士はとう〳〵交番へ恐れながらと出た。

『ネエ小兄様、あの險相な御面相じや犬も吠えるわネ』ッて言ふと、

『向ふずねでも、食ひつかれないのがまだしもだ』つて、聞えよがしに言ふ、交番では紳士がしきりにどなつて居る。主人がたまり兼ねて出掛けると、後につゞいて一同ぞろ〳〵で主人が口を聞かうとすると、

『貴樣無學だから駄目だ』
女將が
『ハイあなたは大そう學者で被有しやる、犬をあいて取つて、裁判でも何でもおしなさい。』
『何失敬な事言ふな、第一犬が吠えついてもかまはんと言ふ、そんな憲法はない筈だ』
『犬の吠える憲法が、どこにあるもんか』
『最う一度吠えて見ろ、往來の安寧を害するものとして、正當防衛で切り捨てるぞ』
大變な事になればなるもので、貧士は非常な勢で怒つて居る、見物人一同哄笑した、私と小兄樣無遠慮に、誰憚らず笑ひ出した、歸へつて床に着いたのが、丁度十時。（十一日）

包みを抱へて家を出る、お師匠樣風邪の氣味でお休み、松の木に、ハンモックつッて金色夜叉を片手に、寢ころんで凝と雲の行衛を見詰めて居る、涼風がそよそよと吹いて、遂にとろ／＼と寢入つてしまつた、

心地よく寢てゐると、
『千枝さん御飯だよ、晝飯だよ、』ッて、兄樣起して居るくす／＼笑つて、何だらうと思つた。目をこすると大變、大變、手の掌は眞黑、鏡に向つた我顏は、いつの間に惡戯されたのやら、二目と見られぬ墨の海、家中が大騷ぎ笑ひ聲で滿たされて、今にも家が破れさう口惜しまぎれに顏を洗つて、其の儘プイと飛出して叔母樣の家に行つた、明樣がキリスト教信者で、顏さへ見れば、イエスキリストが何の・人間は罪深いもの、早く神の救ひをうけよふつて、二時間位お說敎する、癪に障つてたまらないからお使ひに行つた留守、半紙に大いに書いて來た。

午後五時歸宅した、机の上に、絕えて久しき君が玉章、とまでは行かないが懷かしき方から手紙が來てた
『田端の孤家も尋ね給へ、僕の如き寂寞の好きな者は斯ういふ家がよいのだ、夏は青葉茂る下闇にハンモックの中で晝寢、月冴へ渡る秋の夜に、蟲の音を聞きながら燈前で書をひもとく時の心持、何とも言ひようのない氣がする……』讀み終ると行きたくて行きたくたまらなかつた、で色々想像して見た、植木屋の離室、どんな家だらうと思つたが、手紙で許り聞いた事故、それの分る筈もなかつた。

夜、小兄樣のお友達で、早稻田文科のK樣がお出でになつた、お口の惡るい事一通りでない、近頃の婦人は實に驚く、金色夜叉の宮はよく其の特徵をあらわし

て居る、愛と金どちらかと言へば、愛四金六だなんて婦人の惡口を仰有るから、
『早稻田大學はゼムや仁丹のやうな學校ですね』ッて一寸新聞の受賣を申し上げた。
御歸へりに停車場迄お送りした。
『君と千枝樣と二人てう歩いて居ると誰も兄妹と見ないよ』K樣仰有る、と小兄樣
『御夫婦樣とお見遊ばすかね』だつて、私もう小兄樣と一緒に決して歩かない事にきめた。(十三日)
昨日の墨塗られた恩がへしに今朝四時半に起きて、六十三枚の雨戸をがら〱明けた、兄弟四人寢つて居る枕元で、唄を歌ふ、琴を調べる、踊る、はねる、世間の人が見たら狂人が舞ひてんだと思ふだらう、大騷ぎをやらかしたので、四人共五時半頃起き出た、がお母樣に
『朝つぱら何です、年甲斐もない、女の癖に靜かになさい』つて、お目玉頂戴仕つた、すると小兄樣が、
『およしなさいお母樣、口を酸くして言つても馬耳東風ですから、いたづらのはげしいのはとてもなほりませんよ、人間じやない鼠の生れ替りだ』
是りや驚いた鼠の生れ替りだつて、でも頗る奇拔だ

七日前琴のお師匠樣で少し御喋舌をしたら、稽古中に新井樣が笑ひ出したので、おかんむりなゝめにかたむいた、がもう、眞直ぐになつた時分だから出掛けた。
松島を始めたがちつとも覺えられない。
お針に行く、早起きしたせいか、ともすると目が寄合する、何か寢むけざましと思つて、皆んながおひるに歸つた留守、歌さんと言ひ合せて、白の大風呂敷にすつぽり包まつて、後の戸棚に隱れてたんだ、皆の集まつた頃見はからつてころげ出た、キヤッと叫んで皆飛びあがつた、可笑しくつて〱お腹の皮をよつてしまつた、眞青になつた人も笑と變じて花を咲かしてる眞さい中、お師匠樣お醫者樣からお歸へりになつた、又元の雜談して澄ましてんだ。
午後五時二十分頃歸宅、パラソルかたげてお使ひの歸へり道、宮下町で明樣に出會した、往來で、
『千枝樣、君はひどいねあんな事書いて、天にましますす神に申譯がないじやないか』ッて其れから其れと大不平を並べる、負けん氣で大氣焔をはいた。
夜、小兄樣飛鳥山へ散歩に行てうと仰有つたが、御夫婦と間違へられるから厭つてよした、倉智樣にお返事書いて時に出さした。

あッ忘れた、忘れた、大變な事を、お晝に都新聞見て泣いたつけ、口惜しくつて可愛想で、渡米の野球隊がミシガン大學と戰つて、二對一で負けたつて、あんまり泣いたのでお友達に笑はれた。（十四日）

小雨しよぼ／＼、こんな日大嫌ひだ、陰氣で、陰氣で、ぶく／＼の肥つちよに雨合羽を着た形は我ながらあきれざるを得ない、體量正に十六貫三百目。

お琴の方は家の人へ內所で、ずる休みをきめた、昨日の風呂敷一件を思ひ出して、たまらずなつて失笑した、くさ／＼するので寮歌を口誦む。

梅雨の雨は午過ぎから泣噦りするやうに霽れあがるかと見れば又しく／＼と降り出してみたりして居たが四時頃から靜肅と降り止んだ。

お上品な桃割より頭高な束髮が、おてんばの私には似合ふ、歸宅後結びなほす、又弟に惡戯された、大切な日記帳に落書一ぱい、寢て居る弟の足を紐で堅く結んで机の足にゆわへて庭へ飛出した、裏庭の木陰に立つてみると、下葉の雨滴がほつ／＼と髮に落つる、折々唆かすやうな青葉の匂がしんみりと胸に沁み入つて來る、雲の絶間からちらほらと拾ふやうに星影が數まれる。（十五日）

新刊

○東海道膝栗毛　有朋堂文庫

讀書の興味と云ふものも一つの感情が伴ふもので、何んなに立派なことを書いてある書物でも、嫌な紙へ汚い活字で印刷してあつたり、製本がぞんざいであつたり、不注意であつたすると何うも讀む氣にならぬ。殊に一般の讀書家が誰でも所有して置かねばならぬと云ふやうな永遠の生命を持つてゐる著述は猶更此裝釘と云ふことが大切であらうと思ふ。自分は此意味に於て有朋堂文庫が最も現代の讀書界に適切な貢献をしてゐると思ふ、一例を言へば此膝栗毛である、坊間には隨分幾十種となく同じ書物は出てゐるが、活字が細くつめこんであつたり、校訂が粗漏であつたりして完全なものがない、膝栗毛は子供の時から何度讀むか知れぬが、此文庫を見ると又讀む氣になる、それは開いて見た處の第一印象が快いからであらう、殊に對話を別行にしてあるのは氣が利いた、印刷製本の完美してゐるのは言ふまでもない（定價金八拾五錢、神田錦町一丁目有朋堂出版）

○古今和歌集 後撰和歌集　全　有朋堂文庫

有朋堂文庫の特色は右に擧げた通りであるが本書は歌集として更に體裁を凝らし、本文を凡て二度刷とし朱の罫を以て圍んである、卷末には和歌全部の索引が附いてある、歌集としては甚だ親切な編輯である（定價出版同上）

○旅より旅へ　吉江孤雁著

豬苗代湖畔から越後へ出た紀行文と、自然そのものゝ中から强烈な感興を得た時の數篇の描寫と、人の自然と融合したやうな感興を描いた小品文と、三つに大別してある、紀行文には必ずしも嘆服しなかつたが、自然の描寫には一種清透にして鋭利な觀察が含まれてゐると思つた、單に夏日の讀物に出版したと云ふのでなく、一つの生命を持つた著作であらう（定價金四拾五錢、神田表神保町中興館書店出版）



周圍の人

珠野すゞ子

「ねえ、君どてが出ると思ふの」

ブックを膝に、心持碧の瞳を、上げて雜種兒の少年は心配の表情。

「そうだね」

と、連れは純粹の日本の少年、二少年共、十二三曉星の徽章をつけた帽子をかぶつてゐます。

「僕にだつてこれが、とは云はれないけれど」

此所と此所とゝ日本の少年は墨だらけの手を伸べてブックをくゝる、指さす手先毎に色の白い少年は絶えず顔面の筋肉を動かして、合頷き、驚き、不可解、安心の表情をします。美しい少年よ、西洋の空のもとに西洋の海の波に足を浸して、西洋の婦人と西洋の言語で御話しする程、私にとつての快樂は無いと、當時のある新歸朝者は絶叫されましたけれど、美しきは女のみかは、御覧なさい、その少年の劇的な態度を！

「僕わね、せめて九點とれゝば好い。」

「理科先生點が辛いんだもの、嫌やになつちまふ。」

あゝ矢張り試驗のなやみだつたのね、未だ骨柔かき少年の頭腦にも、試驗の鐵槌は容赦でざいませんの。

纏れ合ふ人のいきれで肉の洞に煙の渦卷いたやうに身體中が曇つてゐるやうな氣がします、窓の硝子を開ければ飛沫が入るし、停留場毎に出入口の開閉で、僅かにホッと息つく位、梅雨の電車は、東宮御所前から坂を下りて濠端をゆきます。

二人の少年は赤坂見附で下車りて、青山行乘換の方へ走りました。何だか、つらい別れの人を見送るやうな情緒で、傘に隱れゆく二人の少年の後姿……。

電車は搖れて、同じ樣な柴折戸の家が幾軒もつゞく思ひもよらぬ所に小さな窓よ、と見れば小器用に編んだ、簾の裾を細い指にそと上げて、生際の濃い下鬢のをんなが凝と山王の森を見てゐる、スネテの瞳か醉覺めの瞳か思想に生きてゐるといふ若いをとこのある一面を、何となく簾の裾にみた生際の濃い女によつて聯想されました。

「やあゝすゞちやん。」

運轉手へよつた方の隅へ少さくなつて下を向いてゐ

る、と絣の單衣がチラついたとおもふと突然聲をかけられて、

「まあ…………」

と微笑みながら、見上げると、眞向ふの太つた紳士がヂロリと見てゐたので思はず俯く。

着物の着丈四寸何寸といふ、一ッ橋きつての大入道なる從兄の英さん、ノッソリと其上高い足駄を鳴らして吊皮の本を抑へて立つてをられる、車掌の引く綱に手が觸れなければ好いけれど。

「どど……どこへ行くんですか。」

英さんお話しする時には何故かう吃るのでせう、琵琶なんかなさる時にはお上手なんですのに、

「麻布まで、叔母様御病氣如何ですの、多代様御歸京なさいまして？」

「姉ですか、まだなんです、暑中休暇までズット田舍にゐるとか云つてます。」

感心に袖口先のきれいな白い襦袢をきてらつしやる

「おやあ忠さんとお二人きりで？」

「遊びに來たまへ、忠が此節すゞちやんどうしたんだらうつて云つてましたよ、」

「忠さんは早稻田の豫備科、皆、マーチヤント筋なので三人よると自然と話しに活氣がつく、英樣は貿易商の華々しさを、半、空想的に、強くすゞの胸に吹きこむ。

あゝ、マストに埋められしハンブルク、煤煙に暗きニユヨーク、コロンボの怒濤を越へて綿つむ船の出入多しと聞く孟買には、友達の兄樣がゐらしつてますの友達もやがては印度洋岸に太平洋上の一孤島を夢の詩にして、望鄕の淚に泣く身となるのでせう。

英さまは恍惚と、就中、眼につく財政と金融だの、外に種々の經濟學、民法、商業學……水沫集だの樗牛全集がまばゆく五卷、間に、和製の思ひ出の記など、懷しく居並ぶ玻璃の書棚に眼をやる、忠さまは

「すゞちやん菓子でもつまみたまへ。」

目白家政科の多代樣は獨り心理學の默讀に餘念ございませんのですよ。

櫻田本鄕町！櫻田本鄕！電車はとまつた。

「あゝ此所で私のりかへますの、失禮いたしました、何卒忠さんによろしく仰有つて……さよなら。」

「さよなら」

唯、右手を帽子の鍔へ。

學問がなつきやあ世の中は渡れないかへ僕は一生懸

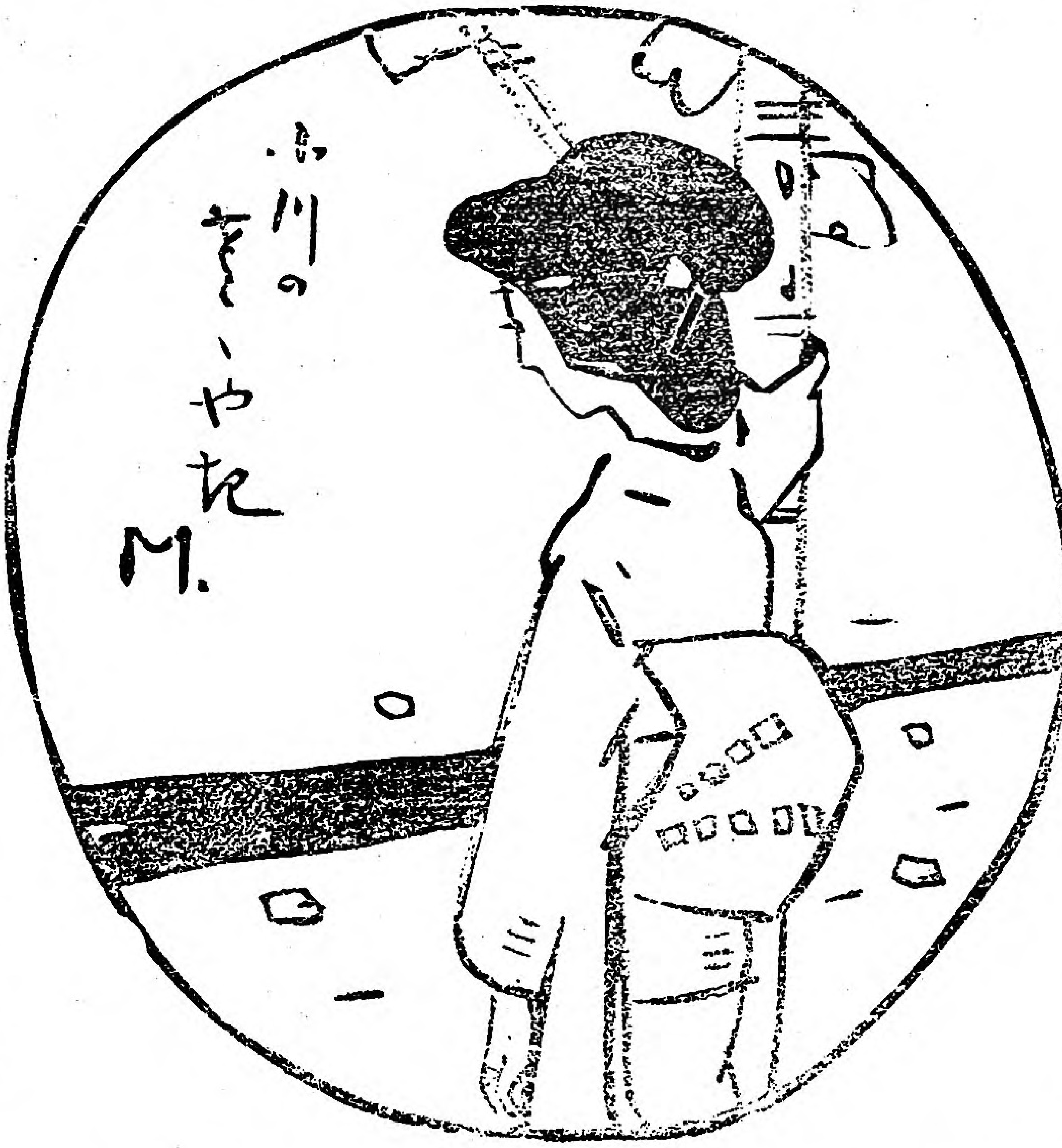
命に學問するんだつて、一つ橋の健兒いつも仰せ遊ばされるので、

「では英さんね飯食ふための學問？ホヽヽヽ」

「眞面目ですよ、卒業したら如何して飯食はうかと思つて今から心配してるんです。」

商學士になるまでにはまだ、春や隅田川のボート競爭が二度あるではございませんか、まさか米穀取引所の相場がWagesやBonusの本位となるのぢやでございませんのでせう？と、思へど口には出さず。

「すゞちゃんなんか、安心だね、嫁にさへ行つて了へば着物買つて貰はれるし、それからと、……活動寫眞へも連れてもらはれるし、眞面眞だつていふから蟲



をこらへて謹聽してをれば何時の間にかなぶられて居るんですもの、もう／＼口惜しくて／＼……存じません。」

と、その逞しい背中を叩きたくなる。

無心に芝公園をくゞりぬけて麻布の家へ參りませば、從兄樣も從姉さまも御一行に新富座へゐらしつたとか、吉右衛門贔負の從兄樣も喜多村贔負の從姉さまにひかれてしまつたのでせう。

「ルイズの最後が大變いゝんでございますつて、父樣達はけふ、明日は兄樣と私行くんですよ、」

柱時計の下で質臺帳をつけてらしつた誠ちゃんが、すゞには恥かしい樣な優しい口調で仰有る、眞實になんて從順しいのでせう、麻布の家へ來る每に、す

ゞの胸はさいなまれます百幾十年、磨かれた大黒柱を中心に、神棚、佛棚の隈なく鎖された家代の空氣に當つて、始めて醒むる放縱の精神、けれど家代の空氣より現代の空氣は希望がありまして、遠きいにしへには強烈なる光も放ちたりけむ、彼の星此の星も、今は神秘を囁く夜の裝飾に過ぎませんの、太陽の光りを誰か慕はざる！

帳場の引出しから「蝸牛」を出して下すつた。

誠さんは俳畫をよくなさいますのよ。「日本及日本人」なぞへも時々出ます、誠さんは可憐い犧牲の子、美術學校を非常に望んでゐらしつたのですけれど、とう〳〵縞の着物に角帶を締めるやうになりました、語は切れて誠ちやんは臺帳の筆を動かず、すゞは萬朝報を取り上げて、「繪具皿」に眼を移しました

柱の時計が緩く三時をうつ。

* * * * * *

新刊

○ひこばえ　太田三郎著

『蛇の殼』と似て此方が製版に變化が多いだけ見た眼には美しい、原色版も多くあるし、スケッチも殆んど木版色刷になつてゐる、河岸の「白壁」は印象的の插寫も面白く原色版の製版の手際が好い、「灰に書く文字」はスタイルが面白い、「畫室の一隅」は腰から下が男のやうだ「セル着る頃」にはセルに見えない、「顔ヲソル」は好い、其次の田舍者も大いに好い、「五月一日」の顔は一寸表情がある、「公孫樹」も好きだ、田舍女が草原に足を投出してゐる繪も何となく心持がある、「春の人」は興味が乏しい、都會式情趣のあるのに「下谷のとある小路」外二三の作を好いと思つた（定價金九十五錢、博文館發賣）

○蛇の殼　太田三郎著

太田三郎畫伯の畫集である、氏の技術は油繪の外に斯ういふスケッチにも表はれてゐる、殊に一冊に纏める爲に精選してあるだけ氏の個性が能く表はれてゐる、吾人のやうな素人目にも分るのは、氏のスケッチが形の整つてゐると云ふことである、また氏の線から柔かい感じは受けられないが、はりがねを折り曲げたやうな硬い線か面白みを持つてゐる。此集には隨分澤山のスケッチが集められてある、時代の色調と云ふやうなものもかなり捉えてある、才氣はそれほど動いてゐないが、甚だ眞面目である、人物畫の多くは顔の表情よりも、全體の姿態と、背景の配合に依りて感情なり心持なりを表はさうとしてゐる、近時刊行される畫集の中では特色の顯著なものであらう（定價金八拾五錢、博文館發發）

○午後三時　吉井勇著

脚本界の勇者、猛者、しかつめらしく言へば革新家の吉井勇君の脚本十一篇を收めてある、君の脚本は芝居にしても面白からうが、讀んでゐても甚だ面白い。君の脚本ほど囚はれてゐない脚本は日本に珍しい、自分が君の他の形式の作品よりも脚本を熱愛するのは其放縱な處にある、森先生の云はれる通り詩人だからとてむちやくちやは書けない、矢張充實した感興を持つてゐればこそ書けるのだ、それが芝居だから面白い、詩は元來空想の產物だと云ふことは分つてゐるが、芝居は少くとも空想の產物だとは云へなかつた、處が君の作には隨分空想的なことが書いてある、上場した『夢介と僧と』『淺草觀音堂』と『河内屋與兵衛』の三種でも從來の芝居からみると餘程離れ業だ、君自ら本書を省みて藝術的悲哀を感じると云つてゐる、甚だ結構なことだ、未來は何うでも好い、作者自らが悲哀を感じるといふ此集を讀んで、それはどう云ふ意味であるかといふことを世の人達に判じて貰ひたい、偖て製本は函入で菊版三百三十頁（定價金壹圓、京橋畔東雲堂出版）

繪の東京（五）　本郷の露店　荒井寛方



爛れた油煙のなかに
熱い呼吸がむせて、
宵の町の群集は
燒焦るやうだ。
その中に唯ひとつ
ぢつと凍着いたまゝ
誰も熱い指を觸れぬ
眞白な花が……あつた。

胡夷

張合のある女の時代

山崎千代子

『溫泉湧くなる故里の山』とのお歌に、彼の二人して書讀んだ合歡の樹陰が、もう一度私の胸に擴がり、八月の夢のやうな花の香が其處としも無う漂うのでございます。仰せの通り、此夏は御卒業前の一番大切なお休み、貴女が學生としての最後の暑中休暇でございます。お手紙の中の、『來年四月學校を出でゝ後ち、右に行く可きか、左に進む可きかとの一事は、今の私にとりて、與へられたる宿題よりも卒業論文よりも遙に重き大問題に候』との御言葉は、誠に御同情の置き處もございませんほど、そして、眼を閉ぢると、御兩親樣御兄姉樣方のお膝許で遊惰な時間を過さないで、人々の意見も聞き、御自分の考も練り前途を計つて居らつしやる、靜かな、然し意味のある貴女の朝夕が見えるやうで、私は嬉しさに堪られません、一日の長を以つて私が是れから申上げる事が、若し、貴女の御參考の一つにでもなつたら、此の上無い幸でございます。

近頃は、女流小説家と云はず、女流新聞雜誌記者と申さず、一體に女子が筆を執ると云ふ事が、世の中の耳目に觸れるやうになつたのでは無いかと思はれます隨つて又、それが女子自身の爲めにも社會の爲めにも好いとか惡いとか、結構であるとか面白くないとか、各方面の方々の種々なお聲を承はる機會が多くなつて參つたのは事實でございます。是は誠に私共女子の爲めに嬉しい現象で、假令や、其聲は折々、私共の耳に痛く、愚かしく、又淺果に響く事がありますとも、今から十年或は二十年前の女子と云ふ者に對して、何の反響も無つた鈍い時代に思ひ比べますと、如何に、張り合ひ強くも、心丈夫にも感じられませう、茲まで來た、今一息だ〳〵と云ふやうな勇ましい前途の考へが油然と湧いて來るやうに覺える事のあるのは、獨り私

計りでも無いであらうと存じます。

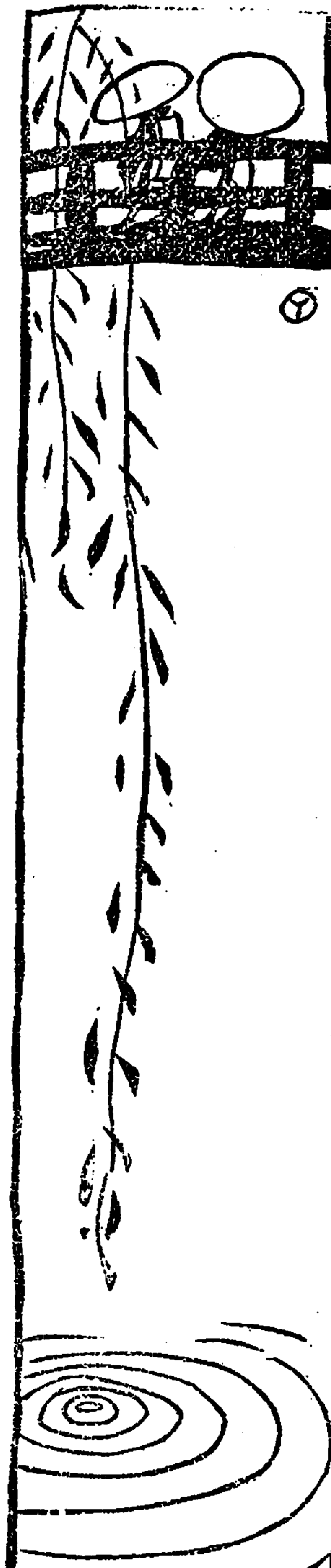
私は、私が一新聞の記者として、さう云ふ類の評論に接する時、常に興味深く又最も尊敬を拂ふて、拜見もし拜聽も爲る一人でございます。崇拜する先輩の方々が個人としての『女子が小說家や新聞記者になるのは間違つて居る、何故、もつと娘らしい、女らしい道を進まないのか』と云ふやうな親切なお諭し、唯だ面白半分に當面女子の眞面目な考へや覺悟も考へないで筆を以つて、言葉を以て、侮り騷ぐ下品な評者の無定見な議論、私はあれもこれも甘受する丈けの――甘受して自個の考へと照し合はす丈けの寬い心は持つて居ります。又贊成を與へ、反對を擧ぐる社會の聲の爲めに、自個の考へが全然埋沒されて了つたり、動搖したり、間違つて居ると思はれたりする事の夢にも無いのは、現に新聞に婦人として筆を樂しんで居るし私は敢へて樂しむと申します――者の心の聲でございます。

去る七月の某婦人雜誌上に『操觚者としての婦人の地位』と題す見出しで、某新聞社主筆の談話が載つて居りました。其文章は勿論訪問記者の手に成つたものでございませうが、全體の趣意は『自分は是迄新聞に筆を執る婦人記者に接した事もある、然し、是れはと思ふやうな人には曾つて會はなかつた。三宅花圃夫人小金井きみ子夫人のやうな閨秀作家は五千萬人に一人あるか無しの得難い才女である、其五千萬人に一人か二人の才女と平凡な女子を同じに考へると大間違ひである、今の婦人記者は、働く故に雜誌社や、新聞社が便利上使つて居るので月給が安くて猫のやうにあるから至つて地位が低い、報酬が少い、虛榮の爲めに好い衣服が着たければ、郵便局の女事務員なり、學校の敎師なりになるが好い、自分は是迄に墮落しない女流記者を見ず又外國でも餘り操重されないものであるから、婦人が操觚者となつて社會に立つのは不贊成である』と云ふ意味であつたと覺えて居ります。私は是を拜見した時、此何某主筆は、親ら社會の木鐸を以つて任じて居る新聞記者にも似合はず現代に耳も無い眼も開かない方だと存じました。そして、若し此御論が實際話された御論ならば隨分お氣の毒な方だと存じました又私共は、恁那お方樣が御主筆遊ばす新聞社に、入社するの光榮に接しなかつた事を、如何なに幸福に感じましたでせう。私のお友達である貴女も必つとさう思つて下さる事と信じます。

現代の女子操觚者は、成程幼稚でも御座いませう

又御男子に比べたら迚も〳〵お脚元にも及ばないのかも知れません。然れども、私共が筆を持つと云ふ事は御男子方と競爭する爲めでも、女子の地位を高める爲めでもありません。苟も眞の意味に於て自分と自分の筆を尊重する事の出來る女子は、必らず他に確乎とした執筆上の信念がある事と存じます、又、さうある事を望みます。此點に於て現代の女子操觚者は、昔――十年若しくは其前の――婦人記者と大層違つて居る事と存じます。文筆に親しみ、或は筆を執る職業に從事して墮落したやうな弱い女子は、既う過去の人でございます、今の女子では御座いません。私共は、私共が此過渡時代に筆を以て、聊か世に立つたと云ふ歷史に依つて、時代の女子の經驗が殖え、次第に女子の活く時に、自然に其地位が進んで居る樣な事になれば、誠に結構とは存じます。が、他から認めて貰はなければ出來ないやうな女子の地位の爲めにのみ活くのは辛い事でございます。私共は、斯う云ふ世界もあつたのか恁那處にこんな人生もあると申すやうな、活くと云ふ事に依つて得られる廣い智識と興味と敎訓、更に是を形作らんとする『自分』の內容に鑄込んで、金剛石は光らさずとも、富や位のヴエールは冠らずとも、女子として人として立派なものになると云ふ事、觀た所感じた所を、自分の筆にして他に傳へると云ふ事、其處に云ひ知らぬ面白味もあれば生命もある。過去の女子操觚者が成功しなかつたからとか、西洋でも如何だからとか云ふやうな根の据らぬ御論は、暫く私共の耳には遠い事、過去の女子は今の女子ではなく、西洋と日本とは少し違ひますもの。

前申した議論もある今の世の中でございます御自分に筆執つて起つ興味と勇氣と、自信がなければ、決して、小說家や記者に成らうなど〻謀反心をお起し遊ばすな、それよりはお嫁樣のこと〳〵。然し、御卒業後の一二年を意味の大きな勉學の爲めに働くと云ふ事も、貴女の長い未來に、決して御損ではない事もお考へなさる〻やうに、女子が文筆を執る事と獨身生活と云ふ事は、自ら別々に離して考へられる問題だと存じます眞に、三宅花圃先生や小金井夫人は、私共の舊師であり又お手本と成る可き方々では居らつしやりますけれども、某主筆の云はれたやうに五千萬人に一人二人と數へ奉つて、如何な偉きな文才が出るかも知れぬ現代乃至は未來の女子を、ゆめ度外視する譯には參りますまい、幸に御自重を祈る。



三都の橋

東京の橋

兒玉花外

東京日本橋、これを眼頭に載せて、私はスグ畫工廣重が彩つた昔の橋を偲ぶ。あの東海道五十三驛が夢の虹となつて現はれる、翠の松と圓い笠とがある。帆がローマンスを積むで漂ふがまた元の日本橋へ戻る。海邊に根をすえた東京は、之を橋の都といふことが出來る。縱横に糸のやうに流れる川に飽く程、趣味と詩の情調が泡と浮いてゐる。

倫敦テームス河といふと、矢鱈にホヰッスラーの油畫と深い霧を想像する。私の謂ふ東京の橋々は、いくら惡どい文明の化物が渡つても、やはり剝落ちぬ江戸時代の橋である。貴い夢の架板なのである。イヤ心ある人は日と夜に、詩のやうな思案して市中の橋を歩む。

東京の橋と河を、一括めにして、もう大川で十分なのである。墨繪の隅田川！夏は淺濁つて流れる情調を味ふたら、みどりの川柳が馴染の女のやうに現はれる。大川！何といふザックバランな、江戸式の投遣つた

名であらう。京大阪では、なんでも思切り飛離れた、物質にも名が喰附いてゐない。大川の夜網、僕は詩を作るより幾ら痛快だと思ふ。隅田川の鯉は、現在の詩よりも美味くはないか。

大川に架る橋は一口に言ふと、吾妻橋、厩橋、兩國橋、新大橋に永代橋、そして相生橋の名も佳い。越えて、佃の渡、月島の渡、かちどきの渡、もう一遍かちどきの渡、これ丈け呼んでも心臓が慄へる、凡そ此んな振つた號が天下の河にあるかイ。

花の堤は最はや陳い、僕には、隅田のほとりの青草で澤山だ。青い繪具に似た草地に、男の紺の匂ふ單衣の尻を着け、こゝに豐饒な空想を恣まゝにする。黃金色の詩は苦もなく產れて、若い母が赤子をうむよりいゝと易い。

いつかは忘れた、花のちる晚春であつた、隅田の上流で、獨り步きのつれ〴〵に土手の上。チラと見たのは眞白い男の顏！絕世の美男子なる詩人業平であつた櫻の蕾よりも紅い上品な唇、綠の濃い髮はしげる葉よりも美くしい。

明治の干枯びた詩に滿足せぬ私は、驅つて隅田のほとりに下つたをりから。暮春の火のやうな夕陽が、パッと赤い葩を水面に碎きちらせて、浮く都鳥(鷗)が炎の如に見られた。

餘りの嬉しさに、携へる杖をあげて水を打つたら、哀れ、銀光をした露の滴雫が、僕の長い髮のうへに、美しくも灑ぎ散りかゝつた。

千古の詩聖李白は、慷慨刀を拔いて急流を截てば、水は更に急にながれたと謳うた。僕も唯嘆きと愁に水を撲つたら、飛沫はこの艷やかな長髮をうれひに濡らせた。

再び岡に上れば、詩人業平の美貌は消えて、フツト吹いたる紫の煙草の煙！かなた茜色に染むだ西空に、眞赤な日はくる〳〵と舞ひ沈むだ。いま、薄墨の靄低く垂れかゝつた水上に、私は兩手で面を蔽つて、實に冷たい現代に泣いた。

眦を切り放つと、櫻で飾つた晚春の輦は、詩人天才

の姿を載せて、褪めた紅い夕燒雲のあなたに、搔きも消えて仕舞つた。

飛んで、潮濁る海の入口、名も古い佃島に來る。佃島の對ふが月島になる、佃島と月島の緣繋ぎ、橋渡しに佃橋と初見橋がある。いづれも洒落れた、風流な稱である。

佃島は德川時代には、溝の如な海を離れて、流刑人を置いた處だ、石川島の獄は名に殘る。俳優菊五郎抔が扮した、鯔脊な好い男の罪人が居た。たぶんは情に溺した艶な罪で、佃島の邊を打濯ふ白浪に、夜な〳〵の紅夢が如何なに驚かされたらう。僕は佃島を徘徊して、チエロンの囚人を描いた詩人バイロンと違つた、東洋的の小さな情緒を感ずることが出來る。……小さな佃島の白浪に、活きた女のつや髪が夜る〳〵流寄つたと云ふ。



月島に月島橋がある、別乾坤の一廓の月島は新開地だけに、市街が井然と整つてゐる。島に工場の煤煙が目ざはりだが、夏の海の涼しい潮風がスイ〳〵と吹拂ふ。以前の唄にも殘つてゐる、あの越中島はこちらだが、

日に月にも生茂つてゐた名物の青蘆細蘆は、モー曳こぬかれて、深川の蛤の儚いゆめと滅んで了つた。江戸趣味の凋落を、今は可愛いゝ小禽が嘴で歌啼いてゐる。
日本橋河岸、眞赤な血のしたゝる大鮪の切身の詩美は、既に『東京印象記』で説いたから玆には拔きにする。白い倉庫と魚積船の集る日本橋を中心に、呉服橋、一石橋、青物市場の西河岸橋、こちらは江戸橋、何と思案橋、金の鎧橋、港橋と鐵砲橋がある。潮のまじる川水に、傳馬や荷足船が腹を漬けて、輻輳をしてゐる。あゝ帆でも船は河水の魂である。
日本橋や京橋の河岸で、ニス塗りの赤い會社と、赤煉瓦の倉庫と、緑の川柳と、架る橋とのコントラストに詩味詩趣がある。
晴天の日も、曇り日も、大東京に架れる夥多の都會のいろ〳〵の橋々、私はいつも詩歌調の足踏みをして通る。
紫がゝつた潮染の派手な浴衣の女を、涼しい橋の上に浮世繪のやうにながめたい。

大阪の橋



高須梅溪

水邊の風物として見逃すことの出來ぬのは橋の趣でせう。大阪は、到る處、水の流れが東西を貫き、南北を横ぎつて、ヴェニスの都を見るやうなおもひをさせます。其の水の流るゝところには、必度、橋が、架かつて居ます。其の橋上は、夏季になると、特殊の趣を呈します。私は、橋畔に於て、浴衣掛の若い男女が戀を囁いてるのを見ました、欄干のあたりに凭れて、尺八を吹く痩せこけた書生さんをも見ました、相乘の人力車に乘つて銀杏返へしの藝妓と青春の客の姿をも見ました。雨が、ショボ〳〵降る晩、橋畔の柳が、ザワ付くのを見て、物淋しい一種の都會情調を味はつたこともありました。然しそれ等は、私ばかりでなく、誰も能く見る光景かも知れない。それよりも、此には、私の幼少時分に與へられたロマンチックな橋の印象を

記しませう。唯一つ。

平野町の御靈神社――大阪東區にある――の縁日！それは、私にとつて忘れ難い感銘を得たのです。此には毎月一、六の日に縁日の夜店が出て、夜更くる迄、雜沓するのでした。私は、其の縁日のある毎に、人通りの少い阿波堀の家を出て、從姉に手を引かれ乍ら、まゐりました。淋しい西横堀の瀬戸物屋の前を通つて、人氣の多い京町橋――平野町の西端に架せられてある――へ近付くと、自然に私の心は、はしやいで、魂が喜びに打をのゝくのでありました。

其の頃、京町橋は、鐵を以て作られて居たので、木造の橋の多い時代に、一種の誇りを示すやうに思はれました。夏になると、夕刻前後から、漸く男女の往來が繁くなるので、それを當て込んで、氷店や、甘酒屋が、處狹い迄に、橋の兩側に出て居りました。大人は兎も角、幼少なものには、それが何より嬉いのでありました。

從姉により添ひ乍ら、夜の薄闇を透して見る、氷店の硝子暖簾――水色と白色とを取混ぜた――や、紅提灯の裾に藍色と白色とを以て現はした波の砕けかゝる姿や、赤と墨の二色で、輕く御多福を書いた甘酒屋の古行燈や、短い筒袖を着た鉢巻姿の男が、透徹るやうな氷塊を、シカと布片で掴んで、忙し相に雪をかいてる樣子や、『まあ御かけやす』と頻りに嬌聲を發する赤襷の白粉臭い少女の顏なぞが、ポッと浮いたやうに見えました。それが當時の私には、少からぬ色彩美の滿足を感じさせました。

私の從姉は、何故か氷が好きでありました。御靈神社へ參詣した歸途には、必度、橋上の氷店に立ちよつて、縁の付いた蓆を敷いた細長い床凡に腰かけ乍ら、氷あづきナゾ喰べるのでした。時には硝子皿の上に、鮮紅色の西瓜の切身が置いてあるのを手にして、舌鼓打つこともありました。其の切身の上に、少しばかり振りかけてある白砂糖は、小供心にも、よい色彩の配合だとおもひました。勿論、ハッキリ意識したのではないが……

折柄、颯と河風が吹くと氷店の硝子暖簾が搖れて、サラ〳〵サラ〳〵と云ふやうな音をさせます。紅提灯が心持ユラ〳〵して、男女の浴衣の袖や裾が翻へるやうでした。遥か彼方の空に、ポンと音がしたかと思ふと、柳の絲のやうに、五色の花火が、空から下に垂れさがるのでありました。此の時、京町橋の河邊にさしかゝつた納涼船の中から、ゆるやかな三味の音が、起つたやうにおもひます。幼い時分の私にも、それが妙に趣深く感じられたので、忘れ得ぬ印象の一つとして、此に記したのです。

京都の橋



澤村胡夷

何時のことであつたか。忘れて了つた。

友達の書齋に外國の雜誌があつたのでそれをひろひ讀した事がある。その時ふと其挿繪のなかに日本の街の寫眞が出てゐるのに氣が附いて、面白半分にそいつを一ツヾヽ見て行つた。その中に橋の寫眞が出てゐたので、能く見ると、說明には『吾妻橋』と書いてあつた。

僕が錦繪で見た江戸の橋は向から來る人が胸のところまでしか見えてゐなかつた、腰から下は橋板で隱れてゐた、さういふ足の見えぬ人物が必ず二三人は畫かれてゐたものだ。勿論この寫眞にはそんな人物はゐなかつたけれども、何だかその橋を見てゐると、自分が古くから知つてゐる橋の一つであるやうな感じがして來た。熟々その寫眞を見てゐるうちに……是は京都の橋に相異ないと想つたから、友達にもさう言ふと、如何にもさうだと言つた。その橋には足の無いやうな人物はゐなかつた代りに、足ばかりで頭の見えぬ人が澤山歩いてゐた。それらは形のよい日傘をさしかけてゐる女であつた。確にそれは三條の大橋であつたのだ。

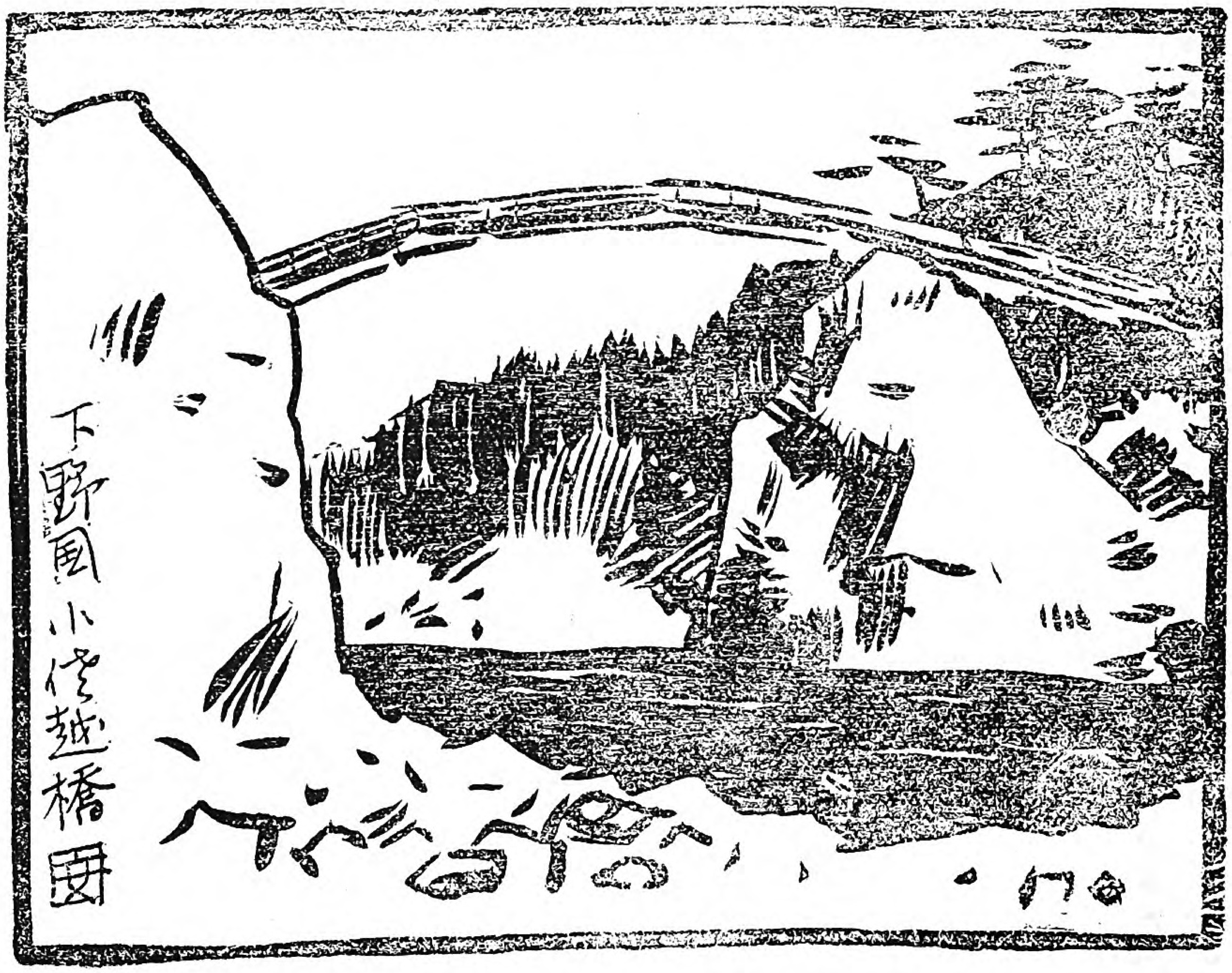
夏の日盛には花のやうな日傘が幾つも幾つも廣い通狹い町、ところ嫌はず過ぎて行く。京都の夏から紅や水色、黄色、紺色さまざまの日傘の行列を取のけると、

からりと晴れた風のすくない暑くるしい市街を想起さずには居られない。

他人は何うだか知らぬ。

僕の知つてゐる京の夏は祇園祭の鉾が電線を斷切つて迄も通らうと犇めく騒ぎと、猩々緋の緣をとつた山鉾の見送阿蘭陀縫の金絲花鳥の横掛、それから貝盡の金物を打つた桁……是等が日盛に適はしいやうな色彩となつてゐる。けれども三條四條の大橋や小橋を日傘に隱れて小股に急ぐ女の姿は更に京の夏の空氣に一層深い親しみを起させるであらう。

突如として開かれた日傘は



輕やかに橋の欄干にすれてすうつと彼方へ消えて行つて了ふ。てふど日廻草の花が廢頽した伽藍の片隅に精一ぱい延びはだかつてゐるやうに、古い頑丈な京の橋にはこの殘された新しみが日傘に落ちる光の中に眼覺めやうとしてゐるのだ。鮮やかな夢を、固く握つて放すまいとする胸のやうに、橋の日盛は壞れて行かうとする日傘の形を浮べてゐる幾日も幾日も日照がつゞくと、廣い磧の面には精々してゐた雜草が一齊に凋れてぴたりと砂礫の上に倒れかかる、幾蜿蜒もしてゐる砂

山の窪みには生温い水が止斷ながら這ふて行く、その面を廣い橋は大股に横切つて、矢張、美くしい夢を漂はせてゐるのである！

　夜深けて三條の橋から兩岸の涼臺を望む時ほど熱情のない燈火を僕は見た事がない。宵には篝が磧に焚かれて、群集が露を帶びた砂礫を踏みながら波立つて行く、喧擾は川風がひたと止まつて了ふ一時に湧返るのだが、是が次第に靜まつて行くにつれて、花の眼のやうであつた涼臺の雪洞が力を全く失つて了ふのだ。

　稽古に疲れた祇園囃子も少しづゝ止斷れて行くと、今まで上調子に聞えてゐた三味の音もしつくり胸に落るやうになつてくる。

　川端の柳は風の微動ぎにつれて胸をそゝるやうな幽かな響を傳へて、欄干も露に全くぬれてゐる。すべての熱情から全く冷果てた橋の擬寶珠は……古い都から喚起すあらゆる感想を殘らず吸附けるやうな心持を投げだしてゐるのだ！加茂川染に充分疲らされた水は全く下流へ流れ去つて新しい水は橋を洗つて淙々と流れて行く。靜かな空氣に長く渡された京の橋は……電燈のあたりに飛んでは傷つき、傷ついては再び飛かゝる幾つとも知れぬ蝙蝠の影を落して、ぢつとかかつてゐる。

　僕はこの橋の下をくゞつて鳴き行く千鳥の聲よりも高瀬川の船うたよりも、寧ろ幾十とも知れぬ蝙蝠の舌打の方がこの頑丈な木橋の夜に適はしいと想ひながら此橋を夜深に獨とぼとぼと渡つた事を記憶してゐる。

朱欄

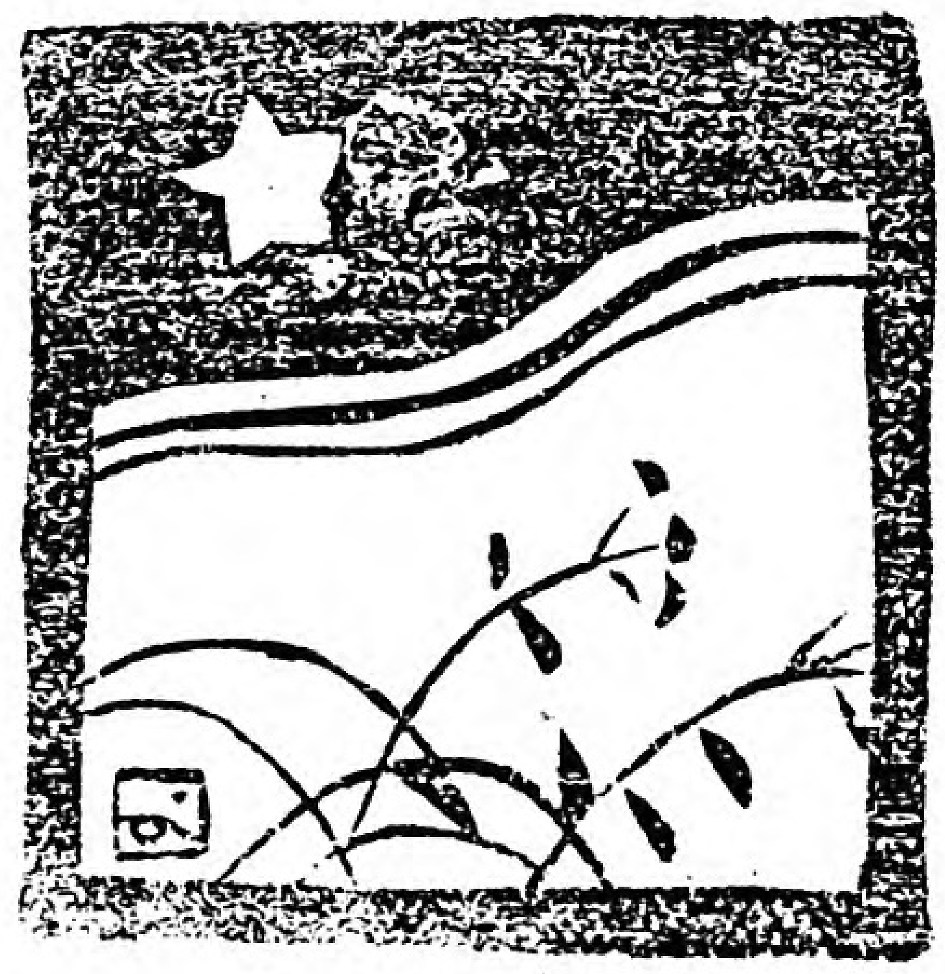
赤く塗つた欄干、青銅の擬寶珠、廣い橋を渡るのは快いと思ふ。

　溪澗の急な響に轟いて、欄干が顫ふ、橋が動く、橋柱は無くて、岩から岩に架けられた赤い橋の上に、山が壓してゐる。

　橋の中のクランックな橋は、暴風雨のある度に橋板が流れて行く、斯くて滅びて行く。

暴風雨のあと

水野葉舟



六月十九日　暴風雨。

午前四時頃目を覺ます。外では雨が降つて居る樣子。昨夜書き殘した『偶像』の終の處にとりかゝる。書きながら種々な事が考へられてならぬ自分の頭に印象されて居る自然と、自分が今ものを言つて居るこの藝術との間に、明かに距離がある。それが痛切に感じられて來る苦しさが、その中に交つて居る。

蒸暑い。室の空氣が心持惡く濁つて、不潔になつて居る。障子を開けたが、それ位では駄目、戸を開ける、もう夜はすつかり明けて居る。何處かで五時が打つて居る。家の時計が約四十分進んでしまつて居る。

その中に風が吹き出した。ふッと裏の聖書學院の並木に風の當る音がしたと思ふと、俄かに靜かな空氣が吹き出したなと思つたが、今朝如何しても九時までに書き上げてしまふと言ふ心積りをして居るので、何にも氣に懸けずに書く。するとだん〳〵盛んになつて來る、雨の量も多い。

その中に家のものも、皆起き出した。これでは畠が大變だと思つたから、眠むさうな顏をして居る細君を急き立てゝ、ダリヤに棒を立てゝ貰ふ。

暫くするともう息もつけぬ烈風になつてしまつた。ずぶ濡れになッて細君が入つて來た樣子だから、臺所に行つて見る。頭には風呂敷を冠つて、濡れる覺悟をして居たらしいが、雨がしッぽりと透つた姿をして居る。

「駄目か？」
「駄目です。大抵立てゝ見ましたが、風が廻るんですもの。ヤッぱり、此間言つた時に用意すればよござんしたね。」
「さうか……」と言つたが、自分は失望して口を噤んで室に入つて來てしまつた。
　美しく築き上げて居た夢をたゝき壞されてしまつたんだ。これも一種の Catastrophe なんだ。
　爲事が中々すゝまぬ。身體の疲勞が、泌々と感じられる。神經が全く疲れて、彈力が無くなつたやうだ。これに反抗して書いて居ると、むづ痒いやうな、眠り不足のやうな、惡臭で蒸されたやうな不思議な感が起る。
　十一時にヤッとすんだ。雨も上つて。反省社に電話をかけに行く。何處を見ても大騷ぎだ。暴風雨！、暴風雨！
　反省社に行つた途で、駒込に行き高村君に逢ふ。丁度出かける處だつた。逢へてよかつた。暫く書齋の椅子に身體を投げ出すやうにして、休んだ。
　高村君は昨夜、下手な理髮店に飛び込んで頭の髮をむしられたと言つて話しながら髭をそつて居る、此方はぼんやりして、壁にかゝつて居る、この人の近作を見て居る。日がだんだん暮れかゝつて行く……
「出ようか？」
「もういゝのかい？……ぢや」
「ぢや、着物を着るから……」
「で、何處に行かうな」
「僕は琅玕洞に行つて、それから歩くつもりだ。」
　今夜、半年ぶりで、よか樓の二階に行つた。

六月二十日　晴

　今日はいゝ天氣だ。朝は例の處へ。目黑まで山の手線に乘る、鎌倉からの人が、相變らず美しくおつくりをして來て居る。この人の顏は少し斜めに前から見る

顔だ。何時の間にか、麹町から來ると言ふ髭の人が來なくなつて居る。

日光が暑い。

歸りに。高輪の方に廻る。電車で品川まで來て品川から歸つて見ようと思つた暑い中をぼんやりと考へながら歩いて見た。平生歩いた事の無い町を歩いて、自分を考へて見ると言ふ事が面白い。



品川で電車を降りると、喉がかわいたから、停車場前の家に入る。平野水を飲んで見たが古かつた。アイスクリームが欲しかつたが、こんな家ではとても駄目だと思つて觀念するプラットホームに出ると、これは珍らしい。久し振りで鎌倉でガードナーになつて居る河田君が立つて居た。上野行の汽車が出る處だつたがそれを出さして、次の電車を待つ事にした。河田君は澁谷まで、自分は大久保まで。

歸つて秀才文壇に約束した『封』の續きを書き出したが、氣ばかりじれて困つた。

六月二十四日　半曇半晴

又三田通ひを始める。

弟が病氣になつて居る。看護婦が來て居る。身體の大きい弟が、床の上に横になつたなりで、動けないで居る。顔には髭が伸びて居る。自分はその枕元に坐つて、その髭を見て居た。この家の子は三人とも、髭の生へる年頃になつたと思ふ。母も老いた。父も老いた。始終、互に怒つて見たり、懐しがつて見たりして日を暮して來る中に、何時となく、木の肌に古い皺が寄るやうに、皆が年をとつた。その時のうつる間見馴れて暮して居るので、その變化には氣が付かないが、考へて見ると、相剋して居る心と心の姿が、はつきりと見える。

夜更けて歸る、佃君が眠むさうな顔をして居る。自分は親の家の『群』を離れて更にこの『群』を作つて居る。自分の机の前に坐つて見ると、自分一人の生活を考へられるが、後を振り向いて見るとちやんと、自分は『群』の中の一人だ。

この中に矛盾と、暗默の間の運動とを考へると、つい重い吐息が出る。

新刊

源氏物語大意

源氏物語が紫式部と云ふ婦人の大作家に依りて作られた我國では珍しい戀愛小説であることは誰も知つてゐる、大抵のものは讀みたいに相違ないが一寸手が着けられないと云ふのは第一文體が古くて分りにくいから、大意が通じにくいために評釋書がくだくしいからであらう、誰か分り易く通じ易く今の文體に書きなほしら第一に源氏物語は何を書いてあるかといふことが分り、次いで原作に就いて學ぶことが出來る、果然此注文に應じて現れたのは本書である、作者は尾上柴舟氏の夫人であるから、源氏を讀まうと思ふものは先づ本書を繙いて宜い、本書だけでも源氏物語を讀むと同樣の興味は得られるのである、函入布クロース女性式製本の優美な書物である（定價金一圓四十錢、神田表神保町大同館出版）

論文作法

相馬御風氏の著で新潮社の作文叢書第六編である、作文叢書は凡て新しき用意の下に編輯されてゐるだけに、論文作法と云つても、昔の論説文範的のものとは内容が新しい、殊に著者は新進の青年の學者だから舊い形式に囚はれたやうな編輯はしてゐない、百家の短文例も皆好いものを引いてある（定價金三十錢、飯田町新潮社出版）

會話文範

同じく作文叢書の第七編である、之は紅葉、風葉、柳浪、白鳥、葉舟、天外、鷗外、鏡花、荷風其外明治の小説家の文中から、戀する時、情を抒ぶる時、感想を語る時、爭ふ時、論ずる時、説く時、罵る時、偶然の時などの談話ばかりを拔いたものだ、談話は小説の中でも尤も生命の深い點だから、之を讀み味はうと小説を作るものは勿論、文章を好く作らうとするものには大いに助けとなる、別に會話の書き方も説いてある、編者は德田秋聲氏（定價出版同上）

日本の事物

草野柴二郎本名若杉三郎氏が英語の力を養ひたい人の爲に、日本の事柄を英文で書いて、別に和文と對照してある、日本の事だけに英文を習ふものに早く習熟せしめると云ふ便利がある（定價金三十五錢、同上出版）

日本女史

第一巻「天照大神」が出た、日本の婦人中、ある時代を代表した人を一人一巻として評傳するのが「日本女史」の目的である、本巻は天照大神を中心として神代の歴史を說いてゐる、著者は澤田撫松氏、文章は明快で何んな婦人にでも分る第二巻は橘媛である（定價金三十五錢、駿河臺紫明社出版）



新しき婦人畫家（つゞき）

（佛國印象派の中）

岡本一平

頭腦を有つて居つた。彼女の技術には極めて美しい手法と光輝ある詩的な色彩とを具へて居る。手法の困難といふ事は嘗て彼女が覺えなかつたらうと思はれる程練熟したものであつた。然し最印象畫家中に在つてての畫家の特色とされて居るのは女性的の眼光をもつて藝術を啓發したといふ點にある。之に加へて女性的の意匠性格の魅力も亦觀者を動かした所のものであつた
彼女は初期印象派畫家等の各所の展覽會に出品して其才能は美容と共に有名になつた。透明は空と藍寶石の如き天涯のノルマンディ海岸、眩惑させられる樣な美麗な花園。たわゝに實る果樹園、大きな花をつけた帽子を冠り白衣を着た少女。舞踏服をつけた若い婦人等は彼女の最好んで描いた畫題である。總てのもの皆正確にして高尚なる趣味が流れて居る、微妙な色の度合

△バア、ス、モリソ孃 （Berthe Morisot）

バアス、モリソ孃は十八世紀末の畫家フラゴナールの孫女に當る人で當時有名な美人であつた。フラゴナールはルイ十五世朝特有の華麗なる畫風を描き筆技にも色彩にも長じて居つた畫家である。この祖父よりして彼女は彼女の優美と活潑なる華美との氣持を得たのかも知れない。年頃に及んでマネーの兄弟エウゲネーマネーと婚を結んでいよいよ印象派との關係を深くしたマネーも「私の義妹は私なくしては存在し得なかつたであらうと言つた程彼女はマネーの主義に信頼して義兄の運動の力強き助けをなした。」
彼女は珍らしい特色ある個性を持つて居つた一人である。彼女はどんな問題をも一目で解決する明晰なる

によつて畫面には自然が呼吸をして居る。眞に花の如くである、虹の如き色ある詩である。小説家のジョーヂムーアが嘗て次の如き事を言つた。「僅一個女性の身を以てして新らしき眞ある一の形式を生み出した人がある。そは誰れでもないバアス、モリソ孃であると、誠に孃は因習に囚はれないのみならず反つて彼女の大なる個性と美くしい感情の魅力を以てして新しき彼女の形式を畫法の上に立て周圍の大家に迄感化を及ぼした。彼女の義兄の大畫家マネーの如きも孃の作品よりして溫きある暗示を得たといふ事は爭はれない事實である。

彼女は油畫に秀で丶居る計りでなく水彩畫にも巧みであつた。光輝の中より蒼空の中より生れ出でた如き水彩畫は彼女の作品の中で殊に感觸の鋭敏な事と獨創の自由を示して居る。惜しいかな彼女は四十歳の壯齡を以てして一八九五年衆人期待の中に沒した。併し作ら非常な精力を以て描き遺したその數多き油畫、水彩畫は印象畫派をしてその到達すべき終局の地點を指示するに大なる力があつた。彼女はこの點に於て現今の藝術界にまで長生し呼吸をして居ると見ても差支へなからう。



『寢起き』　バアスモリソ

△マリー、カサット孃（Mary Cassatt）

孃は亞米利加人である。ピッツブルグで生れフヒラデルフヒヤの美術學校で始めて畫を學んだ。後佛印象派畫家の人々に同情と創作とを以て加盟しこの派の展覽會へ間斷なく力を盡した事から見て立派に一個の佛蘭西人である。

彼の女は母と子供の畫家である。幼兒と年若き母親の間の情緒を心理學者の如き觀察眼を以て描いた。二十年程前マリー、カサットは母親が子に御化粧してやる所の圖を十枚程彩色銅版で仕上げたものを發表した。

この時代には斯の如き圖題はその趣向が既に定まつて居つて何人も描く所は通り一遍のものに過ぎなかつた然るに彼の女の畫はこの埒を放れて非常に困難な感情の機微を顏面に大膽に表したので人々の驚愕を惹起した。この藝術家の畫には堅實なる手法、正確なる繪の具の使ひ分け、熟練したる物質の説明を以てして幼時のライフの微妙なる生息、子供らしい科、無垢な顏付、母親の愛の表現等が思ひ殘す所なく描破してる。そして孃はそれ等の畫材を清新なる果樹園の中や花の如き衣服を取亂らした衣裝室の中に置いて描き或は光澤あるリンネルや水盤、陶磁器等を背景として描く事を好んだ。

孃は又多能を以て聞ゑた。感興や主題を廣く探し求めたのみならず、手法もいろいろのものを試みて成功した。パステル畫家としては生眞面目の寫生でなく見た氣持ちのノートを描いた。してその平面的な描法と光輝ある優婉な調子とはマネーやドウガのパステルにも比すべきものがある。又ラッフハエリと共に廢れて居た彩色銅版を復活するに力があつた。その他油畫、木炭畫、水彩畫、銅版畫等總てに働いて興味ある彼女自身を現さうと試み。その倦まざる努力によつて何れにも成功した。

説く所によると彼の性格の尊重すべき處は女性には珍しき力といふ事にあつたといふ事である。孃は男性に近き性能を持てる女流作家だつたといふ事が報じられてある。

△エバ、ゴンザル孃（Eva Gonzales）

孃はマネーの寵愛した愛弟子であつた。師匠の筆に成れる孃の肖像は今でも殘つて居る。彫版家ヘンリー、ギエラルドの妻となつたが若干も經ずして沒した。然

しその短き生涯に於て既に美くして優しきパステル畫を描いて技能は相當に認められて居る。孃は最初シヤプランに就いて學んだがマネーの明確にして力量ある藝術に魅せられてより技巧の遊戯を捨て、眞摯なる主義に詢じて。天若し藉すに今若干の齡を以てしたなら彼女は確に他の大家に劣らない近代藝術に先鞭をつけた人の一人となつてたに違ひない。リユクサンブルグの畫廊にある彼女の小さなパステル畫は色彩畫家として敬重に價する彼女の技倆を證據立てゝ餘りあるものである。

△マリー、ブラツクモン (Mario Bracqumond)夫人

夫人も亦一個の印象主義者である。そして熱心に此動機に加盟した。最始クラシック派のアングルに學び後稀なる才能を持つた彫版家に嫁いで其夫より價値ある助言を受けた。夫人の執筆の範圍は巨大な装飾的パネル（一八七八年八月博覽會に陳列せられ九フヒートに二十一フヒート計りのもの）より微小な銅版畫にまで及んで居る。この装飾畫の如きは單に筋肉の勞働だけでも非常なる勤勉と重い辛苦とを要する。以て夫人の藝術に對する熱誠を覗はれやう。



『お化粧』　マリー　カサツト

フランス印象主義者の最も苦心した處のものは色彩である、彼等は彼等のパレットを洗滌した。總て脂色に近いもの、乾燥せる汚き色、墨薦色、代赭の如きはすべて排斥した、その代りに當時化學的研究の結果から得た新鮮にして光澤ある新顔料を使用する事に注意した。(完)

曝書

涙之助

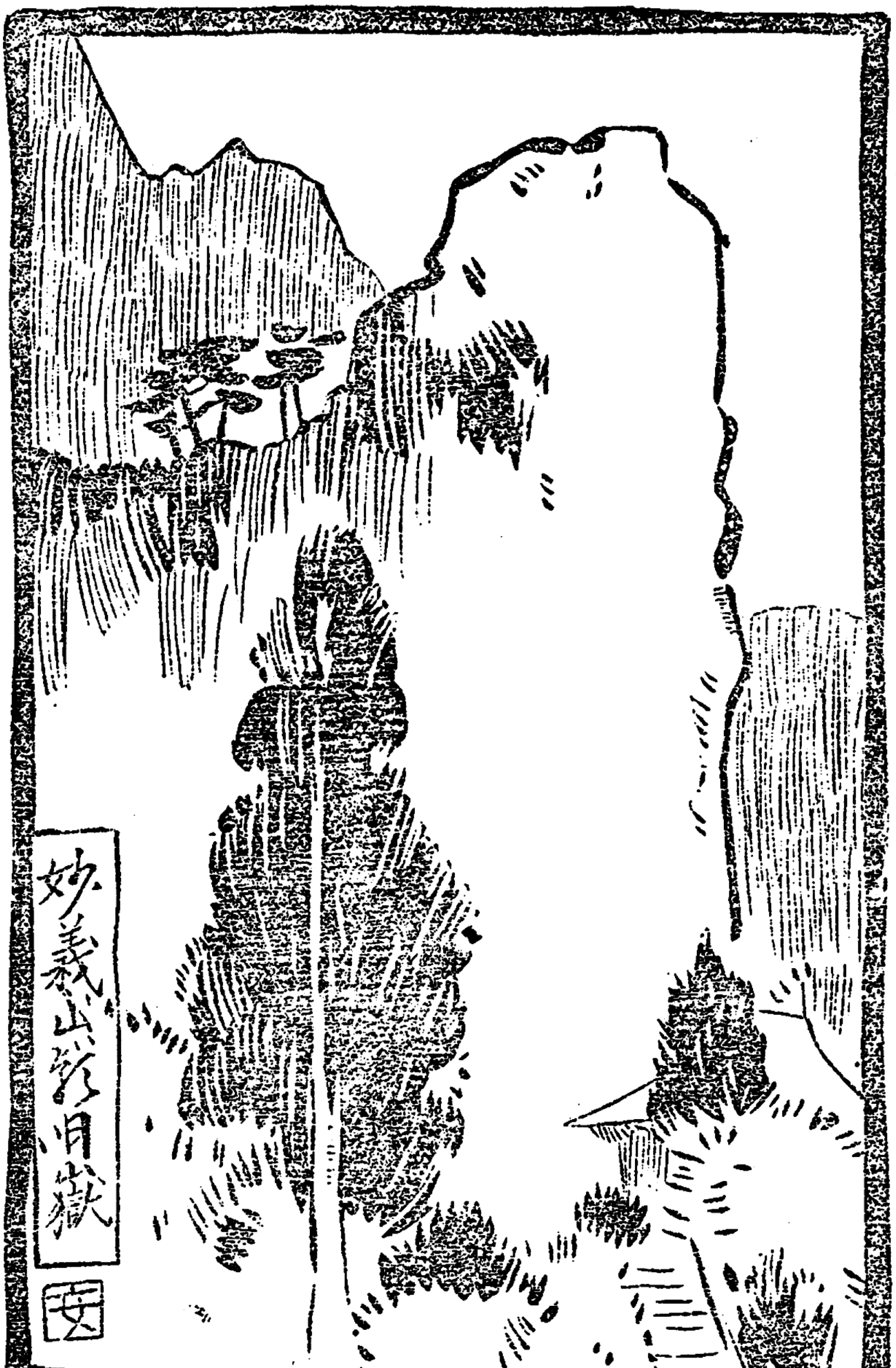
▲昔の考へ物▲腹で物言ふ人▲鼻の穴に碁石▲油壺から出すよな男▲八百屋お七の實況▲かさね▲元祿袖▲隆達節▲女官のかくし言葉▲苗賣の聲色▲大鹽平八郎の人相書▲四十三本の足▲人名の魚

▲問題が二ッある。第一は、『子子子子子子子子子子子子子』、子の字を十二續けたのを何と讀むか、第二は、『ほとゝぎすほとゝぎすきすゆきすきすまつまつわれにはつねきかせよ』は、どう讀むか、先づ劈頭に昔の考へ物でおどかして置く。暇なお方は考へてごらんなさい。

▲京都の油小路二條に屛風屋の長右衛門と云ふ人の子供が十二歳の五月の上旬から非常に熱が出て、十日間許したら腫物がふき出し、お腹の眞中に口が開いた。その穴から本人が話すと同じ様に物を云ふ、それ許りでなく何でも喰る、餘り喰過ては如何と押へて喰させないと又々大熱が起つて罵る。醫者は何人も診たが効がない。七月になつて、玄隆と云ふ博識の醫者が種々の藥を其口に入れ試みて、喰なかつた藥五六種を混せて無理に毎日呑ませて居ると、次第々々に惡口の聲が嗄れ食物も減じ、十日許して大便と共に長さ一尺許り額に一本の角のある形 雨龍の様なものが飛出したので、卽時に打殺たと云ふ。是は實際有た事、然し今から二百年前の元祿十六年▲麥の穗を咽喉に入れ、次第次第腫れて、今にも息が出なくなりさうになつた時、眞綿を口に入れてグル〱巻いて穗先にからまして取つたと云ふ話は、氣の毒にも思へるが、戯に黑白の碁石を二つ左の鼻の孔に入れたのが、どうしても出ない、三日三晩苦心し、鼻の先は眞赤になつて、皮がむけた。堪へ兼て醫者にその話をしたら、其の醫者が、紙差を一本作つて、右の鼻の孔へ無理に入た、嚔が續樣に出て、漸と碁石が飛出た、滑稽だが事實だから更に面白い▲近松門左衛門が六十歳に近い頃、京阪地方で流行した俗謠がある。『槍の權三は伊達衆で御座る、油壺から出す樣な男、しんとんとろりと恍惚る男、どうでも權三はよい男、花の枝からこぼれた男、しんとんとろりとみとれる男、いとしい男』と云ふのである。渠は此一流行唄を基として、かの有名な戯曲『槍の權三重帷子』を作つて大喝采を博したが、後世に至つて『重帷子』の文中にある。その俗唄のどこ迄が唄

で、どこから文になるのだか——つまりいゝとしいゝ男の一句が文か唄が——が近松研究者の問題となつて、未だ解結されない程、俗唄の出所が忘られ、『重帷子』が有名になつた▲海音の傑作『八百屋お七』の實際の出來事と戯曲とは少し異う——と云つて事實の記述は藝術でないのは當然だが、今この事實と、戯曲と比較したら渠の文學的價値がわかつて面白からう——つまり骨子だけ書くとお七の家が燒けて、旦那寺へ行つて居る内に住職の甥の佐兵衛さん、(戯曲では小姓吉三郎といふ)に戀した。新築して家に戻つても忘れられないその時近所に住んでる吉三郎と云ふ惡い若者が居て、前からお七さんに戀して居たが、嫌はれたので其の復讐の期を待つて居た時に佐兵衛とお七との關係を知り妬しくてたまらない、そこで、或日お七に『佐兵衛さんに會ひたくば家を燒けさうすれば側に行かれる、私が手傳てやるから金目の物を持出しなさい』と戀の復讐と慾とで、とう／＼火を附けさした。さうしてお七と吉三郎は逃げ出す處を捕はれた。吉三郎は擧動不審の罪——大風呂敷を持つて居たゞけ——で許された、裁判官は、お七の無邪氣な行爲と渠の心事を憐んで年十五に滿ずとの理由で無罪を宣告しやうとした。之を聞て吉三郎がしうねくも訴へ出で、寺に奉納してある願額に祖母とお七の名の下に歳が十一と書いてある、今から五年前だから今年正しく十六歳であると、證據物件を提出したから、幾許辯護したくも法律は曲られないと云ふので、遂に大森で死刑にされた、是だけの材料が、あんな立派な『八百屋お七』になつたのである▲餘程執念であつたものと見へて、六人も取殺した幽靈で有名な『かさね』が、常陸の絹川堤で其の夫の堀越與右衛門の爲に殺害された時は、八月十一日の晩であつた、年は三十五歳。本名は『かさねさん』で無く『おるいさん』である、やはり絹河畔の法藏寺に葬てあるが、其の寺の過去帳に『理屋松貞信女俗名るい始法名、香譽妙林』とある。與右衛門の後妻を六人も取殺し、最後の後妻の娘に迄祟つたので、名高い坊さんが後世を弔つた、それで漸く出なくなつたと云ふ。かさねは累の音讀から誤解されたものらしい。然しおるいのお化ケ——では恐くない、やつぱりお化はかさねに限る▲元祿袖と云ふものは此頃の子供服にも流行たが、所謂元祿年中に行はれたものは、今のよりも袖丈がズット長かつた。そして袂のまるみもまるい、で處女は長い袖であるが、男子か又一般の女は短

い袖で丸みがある。元祿より以前萬治延寶頃の方が袖は短い、と云つても袖丈は二尺位あつた、正徳享保にかけて既婚者の袖丈二尺四五寸であつた寶永頃に袖の下方が三角になつたのが流行した六尺袖又そぎ袖といつたのは是をいふのだらうと思ふ。寶永以後には袖口の下を總て縫はないのもある、今の廣袖と同じだが糸をつけたので美しいといふ、今では小供に限るが昔は大人も絹糸の房をつけたらしい▲菅笠節『破れ菅笠、ヤンヤ、



しめ緒が切れていの、オ、エイ、更に着もせず、エイサンサ、ヤアサンサ、捨もせず――』今から二百五十年も前――寛文年間――の流行唄で、三味線や一節切にも合せて唄つた隆達節の小唄である。隆達節は歌謡がいくらも殘つてゐない、右の破れ菅笠の外に、『吹けよ川風あがれよ簾、なかの小唄の顔見たや』と云ふので、此も一時大いに流行した、隆達は我邦の小唄の元祖とも云ふべく、作者と作曲者と歌ふ人とを兼ねてゐたらしい。彼

は泉州堺の生れで高三隆達と云ふ面白い僧侶であつた▲今でも宮廷の女官が使用して居るか否かは知らないが、元禄の頃御所方の詞として、下々で大和詞と稱したもの丶中で、謎の樣でも一寸考へると頷れるのは鼻紙の御雜紙、紅のお色、團子の石々、大豆のあか、いひずしの月夜、剃刀のお毛垂、降雨のお下り、などは面白い、錢のおあし餅のかちん、鹽の涙の花、海苔のの文字、蛸のたもじ、等は、今でも使うが、蒟蒻の蒻、土筆のつく、たけのこのたけ等は頗る平凡で、醂柹のお先爛に至つてはがつかりしてしまう。何の事か不審なのは、豆腐のおかべ、大根のからもの、素麪のぞら小糠のまちかね、などである▲徳川の中頃に世の中があまりに遊惰になつたので、儉約のお觸が出て、遊山も出來ないと云ふ不平から、苗と無とに懸けて、諷刺の苗賣の詞が流行した。卽ち『當夏（唐瓜）凉の無い（苗）やア、べん〱騷（ぺん〱草）の無（苗）や、おしやらく者の苗や、ふくべの無や江戸の樣でも無や、面白くも無いやア〱』どいふのだ▲大鹽平八郎の人相書がある、あまり面白い物でもないが、『年齡四十五六歲、顏細長く色白き方、眉毛細く薄き方、額廣き月代の青き方、鼻耳常體、その節の着用物云々』とある、

▲盛岡の妙泉寺の門前の某農家の女房が、双兒を生だが、二子共片輪で、一人は片手が長く、足が短く、身體中に毛が生へ、他の一人は目鼻が無く手指が七本で足が四十三本、それで一週間生て居た。不思議〱。
▲鮫に角兵衛といふのがあり、龜類に正覺坊といふのがある。やはり人間の名の付た魚が品川の海に居る、鯛と河豚のあいの子の樣なもので、『鯛の婿三八郎』又の名は源八』又『新五左衛門』と云ふ魚も居ると云ふ然し女の名は附けまいと思つたら、鰯を『おむらさん』といふ處がある▲始の答、第一は、『子子子子子子子子子子』で、猫の子の小猫、獅子の子の子獅子。第二は短歌で濁音さへ附ければいゝ「ほととぎす、ほととぎすぎずゆきすぎずまづまつわれにはつねきかせよ。」卽『時鳥程とき過ぎず、行き過ぎず、先づ待つ我に初音聞せよ』何だ、つまらない。▲附錄として今一項を加へやう、難波土産と云ふ書物に近松の語れる處なりとて『淨るりの文句、皆實事を有のまゝにうつす內に、又藝になりて實事になき事あり、近くは女形の口上多く實の女の口上には得いはぬ事多し、是等は又藝といふものにて實の女の口より得いはぬ事を打出していふ故其實情が現るゝなり』云々と。



ゼラニアム

山百合

けふは午後から松岡樣へ伺る、朝氣まぐれにウヰンナに結ふてみたら、いつになくよく出來て、襟元に淡紅色の刺繡入りリボンを蝶と結ぶ、ルイザより二つばかり若く見える、もう〳〵帶が思ふやうにしまらなくて泣きたくなつて了つた、行きがけに〇〇園で燃ゆるやうなゼラニアムとヘリオトロープ一鉢買ふ。上野から山の手線電車で………。

洋傘をたゝんで三つばかりの段を上ると、杉の生垣ごしに、

「おや、百合樣、」

「一雄ちやま？」

空氣草履の音をかろくはせよつて、私は一雄ちやまに飛びついた。レースでかざつた白エプロンかけて、眞黑な眼々に青いお頭、放さじとかたく抱へて頰ずりすると、奥樣はほゝ笑んで、

「一昨日父ちやまがね、涼しいよつてこんなクリ〳〵坊主にそつて了ひましたのよ、可笑しいわねえ、生れて初めてかみそりあてましたの、」

「あ、父ちやまは……奥樣、おめでたう、一雄ちやまもお目出度う、」

「は、有がたう御座います？」

壁にかゝつた角帽ももうお頭にのる事はないでせう新法學士、松岡勝氏寵をあつめ顔をパナマ帽子のにくらしさよ。

奥樣は一雄ちやま抱き取つて、あちらの方が涼しいからと仰せ下さるまゝ、何氣なくお後について離れへ行つたらば、お留守だとおもつた御主人公はじめお友達の三四人、お鼻をそろへてゐらつしやるのにびつくりしよげて、そつとお椽から次の間に上る。

松岡樣と伊田樣とが出ていらして、御挨拶遊ばした唇まで出かゝつた御祝辭もすつこんでしまつて、ただお辭儀だけしとく。

奥樣お膝の一雄樣をゆすりながら、

「おやせ遊ばしたわね、貴女、」

「さうですか、」

「先刻お顔みるなりさう思ひましてよ、御病氣でも遊

ばしたんぢやないこと………。さうぢやないの、まアどう遊ばしたのでせう——」

「夏やせでせう、きつと？」と笑ふと、

「いゝえ、先日からお目にかゝる度おやせなさるんですもの、あまり御勉强なさるからですよ、去年の秋頃御出京の時は、ほんとにいゝ體格でゐらしたのに、」

お人のわるい伊田樣までが、

「さうです、僕が正月お故國でお目にかゝつた時にはずつとふとつていらつした、………」

「それは私、田舍にゐると、おいもばかり食べてるからでせう、」

さう云ふ奥樣のやつれ給ひしことよ、花の面影いたいたしきまでかはつたお肩の細り、お顏のとがり、なんぼもうお二人のお母樣におなりなさるのだとて、これがお二十一や二と見えませうか。

しつくりと紅絹うらの長い振りを揃へて、華美な紋羽二重のお被布すらりと、御一緒に歩きましたも、つい昨日の樣に思はれるではありませぬか、

ヴアイオリンがお得意で、指が長いからピアノもお上手で、英語が出來て、隨分キビ〳〵と氣の勝つたハイカラ樣であつたものが、引きつめた三つ組の束髮、やつれた頰の青白く、神經質的のお眼の子が一きは大きく美い。

たつた一人の子どもにおはれて、こんな意久地がなくつては仕方がない、この頃は雜誌よむ間も手紙かく暇さへありません、たのしみは夜涼しい蚊帳の中につかれた身を横たへるのばかりで、なんて情ないこと有仰るんですもの。女の天職つて……誰でもかうして苦しんで子どもを生んで、育てゝ、そうして年とつて、死んで了ふのでせうか。

「デカンショ〳〵で半年やくらす……」

なんていきなり伊田さんが蠻聲張り上げて歌ひ出す。

「女つて實によく笑ふ動物だ、」

「あら、」と奥樣と顏みあはせたら

「もつとも若い女の身上は笑ふところにあるのだからな、」

「一體それ誰のこと？　奥樣にげ出しませう、どうせ三人に二人でかなやしない。おぼえてお出遊ばせよ、ホヽヽヽヽ」

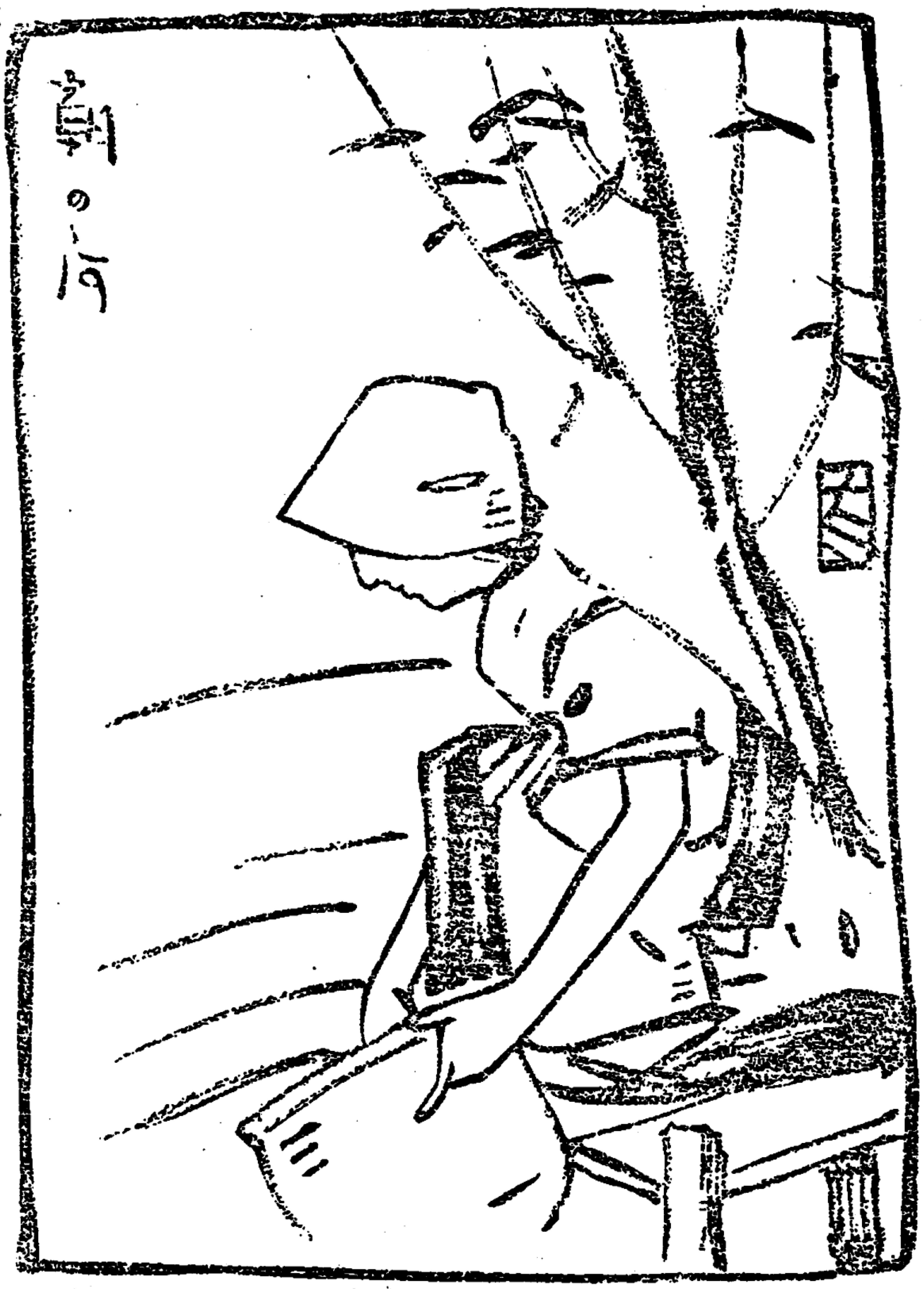
一雄樣は女中にせおはれてお使ひに出て了ひ、二人は椽に腰かけて話しました。

夏綺樣のお噂をきいて、私は悲しくなりました。

立派に大學まで卒業あそばしたお方でも、家のため親のためならば、是非なく故郷の草にうづもれると有仰るものを、私が女の身で我まゝばかり。女一人は打捨つたと思ふて下さいと云つたらば母樣は泣いてゐらした……思ひくらべてなんだか涙がこぼれ俯いて了ひましたの。

あはれたゞかりそめのおんめもじを、永久の別れとは知らざりし、今ははや海山へだてゝ三百里、いづれの日にか、またと相見る折やあるべき、あゝ夏崎樣、あの、エハガキも、御本もカードもお手紙も、みんな〳〵おかたみとなつて了ひました、はかない青春の夢の名殘でございます十八年間の御勉學も何のため、かくなりゆきし運命とは云へ、いまさら御家庭に囚はれて了ふほどならば……勿體なう御座います、有爲の才を野に捨てゝ……

………



思ひみだれて、十坪の庭をみつめたまゝ私は身動きもしませんでした。

先日伺つた時お机の上にあつた紅い花の鉢は、さびしく庭に下ろされて咲き殘つて居りました、三寸ばかりであつたダリヤの苗も、三尺ほどに丈のびて、よは〳〵しい莖が重い花をのせてゆらめいて居りますお手づからの紅茶のおかげんが舌だるい程甘かつたのも……アルバムを拜見してゆく中に我が送つたのをも見出して顏を紅めたのも、今は主なきこの室よ……、まだ本箱も

そのまゝにおいてある、我にもあらず眼をやつたら、
「夏崎樣の本箱には何か面白いものがあるかも知れませんよ、引出して御覽遊ばせな、」
「エ、」
「一時御歸國遊ばしてもまたすぐに出てゐらつしやるおつもりで、荷物なんかもそのまゝにしてお立ちでしたから、あのもうとても出京はおぼつかないからみんな送つてくれつて仰有つて……ほんとにあの方もお氣の毒でございますわ、」
額にかゝる後れ毛を細い手でおかき上げになる。
「奥樣とももう直きにお別れでございますわね、さびしくなつて了ひます、」
心から云つた私の聲はふるへてゐました。
「えゝ何處へ左遷になるかわかりませんけれど、十一月頃までには……私だつて知らないとこへまゐりますのは……どんなに心細いか知れません、」
何のかのと云ふものゝ學生時代は室咲きの花のやうなもの、御卒業の御よろこび申上げる言葉の下からまたすぐにこの悲劇がある、奥樣のお眼にもきよい白露がやどつてみえました。
「あら一雄樣、小母樣のところへゐらつしやい、ね、ねほらお月樣が出てゐますわ、きれいなのゝさまよさ、いらつしやい？」
「奥樣は食卓のおこしらへにおいそがしいので、一雄樣抱こして外面へ出ました、ほのかに匂ふ月見草、道をせばめた雜草に露ふかく下りて、足袋の色も綠にそまりさう。」
「をば樣、御飯が出來ました。百合樣、百合子樣、一雄と小母樣。」
奥樣が呼んでゐらつしやる、私は一雄ちやま抱きしめて、月に背いて立つてましたの、青葉をもるゝ月光は燦々として肩に落ち、銀線の征矢のやう。お離れの椽には高い大きな人影がうごく。

千代の句

肌かくす女の罪のあつさかな
紅さいた口も忘るゝ清水かな
けふばかり男を使ふ田植かな
涼しさや氷室々々の雫より
東雲やとめし螢を置き忘れ
散れば咲き〳〵して百日紅
若竹の風は日に〳〵變りけり
水音を聞く風情なり百合の花
晝顔の面强さよ晝の鎗
夕顔や女子の肌の見ゆる時



番町日記（三）

山田邦子

暗い日は猶も續いた――。戀人もなかつた、從つて物を待たれる心も、物を怖れる心も、熱い涙を流す心も、一日〳〵と遠のいて行つて生活は乾いて荒んで破れて來る。其頃、女の唯一人の友、Tさんは私から離されないものと爲つてゐた。無意味な、底に沈み切つた樣な番町の家を出て下谷のTさんの家に着いたのは灯ともし頃で有つた、雜誌の校正がでる頃で、Tさんは毎夕歸りがおそいと言ふ。人のない部屋の机に倚つて、私はいつまでもTさんの歸りを待つた、小刻な駒下駄の音がして、「來たの！」と夕闇に立つたTさんは聲をかけた、……それから歸るのが、いやだ〳〵といふ心に引かれて、つひ家へ歸つたのは三日目の夕方で有つた、さすがに一寸物なつかしい樣な心にそゝられて、部屋の襖をつと開けると、ポッと強い匂ひがする……と本箱の上の小さい花瓶に、たゞ一輪蕾の百合を挿したまゝ出たのが、其花が咲いて白く夕闇に匂つて居るのであつた、ふと私の瞳には言はふやうなき自己の淋しい涙がしづかにたまつて力なく流れた。

九段下で止つた電車は、青い灯がチラリとこちらを向くと、チン、チーンと相圖をして動き出した――と九段勸工場の右手の方に何かおさらひが有るらしく、而も客は滿員と見えて、入口の扉は閉ぢられて、白い紙が張られてあつた、二階の窓、其窓から流れて居る電燈の光の中に、お白粉の白い顏、「勝山」に結ふた、昔の人形の樣な女が赤い、眞紅い衣物を着て、金の扇をかざしては踊つて居るのがほんの一瞬に見えた、……踊りを踊る女と、其踊られて居る踊り、……かういふものを一瞬に見た心、ハッと心に映つた其ものゝ感じを、何と形容したものだらうと、ゆられながら考へて

居た。

九谷燒の陶器のかけら……それを歩きながらふと見た時のやうな感じ、そうじやあるまいか？と思つた時電車は四丁目の停留所に止つた、私はだまつて電車を降りた。

惡婦とやわがたはむれをたのしみを指さす事は夫もゆるさじ

偽りはおもしろきものこの命つゞくかぎりのたはぶれとせむ

偽と言ふ事は面白い事だ、嘘をつくのも面白い事だ……と言つたらきつと目を見はる人が有るに違ひない然し私のいふのは我利に偽を言ふのではない、自己の利益の爲に嘘をつくのを言ふのではない、私は趣味を中心に、偽つたり嘘を言つたりしてニッとするのが私の持つて生れた性質に合つて輕い心で實に面白い。私はこれが私の趣味の一つで有る事を疑はない、而もそれらは凡て戀にのみ於てゞある。

○○停留所につくと「これからお先きはお氣の毒様お歩きを願ひます」と車掌が靴音を響かせてまわつたいつもガヤ〳〵と白筋帽子の人たちが集まつて居る横手も靜まりかへつて灯さへついて居ない、……ゴーッ！と又一臺、灯が見えた時、私は最後に暗い夜の中へ吐き出される樣に降りたつた。電氣がパッと消える、「鈴木君ウーン！」バタ〳〵靴を鳴らせてポールドを後ろへ廻す音、續いて來た一臺からも二三人降りた樣子で足音が聞える、……「まゐりませう……」ぼんやりと灯をともした白い車夫が小腰をかゞめた「○町まで十五錢……」「御無理は申ません、二十錢やつておくんなさい、ヘエ」「じや、まあよそう」追ひかけて來るのを知つてスタ〳〵と歩き出す「ようがす〳〵！」ガラ〳〵と引よせてチリチリンと一つ意勢をつけると其まゝ曳き出した、右に折れ左に曲り、とある横町へ曳いてゆく……近道をするんだな、と思ひつゝ私は目を見はつた、梅月、花江戸、喜雪、花月、……軒並びのガスが一種の表情を示してゐる。



天の橋立

女三人連の旅行

杉若里子



▲西國二十九番の札所

ことしは父樣の十三回忌だよ、あの――松尾寺へ行くと死んだ人に似てる人にあふんだとさ、といはれた、祖母さんや母樣から、よいおつれも出來たし時節はよいし、一度拜つたら?、と五日ほど前から進められたので、やつと行くことになつた。

おのぶちやん、晴ちやんに母樣と四人が家を出たのは、午前の七時少し前だつた、皆合財袋に洋傘一本といふ身ごしらへ、初袷の身もかろい、荷もかるい。

少さいくく汽船で一時間の後、和田村へついた。

昨夜つくつて下さつた母の情の脚絆、お納戸甲斐絹に緋の口もしつかりとむすびつけ、掃き出された老若男女の中に入りまじつて細い道を行く。

伊勢屋とした宿の前で、ぱつたりと半月前に嫁らした山川さんに合つた、紋お召しのお袱布に、白粉の濃いせいもあろうが、すごいくくお顔だつた、手には七日の間、夫とかしつかれた大尉の君の、白骨らしいものを抱いておらした、その姿、一目みたせつなさは、涙と歔欷の外なにも言葉が出なかつた。

お時ちやん！おさあさん！とよびもよばれもした仲だつたのに、今會つたのになぐさめの言葉一つ出ないとは！おいたつきでの遺骨なら、戰死での遺骨なら――あんなにいつてらした方が新婚七日の後に自刄しておはてなさるとは――お時ちやんはどんなにくく思つてなさるだらう。

山の中のお堂――卯月八日のおしやか樣は、れんげや滿種の花の屋根の中に、一寸八分位の御身體をたいぎんと。甘茶の中にいらす。

のぼりくだりの坂道は、いつも坐つておる私逹には樂じやなかつた、はあくくと呼吸がくるしくなつたり――足のうらにはまめこさへたり、幾度もくく休むで――松尾寺！でも境内は想像よりも廣かつた、日曜のせいか水兵や軍人の奥樣らしいのなんぞ大分と舞鶴から見えておた。

此寺は二十九番の札所だよと、おしへられたけれども、その御詠歌すらしらない、お祖母樣逹は鐘たゝいてお念佛となへておる。

石でつくつた佛樣の前には、いろくくな戒名のしるした紙きれや、へぎなんぞがあ向したしきみの水でびしよびしよになつておる、母樣も得見としたのや、妙見としたのをぬれた上へのせて、おがむでおいでる、私もたゞ、なむあみだぶつと珠數つまぐるより仕方がなかつた。

「母樣も行くといゝんだけれども氣をつけてね……………皆さんどうかね途中を氣をつけてね、若い方ばかりであんじられるけれども、私もよんどころない用事で」と見かへりくく歸られた。

何んの母樣わたしたちだつて字はよめるんですもの、大丈夫よとはいつたものゝ、しばしの別れも母とはつらかつた。

▲旅の宿屋

ふら〳〵になつたおのぶちやんも、晴さんも、もう幾里だらう、もう幾町？と舞鶴までの里程ばかりをくりかへして、唱歌一つうたふ男氣すら出ない、やつとの事で新舞鶴まで着いたのは逢魔が時だつた。

ステーションでは電燈もついてた、知らぬ人に和田からこゝまで幾里といつて七里餘りとの聲に耳をうたがふた、十分間ばかりうすぐらい汽車にゆられて、それから十五丁ばかりのさみしい田圃道を本町とかの山キ旅館へと——雲のたゞよふてゐる空には上弦の月がかゝつて、蛙がやかましく泣く。宿の十疊の二階へ通されて、しばらくしてから、三人つれだつて三十位の啞の男におしへられた湯殿へ入つた、九時過ぎのお湯はうつすりとにごつてゐるが、もう〳〵と立ちこもるゆげに二人のかほも、ぼんやりとしたランプの光にうつすらと——

身はあたゝかき湯につゝまれて、上げる手、入るゝ腕も、やはらかき肌のぬくみに、身も魂もうつとりとして晝間の足の疲れもきえうせた。

上りませふか？と上氣したほゝのいろ——たゞうつくしいとながめたサア晴さんからと赤いの——白つぽいのや紫がゝつたのの長襦袢一つで戸一枚あけたら、わたし私らのぬぎすての入れてあるその室に、女中らしい十五六のが帶着ものとうらかへし表かへして見てゐる。

淺ましい女のしわざよ！。

むしあつい夜はとなりの室から、もれてくるいびきの聲に二時までもねむれなかつた。（七月）

▲水や空なる青海原

第三橋立丸の甲板に昇つたのは九時頃だつた。

紺ぺきの空しづけき海、多くの人の視線は、みんな海の方へ〳〵とそそがれた。

あの右側の山の方にあるのが、水雷團だ、もうじきに外海に出るんですよ、それからしばらくすると橋立が見えてきますよと、小學生三十名ばかりつれたひげのあるお守りの君はおつしやつた。

そして時々こちらの方へめつきらしいゴールド色した側の眼鏡を光らせて——

少しうねりだしましたね、道理で山が見えなくなつたと、どこやら隅の方から聲がする。

晴さんはくつ〳〵と下むいて笑つてひざをつねる、そして上目づかいで向ふをさす、何かしらと見たら、

お守りの君、大方くしやみをしたんたろう、手といわず、ひねり上げたカイゼルから、ズボンにまでも、時ならぬ水晶の玉や黄色のあやしいものまで——

カクシからハンケチとり出して、眞赤なかほしてふきとつてゐるお氣の毒さ——

水や空、空や水なる青海原。

あゝこのまゝ〳〵しづかに〳〵船がしづむでしまつたら——けれども船はこんなことを思つてるものゝあるのもかまわず、ドツ〳〵と波をけやぶり、水かきかきわけ、昨日の道をさして平々と進行する。

あれ山が見えてきた、橋立？と小學生は喜々とする、どれどこに？と夏みかんほゝばりながら立ちあがるもの、お菓子をつめこんでかけでるもの——

▲謠にうたふ丹後の宮津

文珠、十八丁。成相山、七十二丁——

とはり札のある宮津の町に、十二時ころに着いた、上つたところは、

縞の財布もからになる——といふ遊里だつた。

まひるの遊里、一すじの糸の音すら聞えぬ。

沈默の家——ゆうべのどよめきはどこへ?

きのふ七里の足だめし、十八丁はわけはなかつた。文珠の智惠のもち三人とも足をとめた。

中へ入つてたべませふか?

えゝ少し智惠でもつけないいじやね

ホントニよ——相談一決、

お晝飯は一皿でたんのうした、あとはお茶ばかりがぶ〱飮む。

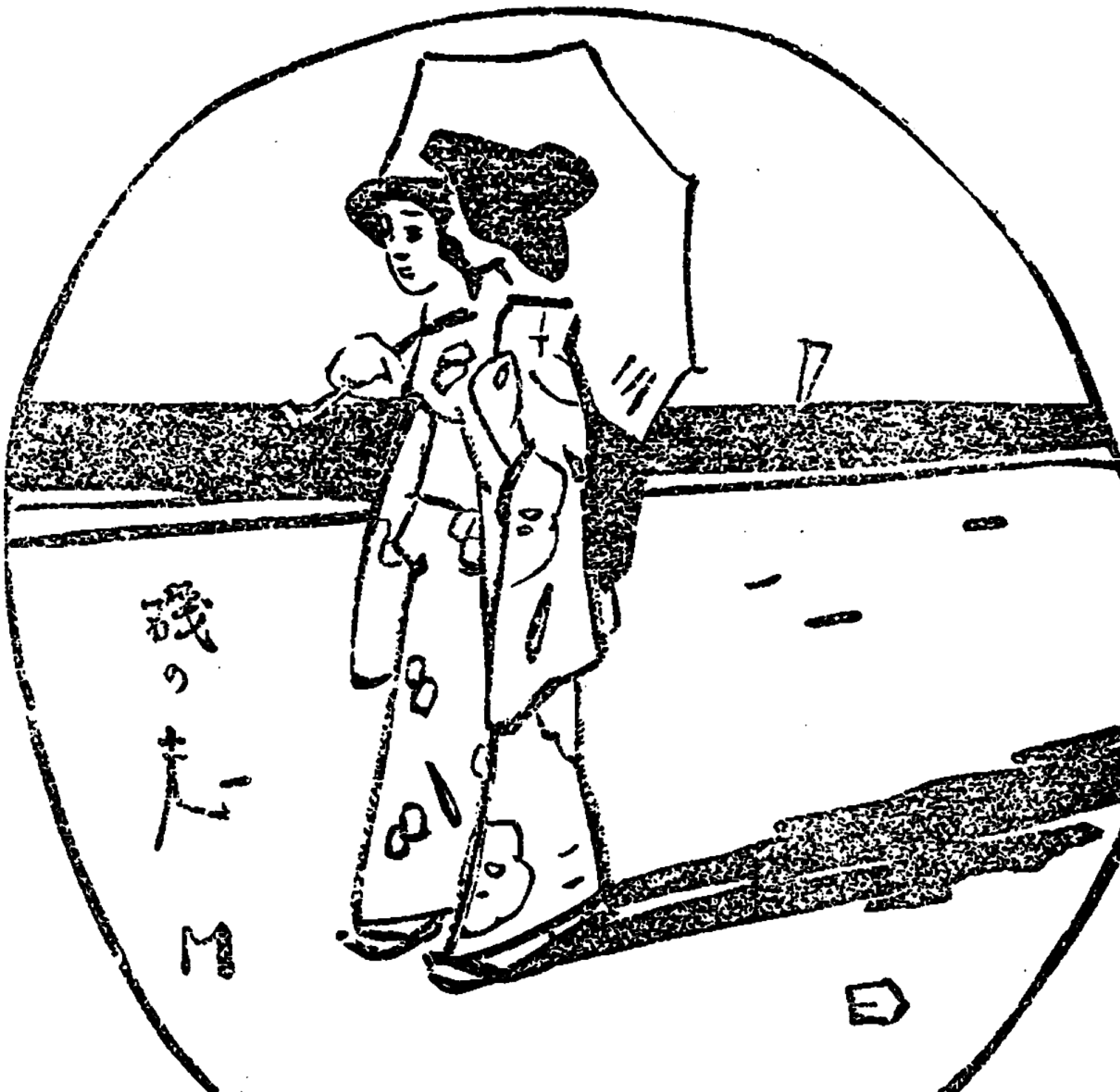
入り海の水——底はすむでゐるけれども、少しのゆらぎもない、前には橋立、左手は文珠、けれどもこゝから見た橋立は、これでも?とうたがはれた、水の面には丸木船をうかべて、三々五々帽子きたのや、パラソルかしげたの、五人も座れは一ぱいになりそうなと思つた。

のりませふか?と晴さんはいふ。

いやだツ、せゝつこましい貴女達おのりなさいな、

といつたらそんならそよふといわれては小さき勝利とこゝろに叫むだ——

——文珠の山門——あまりに小さくてきたないのにあきれた。



水の棚の横手を通つて、渡し守の前に立つた。

△天の橋立

向ふへ渡りませふ?皆無口で船の中へと。往復一錢の船、一丁のわたし船向ふへと青松白砂のうちへ——…うねつた木、つツたツたのとその間には意氣なあづまやも、ところ〴〵に建てられてあつた。

左側の硝子ばりのさゝやかな家には、二十餘りの女が名物をうつてゐた、ふりまかれる愛嬌に繪はがき、貝、松の皮、せんべいをつゝむで頂かずにはいられなかつた、それから少しゆく〱と磯清水神社とやらには大きな石に、いそしみづ松は月日の……刻むであつた。

一間位な丈で葉先きの五寸もあるのがみどり榮えてうつくしい新芽をふいてる、之が東宮殿下のお手植とやらだつた——白き地褐色の幹、グリーンの葉、右にまがり左におれて、いつまでいつてもはてしがない、

わたしもふ、このさき五十丁の松林、あゝうんざりしてしまつた、ひきかへそうかしら、晴さんも、ほんとによ、もういやだ、歸りませふか。

せつかく橋立へきて、こんなところじや仕方がない、何とかの股のぞきまでゆかなくちやと、おのぶちやんは不贊成、けれど多数決で仕方なしに、不平滿面といつたかほつきでついてゐらず。

十八、十九、二十、とこの三人は生れるからの友、お信ちやんの末つ子、晴さんの總領に、あたしの一人と、皆なそれ〴〵のわがまゝはもつてゐるけれども、一番丈けの長いわたしのわがまゝはいつも通つた。

夕照まばゆきデツキの上、海水をふくむだ風が肌につめたい、くびにはハンカチまき、袖をたくし上げたがまださむは、ベンチに坐つた、けれども――とく〳〵今度はむしあつい下へおりた、海のさまはもう見たくないので、窓の下へはようずにじつと眼をつぶつてうつむいた。

どこかおわるくて?、

青いかほよ、とおのちやんも晴ちやんも眉をひそめて、何でもないのよといひ放つたものゝうつくしい友の情けに、わたしのこゝろがにくらしふて、つめたい〳〵涙が頬をつたふ。

舞鶴での宿はやつぱり藥屋の前の山キだつた。

早くやすみませふよと、みんな八時過ぎ床をとつていたゞいた、ねむり!ねむり!ねむりより外にたのしみのない私は一番に床に入つた。後から入つたお二人は、横になるとすぐかすかないびきを立てゝいらつしやる、細くしたランプの光り。

唐紙には小高いふとんの山が三つならんでゐる、すつと唐紙あけて、宿の主人が宿帳を願ひますと火をあかくする。

昨日の通りですと、おひかへした。失禮しましたと火を細くして出て行つた。(八日)

▲なつかしき家に帰る

いよ〳〵けふは帰るんだ。

小さくて、うすぎたない汽車のうち、七時二十分の箱のうちはすいてゐる。

君は近頃見かけないが、どちらへと?問はれた男えゝ、今は伯耆の方の土木の課長をやつてますといつた人は、二つの指環、鎖、カフスボタン、時計、みんなゴールドづくめだつたが赤切符だつた。

新舞鶴からは、和田までガタ馬車にて、馬の動くごとの上下動、左右動、七里のみちはつらかつた。

汽船の上は午後の日ざしは容謝なくてる。

パラソルか　げて、くらげのおよいでゐる海底をじつと見つめてゐた乘合ひの人々は關西者らしい、紺の單衣の十人揃ひのすげ笠、わらじといつた風の人のはなしに耳かたむけてゐる。

これから小濱へ上陸つて竹生しまへゆくとか、大方觀音めぐりなんだらう。

双兒のしま、青しま、町の家並も見えて來た。

あゝ、海も、山も、小濱だと思つたときは、淋しい旅よりも、やつぱり骨肉のゐるがわが家はなつかしい、濱には、まずもむかひにきてゐた

祖母様は、今度のかもしれんけれども、帰りそうなので、一寸見てゐてきて、とおつしやつてでしたと云ふ。

氣の弱い祖母樣も母樣も、でもよくね、早かつたこと〳〵と、うるみ聲してゐながらも、うれしさは、眼にもあふれてゐた。

三日ばかり遠ざかつていた私たちも、血縁のなつかしみには、やつぱり、きゆうくつなうちも、なつかしく見まはした。(九日)

化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉



問 荒性のものがつけてよいお白粉と其つけ方を御教示願ひます、吹今町に鬻がれて居る化粧水は一段に色が黒くなると去る方の申されましたが本當でせうか（鳥取の愛讀者）

答 粉白粉がよろしい、これは初めコールドクリームを顏全體に摺込み、生紙にて拭き取り、その上にキセロールクリームを斑なく塗り、後粉白粉を打つのです昨今の化粧水は多く炭酸加里にグリセリンを原料としてありますからこれを長くつけて居ると黒味を帶びるやうになるのは事實です。

問 五月號にて能登春雨樣に御答遊ばした内について御伺ひ致しますがあの荒性の人はグリセリンだけで洗ふのですか又ビネーグルも混せてなのですか、セキロールクリームやコールドクリームは何處で賣つて居りますか（牛込の春雨）

答 荒性の方にはビネーグルの要はありません、コールドクリームはまだ日本でも賣つて居りませんから面倒でも御自製なさるより仕方ありません、その處方は色々ありますが、その中、甘扁桃油一〇〇、〇に對し白蠟及び鯨蠟各々一三、〇、グリセリン二五、〇薔薇油一、〇、麝香〇、二とも合せて調製するのが最も簡便でよいと思ひます、キセロールクリームは兩國米澤町の紅屋で賣つて居ります。猶これと大體同樣の御質問を「京洛の花暦」さんから受けて居りますが改めて御答しませんからこれを御覽願ひます。而して花暦樣と仰やると去月十日私の方へ直接御手紙下すた〇〇子さんではありませんか。若し左樣であつたとすると返事が二重になる譯になりますから。誰方も社の方へ御質問になつて同時に私の方へ御手紙下さる場合にはチヨツト其旨を書添おき願ひます。

問 フケが澤山なのに髪毛がズン〳〵拔けますので、アルコールとサリチル酸の混合液を用ひてますが依然として脫けが止りませんが……（函館、若き母）

答 貴女は前號で御尋ねになつた函館の露子さんでせう、それでは產後の脫毛なんですね、それなら左樣と書いて下さらんと、普通脫毛の場合と思ひちがつて御答するかも知れませんから、他の御質問下さる御方にも今後は、其原因や經過をよく書いて寄越して頂きた

いものです。フケを取ると酒精劑を用ゆるは一種の方法ですけれど、これは餘程その頭皮質を見た上でないと、禿頭を招致する原因となることがありますから注意せんといけません。脫毛してフケあるを防ぐには純粹の椿油を揩込むのが一番です。

問 數年前から面皰に犯され硼酸水をつけても直らず困つて居りますがよい療法がございますなら(本郷、泣暮し女)

答 面皰療劑としては秘中の秘法を、女子文壇愛讀諸子のため御敎致しませう、それは密陀僧を人の乳で練つて夜間臥す時に揩付けて翌朝石鹼で洗ひ落すのですこれを以て痲布の心配女樣初め七名の御方の同質問の答に代へます。

問 私は性來脂肪性で顏一面に泡ップのやうな吹出物がしてをります、何とかしてよき療法を(發貴瓣子の姉)

答 御書面中にあつた某化粧水は御察しの通りよくありません、キセロールオードトワレットを五十倍位にし溶せた溫湯で御洗面なさい。それから序手に皆樣に申上げますが、或化粧はドウかの、某何とか院とかの藥がドウかのと他を毀譽褒貶するやうな御質問は……それもよいとか眞實とか申上げることの出來るものなら格別……どうも茲で公開的に御返事するに忍びませぬから、斯かる御質問は直接封書で私の手許に御送り下さい。この意味に於いて「山下淚思女」樣外御三名の方には御答を遠慮致します。

問 スワリダコとハタケとを療す法を御敎へ下さい(名未詳女)

答 スワリダコを取去るにはレゾルチン三〇、サリチル酸五、〇をコロヂユーム三〇、〇に調和したものを塗布なさい、ハタケにはコールドクリームを毎日すり込みなさい。

問 暑くなりますと日光に當りませんでも日にやけますが、今からこれを豫防しますには(大阪女)

答 豚脂三〇、〇　蠟鯨一〇、〇、安息香二、〇、胡瓜汁一〇、〇より成るクリームを御塗けなさい、これの調製法は先づ安息香を豚脂に合せて一晝夜溫浸し、これに鯨蠟と胡瓜汁とを加へるのです。

問 お化粧するのに幾度もクリームの上塗りを致しましたら氣持が惡いやうなことはありませんかしら、領にも矢張りクリームを塗つて粉おしろいをつけるのでせうか(日本橋、京子)

答 幾度〃〃クリームを塗るとはドウいふのですか、或は先づコールドクリームを揩込んで、それを拭き去つた上にキセロールクリームを塗ると申したのを左樣思ひなすつたのではありませんか、コールドは美膚料でキセロールは化粧下になるのでその質が全く違ひます

梅どくりん病ぢ疾症わきが 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人科

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横◎朝八時より夜九時迄

中央醫院

子宮諸病 血の道 ヒステリー 月やくとまりたる病 子なき人

梅どく諸病 りん病消渇 わきが ぢ にきび た蟲等

生殖器諸病 神經衰弱 陰萎 遺精早漏 發育不充分 記臆力減衰

▲病狀を記し郵券六錢を送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京淺草區瓦町廿八番地淺草橋通り瓦町電車停留場横

中央醫院

經通丸

調劑元

本劑は代々家傳の秘[illegible]にて如何なる[illegible]經滯りし[illegible]なるは其夜にあること[illegible]請合也[illegible]を用ひて効能なき時は[illegible]

[illegible]

江戸屋

子のできる器及子のできない器 懷姙避姙自由自在器

(▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器)

醫學得業士

(齋藤乙吉先生發明)

實用新案登錄特許

アトシア

atocia,

(膣內挿入小器具)

本器は産科婦人科口泉病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懷姙避姙自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器によりて膣內へ[illegible]孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に[illegible]**懷姙**[illegible]多年實驗上確證する所なり[illegible]**避姙**[illegible]**梅毒淋病**[illegible]**子宮諸病**[illegible]**自身治療**[illegible]天然の感覺[illegible]理想的新發明品にて[illegible]但し詳細なる說明書[illegible]

(正價)ニッケル製實價壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢。

人衛生上必ず携ふべき要用の具器なり。現品に添附し小包郵便密封にて送付す。郵券代用貳割增し。着金即刻發送す。

世界一手專賣元 (東京市神田區五軒町十九番地 電話番號下谷五百四十六番)

日新館藥房

婦人畫報記者坂木易德先生序
與謝野晶子女史題咏　杉野夫人書翰
日本藥學協會主幹　鴨田脩治著

實地應用 美顏と美髪

美顏と美髪の寫眞銅版數個挿入美本正價四十錢直接申込郵税要せず

美顏と美髪是れ美人の章表なり美人たらんとする人は讀め美人たる人讀め美人ならざる人最もよく讀むべし美人ならざる人これを讀めば美人となる、美人たる人これを讀めば愈々益々其美を發揮す。本書は世界的文明的現代的として最も適切に最も穩健に眞正の美人となるべき要件を親切叮嚀に指導したるものにして一々實地に應用し得べき新式の化粧法なり、時代に後れざらんとする人々は是れ一讀すべき良書なり

東京市本郷區丸山福山町四番地
發行 日本藥學協會製藥部

長身肥滿 **人體の肥料** 發見 再生丸

せの低い人 本劑を用ゆる時は高くなる **やせたる人**

病後、產後其他生れ付きの人にても忽ち肉付き强健となる不思議の靈藥あり郵券四錢送附あれば本劑の記効書及び長身肥滿法と題する約五十頁の冊子を進呈す

東京市芝區高輪南町六十五番地
成蹊堂

青春 男女諸君が一刻千金の大快樂を享有すべき一大秘書

萬民必攜 奇法奇術寶典

洋裝美本全一冊▲特價郵税共金廿四錢▲切手代用許す

目次大要

我が思ふ女に嫌れぬ法●情死の豫防法●陰部の○を除去する法●身體を肥滿ならしむ法●夢に戀人と語る法●思ふ女を動かす法●秘密交の法●毛生藥特効法●一刻千金!!閨中の秘藥●湯化粧秘法●鼻の低きを高く見せる法●顏の穢物を去る法●女を男にする法●女の相を見て多淫なるか然らざるかを知る法●迅速に○○を强むる法●牛乳にて顏を洗ふ法●わきがニキビを去る法●女の疲間へ男の來らざる法●婦人○氣の妙藥●女に外情あるを顯す法●年齡によつて○○の度數●淋病梅毒消渇秘密療法●色欲なきものに情欲を發せしむ法●男女過房を治す法●寢入りたる男女の心中を知る法●音聲を美ならしむ法●多情を抑制する法●男女梅毒の有無を知る法●經水不順を治す法●男にほれらるゝ法●口の臭きを治す法等此外尙前人未發の奇法術を山の如く滿載しあれども風紀上內容全部を掲載する能はず……(特に密封送本)

▲永久に何年後でも發賣す

發賣元　岐阜縣高須町一ノ二　振替東京三八五三番　**芳文社**

◉注文山の如く賣行飛ぶが如し!(本品百年後でも發賣す)

大好評

機械不要 輕便 早取寫眞インキ

▲特製一個送料共金貳拾錢(說明書付)但並製は十四錢

今や日進月歩の世界にして文明利器の發明せらるゝ枚擧に遑あらず而して本法はシヤノタイプと稱し實に寫眞界大發明にして其方法頗る簡易なれば何人と雖も練熟を要せず此インキを塗りて作りたる原紙と一枚の普通硝子とを以て他に少しの機械藥品を要せず人物風景意の如く凡て其通り美麗鮮明に速寫するを得て愉快限りなし萬一寫らざる時は**返金**す安心注文せよ◉本品を用ひて自分の肖像入繪葉書肖像入名刺を製し又は景色を速寫して**額面**用とせば頗る妙なり◉**說明**書は人物風景速寫法より幻燈畫寫眞、硝子寫眞の寫法まで丁寧明細なれば誰にもよくわかる◉速かに一度試みよ『便宜上芳文社へ注文せられても宜しい』

◉發賣元　岐阜縣高須町七二五　振替東京七七八七番　**經文堂**

女子文壇
十月第三、增刊

懸賞募集



娘時代

『娘時代』は人生の花です、語るべきこと、歌ふべきことは、憚りなく自由自在に語り又歌ふのが愉快です、本誌は其娘時代の方々の爲に例の通り二百頁の空白紙を供します、何んな活字で埋めやうと皆さん方のお心がけ次第です、幸ひに傑作をお考へなさい。

投稿の種類

第一種 娘時代の感想、娘ごゝろの告白、文章は思ふまゝに書いて宜し(總振假名つき、廿四字詰百行以上二百行迄)

第二種 ○短篇小説(廿四字詰百五十行以内振がなつき) ○八月の日記(同上)

第三種 ○わが故郷(河井醉茗選) ○わが手文庫(横瀬夜雨選) ○わが親友(溝口白羊選)(二十四字詰七十行以内)

第四種 ○詩(長短随意) ○和歌(一人七首) ○俳句(一人七句)

第五種 ○表紙(石版三色刷) ○口繪(石版六色限り)寸法は本紙に就いて注意なさい ○スケッチ(方三寸以内畫題注意)

△原稿締切 八月三十一日本社到着

募集所 東京市京橋區大鋸町 女子文壇社

懸賞

第一種 △一等金拾五圓△二等金拾圓△三等金五圓△四等金貳圓△五等金壹圓(掲載したるものは全部報酬す)

第二種 △小説一等金七圓△二等金四圓△三等金貳圓△日記一等金五圓△二等金參圓△三等金壹圓(日記は優秀なる作ある時は各等數編を採用すべし)

第三種 △各題毎に△一等金五圓△二等金貳圓△三等金壹圓

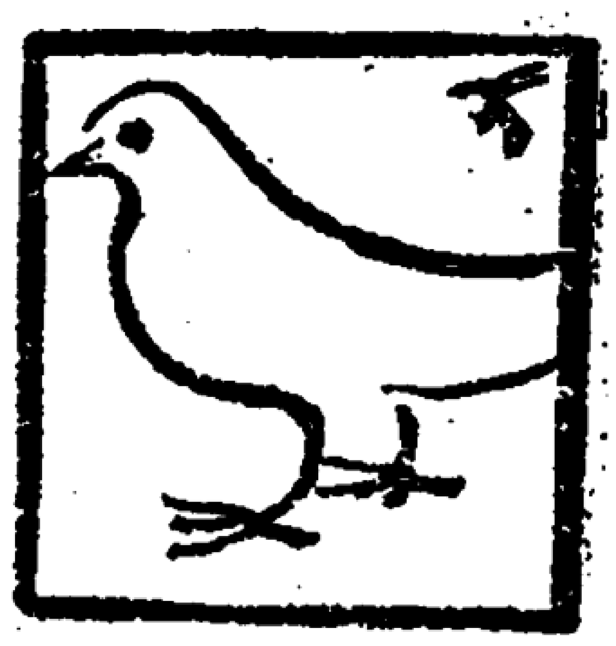
第四種 各種毎に△一等金貳圓△二等金壹圓△三等金五拾錢

第五種 表紙口繪は正金五圓以下貳圓以上、スケッチは一等金壹圓以下數名之に準ず

右第二種及び第三種の一等は正金にて贈呈し、其他は凡て價格相當の物品にて發表翌月後に贈呈すべし



創作



小説

水野葉舟選

○不安（天）

信濃　優梨子

「美遊龜の春ちゃんが新橋の何處とか云ふ藝妓家へ養女はれるんですつて」
「さうだつて、矢張りお座敷へ出るんでせうて、可愛い好い妓になるでせうよネ」
恁麼噂が近所界隈でされる頃、もうお春の籍は梅の家の養女になつて居た。
裏庭の大きな泰山木の陰の無花果が、枯木の樣な枝先から小さな葉をゴチャ〳〵と澤山出すと、すぐ青い可愛い實が幾つか出た頃から、お春は何かに唆り立てられた樣に急に踊と三味線の稽古に身を入れ出した。
「田舍者だから藝が無いと云はれちや第一私が笑はれるからね」と叔母のお須惠は口癖の樣に云つてうるさい程よく世話を燒いた。
其日もお春は朝湯から歸ると、半襟のかゝつた大柄な

銘仙の袷せの上へ赤い博多の帶を小さく貝の口に結んだまゝ、長唄の稽古本を二三冊バサりと投げる樣に置いて、茶の間の椽近くへ撥を持つて坐つた。
ふつくりした唐人髷の緋鹿の子の手柄が、湯上りの黑く濡れた廻りの毛に似合つて美しかつた。
――牡丹の花に舞ひ遊ぶ胡蝶に心柔ぎて――
調子を二上りにすると思ひついた樣にふいと連獅子の途中半から小さい聲で唄ひながら無雜作に輕く少し早目に彈き始した、好い加減表紙の皺くちやになつて居る稽古本は開かれないで其儘になつて居た。
蠟を塗つた樣な艶を持つた若々しい八ッ手の葉を通して、朝の日が椽から疊の上まで明るくさして居るけれども、花柳の街はまだ夜明け頃の樣に靜かであつた
女中のお富美もお信もやつと顏を洗つた許りで、まだ眠りたりない樣な顏をして座敷や庭の掃除をして居た
「おや春ちやん今日は馬鹿にお精が出るのネ」とお須惠は大縞の寢卷きのまゝ、櫛卷きの髮をとかしながら、晴れた顏をして這入つて來た。
お春は唄と撥の手を一緒に止めて莞爾した。
「勸進帳、賤機帶、淺妻船……さう今日はまア勸進帳をしつかり堅めてお終ひなさいよ、ネ？」とお須惠は其處にあつた稽古本をずらして表紙の字を見て云つた。
「妾彈くから叔母さん唄つて下さいな？」とお春は笑ひながら冗談の樣に云つた。
「彼麽事云つて、私が唄つたんじや何にもなりやしないわ」とお須惠も機嫌の好い顏をして笑つた。
「だつて私もう終ひになると咽喉が苦しくなるんですもの」と云ひながらお春は爪彈きで調子を直して居た
「まア斯ういふちやんとしたものをしつかりやつて置かないとネ、細かいものは何時でも出來るから」とお須惠は違ひ棚の極にあつた長い煙管と煙草入れを引き寄せながら云つた。
「始めの方は好いけれど……鎧に添ひし袖枕のあたりからまだかたまつて居ない樣だから」と云つてお須惠はマッチで火をつけながらゆつくりと好まさうに煙草を呑み始めた。
「じや、人目の關のやる瀨なや、のあたりから叔母樣一緒に唄つて頂戴なネ？」と可愛く一寸頸を傾げてすぐ旅の衣は篠懸の〳〵、露けき袖や……と張りのある好い聲で唄ひ出した、絃もよく其れに合つた。
お須惠は曇りのない顏をして其撥の手と細かく動く左

の手とを眠と見て居た。其内に小さい聲で調子をとり始めた。——元より勸進帳のあらばこそ箋の中より——と大へん調子がついて來て、お須惠も何時か釣り込まれて一生懸命に聲をかけて居ると「御免なさい、お女將さんお宅?」と晴々した松三好のお女將の聲がした。

「おやお女將さん大へんお早くえゝ被在いますよ、もうお春ちやんのお稽古ですの」と輕く挨拶するお信の聲も表庭でした。



（天）江の島にて　大阪　むらさき

「おや松三好のお女將さんが………」とお須惠は待つて居た樣についと立つた。お春もひたりと止めた。何となく調子拔けのした樣な變な氣持ちがした。

「お春ちやんなかくお精が出ますのネ、構はずなさいましよ」と松三好のお女將はお須惠の後から這入つて來て、お春の後姿を見るとすぐ調子の輕い聲で云つた。

「あら、女將さん被入いまし」とお春はくるりと後を向いて黃ろい高い聲で云つて輕く頭を下げた。

「あの十日頃に妓を見に來るつて今手紙が來ましたの」とお女將は明るい敷居際へ坐るとすぐ斯う云つた。

「あらさうですか什麽も色々御世話樣、十日つて云ふと……今日は四日ですネ」とお須惠は一寸指を折つて見た。そして

「春ちやんみつしりお稽古しなけりや駄目ですよ」と別に強い聲でもなく、横に居るお春を振り返つて云つた。

「お女將さん大丈夫、性が好いんですもの、そして此容貌なんだから……………、新橋あたりで磨き上げたらまア甚麽に好い妓になるでせう、梅の家のお女將も幸せですわ恁麽好い娘が養女るんだから」と松三好のお女將は睨とお春の横顔を見て羨しさうに云つた。

「何だかまだからつきしものになつて居ないんですからネ」と云ひながらもお須惠は何となく嬉しさうな顔をして居た。

「何處で逢はせませう自家でも好いけれど、妓が大勢居てうるさいし、一層お宅じや如何、お春ちやんも其方が氣が落ちついて居て好いかも知れませんよ」とお女將はお須惠の吸ひつけて呉れた煙草を一寸會釋してゆるく吸ひながら云つた。

「えゝ私も其方が好いと思つて居ましたの」とお須惠はすぐ頷いた。

「誰でも彼の時は氣がおど〳〵すると見えましてネ、私なんかよく何か彈せても、終ひには氣の毒になつて好い加減で止めさせて終ふ事があるんですよ、餘程氣のしつかりした馴れた女でなくちやとても平氣な顔をして思ひきつては彈かれないやうですネ、踊りも矢張りさうですよ」とお女將はまた續けて云つた。

お春は何となく不安になつて來た。

もし間違つたら、お女將さんは大抵彈かせるものは定つて居るといふけれど若し私のよく知らないものなんか彈かせられたらと思ふと、極優しいといふ其梅の家のお女將が意地の惡い何だか其麽事をしさうに思はれて、泣きたい樣な心持ちになつた。

亡母樣の被在した新橋、初代姐さんのよく話して呉れる彼の東京の新橋、私は行きたいんだけれども……と思ふともう其時が心配で堪らなくなつて來た。

「お春ちやん好く彈かうなんて思はないでネ、何でも平常と同じつもりで思ひきつてお彈きなさいよ」とお女將は幾度も云つて歸つた、お春は只笑つて頷いて居たけれど、小さい胸の中はもうおど〳〵して不安で

不安で堪らなかつた。

○踊のお浚ひ　（選）

近江わかば

お良は、母親に連れられて踊のお浚ひを見にいつた。雨上りの氣持のよい初夏の晩で、紺色の空には、小さな白い半輪月が浮んでゐた。街燈の光や店頭の燈火で、泥濘道はちら／＼と銀色に輝いてゐた。水菓子屋の店には枇杷やバナヽや紅い林檎などが、配合よく幷んで、まだ土地では、會社が出來たばかりで、衆が珍らしがつてゐる瓦斯の靑い燈火が、其等の果物を美しく照らしてゐた。「瓦斯の燈火は嫌やな、靑うて幽靈のやうに凄いやないか、やつぱり電氣の方がえゝな、」母親はお良にいつた。「そんなことはないわ、螺旋で暗うも明うもどうにでもなるし、馴れると反つてこの方が便利や、東京の吉田の家もこれやつた。」「そうやらうかなあ、妾等、此麼燈火では眩うて、裁縫なんて出來やへんがな」母親は、斯ういつたきりで、ずん／＼歩いて行く。お良は東京から歸つてから、殆んど五月にもなるが、めつたに外出したことがないので、明るい街のさまが、懷しく眼に映つた。すると、東京にゐた時分のことを、思ひ出さずにゐられなかつた。いつか、姉さんと呼ぶ人に連れられて、四谷の夜店を歩いたのも、此麼晩だつた。おでんや、すしやなぞの屋臺店や飴屋玩具屋樣々の露店が、兩側に隙間なく幷んで、廣い明るい街を、きよろ／＼珍らしさうに詠めながら歩いた。未だ東京へ出たばかりのことで、靑い火花を散して、走つて行く電車も、珍らしかつた。長い髱を出したつぶしの、すつきりした姉さんの後姿を、時々人が振返て行くのを、お良は胸轟ろかせながら、それが妙に嬉しかつた。お良は、此時のことを思ひ出して、濃い美しい髮をした、吉次姉さんの姿を思ひ浮べた。握られてゐた、白い柔かな手の溫みをも、感じるやうに思つた。歸鄕以來およしはいつも賑やかな淺草や銀座や、一度行つた歌舞伎の棧敷を思ひ出してはたまらなくなる、斯うして毎日裁縫をしたり、勝手元を働いたりするのがつまらなく思はれて悲しかつた。

お良は、去年の秋から、四谷の藝妓屋の下地妓として住込んでゐた。その家は、母親の遠緣に當るので、其家の女將が、大阪へ所用の歸り、お良の家へ立寄つた時、容姿を見込んで、藝のないのを承知で連れていつ

たのであつた。然し、中年者のお良に、藝を仕込むには、容易なことではなかつた。第一踊にしても、年を取つてゐるので、身體がこなせないし、撥の持ち方からして、教へなければならないのであつた師匠は、丹精しても、骨折甲斐のないのに手古ずつて、時々「女將さん。彼麼ぢやどうも、」と困つた眼付をした。女將も此樣子ぢや、急に物になりさうもないと思つたので「身體も、弱さうだし、多くもない御子だから、萬一病らひでもしたら、」と體よくいつて、送り返して來た兩親も、始めから望んでゐたのではなし、女將にすゝめられて只娘の云ふが儘にやつた迄のこと――それで向ふの云ふがまゝに理由も究めず心よく受取つたのであつた。

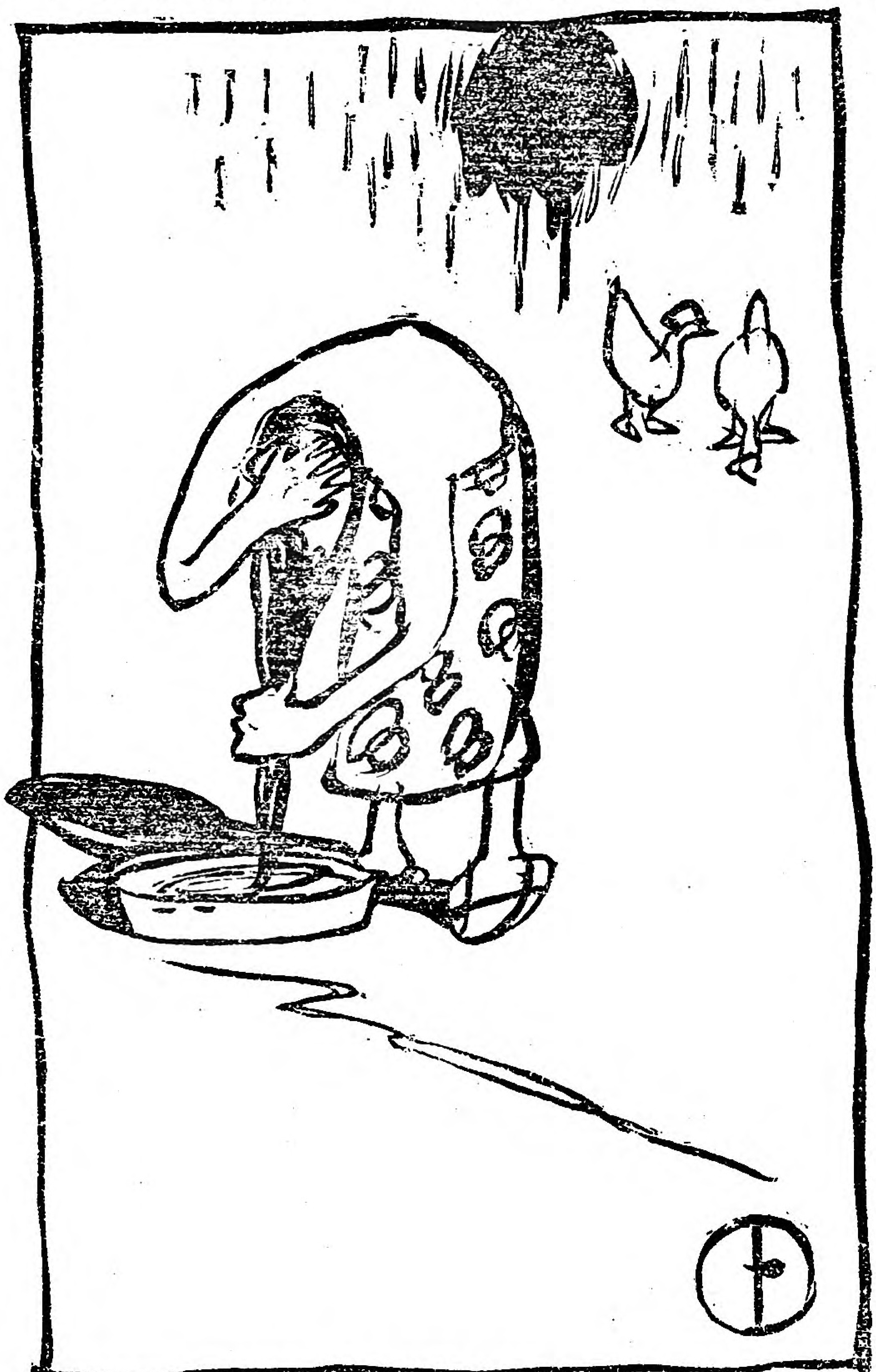
踊のお浚ひのある、芝居小屋の前には、大勢人が押し合つてゐた。「何子さんへ」と太い字で白く染め拔いた柿色や淺黄樣々の色をした幟りが、軒に吊るした紅提灯の燈火に、映えた。小さな小屋の内部は、息もつけない位大勢込あつて、ムッと熱臭い一種の臭が漂ふてゐる、夏蜜柑の皮やラムネの空瓶が、汚ならしく散ばつてゐた。遊廓の子供や半玉なども出るので、席にはお召の瀟洒な裝服した、藝妓や、華美な友禪染の、雛妓の姿も見えた、お良は、見すぼらしい自分の服裝に恥ぢて、後の方に少さくなつてゐた。母親が「彼處が開いてるから」と前の席を指さしても首を振つた。舞臺では、今十二三の子が、忠信を踊つてゐる、お良は妙に考へ込んで了つて、踊なんか眼には入らなかつた。母親が、何をいつても「ふんふん」空返事ばかりした。パチ〱と拍手の音に、お良は、驚いて舞臺を見つめると、狐の面を被つた忠信が、花道へ引込む處だつた、次は雛妓二人が茶摘を踊つた地方は水色のお揃ひの紋付着た四人の藝妓、若いのもあれば年增も居るが、皆此地での一流の妓なので、腕も可なり冴えてゐるし、容姿も相應に見られた。「えゝ子やおへんか」「よう是丈揃はつた者や」見物は、口々に譽めてゐる、「是丈總揚げにしたら豪氣やなあ」職人風をした男が、突然頓驚聲で叫んだので、一心に舞臺を見つめてゐた人達も、思はず振向いてクス〱と笑つた。

お良は、自分も、東京にゐたらと、泌々思つた、何だか斯う云ふ場所にゐるのが辛くなつて來た「お母さん妾頭痛がするさかいお先へ歸りますわ」「さうかいでは氣をおつけやお母はんはもう少しゐるさかいな、」小屋の外へ出ると、さつと涼しい夜風が、熱した頰を氣

持よく吹いた、お良は、ホッと息を吐いた、芝居前の通は、もう大分戸が引いてあつた、涼しさうな玉簾を掛けた氷屋の店には、客の影は見えずに、女中らしい女が、眠さうに欠伸をしてゐた。

お良は、後から何物かに追はれてでもするやうに、急いで歩いた

暗い横町へまがると、寂とした暗に、自分の足音のみが耳につく、ホロ／＼と涙が、頬を傳はつた。



（地）　夏　　青森縣　立花とも子

○島の女（八）

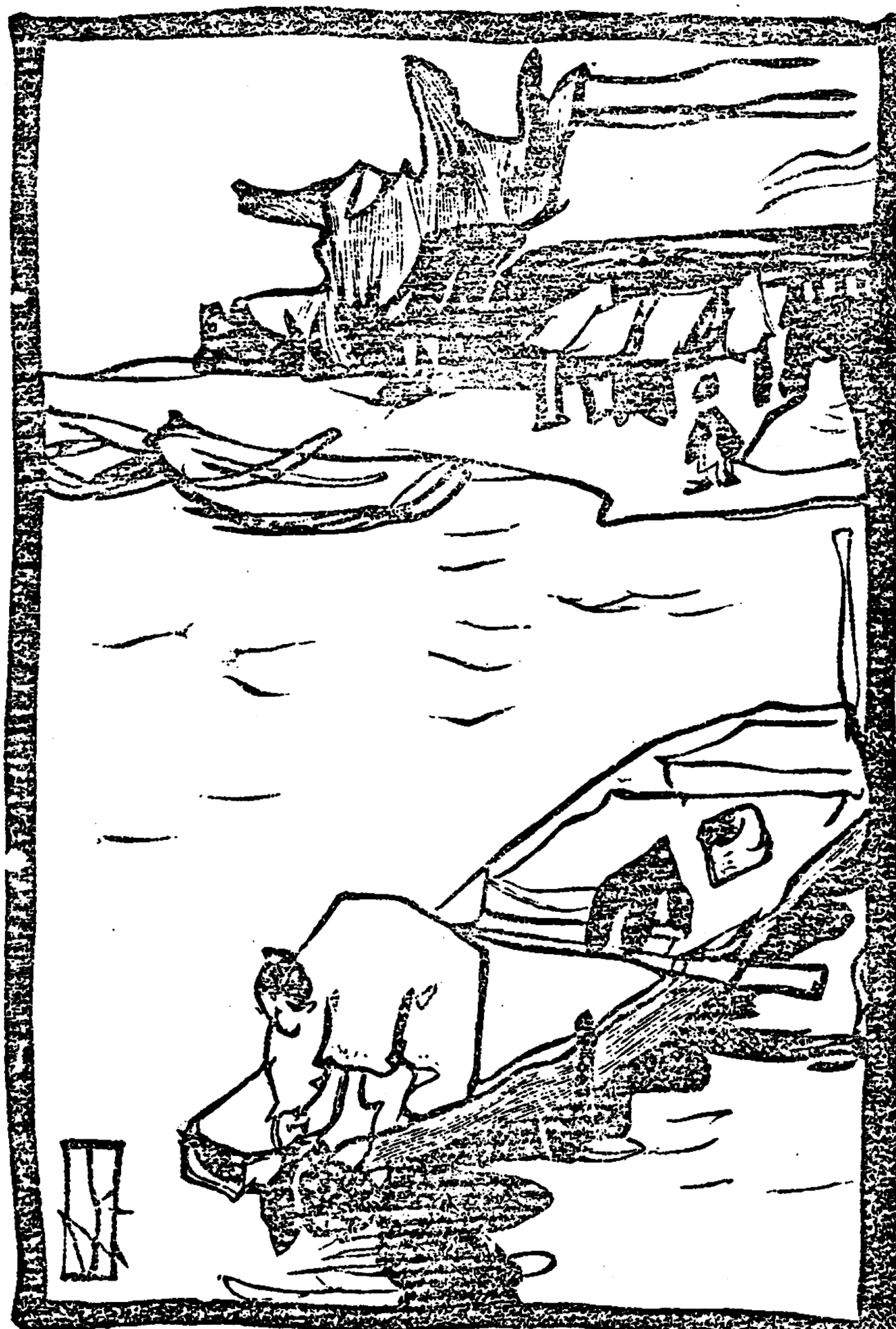
横濱　月草

大きなテーブルを、中央に圍んで二十一人の娘達は、せつせと針を動して居た、廣い座敷は殆んど純白の羽二重や、リンネルで埋められて所々紅の勝つた友染メリンスや、紫繻子の帯が際だつて美しく見えた。

ガチヤ／＼と喧しいミシンの響も止み、裁物部の鋏の

音が少し途切れた時、部長の高井は店の方に出て行つた。
「尺度を貸して下さいな」をきつかけに、
「阿君さん、夕方伊勢崎町に行きませんか」「エ、賛成よ、あの橫町へもね」這麼言葉が取交されると今迄の靜寂は破れて、ハイカラ節を歌ふ人、越後獅子の合の手を口三味線でやる人など、急にガヤ〳〵しだした、鋏の音は叉烈しく成つた。
「芳枝さん、晚に例の所へね、」袖形にへらをし乍ら光子が云つた。
「エ、わかつてよ、それよりは彼の落葉の詩を敎へて頂戴な」「秋の日の、ヰオロンの……ため息の身にしみて？」夢中に成て多辯つて居ると隣りに坐つて居た阿槇は急に後にくるりと向いて了つた、そして小さなとぎれとぎれの細い聲で、
「伊豆の下田に長居はふよし……」歌ひ出した。
「始まつてよ例の癖が」と光子は小聲で云つて前の芳枝と顏を見合した「歌つて居らつしやい」芳枝は目で云つた、歌ひ了つてほろり〳〵と淚を零し乍ら阿槇は「あゝ私はどうしても獨りぼつちなんだわ、彼の都かな誰も居ない新島が戀しい」誰としも付かず這麼事を云つた、其人を容れない樣なうすら淋しい姿、がつくりと引繰返つた銀杏返し、青い面の色、狹い肩は殊更此人をして島の女を思ひ出させたのである。自分の生れ故鄕の小な島の銀砂の光る瀨邊、便船も月に一度位しか就かない、所他國人の踏むを許さぬ土之より外には何物もない樣な心持の中に兩親ともない孤兒と云ふ事が阿槇の心を一層暗くさせた。
何を聞いても面白くない、皆他國者の寄集つた仲間の事だから一人が須磨の自慢をすれば、一人は東京の賑やかさを誇りがに話す、他の一人は沼津の美しさを云ふ、斯んな時は「何と云つたつて新島程景色のいゝ人達の正眞な所はありやしない」と流石に口にこそ出さないが、耳をふさいで務めて聞くまいとして、友達が何と云つても返事もしなかつた。
「どうしたのか知ら」帳場に仕上物の送票を書いて居た春子が云ふと、「例のよ私が一つしやべらしてみるから默て被在い」とつとさゝやいて、慣々しく春子は阿槇の面を覗き込む樣にして云つた。
「ねえ、阿槇さん、新島の俗歌をきかせて頂戴な、島の歌と云つた樣なものがあるでせう」此時迄、一生懸命に布に注がれてゐた眼が急に輝き出して、

「エヽ有りますとも、一寸しやれてる歌だけど、今は忘れちやつた」と晴々しう笑つた「そう、そりや殘念だわね」と此方も莞爾しながらそつと與波と顔見合せて笑つたのを阿槙は知らなかつた。
「ほんとに何と云つたつてあんな平和な村はなくつてよ靜かで、うつくしくて」すると向側の引つめた束髮に結つた阿民が「でもこう島に育つた人達は他の國の人とは交際ないと云つた樣な偏屈はなくて？」とふれつたさうに云ふ、阿槙は別に氣に止めるでもなく、
「そりやそうよ、誰でも他國から來ると暫らくは怖がつて傍にもよりつかないのよ、でも慣れればみんな親切よ、そう云へば私が十七の夏でしたわ初めて君夫さんに逢つた時も……」此處迄云ひかけてふつと氣が付いたか初心らしく眞赤になつてうつむい



（人）舟　京橋　鈴木よろづ子

た。

お槇の一番樂しい思出は此事であつた、いつも話して聞かせた、小さな蓮の葉の樣な放れ小島の岸に夕方しよんぼりと獨り立つては海の藻屑と消えた母を思つて涙ぐんで居た時、ふと邂逅つた都育ちの青年と初めて女らしい情に血潮を騒がせてから、人知れぬ微笑、はた悲しみ、寄せては返す浪の音をきゝ乍ら、胸ををどらせたのも束の間、昔氣質の人達から裂かれて、今は互に忘られた、が、今からやつて忙然してゐても此事さへ思ひ出せば不平はなかつた。遂には。

「君夫さん」無意識に這麼言葉を出した。

突然なので、驚いた樣に人々の目は阿槇の上に注がれた。

「どうしたのよ」靜子がポンと肩をたゝくと、

「あれ、何か云つて?」

淋しい面をあげたが、其眼はいつになく、生々として居た。

○二人の噂

草苺の花

朝洗つた足袋の修繕をする母樣は着物を疊んで被居しやる四時三十幾分遞送人が驛から息を切らして歸るやがて消印をする音が騒がしく聞えて居たが集配人が出てから事務員が手紙を持つて來る朝鮮から母樣宛に急いで開けて見たら龍江さんと義夫さんの事だ一體義夫さんは今年取つてまだ二十歳そんなにお酒なんか飲まないのですけれども珍らしいものが兎に角欲しいのと菓子をたべるのとで五六百程借金を造らへた少し拂つて貰つてるうちに又ぞろ母親の時計を引張り出して賣つたりしたこれで津山にも居れなくなると昨年十月、夕暮に友達の宅へ行くと云つたなり飛び出して三日經つた朝に一葉の端書が舞ひ込んだ「無斷で飛び出した不孝の罪を御赦し下され度……」走りがきで朝鮮からよこした叔父にたよつてから「これからは本氣で勉强致しますお金も溜めますそして今迄の替りに弟や妹の學資も造らへますと、殊勝らしう云つて來た私等は何があの怠惰者がと思つて居ても伯母さんはそれでもこんな事でも云ふ樣になつて、と嬉んで色んなものを送つてやられる親つて有難いもんだ中學一年の弟も兄さんしつかりと毎度手紙で勵まして居た然し雀百まで躍りは止まぬ、その通りで例の癖を出して辯護士の内で居ても彼處で十圓此處で八圓と作り出した積り積つて

借金の山を作つた月十五圓も足りぬかして子供としては餘り過ぎるやがて其處の家から新聞にまで廣告して貰つて追つ拂をくつたそして支那傾海山地方へ飛び出す後は叔父さんにかゝる其あと仕末の事とも一つは龍江さん、この人は今年で二十三何だか婆さん風のした人で白つぽい袷を着て平時も頰を紫にして居た何處か拔けた所のある女この人を母樣が今年一月朝鮮の叔父さんの裁判所の書記に世話をした實際は少しも知らない人で或者に欺されたので私の內へ來た時は一目で驚いてしまつたが仕方なしに汽車に乘せて彼地へ送つた貧想に坐つて居のを見たら子守らしかつたと思ふ、所が果して苦情が矢の



縫もの　岡山縣　野崎よしの

樣、先方の良人たるSが嫌つて嫌つて女房とはいはぬときらつたとの事無理はないと叔父樣も仰出やつてでした龍江さんが「私髮を結ひませうか知ら？」といつた時にSは丸髷でも結つたらこちらへぬといつたといつて龍江さんは云つて寄越して機嫌はどう？と尋ねても「ちつとも惡くはありません」と誰にも云ふのであつたそして每夜何卒氣に召さぬ所はよくしますから置いて下さいと歎願しては袖に泣き附くすると猶々面倒で家に居り度くなくて家を外に出步いたさうだつたそれでは餘り龍江さんが可愛想だと

いへばSはあなたには濟みませんけれどもどうしても妻として一生件ふ氣になれませんといつた、或霜の烈しい朝そつとSが裏口を出て街道の霜を踏んで考へながら的なく歩いて居ると後で草履の音がするので振り向いたら例の嫌な龍さんが寒いのに寢卷なりに猜疑の眼を張つて後から從いて來て居たから又引返したそういふ事もあつて遂々離縁して仕舞つたけれど二月やそこらで內地に歸るも恥かしいとて或判事の家へ奉口して居たが又しても先のSに未練があると見えて死ぬの生きるのと迫るのでほと〳〵持て餘して居た、夫が不思議にも妊娠五ヶ月數へて見るとSの子らしいとの事で交渉中それについて母樣への相談がてら云ひ寄越したその手紙である。

○五時から七時まで

山田花子

五六日前からお光は身體の具合が妙に懶くなつた。少し激しく働きでもすると、直に胸の邊が鈍い力でおされる樣な氣がする、又脚氣にでもなつたのかしら——お光はこう思つて立上つた、此三四年來夏の初頃は脚氣に襲はれるのが例であつた。

明るくなつた空の光が、雨戶の節穴から仄白く射してこむで、暗い家の中には寢ぐさい息が苦しい程こもつてゐる、お光は寢衣のまゝ雨戶をあけた。空は灰色に曇つて、低く下つた雲が西から東へ靜かに動いて行く。お光は外の空氣を胸一ぱい吸つて何か考へ込むだ。やがて脚氣——厭だわ——かう呟いて幽かに眉をひそめた。

雨戶を繰る音が諸處に聞え出した、つゞいて味噌を擂る音、水汲みの音、さう云ふ眼覺めた世間の活動の音が刻一刻と增してくる、けれどもそれらが皆遠い違つた世界からでもくるやうに、濕つた朝の空氣を通して朧氣に聞える。

毎日毎朝の仕事ではあるがお光は此頃釜の下を焚き付けたり水汲みをするのが如何にもだるくて、つく〳〵厭になり出した。二十五歲——此の言葉の響は、お光の小さい胸に安からぬ寂しさを起させた、娘々して居た眉の間にも、生活の印は重苦しい地味な色を刻み付けた。

正吉を世話してやらなければなりませんから妾は嫁になど參りません——斯んな事を何故云つたらう。それは母親が死んでから直ぐ父や親類の人々の前でお光が

誓つた言葉であつた。その頃教會へ繁く通つてゐたお光の頭には犧牲獻身と云ふ言葉は、此の上なく美しく聞えた。弟を母に代つて育て上る——かう思ふと譬へやうもない誇が胸の中に湧き上がつた。

併し美しい幻影はやがて消えた。一年——二年——犧牲や獻身の世界には美を見出せなかつた。そして其處には豫期けなかつた寂寞と孤獨との草が深く強く根ざして居た、やがて丈の高いお光の身體が臺所へ消えるとかまどの中で火が燃えた、薄暗い臺所の中に紅い光りが漂うて、吹竹を口に當てゝゐるお光の頰がクッキリと浮び出た。

それがすむと「正ちやん、もう六時よ、起きなくつちや不可ませんよ。」と聲をかけた。その時父は辛つと眼をさました。最前から起きてゐたといふ事を粧ふ樣に「正吉、起きんけれや不可」「何ですね、お父さんてそ中々起きなかつた癖に」とお光は笑を噛締めるやうな顔をしたが我慢が出來なくなつて遂々吹出して了つた父も笑つた。「何俺は最前から起きてゐた」「僞ばつかし私が幾ら肩を搖ぶつても、まるで赤兒見たいに口を開けて、ほんとに鏡を見せて上げたかつたわ」と云つたそして三人して笑つた。斯うして大笑ひをする事はきわめて少なかつた、常は各々無言で自分の仕度をするのであつた。

急に雲が切れたかして、朝の清い日光がぱつと縁にあたり出した、杉の木と物干竿の影が細長くそてへふるへた。父と正吉とが臺所で顔を洗つてる間に、お光は手早く夜具を疊んで部家を掃いた。微細な塵が縁先の日光の中に輕く舞つた。

役所に通ふのに七時前の割引電車に間にあふと間にあはないとでは、父に取つて非常な相違であつた。時計を氣にしながら、父は飯に味噌汁をかけてかきこむ樣にして食べた、時計の針の刻一刻が此の老人の神經を苛立たせた。

——私、又脚氣になつたやうよ。と口の中まで出かゝつたが、お光は遂に云切る勇氣が出なかつた、正吉は御飯を口一ぱいに頰張つてゐた。その頰は血色が好かつた。

父の洋服は舊式の立襟で色も大分變つてゐる。お光は父に手傳ひながら、かういふ格恰が調和するやうになつた父の樣子を悲しく思つた。

勝手口の障子を開けると其所からは一段低くなつてゐる往來が見渡された。

お光は毎朝その敷居際に立つて、父を見送るのが例であつた。ダラ〳〵と、下り坂になつた往來の兩側の塀や垣根の上からは櫻の若葉が朝の日光を受けて薫つてゐた。その下には赤いパラソルや、ハイカラな脊廣の若かい人々の群が、幾組となく通つてゐる。
大きな辨當箱を右手に持つた父の後姿は、唯一人別世界の人の樣に見えた。

○なさぬなか

牛込さかえ

涼しい風が吹いて明放した、茶の間に燈けて有る岐阜提灯が、ゆら〳〵と淡い光りを送てゆらいだ。
お絲は、手拭地の華美な浴衣に細帯をだらし無くしめて、縁側を出ながらお湯があいたと、繼母に知らせて、縁側に腰掛て、團扇をバタ〳〵、用ひながら、蚊を追て居た。
「お絲さん神樂坂に縁日見に行かないか、氷や位は驕るよ」と、不意に後で聲かけたのは、從兄の友さんだつた。
「おや友さんなの、びつくらしたわ、ほゝ貴方が驕つたら水位ゐな物でせう、ほゝ、稀にはアイスクリームか、そうね何んでも可いわ、上等な物驕つて下すつたつて其那におばちも當らしないのにね」と、半分笑ひながら云て、其那事何うでも可いわ、今夜あたりはにぎやかでせうね、私行きたいけどこれがねえ」と、兩方の人指指で、角を作らへて見せて、暫くしてかんがへてから「可いわ行く事よ、湯殿に居るんでせうから今聞いて來るわ、いゝ事よいけないたつて行くわ、表へ廻て、頂戴なね」と、お絲は子供の樣に云つた
友さんはうなづいて、町のそろひの浴衣着た粹な姿を、次の間の方にかくしてしまつた。
見送てた、お絲は、いやみつ氣の無い、いゝ男だと思た。お絲は友さんと入れかはつて、お湯から上て來た、繼母の顔を見るなり「母樣、私神樂の縁日へ行く事よ」と、最う仕度をしている。
「まあだれと行くの」「友さんとよ」「エ友さんと——二人でかへ」と母親は、あきれた樣に云つて、
「今夜は母さんも仕事が無んだから、一緒に行きませう」と、氣の早い母は最う帯を締め直してゐる。
お絲は手早く仕度して店にかけ出し樣、表に待ていた友さんに「友さん友さん之が行くんですとさ」と又角を造らへて見せて

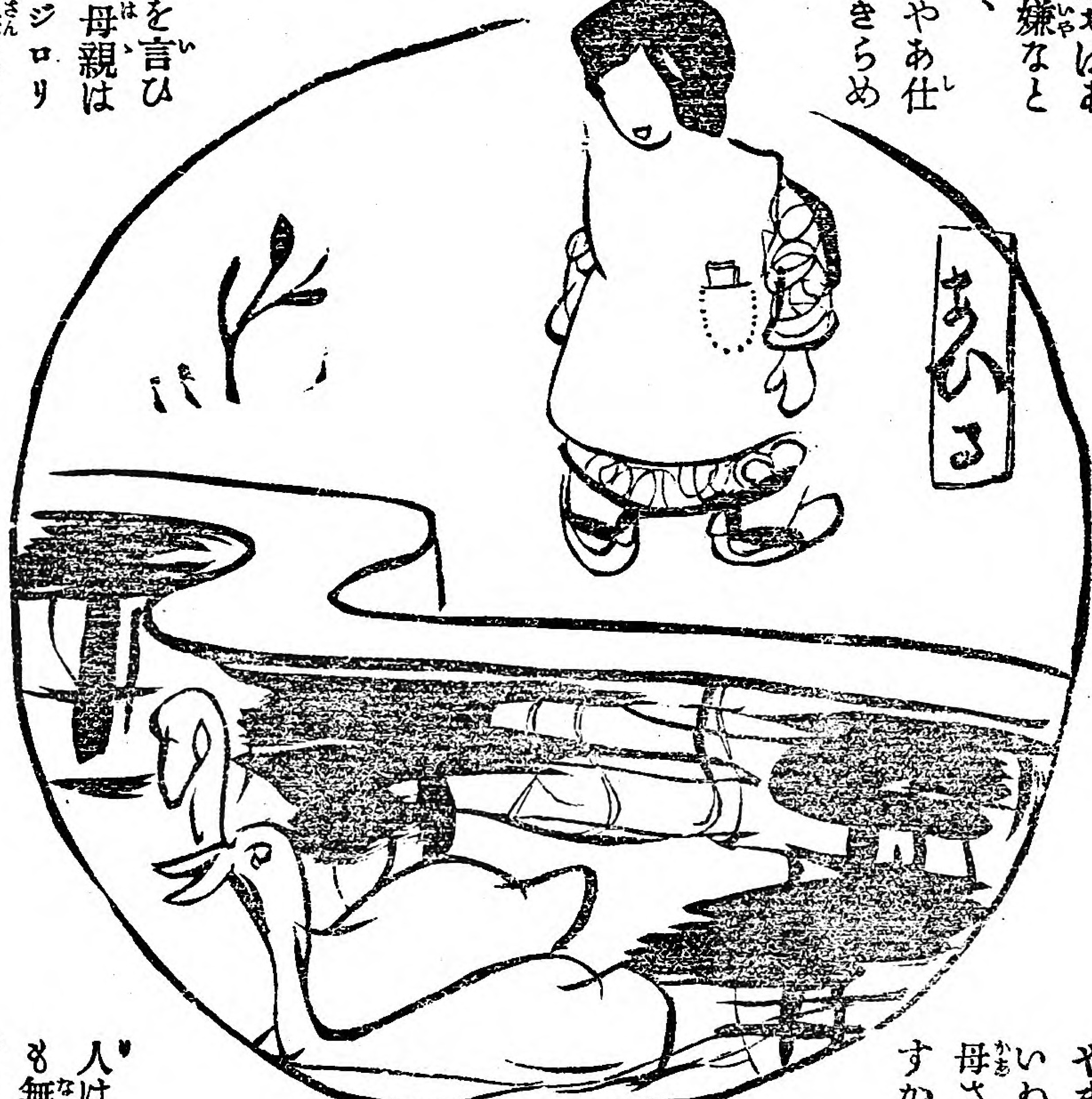
「嫌だわねえ、彼那おばあさんなんか」とさも嫌なと云ふ風をして云つた、「だつて來るつて言やあ仕樣が無いやね」とあきらめた樣に言た友さんの聲は不平の樣だつた。

お絲も友さんも緣日見に行くと云ふよりも、只二人つ切りで、しんみりと堀端を語りながら、歩きたかつたのだ。

「友さんお茶瓶付だよ」と、憎氣な事を言ひながら、出て來た、母親は白い眼で友さんを、ジロリと、見た。「まあ、母様たら隨分な事云ふのね、お茶瓶付だなんて、何時母様をじやまになんかしてえ、可いわ可いわどうせ私見たいな者にや、母さんので機嫌は取れないんですから」と、お絲は、相坂を降りながら、いらくして云つた。

「今頃の若い者は口ばつかり美れいで、何をやり出すか知れやしないからねえ」と、さも二人が言た樣な口ぶり。

「まさ母さん、實に母様たら榮螺のお尻程氣の曲てる人なのね、二人が神樂坂迄行くと云へば直に二人はへんぢや無いかなんて痛くも無い腹に探りを入れて見るんだもの、人馬鹿にするにも程が有るわ」と、お絲はむきになつて云つた。



あひる　京都　岸田ふみ子

「可いよい丶つては、絲さん解らずやに何を言つたつて解るもんか」と云た友さんの辭はむつとしてた。

「まあお前方は父さんの前ばかりおや優しさうに言てて、私一人になると、屹度だね、皆んなお前方の爲を思つて、云ふ事だのに、もう〳〵何んにも言ひやしないから勝手にお仕が可いよ」と、母樣はあつく〳〵も無いのに團扇を自暴にバタ〳〵用ひながら云つた。

「其りや私だつて蟲が有るもの、ちつとは勝手な事も云ひますさ」と、勢ひ込んでいつた、お絲は急に萎縮れ返つて「亡なつた母さんさへ居らしたらねえ、お父さんが親類の方だちの云ふ事を彼の時聞いて下すつたらねえ、まさかてんなにも、いぢめられやしないでせうにねえ」と、云つて、友さんの方を向いて、ニコと白い齒を見せて、冷たい笑ひをした。

母親は、自分の前に勝ほこつた樣に、友さんと並んで行くお絲の、思ひ切た根下りの銀杏返しに、華美な浴衣の衣紋を、グッとついて、黑襦子の半巾帶を無造作に締めた粹な姿を、引ずり廻してやりたい程憎くかつた。

* * * * *

お絲の實の母はお絲が十六の春、心臟を病んで死んだ。半年をすぎて、其の秋後妻話しの持上た時、父は氣心の知れた者がよいからと親類からの反對あるのにも係はらず、達てと、若い時分から圍て有た、藝者上りの今の母を家に入れた。

其の當座はお絲も、母も、互につ丶しみ合ておとなしかつたもの丶、一人娘の我儘一杯に育てられたお絲には、我物顏に、家中を搔廻してゐる母が、惡らしくてならなかつた。だから寄るとさわると、口爭ひばかり仕ていた。お絲は口爭ひして負ける樣になるといつでも亡くなつた母さんがいらしたら、父さんが親類の方だちの言ふ事を彼の時もすこし聞いて丶下さつたら」と、いつもこの奥の手を出して母親を、だまらして仕まふのだつた。

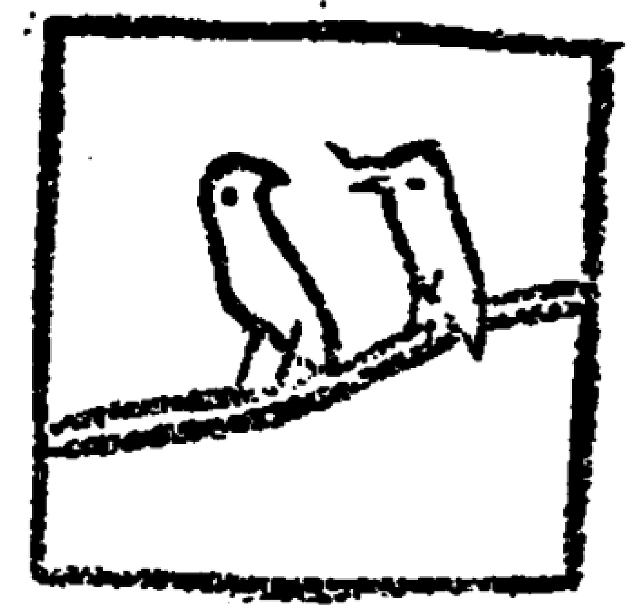
* * * * *

お絲は今迄の爭ひを、忘れて仕まつた樣に。

「涼しくなつた事ねえ」とうるさ相にほつれ毛を搔上げながら云た。

「あ丶、あの人込の中に入るのは嫌になつちまふね」と、云た。

お絲は、ふと又てんな事を思て見た。外にだれも居なくて友さんと二人切で歩いて見たらと。



散文

編輯局選

○八百屋お七戀のうた（天）

京都　しづか

カンテラの灯のやうな暗い重たい色調を帶びて浮んで來る記憶は、幼い頃氏神の縁日の夜によく見た八百屋お七のからくりである。

京の東の町はづれ、今こそ森の東に新木の香りの身に染む樣な新開の町がつゞいて、遠からずその森蔭を電車が通ると云ふ、けやきや椋や明るい光線の一條にだに宮の境内をうかゞはせじと枝はりのべて綠の雲と空をおほふた森蔭の闇はいくらか透かされた樣に思はれるけれど、私がまだ七八つの頃には、花やかな夢を見つくして暗いロマンチックに沈んで居る京の東の町はづれにはふさわしい處であつた。追憶としてかへりみる心にこそ、その暗がりを貴き物と思ひ樹立の深みにいひしらぬなつかしさもひそめど、その頃の私にはたゞもう恐ろしい處、物凄い處とより思へなかつた。寂しいけれど縁日の夜は、その暗がりに點ぜらるゝ黑赤い露店のかんてらの灯、それも十と數へられるのは稀な位だつたけれど、幼い私等はさながら灯をしたふ夏蟲の樣にそれにさそはれた。

からくりやのぢいさんは六十をもう餘程こした枯木の樣な背の高い、ひよろ〳〵した銅色の額や、頰にきざまれた皺の深さ、この人にも猶一片の肉ありやとうたがはるゝ程であつた。皺渇れ聲をふり上げては燃ゆる樣な若い男女の戀物語りを、色つやもなく歌ひつゞけて居た。何と云ふ考へもなく何がなし其處によつては弱らしい鞭にさす黑ずんだ繪を眺め、些の哀調をもふくまず、抑揚にとぼしい歌に耳かたむけて立ちつくしたものである、繪には廣々とした寺の廊下に美くしい吉三の前髮姿がかゝれてあつた、それを落すとはでな振袖のお七が、前髮の紅いかけものもしどろに片はだぬぎの思ひきつた姿で半鐘を叩いて居る、一番終ひの火あぶりの場は恐ろしくてよくも見なかつた、夢に見ておびえた事さへある、「江戸は八百八丁町……」そー云ふ聲が今もあり〳〵と思ひ出される、「にんじん大根に干かぶら……うたゝ寢枕のその夢にも一度我家を燒いたなら可愛い吉三に逢はりよかと一束のわらに火をつけて……七夕樣の申子で七月七日が誕生日でそれでお七と申します……十四と云うふたらよい事に……」其樣子がきれ〴〵に思ひだされる。

美しき悲哀に醉ふは快きものなれど、人の世の恨めしきまして戀には無情なき運命と思ば我が胸はいたむ、十年の月日の中に當時の振分髮の子は背たけのびて悩みしげく夢安からぬ身となつた、お合童やお下げや小さな五分苅頭やからくり臺の下にならんだそれ〴〵の行方や何處、逢はゞ面伏せて打つくらへる姿にあどけない昔の影はなからう。からくりやのぢいさんは、忘らるゝともなき月日の中にいつか縁日には來なくなつた。

粉本が有るのはわかつてゐますけれど、「うた」を入れた爲に光彩陸離たる感がします（Z）

何の據り所もなく、手本もなく、此作者自らが、これだけの事を考へ出し、作り出したものであつたら、何んなに嬉しい現出であらう、八百屋お七の覗きからくりと云ふことは何んなに深くわれ〳〵の思ひ出を動かすであらう、措寫も徒になづまず、新に奔らず、吾等の意を得て居る、此作者眞に技倆のある人なら續いて何か出色の文字が出來なければならぬ（辟者）

解放されたクラスの連中は騷り立てないと聲かなくなつたと辟者は曰ふ、やうやく〳〵お婆婆になりかけたのであらう。恰もよし第二第三のクラスの飛躍すべき時は來たのである、仰ぎ見ていたづらに咏嘆せんよりは戈を執りて彼等の壘に迫れ、文章即人格、人格即文章なるを知らば、おのれを僞り、人をいつはる勿れ、無きを有りとなし、見ざるを見きと爲す勿れ。眞、すなはち新。（Y）

○天狗岩（地）

多摩山の女

あつらへて置いた種子卵を、一つ一つに反古に包んで袋へ入れてくれたので、こはれやすいものを持つたやうな心地もせず、石くれだらけの坂になつてゐる門口を下りると、後ろの庭で、しーつと鷄を追つてゐる主人のこゑが、自分を追ひ出すやうに聞かれた。みると、棚の上へ蔽ひかぶさつてゐる櫻の木の間に、釣瓶竿のやうなものが斜に動いてゐるのに氣がつく。近づいて見たら、新らしい紺絣の單衣に、赤の多いメリンスの帶を小さく結んだ桃われが、冠木門の端へのぼつて、一生懸命つッついてゐる。兎の目のやうに黒くなつたのや、紫色のや、赤い瑪瑙の玉のやうなのや、また白南天の實のやうなのも交つてゐるのが、綠の葉の間から、振りこぼされるやうに動きながら、竿の先の割れ目へ挾まつて、あふむいて立つてゐる妹らしいおかつぱの子の前におろされるのが美しい。よく熟したのだけ手にためて、あとはお餅につかはれる位の葉と一しよに、足もとの川へ捨ててゐる、羨やましいほど嬉しさうな顏をして。

土橋を渡ると、河岸に無花果が二本あるきり、山に

は珍らしいものかげの無い道なので、傘を透して額に射す六月半ばの午後の日光は、まるで押しあふやうに熱い。小さいけれども、峠と名づけたいところで、道が二つに分れてゐる。遠まはりと知りつつ、いつの日かの火の燃えあとに、色のうすい薊の咲いてゐるのを淋しいと見ながら、大きな松や、樅の根をふまへて、遠くから旅人の目を引く天狗岩の陰に苦しい日を避けた名も知らぬ蔦の類と、羊歯の類が、冷たい汗のやうな雫に濕つて、柔かい綠の生命を保つてゐるのが身にしみて懷かしい、しばらく足をとめて、からだ中を水に浸したほどの涼しさをほしいままにしたふと岩に觸れた風呂敷に、卵のあるに氣がついて、あまり、險岨なところに居るやうな心地がしたから、靜かにそこをはなれた。



夕なぎ　小石川　吉村しづえ

何々のやうに（ように？）の形容詞が多すぎると思ひます、文章は例によつてうまいけれど、色氣が無い、どうしても二十六七といふところが聯想されます（T）私は此作者、即ち三ヶ島さんに囑目してゐる一人です淋しい秩父根の山麓に住居して、都會にあこがれて、現代にかぶれず、涙を隱し、戀を包んで、いつも忠實なる自然の味方となつてゐるあざやかなところは少い代りまめやかな心が充てゐるしかも相當に藝術に憧憬を持つてゐる、之が何より力强く思はしめる、物を觀る事の出來る人は、山に居ても町に居ても幸いである、進んで其立脚地を大きく深くなさい（評者）

○冷泉　（入）　みなとの女

「貴女は靜かで、騒がない。丁度沈んだ青色ですね、」Kさんはかういつた。

私は、去年の冬黄色い枯草の上に坐して、凝乎と大空の青を仰いで、冷たい冷たい光の漲つて居るのを見てしみじみと、我と我が心を味ひました。
何故に、我が心は――我が身は――我が血は――我が肉はかうも冷たいものなのでせう。
思ふまゝ人を戀ふ人の心中は、私には想像する事が出來ません。私は一時でもそんな幸福なめにあつた事はないのですもの。
この私にさへ眞の愛を吐露して來たらしき人も、決して少くはありませんでした。普通の少女、十代の若い女ならば、すぐ樣それにおもむくでございませうに、稍物の理を解し、文字の數も讀む事の出來る私は、はじめは、それをくるしいと思ひました。くるしうでざいました。
苦しんだ頃はまだ私の血には溫みが失せて居なかつたのです、あんな頃が、なつかしうでございます。
凡ての物の音が、胸の琴の緒にふるゝとき、少しの共鳴をもおこしませんし、口からもれる我が言葉は、我を僞つたものでございます。我が肌にふれるとき物皆は氷の樣に冷たいです。
私の位置は、それは安全なものです。
しかし安全なだけ、それだけ、心の淋しさを感ずる樣になりました。女は矢張りこんなもの。「私も矢張女だつた」今では、我と我をつよく嘲るのでございます。
あゝ今まで、人に思はれても人を思つた事のない私、こんな不幸なものはまたとありますまい。
それならばすなほに女らしく人に從へといはれれば、その言葉にしたがつたらば、愛してくれる人も少くはないに、「どうせこんな性分の女なのですもの」と背くそして、思ふまゝ反抗して置いて、後で冷たい冷たい涙がホロ〳〵とこぼれます。
あゝ何とした女でせう――。ほんとうに。
この頃の樣に濃厚なグリーンが世の凡ての物をつゝむときそこに强烈な日光がふりそゝぎますころは、尙更狂はしくなつてイラ〳〵として、何にでも強く反抗を企てゝ深い深いかなしみを味ひます。
我とそむいて我とかなしむ女、あゝ何故に人に從ひ人に交る事が出來ないでせう。

もしそれが事實なら、一面いたましひ思ひもしますけれど、自覺しつゝさうなのなら立派な誇りではないでせうか。(Z)
Z氏は餘り眞面目になり過ぎた。私はさう云つたやな情緒が――よし多少の誇張を含むにもしろ――若い健全な女の胸奥に起るものでない、これは無論ウソだ。――かいなでの現代的婦人思想を歌つた文として格別深刻な味調は認められないが、所々になか〳〵侮るべからざる機才がほのめいて居る。(白羊)

○待つ心

常陸　古島波奈子

裏板の何枚ある事も、障子の棧の幾本あるのも、數へ

あきて終つた、窓の花も、庭の草も見るのも物憂くなつた。凡てのものの皆に對して苦痛を覺えるのだ、何か新らしいものに接して見たいのかも知れない、今しも師の君と友よりの玉章、讀み終へて、胸に確と抱いた、故なくうるむ瞳を閉ぢて、聯想の絲をそれからそれへと辿つて見れば、かつて、小學時代我母校に、才媛のほまれ高かつた師の君は、今は、家庭の人となられて、靜な野に生活をつゞけていらつしやる。私はその御樣子や、お心持ちが知りたくてならない。それが一種の懷しみを以つて、或物の影に執着してゐるのだ。わが身のことでもないのに――。

友は別れてから、一年にもならう。その間三四度會つた事がある。いつ會つても友も私も冷靜な態度で親友らしい點は少しもない。私は自分の心をしみ〴〵考へる度に思ふ、友も私も、心の親しみを表情に表はす力が足りないのだ、それにどうしたのだらう、此頃の私、とりわけ病んでからの心持は、それらの事が空しいものに思はれるやうになつたのだ。

生溫い南風に送くられて俄に、響く汽車の音、おゝ、それよ私の心の底の底で、待つてゐる云ひ得ぬ影を連れて來るのは、あの汽車、私の幼い昔の胸には、恐怖の念も湧いたが、又忘れ難い印象を彫みつけた、汽車よ、私の待つべき或る影が、その一隅に俯向いて乘つて來る。其―それである、ピユーとあはたゞしう汽笛が鳴つた。停車場へ着いたのだ。どや〳〵と、大勢の中にまじつて、やがてにぎやかな町を、しよぼりと、淋しさうに、歩いてくる姿が、私を想像してるやうに見える。最あの急な坂を登つて、櫻の木の澤山ある所まで來た。いよ〳〵家へ近くなつたと思ふ頃、はつと、姿が消えて終つた、あゝ、矢張私のとこへ、來たのではなかつたのかしら、―いえ、何者でも、何處へ行つたのでもないわ、―迷の魂幼い私の胸に描かれた、懷しい影なのだから、だん〳〵に、うすれて、いつか、終ひに、消えるに違ひない。はじめて描かれたのは、風の妙に悲しい夕だつたと思ふ。一度は、消えるその時も、こう心を誘ひ行くような、風の日であつてほしい、最う、私はいゝわ、―あゝ又聞えるあの汽車の音、いくら待つたとて駄目!、淋しい思に耽らせるそれが返つて心の慰藉なのかも知れないのだけれど。

私も病んで何ものかを待てる一人です、あなたの待つ影は消えても私のは永久に消えませぬ(X)

何となしに、哀愁を感じさせる作だ。或ものを待つと云ふことが、如何にもウヰークの女性的氣分を味はせる。も一歩内裡に踏込んで書いてあつたらと思ふ。(KO)

○苺

紅子

咲殘りの花が五つ六つついて居た日でした、冷つてい

朝だつたもんですから、どの葉もどの葉もそのふちのギザ／＼のさきへ、一つ一つ可愛いゝ露をつけてゐるのです、私共がレース絲で袋をあむで、ふちへずつとモールをつけるようなふうに、それは綺麗でした。どうして自然にこんな巧い工合になつたのだらう、何か好奇な人が暇にあかして苺の葉を水晶の玉で飾つてみたといつたようなと思ひました、そしてあの紅い實のなる頃もう一度、這麽になつて欲しいと思ひました。

その後ある夕方、また見にゆきましたら、花はもうなくて、青白い小さな實が少しづゝかたまつては、ぶら下つてゐました、その弱々しいあはれなさま！營養不良の嬰兒を集めたやうです、早く明日になつて暖い日光にあてゝやり度いとおもひました。

先日見舞つた時は、もう白く大きくなつて居ました、今日、お午後からお裁縫をして居てふと思ひ出して、みにゆきました、紅い實が綠の葉かげからチラ／＼見えたので、うれしくつてかけよつた、あつちこつち葉を除けては、手にとつてみました、まだ白いのも、まだ小さいのもあります、もう腐れ氣味なのもありました。つや／＼した眞赤なのを一つそつととりました、初丸髷の手がらのやう、綺麗だと思つてみて居ましたが、いつの間にか口へはいつてしまひました。

また一つ――二つ三つ……見事に大きいのや、そんなでもないのや、實だけとつたり莖でとつたり、少しでも白い處のあるのはよして、やがて三四十も前掛に入れました、思ひ出したら氣がせくのでそんなにとつて居られず、急いで臺所へいつて――誰にも見せないで――泥を洗つて西洋皿に盛りました、眞白いお皿に淡くれなゐの雫が流れて、眞紅の苺と綠のうてなと、中々綺麗です、また考へついてかけ出していつて葉を四五枚引ちぎつて來て、苺の下へお飾りに敷きました、自分ながらうまくやつたと微笑みながら、丁とお盆にのせて、茶の間で話してる叔母さんと母樣の前へ、不意に出してやりました。オヤ――マア――綺麗――いつの間に――なんてびつくりしてました、私はおかしくつてをかしくつて。そういへばさつきから、何だかガダ／＼やつてると思つてたつて、果てはみんなで大笑ひでございました。

「綺麗だと思つて見てゐましたが、いつのまにか口へ入つてしまいました」は大出來／＼(S)

態とらしく、感情を誇張したり、乾ききつてもう黴菌の飛びさうなバタ文句を田舍の花嫁式にコテ／＼飾り立てたのより。斯う云つた風な有の儘を歌つた方がいくらいゝか知れない(H)

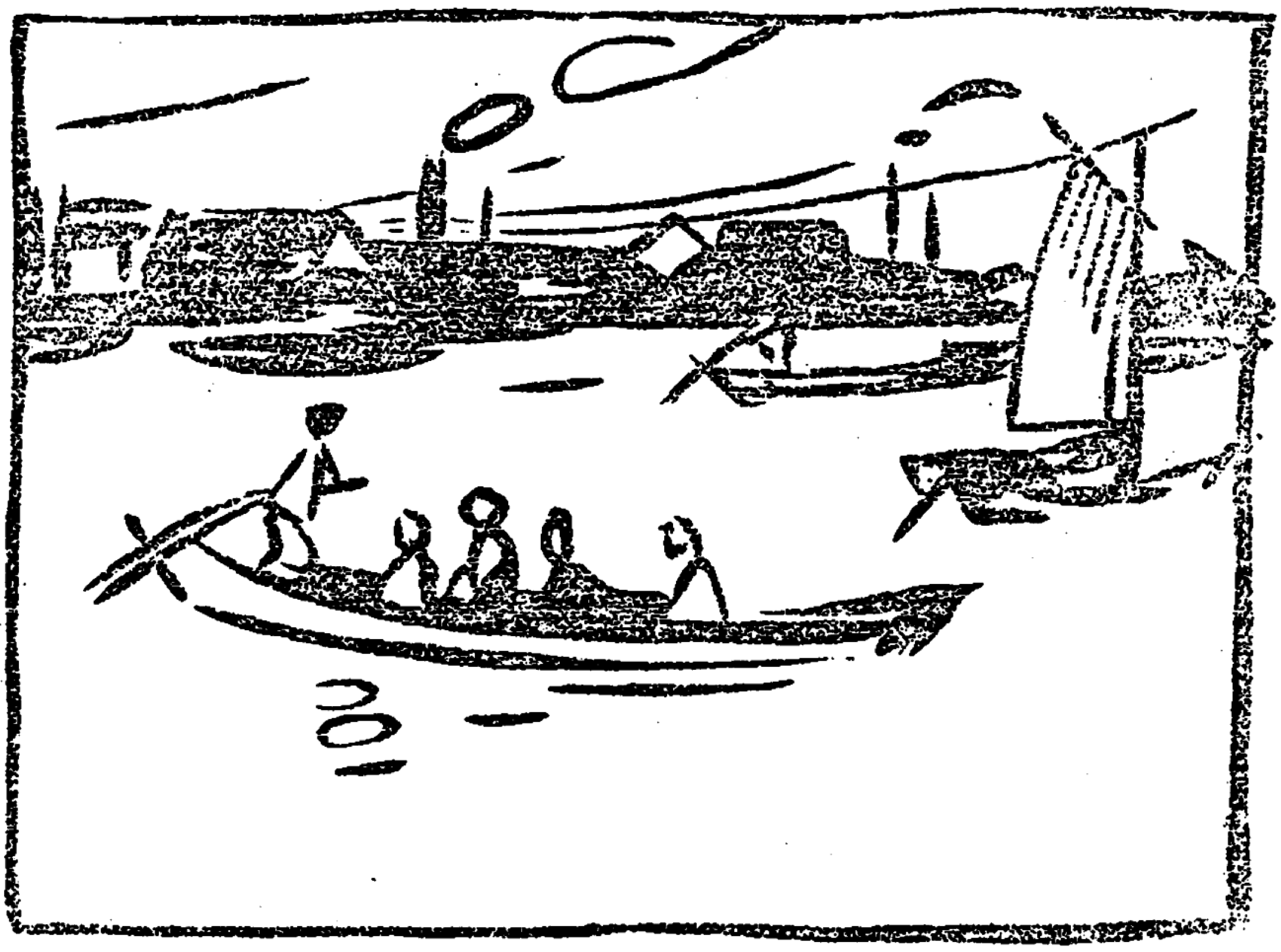
○毒だみの花

駒込　平塚白百合

郭公のこゑを聞いた翌朝であつた。

こまかい音もない雨は長く／＼つゞくらしく新綠の木の葉

一枚つゞに緑のかてをあたへて、いよ〳〵鮮やかな緑にもえた。にえ切らない蛙のこゑは垣の内外につまづきがちになく。私はてでめ櫻の白くこぼるゝ門を出て、そこにあつた骨太な傘をかざした。空溝にもさゝやかに水が走る。荒川の水量はいくらか増してゐた。袖を合せて傘の柄をかこうやうにして立つて、水に結ばる泡を見つめた。それは榛の林の青い〳〵下であつた。八方に手をひろげて天をつかうとする若芽の盛な勢は、瞳をハット見はらす程に美しい。河邊には白楊がなびいてゐる。その葉先からしたゝる雫は汀の水に豆程の泡を結ばせる。そして絶えず流れながら消える。それでも跡から〳〵と結ばつた。むなしい努力は二間と成功する事はなかつた水底には瀬戸物のかけらが沈んだ白い光りをつゝましくあげてゐる。河心はくらくにでつて、汀ほど水は動いて見える。曲汀九十九曲の流れは白楊



渡船　章花生

の青い影に吸はれて曲つた。舟が下る。生々しい白い木が舟をしづめる程つまれて。

對岸には葦が密生して、ゆるやかに西に東にゆれた。一様にゆれる中に小鳥のつばさのやうな閃は何であるか私には見えない。一しきり雨が白くこめる。其の奥に、春の歡樂にほてつた花の堤は默してゐる。

フト、キビ〳〵したよし切りがないた。

無言に水を見、けぶれる對岸を眺めてゐた私は、青葉打つ雨のしげき音に耳をかたぶけた。

心よいその細音の中に抱擁された私は何物をも忘れた。そうして何物をもなげ出そうとする。あだも、戀も、凡べてわが身にふれんとする何物も——

一たいに沈靜な光景は魂を盲目にしやうとはかる。トロ〳〵とぬるま湯に沈んでゆくやうな——。

ヒタ〳〵といふもの音に見かへると、竹の皮草履を素足にはいた男の子が煤だらけな鳥

かごを抱へて、つば廣な、丁度海水帽のやうな大きい帽子をかぶつて、林をぬけて汀に下りた。籠をいきなり、水にひたして、水際の靑葦引ちぎつて手ハ中にまるめると、ザブ〳〵洗ひ初めた。水輪は雨點より大きく、強くひろがつて消えた。

菊さまの舟して下られたのは光明な六月の鮮やかな、エーテルの類にふるゝ程美しい甘い日であつた。舟は舞蹈するやうに水に湧躍しながら快よくなめらかに辷つた。女詩人は舟べりを打ながら心からうたつた――

私はこの雨に棹さしてさかのぼりたいと思ふ。あやめさく六月の雨の日、漂泊のはて着くのは何處であらう。私はその地を何れとも指定したくない。只旅情のゆるゝにまかせて、とゞまりたい處にとゞまる迄である。

かつて、川下へと下つて行つて、櫻草つむ美しい人と、色彩のよいパラソルを見た。オールにぎつた若い人のデカンショを叫號して紫の水に波立てるのも見た。今は白楊のかげに釣鐘草の蘇枋色にさく六月である。異つた情緒をもつた女はどんなに瞳を輝かす事であらう。

詩もうたもし得ぬ女は、只心のカムパスに心の畵筆をつよくにぎつて、思ひのまゝ動かさう。そうして醉はうと思ふ――。

長目のネルはいつかしつとりうるほつてゐる。

強い毒だみの花の香が何處ともなしに流れてくる―。

仄ゞ聞く、作者は才貌兩全、名誌友問にかゝましと。靄々たる梅雨荒川の岸を罩めて水遠く百萬市塵ゝ裡に沒する所、傘をひらいて白楊の下に立つ、是一幅の畵ならずや。たゞ願はくば長曾我部菊子の曾遊をおもふと共に、沈痛なる彼女の文體に學ぶところあれ、君の文はあまりに輕し。（S、S、S）

白百合氏に認むべき特色は、その華麗なる都會的色調である。鋭い觀察の針で、あらゆる紀層を貫いて、深奥の士の溫味に觸れるといふことは、氏と何ハ關はりもないことである。――斯う云ふ斷案が許されるならば、氏としてこんな題材に筆を染めたのは既に自ら誤つてゐる。正直に云ふが、私はこの文を讀過して非常に物足りなく思つた、自然をうつすのにはもつと違つた眼が要る、（シヤンチオンム）

○六月の窓

東京　ひなげし

白い細い〳〵銀絲のやうな五月雨は、しと〳〵と無花果やざくろの茂り合つてる靑葉若葉にふりそゝぐ、いてふの葉末に宿つた眞珠のやうな白露は、時々思ひ出したやうにバラ〳〵散る、あら素敵に白い人が通る、あやめ色の蛇の目傘ひらきにして、紺がすりに水色しゆすと白地へなでして出した、紅入友禪の帶を胸高にしめて、紫めりんすのお包かゝへた少女が、きつと

裁縫通ひの方だらう、眞白にぬり立てた顔にえり足、着物が黒いので、餘けいきは立つて見える、ホヽヽ、あの澄しやうたらありやあしない、あつゝあぶない、足元御用心だわ、あんなに道が凸ぼこなのだもの、ホヽヽ顔を赤くしたよ、だあれもゐないのに……、兄の友達でＫ樣つていふ方があるのよ、その方大の妹じまん、妹さんに、白粉をもつと〳〵こくおつけつて被仰るのですつて、振つてるでせう、だから私ね、先日兄にいひましたの、笑ひを堪へて、あの兄樣、何故私にお化粧をこくおしつて被仰らないのつていつたら、馬鹿なッ……て怒鳴られて終つてよ、私此頃無暗に騷いだり、沈んだりして自分ながら變でならないのよ、未練男の涙のやうな五月雨は降つたり止んだりします、それが此頃の私のやうだと想はれます、散りかゝつた紅いさつき、空色した紫陽花に、サラ〳〵と雨がかゝつて、お池の蛙がガア〳〵鳴きます、ジイッと書齋にこもつて居ると、不安ないら〳〵した、氣持になるので、いつもこの窓によつては氣をまぎらすやうにつとめますの、いつでしたか雨の降つた日、島田に單衣きてゐた時、千鶴さん何故そんなに考へてるの……、淋しい人だ……、鐵ぶちの近眼鏡かけた幸さまが……、その時何故かハッとしました、幸さん私强い女と言ひ切りたかつたけれど、ダイヤモンド、スヰートホーム、ホネームンを夢見てゐた時は、幸福(?)だつたのでせう、それも儚い夢と知つた時、冷やかな笑は唇頭に浮びました、幸夫樣が畵は天才でした、その方が墮落したと聞いた時、思はず打ふるへました、兄さまは惜しい人だつたが……、つてあのきついきつい人まで泣きました、あの幸樣は人を敵にする事の出來ない方なのです、荒び切つた心にこつたハートの血潮のさゝやきにもきつと紅の花びらの散るのを信じます、强い力ある女の胸にはいたむ涙は流れません、なつかしとも想はないけれど、でも……

お轉婆さんかと思へば、涙も知るようだし、何と評してよいか、醉茗さんにタノミマス、(Ｚ)

『新文章』の表紙に當選した方、繪の筆も文の筆も握り得る若き女性、私は此方を尊敬したいと思ひます、單に此文章だけ見ると一とほりのおてんばさんのやうですが必然うではないでせう。觀察に一寸畫家らしいところもあるが、まだ稚氣を脱しません！、繪にせよ文にせよ、藝術は一に興味中心で進まねば引立ちません、奮發して下さい（醉茗）

○柿の花

新潟縣　星野かへで

井戸傍で白地の單衣を洗濯してゐると、井戸を蔽ふ樣に植ゑてある活々した柿の若葉が盥の水に映るので丁度綠の水がゆらぐ樣――、

六月のある朝である。――じつと水のしづまるのを待つてると、一葉々々朝日をあびて艶やかに輝いてゐる間から、靑い堅さうな蕾が見える、三ッかたまつたのも

ある、四ツかたまつたのもある。――　ふと故郷の此花の咲く頃を思つた。紫煙る八海山の綿を置いた樣な殘雪かさぎの形をして、藪の周圍に桐の花の匂ひが漂ふ時である。紅の玉の樣な粒々した桑の實が紫色に變つて桑取少女の白手拭が染る時である。

姉が十五私の十二の頃よく二人して桑摘した。朝いつも霧が立てこめてあつて、山の姿も紅い燃ゆるつゝじの花も見えないが行き〳〵するとはつきりする

麓の桑畑は皆しつとりと露をあびてゐてつめたかつた枝をゆすぶつてバラ〳〵露を落して摘む。暫くすると着物がびつしより濡れるのであつた。川邊の桑畑はいつでも午後から行つた。なぜだかわからなかつたけれど――

ある涼風の柳の枝を動かす日であつた、只獨りして行くと莫迦に眠むい。で柳の蔭の桑の木によつて知らず知らずの間にうと〳〵眠つて仕舞つた。何んだか、樂しい夢を見てゐると、遠くの方で唄聲がする、ギーグイと高く何かの音がする。其れがだん〳〵近く成つたので目を醒すと手がしびれて痛い、柔らかな細い腕には枝の痕が二筋赤くついてゐた。高かつた日も今山の端に沈まんとして、眞紅に燃え、下り船が船唄勇ましく、櫓音高かく、キラ〳〵する水面を滑り行く時であつた。桑は少しも摘まないのに――其時の心持ち――、悔と云ふか、涙がひとりでに瞼を流れた、なつかしい幼時の記憶よ――

桑摘みに行き歸りにふむ、庚申塚の柿の花、ポタリ！ポタリ！と微かな音を立てゝ絶えず散る、散つた花は、傾斜に成つてる道をコロ〳〵ころがる、其れがたまらなく嬉しかつた。故郷の思出は幼時の聯想と變つて、美しい繪卷物でもくり擴げる樣な思ひを辿つてゐるとガシヤンとバケツを置く音がした。ハツとして後を振向くと、例の皮肉屋の松本さん「貴女まだ盥があきませんか、何にしてゐらつしやるの？先生の事想つて……其れでも教科書の暗記ですか、勉强家てば違つたものね」すぐかうだ、あゝ美しい追想にふける事さへ許さないんだもの……早く今の境をのがれて、柿の花咲く村にと……つく〴〵想ふた、そして思ふまゝに自然の懷に入りたいと――

敍景の文は東京の孃さん方は指を咬へて、たゞ見てるだけだ、自然の惠みは田舍に多いと思ひます（Z）

しほらしい一味の色調がのんびりと全篇を流れてゐる。伎巧を弄せずして、これだけ書ければ侮れぬものだ。女らしい優しい作者の風丰を想ふ。（H）

少しの注意

散文に限らず凡て投稿をなさる方に少しの注意をして頂きたい、それは句頭を正しく切ることゝ、字を正しく書くことゝ、振假名を正しくつけることです、句頭とは文句と文句との間に『ゝ』や『○』をつけることです、めちや〳〵に澤山句頭を切つたり、少しも切つてなかつたりするのは困ります、字を正しく書くことは申すまでもありません、どなたの原稿にも幾つかの誤りの無いのは殆んど一人もないと云つてよい位です、假名なども隨分亂暴なのが多くて困ります少しの注意でも、之をしない人は何となく輕忽な人のやうで感心しません　（一記者）

小說選評

葉舟

△六月十五日　今日女子文壇社からの、例の小包が着いた今月は思ひ切つて早く着いたものだ、自分は今丁度。偶像と言ふ題で短篇を書いて居る時なのでこれの隙々に諸君の作を讀むのである、そして讀むに從つてこれを書くのである。

△『五時から七時まで』（東京山田花子）この作は、ブロークンな作だ。しかし、自分はこの作を愛することの作には、成程、眞實のものを見たなと思はれる處があるもツとその目が鋭く、その見る處が新しくなツたらよくなる事だらうと思はれた、

△亡き父を思ふ（仙臺椿本淑子）たゞ幼くものを言つたと言ふだけの作、いや味の無いのがよかつた、

△同姓の戀（東京小もと）材料の撰擇と言ふ事が第一、自分の見た事を重んじると言ふ事が第二、少しく新しい世界を考へると言ふ事が第三、平凡な抒情を強てると言ふ事が第四、この作者に以上の事について再考を乞ふ、

△不安（信濃優梨子）上手になりすぎた、輕く、圓るくなりすぎた簡單に整ひすぎた、も一度格を破つて出る努力がほしいものだ、

△六月十七日

△耕地整理（金澤むらさき）底に沈澱した思想があまりに貧しいその爲めにこれ等の作がたゞごとになつてしまふ、

△樂書（岐阜篠田とみ子）とにかく書いてある、たゞ話がまとまつて來たと思はれるが、何と言つて、この人の目が見て來たと思はれる處はない、

△寢室にて（小濱里子）口述者に話はしてあるが、眞に物語をすると言ふ上の用意は足らぬ、ヒントの取り方も下手だ。凡てに於て放漫な抒情がはづらひをなして居る、

△午后（東京、吾妻美佐子）この人の目は、恐ろしくチラチラして、少しづゝ、あちらこちらと見廻はして居る、たゞ狀景を、陰欝な、混濁した中にとつて居るので、その現象が持つて居る刺戟が僅に人を刺す、しかし、作者の心持は極めて放縱で、これ等のものから、眞に恐ろしい印象を受けて居るらしくない、

△悶（横濱、鈴木伊都子）壯士芝居の悲劇のやうな、作りものであるが書き方にいゝ處がある、

△心（秋田、咲代）無難の作だが、如何にも單純すぎる、この單純は複雜を統一したシムプリシティーにあらずして、複雜を知らぬシムプリシティーである、

六月十九日未明

△島の女（横濱月草）やはりすツきりとせぬ處がある、が、ずツと進んで來た、

△踊のお浚ひ（近江、わかば）しツとりと、有機的に書かれて居る落付いた處もある、感情の流動も見える、

△なさぬなか（東京、さかへ）意外に自由に書いてある、舊い型にはまつては居るが、この人の目は或は覺醒して來る時があるかもしれぬ

△不安の念（長崎、櫻草）甘い、

△二人の噂（草苺の花）味も素氣もなく書いてあるが、そこに強い力が、あるやうに思つた、

△姉（土佐、はざくら）この人などは目を覺ましてほしい、何時までも幼い涙をながして居るではないか、

△家付の娘（東京、古那夢）樋口一葉時分に見るやうな作だ、と言ふより別はない文章はうまい、

△お清（徳島、蔦江）細々と書いてあるが、くどいだけで、張り合がない、

詩

河井醉茗選

○歌麿の繪（地）

東京　白鳥正江

床の間

歌麿のあだな繪姿のにほひ
明るい日ににほふ黒髪の
なまめかしき春の日の夢の歡樂。
憬れの眸は
元祿時代に迷ひゆき
待つものゝある如く幾夜か追ふ夢の
果敢き狂ひ。
編笠を洩れし長つとは﨟たげに
元祿袖の大丸形はいと優しく
華やかな模樣は追憶の深みに誘ふ…

眞に歌麿を愛慕する心持は出て居ない（評）

夕暮

小鳥の羽ばたきの繁くなる程
夢のやうに淡々と薄れてゆく夕暮
灯もなき室の古びた白壁に
白き花びらの接吻の跡みれば。
痛ましくも病みしほつれ髪に
生の線をぬけ出でて。
絹カーテンより洩れし灯に
かすけく顫ふ青きすゝりなき。
あゝ、悲しめる心に、冷たき胸に
暗き夢路のしるべなるハモニカの
闇の音。

わざとらしくていかぬ、これだけ官能的な文字を使つてありながら、我等の心を動かし足らぬのは惜しい（評）

朝明け

晴れやかにすらすらと
しら〳〵と明けゆく朝。

ものはみな華やかに、靜かに
朝明けの快さの華やかに。
流れゆく小鳥の聲は
おど〳〵した都會の窓の白にしみ
空しき室に優しき子守唄のみだれかかる。

此作が一等いやみがない（評）

○太陽と茅花（人）

金澤　むらさき

若葉のひまよりさしのぞく
少女はづかし、あざやかな
笑顔を見せた
今朝の太陽は。
路の傍の茅花の穗
たれまちわびてほゝけてし、
ときめき渡る初夏の
風に心もそゝらるゝ。
すべての榮とよろこびに

微笑める哉今朝の太陽は、
つばなの穂はも、しろ〴〵と
佗しく太陽をばうけてけり。

言葉は豊かに持つてゐる割に、能くなげやりの作をするので、あなたの爲に惜んでゐた、此詩も投げやりのやうに見えるが、それでも何處か面白い氣がする。幸に一轉機となつて欲しい(評)

○心の缺陷

浅草　露木あき子

限りなき悲哀の空色にかこまれて
吾が心の空洞は、酸の如き月光の忘却に充ち。
あゝあゝ忘却の滴りに充たされたる
夢の空虚と
幽かなる意識の葩は青き青き衰弱の
極みに
空しく神經の梢を離れ、生命の小鳥
翼を收めて眠る。
かゝる時、地平の林に魂は隱れ
無人島の沙漠に疲れたる想は迷ふ。
時よ、汝は水の如くに流れ
昏て溺れたる愛情の湖より
更に果てなき北極の氷の中に、痛ましく吾れを送らんとはする。
悲しいかな、午前零時後の夜半の空虚。
我れはまた、今宵忘却の夢より醒めて
いとも淋しき曉の意識の前に何とか思はむや。
あゝ忘却の夢の滴りに充されて
底知れぬ空色の心の缺陷の青なる池よ。

本誌では珍しく優れた作であるが、女性の面影を見出し難い(評)

○悲哀の音

常陸　古島花子

あれ笛の音が風に誘はれて、かすかにく――
歎をうたへるやうにね、ほら聞えるでせう
何處からでせうね、私わからなくつてよ
こゝへ息んで聞きませうよ、此淋しい野に
他に誰も居りませんわ、たつた二人きりよ
こうしてね、靜に聞いていらつしやいな
あの悲しい淋しい笛の調を、何處からでせうね
矢張あなたにも分らなくつて
濃いみどりの草木、倦み疲れを息めて
眠つてゐる懷で悲しい名知らぬ鳥がなく
鳥よ、お汝そうらぶれて
こんな夜更けにこんな淋しい所に
さまよい泣いてゐるのか、悲しい、
鳥よ

おうあの悲しい〳〵餘韻は、何んと
なく
私には懐しいけど、けれど〳〵
沈んだ調子にだん〳〵と
疲れた、私たちの魂へ
近づいて來るのぢやないかしら
月光の下をそつと通つて、そして
ふたりの、ふたりの、秘密の玉
命の露が結び合つた、愁の玉を
誘つて行くやうだわ、あれそうだわ
いくらあせつても、あなた早く、早
く
あゝついに、あれあれ、悲しいわね
あゝあこれから私たちはどうしたら
いゝでせう

囚はれない自由な形式に、自由な心を歌つてゐるから、讀んで氣持は好い、但し「矢張あなたにも分らなくつて」までは好かつたが、爲たの、玉だのを持出してからは變になつてしまつた(評)

○星

大阪　杉山かし

……星……
星が輝く、暗らい空に、
初秋の潤んだ空に、
青ざめたリボンの様な、星の光りは
だるい眠むさうに、夢の様に瞬いて
は、
次第に此世を遠ざかり行く。

夕雨

雨が降る――僞りの子の僞りの涙を
集めて降らしたやうな、
夕べの雨が降る、
いたましく破れかゝつた、鷄小屋の
屋根に――、
病む妹の痛い胸に――、
月も出ないのに、月を待つて咲いた
月見草のやわらかい、花びらの上に
――。
容赦もなく、沁み込む樣に、
冷めたい夕べの雨は降る。

雨の方が所謂降る雨の氣分が分る(評)

○初夏の心

土佐　はざくら

鮮なる涙の記憶よ
速に去れ！吾目の前を、心の面を
如何に忘却の歩のおそき……
やがてよこぎりてゆく水平線。
海の彼方にどよめきのかすかに
淡き、淡き夢の國
そこより來る――。
初夏のまひるの光、毒だみ色を思は
せ、
胸の潤葉をかきみだす、
そは遠き夢の悲しみと
わが目にうつる群集の色彩あればな
り
されど今、さすらひ人は、
水青き棧橋に別れ行く船の寂しみ
空想の光も消えてわびしげに胸顫ふ
一瞬時よ……。
あゝ、過ぎし日の夢の悲しみ、

再び吾胸にきざさずにあれ。

掴んでゐるものはあるのだが、表現が徹底しない、詩の上にもあなたの性質の勝気を表はして下さい(評)

〇夕暮

信濃　紅百合

音もなう——
靜やかに、いと靜や
かに、
たそがるゝ湖ぞひの
小道——
殘り惜しげにも
ほのに匂ひし
夕映のあとなく消へ
ぬ。

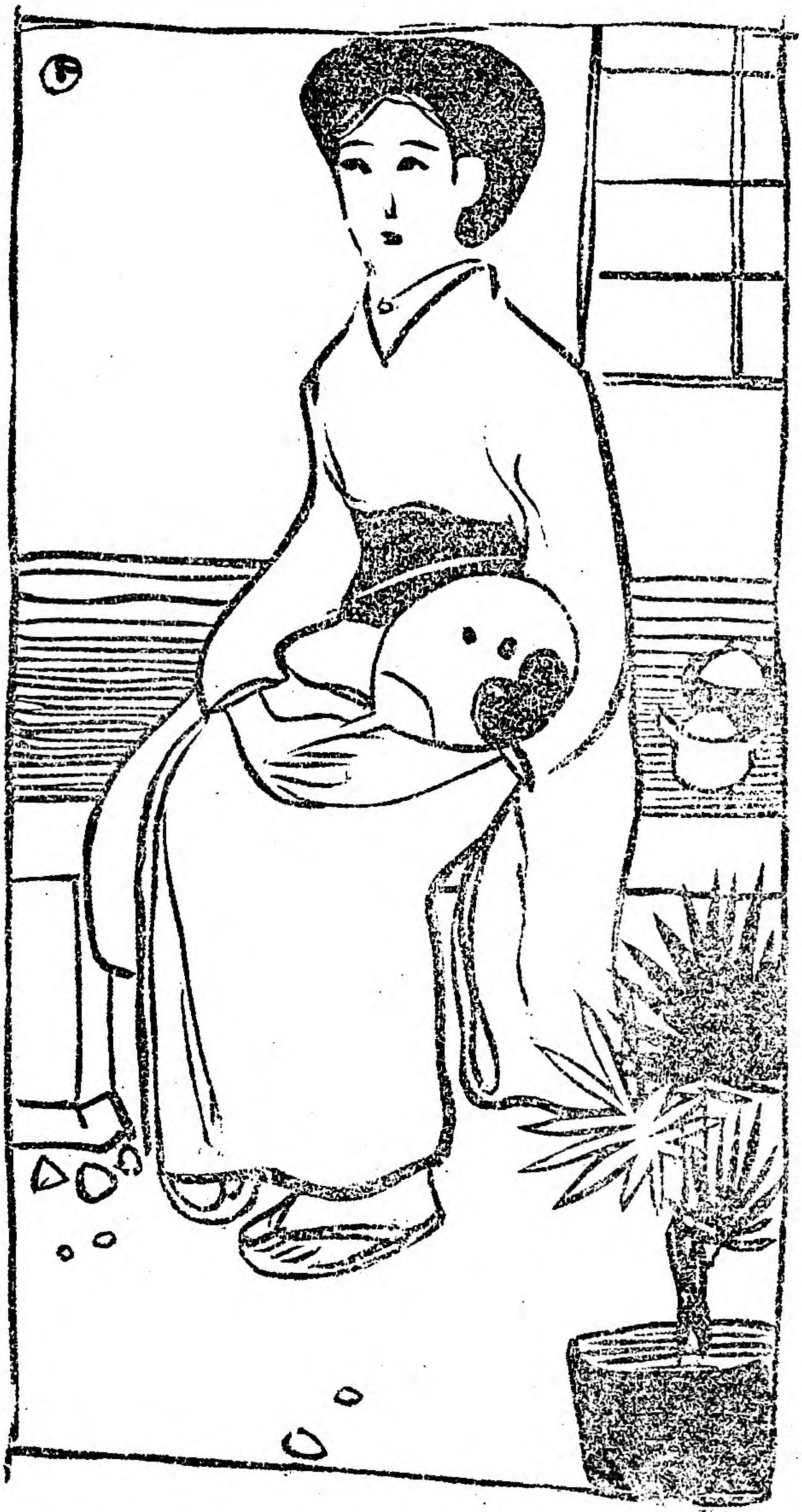
ひねもすを、
いとも烈しき——
天なる神の
熱きキスに苦惱し
小路の小草
すくすくと丈長きかもじ草
柔きクローヴア、よもぎ、たびらこ
み息より今し逃れて

冷やけき露を含みつ
そよら渡る湖風に
ほ、とこそ息づけ。
するすると音もなう——

迫り來る夕暗よ、
おもむろに、徐に
くらきに沈む山山、

只見ゆる岸邊の
ほの白きかりんの花と、
紺色に——重く光れる湖。
なつかしき靜寂よ、

苦惱める子にふさへる境
みちろぎもせで、そめば
あゝ、しらくと涙ぞ傳ふ——



夏の縁　北海道　岩本とよ

冷たき双頰——
ほとばしるこの涙。

されど——
このたまゆらよ
胸のいたみ少しく經む
なつかしき湖邊の夕暮れ
このまゝに——
只このまゝに
永久にあらまほし。

月よ出でざれ
さらば又、堪へがての
明き——
日も出でなむに——
夕暮れよ、只このまゝに
永久に、永久に去るな。
　整ひ過ぎて生氣がない（評）

○午前十時

東京　楓花

午前十時……
目白坂は寂しい。
不透明な瓦斯で掩はれたやうな
灰色の道に自己の冷たい跫音が
細かく泌みて行く。
苦しい陋道の中よりぬけて來た、
自分はホッと偸むやうに息をした、
重くるしい暗い亂れた空氣と
自分の不安とが平行をなして
淡い影を地に殘して行く。
鐘が鳴いた、
傍の鼓が顫へる。
自己を明らかに意識した時
又新らしい不安が起つた、
午前十時——
目白坂は寂しい。

○朝

熊本市　長野白哀子

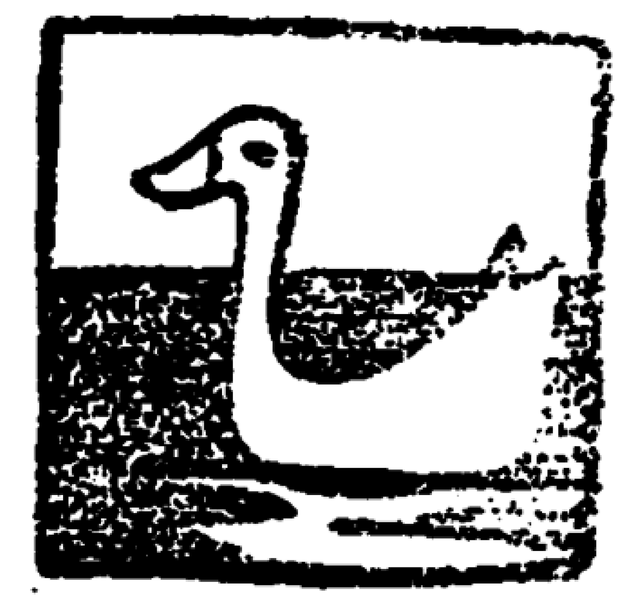
いたづらに長い並木、
そのひとつ〳〵を、
柔に抱擁した霧の色、

丘に沈まんとして、
泣きぬれながら躊躇へる
消へのこつた白い月の光り
こうして何物にか抱れたい樣な
うら若き心を
うち……淺し……うち淺し
冷たい朝の氣がさまよふ
それを追ふ
吐息の樣な風が
何處へとなく消えてゆく、
いつまでも
逝れさうにない霧の中を
靜かに歩む朝……

○道

京都　井上よし

長い道が　細い道が　何處までも何處までも續
いてゐる——
何處にゆくのか　何處まで道が續くのか
それさへ知らずに私は歩むでゐる
ふと小川の岸に出た　清い流れが　淺い流れが
下へ下へと流れて行く　サラ〳〵——サラ〳〵
蟲の泣く樣な幽なせゝらぎが——夢の樣に耳を
澄ふ——ふといひしれぬ悲しみが胸を閉した—
—あゝ——私は休まずに　どこまでも〳〵　眞
直に歩いてゐる　何者かに足をとられた樣に—
—パサ〳〵〳〵草履の音が耳をそゝる——あゝ
私はどこまで——此道を——辿るのだらうか
　もう言ひふるした思想だが、詩らしい作には
相違ない（評）



和歌

與謝野晶子選

○(天)　丹波　田中孤蝶

はかりえぬ我を靜にうち見つゝ默せる外にすべなきものか

○(地)　信濃　關屋愛子

驚きぬ日輪見れば紅く炎え向日葵花と口づけをする

○(人)　宇都宮　松井綠子

初秋や戀しき人と水引の花少し咲く家に住むかな

佳作

○　京都市　島本久惠

星の界のいはほも草もむらさきに光る時きて地はくれて行く

○　岐阜　葛の葉

君も我もともに二十を越えながら此のおろかなる文のからども

○　常陸　宮下すい子

夏の夜の樂屋の灯かげ緋あふぎの花のやうにもなまめかしけれ

○　小梅　紅子

この家にこのごろ君が住むことのよろこびみちて牡丹みな咲く

○　陸前　浮草子

いつとなく親のみむねを迷ひ出で寂しさに泣く少女となりぬ

○　土佐　はざくら

運命の神は織手におはせどもつめの長きがくまたかに似て

○　神戸　川口登藏

戀といふうらはづかしきことなどをわれ思ひつゝ青き海見る

○　信濃　冷光

われ日ごろ世をば恐れずなるものか若き血汐の冷え行くに似て

○　札幌　靜香

わが十五母にすねては涙ぐみ土藏によりてチヤルメラをきゝ

○　小石川　山田濱子

神の子と自ら言へる兒を生みし人のやうなるたふとさ

に生く

○　熊本縣　しらはぎ
二年を獄の中に囚はれて放たれし日の寂しきものか

○　神奈川　しうん子
湯の面にうつれる影は醒むもうし醒めぬもうしとまどへるかたち

○　豊後　北山花月
紫のあやめさく日はめぐりきぬ君に別れてなゝとせの日も

○　宮城縣　齋藤静子
高き木にひぐらし鳴けば我がこゝろかの日輪のごと沈みゆく

○　府下　小島美雪
若き日を面かげに見て衣ほどく絲引く音のさびしきものか

○　伊勢　駒越くに子
鶯の餌などすりつゝ此頃は少しく君の戀しきものか

○　東京　藤堂楓花
群集の中に漂よふ青き火のさびしきに似るわれの若き日

○　下谷　島てい子
沈みたるしば笛の音を我は聞く初夏の夜の霧の中より

○　安藝　竹光節子
古さとはものゝなつかし釘をもて兄とほりたる木の根の傷も

○　大阪市　小泉貞子
夏のあめ鳳凰堂のひろ庭の紅のつゝじにしづくする時

○　加賀　村田いと子
あらぬことかぞへあひゝつあはれにも淋しき中となりにけるかな

○　仙臺　橋本滋子
二十日程腦病院に入りてある姉をおもひてなげく夕ぐれ

○　宮城縣　長谷川紫葉
夏の日の暑き野に居るものとしも舞つる胡蝶のつばさの白さ

○　川越町　吉田わか子
毒草のくれなゐに咲く花の色見つめてわれは君を思ひぬ

○　三河　水竿
前の世は天龍川の底に居て人とりしてふ魔なりけむわれ

○　渡島　川原華子
戀といふ形もあらぬそのものにとらはれいます髪の末まで

○　徳島縣　蔦紅
ましろなる日淺き雛に餌を蒔きぬ少女ごころのもゝをかしき

○　夜香
わが胸によくにたらずやものすべてもゆるかたちす七月の空

◯　愛知　紅樓

朝風ぎや遊に向ひてわれ呼びぬ伊勢の濱邊に人のきくべく

◯　わくらは子

かりそめの戀とは知らず昨日までたのみこしかな世さへ忘れて

◯　山城　木の花

まぼろしの如くはたまた夢の如わが前に來て泣きしかの人

◯　上毛　落葉

咏きなさしみ〳〵思ふ夕ぐれの忍び泣きにも似る水の音

◯　小もゝ

ふと吾等悲しむ如く手をとりぬ水平線を月昇る時

◯　宇都宮　松井鹿韮子

乘する小暗き山の坑道を出づれば白き百合の花咲く

◯　神戸市　森花愁孤

よわき故わが悲みをわが戀を行きて泣くなりさゝが河原に

◯　伊豆　鈴木けい子

やがてわれとらへられんとなすならし隠えの奥に獄の見ゆる

◯　秋田　愛子

初夏や君を思ひて木の下の白き花つむよき夜明かな

◯　長岡在　千草子

山は皆闇に消えゆきわが軒のしのぶにかかるたそがれの雨

◯　愛媛　章花

手すさびに琴などひきて歌うたふ君が來る夜も君の來ぬ夜も

◯　靜岡縣　蕣賀

ほのかにも面がけ見たる君故に一日わが泣く紫陽花の窓

◯　かへで

君戀ひ青葉の窓に身をよせてなきぬ皐月のたそがれ時を

◯　新潟縣　岩本芳子

ほのくらき木立の中のあづま屋はもの思ふ子のやすらひところ

◯　大分縣　小崖露子

椽に出て蚊遣りたきつつ歌などを語り給ふがなつかしきかな

◯　本郷　平塚白百合

枇杷の實の黄なるぞ光れ長雨の心うみたるたそがれの中

◯　順子

雨ののち土の匂へる野にいでゝこし方などを思ふかなしさ

◯　伊豆　渡邊やす子

あはれなり君待つ野路の足音ゝ我と知りつつ振り返るわれ

◯　麴町　牧野銀杏

うたたねの白き腕にゆく春の小蝶とまりぬたわたわとして

◯　信濃　優梨子

捨てられし少女の如くあはれにも五月雨に散るすゝかけの花

◯　和泉　田中きよ子

初夏の森を歩みて人待てば闇に眞白き花みだれちる

◯　神戸市　宮本こと

くれなゐのさうびの花にこし方の夢よりこよと枕邊におく

◯　牛込　西村しのぶ

南風麥の上を吹き森を吹き思ひ疲れし吾が胸を吹く

◯　山梨　吉田邦枝

曉の星かげあはく成りもゆく山裾にしてほとゝぎすきく

◯　東京市　黒田紫蘭

初夏の若葉ゝ匂ひよろこびて浴みする人髮をとく人

○ 長崎市 あやめ
思ふどち花のこかげに語り居ぬわか紫の皆秩して
○ 常陸 古島花子
たふときは君なりわれは野の草の花の一つにもあたらぬ少女
○ 東京 夕つき女
ものみなは眠りにつけど吾たまは悲しみを聞く悲しみを見る
○ 信濃 白露
おとなしく衣など縫へど少女子は夢さへも見る戀人の夢
○ 長岡市 秋月すゞ子
夏の日もあめのふる日はさびしけれ萩の若葉も日まはりも泣く
○ 京都市 冷露
何ごとも知らざるひとに君が上囁きやりし子を自ら憎む
○ 有馬 登芽子
濁流の渦巻く中に落ちし花のそれにも似たる皐月の星よ
○ 姫路 磯菜
時ふれば褪せ行く花のさがぞとも知らぬが如くわれをよろこぶ
○ 芝區 東野歌子
水無月のねさめの床に子規ひと聲きゝぬ鹽原の山
○ 伏見 みどり
かたりつゝうち興じゆく三人づれ蝶とも見ゆる綠葉のかげ
○ 常陸 田村りき子
草の原月見る人も夏の夜はうちはなやぎて歌ふものかな
○ 大阪 名もなき女
奈良の寺順禮の子のやすらひて錢とうでぬ山ざくら花
○ 橫濱市 田巻芳枝
なにとなく淋しきまゝに窓により歌などうたふ夏の夕ぐれ
○ 福井 明の星
にごりたるこの世の中をのがれむと心あせれどつばさあらなく
○ 麹町 山内枯翠
人の影淡き夜の灯に照されてあるを覺ゆる月見草かな
○ 上毛 關口千代子
男こそ憎きものなれかく云ひてあれども戀し四つ上の人
○ 千葉縣 鶴岡吉代子
夢なれどこれははかなき夢なれどさめたるのちの心ときめく
○ 長崎市 井村絹子
螢追ふ少女の袂夕闇に白ばめるこそなまめかしけれ
○ 岡山市 房之
少女子は白き手のべて美くしき男に似たるかきつばた摘む
○ 土佐 はぎ子
紫の衣を着たる舞姫も秋の夕はさびしかるらん
○ 美子
わが嫁ぐ日のくれなゐの衣をばおもかげに見せ金蓮花咲く
○ 美作 美津田
たのしみものぞみもつきしわが命なほもあるべき明日に明後日に
○ 下澁谷 風玉女
吾が力限りのありと思ふこと多しあるひはおとろへにけむ
○ 廣島縣 兒玉喜美子
何となく涙こぼれぬ春の夜になつかしく見る君の住む方
○ 下關市 木本蘭子
わが手もて眼蔽へどあたたかき涙溢れ來人をおもへば

○　草雲雀

思ふこと六とせ七年變りなし熱き涙もいみじき裂も

○　岩手　清子

美くしき眞のわれにかへるべく一人の人を戀ひそめしかな

○　岩手　ひなげし

畑にゆき青ほゝづきの香を嗅げば幼かりけるわれの浮びぬ

○　熊本　英子

さみだれにくるる川瀬の其處此處に蛙なくかなほろゝほろゝと

○　新潟縣　谷　静江

そぞろにも雨にくづるる緋の牡丹戀の少女のはてにまがへる

○　宮城　馥子

月ふけぬ木かげのくらき庭に居て南に北にほとゝぎす聞く

○　岡山市　桃のむら女

水草紙その文字の如消えてゆく情をおもひ泣く子となりぬ

○　美作　水田邦子

かくまでに君をおもひてなげくなる悲しき我は死にいそがまし

○　大阪　杉山かし

戀しらぬ潔き少女の笑める如曉にある月見草かな

○　鶴岡　野口菊子

あたひなき石も錦につつまれて人目まどはす世にはあれども

○　近江　鈴蘭

戀人をはぐれさせつる若人のみだれ心に似る藤の花

○　京都　芳子

吾かために泣く五月雨にあらねども淋しき音のなつかしきかな

○　横濱　月草

なつかしき君と別れし若き子は月見草咲く濱に泣くかな

○　大阪　高山米子

冷たしとうらめる君よゆるしませたらちねもなく生ひいでしわれ

○　神田　美子

湯あみして君とさまよふ夕月夜行てに白き白百合の花

○　房州　岩波篚子

戀をする人のくるしきためいきをぐびじん草の花蔭にきく

○　長岡市　星野小百合子

疲れたる役者の如きまなざしをなす雨の日の露草の花

○　關屋　愛子

夢にして咲く美しき花はあれさめては誰れに何語るべき

○　大分市　千草

さと落つる風にまどひて我庭に二つの蝶はともなひてこし

○　美作　瑠璃子

ほゝ笑みて眠る吾子の枕邊に小蝶とびきぬ春の夕ぐれ

○　岐阜縣　中島幸枝

小山田の稲葉を傳ふ風の香も離りてありぬ山百合の花

○　相模　中村貞子

とんぼなど影をうつせる水底の白き小石の清ゝなるかな

○　會津　桑原仙子

都にはわが戀ふる君の在すぞと夕燒を見て夢のごと居る

○　岡山縣　野崎よしの

都べに行ます君よ咲く花の此の川添ひを忘れ給ふな

○　港の女

我が十九紅き傘など殊更にきちがひめきてさすわが十九

○　廣島　後藤壽美枝

百合の花兩の腕にいだき寢るこの夜の夢をことほぎ給へ

○　廣島　後藤あやの

田植唄きゝてわがよる木の下を二尺へだてて姫百合の咲く

○　京都　松本都僊子

なつかしき音樂堂の窓の灯はたわやめのごとわれを見るごと

○　大分縣　涙の女

雨の降る朝ぼらけ哉落ち柿に打たれしごとく痛みぬ心

○　北海道　美喜子

北の海見捨ててゆきしその人の文の心に涙ながれぬ

○　福山　古城

白壁に少さく君が名を書きしそのかみの子は大人になりぬ

○　田山きよ子

戀しつる命荒めば淋しかり風に吹かれし蜘蛛の巣のごと

○　松本市　矢口貞子

しろがねの女神の像の片あかり戀しき人のなぞ思はるる

○　芝區　枯葉

いと赤きダアリヤの花うなだれぬもののかなしきたそがれの雨

○　朝鮮　酒匂美子

櫻の葉茂る小窓にうたゝねの兄美くしやひぐらしの聲

○　松山　さゆり

蚊遣りたく煙にまじり匂ふなるおしろいの香のなまめかしけれ

○　德島縣　翠子

さびしみは野より山よりおそひきぬわがゆく春の小さき家に

○　霧島　春子

われも泣き君も泣きにし丘なれどいと花やかに青葉しにけり

○　神戸市　足立春子

赤き戀青き戀など若人はものゝすさびになすときゝてき

○　佐賀　さゝ船

君まさぬゆふべの縁にさびしさをわが思ふ時蛙なくかな

○　三河　追谷とも江

西の空心みだして少女子のありと知るかや夕焼もゆる

○　尾張　佐藤承影

玻璃の窓立てて動かぬ少女子の月しろに似る面かげもよし

○　秋田市　咲代

抱かれて悲しき胸をいやすべく訪へば姉にも涙のありぬ

○　常陸　田村紫色女

赤ばみて低く垂れたる柿の葉の風に揺げるうら悲しさよ

○　名古屋　加藤花子

花つみし春の木かげはいつしかに青葉の山となりにけるかな

○　尾張　榊原銀子

山に住む奥家も霙の谷間より春の薄黄の鶯のはるかな

○　岡山市　洋月子

下むきて物思ふごと咲き出でし姿優しき白百合の花

○　名古屋市　波の花

さめしごと針もちかへて息つきぬ逢ふ日近かづく胸はみだれに

○　大阪　多野なみ子

はからずも降りぞ來れる夕立に百合咲く茶屋の軒にいこひぬ

○　上毛　小澤碩子

ある時は僞はり事をおん前に語りてぞすれ二十の少女

散文（其二）

編輯局選

○飛行機

川越みどり

遠く何處かで雨戸をくるのをうつら〳〵ときいて、また夢にいろうとして居る時！表はにはかに人々のざわめく聲！何事かと床の上に起きかへると、一緒にきんやがお目覺めになりましたか、お早く御らんなさいまし、飛行機が參りましたのですよ。ときいて綫みだれ姿の細帶のまゝバルコニーにかけ上る。

あゝ壯快！快絕！ファルマン式だと何處かで叫ぶ。いまだ、新聞紙上の小さい寫眞にその飛揚のさまをおぼろながらにみたつきり、そのとばざるものさへ見ざるに……。

雨後の朝のシットリと露ばんで、まだ明けやらぬ淡紫の空！を、東から北へ、北から南へ、發動機のゴーといふ音をあたりにとゞろかせて、肉眼では僅に坐乘の人のたゞ二つのかしらをやう〳〵見得た位。

見る見る川越町を一週して、南の空に下りゆく美しき其のかげをあかぬ思に見いつて、無眼の感慨にうたれた。去ぬる月の日曜わざ〳〵所澤まで車をかつて空しく歸つた私は居ながらの壯快なる飛揚をみて歡喜の波に胸を躍らせた。

この日「ハアーえらい世になりましたなあ！人が乘つて空をとんぼのやうにとぶなんてまるで天狗の仕業ですわい」と橫町に聲がしたので一寸窓からのぞいてみたら腰のまがりかゝつた、白髮あたまのぢいさんばあさんの二人連れであつた。

四五年前其の時分中學へ行つて居た從兄が米のお祝すぎたお祖父樣に『お祖父樣、いまに空中を人がのつてとんぼのやうにとび歩くものが出來ますよ』と云つたら『何んにイそないとができれば天地がひつくりかへるわ』と何をいふか位に孫のいふことを笑つたお祖父樣はもう世にないけれど孫のいつたことが本當になつたのである、めいどの土産話にするお祖母樣のまだ御丈夫でゐますのを從兄のためによろこぶ。

一日もとゝまらず人も世も着々歩をすゝめて、從兄もちかく學士の夕イトルを得て、美しい髯を御なじみの從妹にみせるだらう。

夕立がおこつてよりつゞく雨に暮れた。

この夜青葉城下の從兄に飛行機のとんだのを知らせてやる、お祖父樣とのことをも思ひ出すだらうと思つて。（六月九日）

願ふても見られない人が澤山ある飛行機の飛揚を、寢衣姿で見られるとは、何と幸福なお話でせう、未だ〳〵見る機會は幾度もあるのでせう、詳しい觀察を讀者に知らせてもらひたいものです（醉者）

日本の飛行機が未成品であるやうに、飛行機に關する記述にも、深く細微に穿入したものがなく空を仰いで『まあ』と驚歎してゐるだけなのを遺憾に思ふ。勿論之れは此人ばかりに云ふのではない。（M）

○水無月十日

若狹里子

里お前かへ？　新建のお離れのあら壁に、あんなにゆすら梅の種なんか澤山くつつけてといはれたので、いつて見たら昨日塗つたばかしの赤土の壁に赤い肉のまだ少し殘つて白くかはいたのがまるで洪水のあとの樣な匂ひのする土にぴた〳〵と三尺ほどの間に飛白のやうになつてゐる

考へて見たら、昨日の夕方壁を後にして椅子によつて前かけの中から出してはたべ〳〵したお名殘りに、その種を後へ〳〵と投げたのだつたのだつたけれども問はれたときしりませんつて云つたので私ですなんか

と今更いひ出しにくかつたのでそのまゝ二階へ昇つて花袋さんの死の方へをよみつゞけた。階下では母樣が

金はまあどこへいつたんでせふ、朝つぱらからかみもとかないでと祖母樣にいつてなさる聲がする。一時少し過ぎて頃筒袖袴の君が入らしたら今日は何ですの？早くひけましてねといつたらホヽヽ、牛どんですよ日曜もしらないとはつて笑はれた。

あしたの蘇洞門行きの遊覽船にゆきませんかつて誘つて下さつたけれども。

幾時に小濱を出ますの？どんな人達幾人ほど幾時に歸るのなんてさんぐ聞きたゞした揚句やつぱりよしませうよといつて怒られた。

しばらくしてから亦一人筒袖の君いらしたとますのつげたとき何てけふは鼻つたれのお守さんのいらすのかと一寸おどろいた。

ドラ聲の修業ださうですねつて申し上げたらいやしくも女流謠曲の研究者をつかまへてドラ聲の修業とはひどいつてこれ亦さんぐおこらせた。

夕飯後、音もなう降りそゝいでる初夏の庭に出た萬物のうるほされたすがくしい初夏の庭たゞわけもなくこゝちよかつたどれを見てもく草の芽も、木々の梢もポタリくとおとなしう雫をおとす。

十日前にさした紅ばらの枝、どんなになつてるかしらとぬいて見たらやつぱりポンポラだつた、亦もとのやうにしといた。

むせつ返るやうな匂ひを放つやうになるのも今しばらくだなあと思つて、引ぱられるやうに木犀の下に立つて見上げた。

かなしいやうな、淋しいやうな雫が、みどりの葉からわが頰へとしたゝる、ひやりくと亦ひやり――い、氣持ちだ、眼をつぶつてじつと上むいてる顏の鼻の上、額の上、口びるの上と、ホロリ――ホロリと……まるでみがき上げられた刄物にでもふれてるやうだ。

これはお行儀のおよろしいお孃さんでいらしやいます。（Ｚ）

天晴れこれだけの女傑でいらつしつて、悲しいやうな、淋しいやうな氣が矢張り起ることがありますかね、――里子とは優しさうな美しさうな名だけれど。（Ｂ、Ｂ、Ｂ）

○養蠶日記

上毛　落葉

六月一日。晴天四時起床、身體がぞくくして頭りが痛む、釜の下をたきながら、火ばしを杖して、ぢつと目をつむつてゐたら、いつの間にか夢心持にないてしまつた。朝飯をすましてこしりとりる桑は朝飯前に祖母が一人でくれた、いやでするので、あと何枚くとそんな事ばかりを思ひながら、六十五枚取りきつた時計はまだ九時前、物置へゐつて桑もぎをする、左の首が妙にかゆくなつてきた、かまわずにかいたら赤くなつて、ぽつくができてふくらんできた。桑蘂についてゐる毛蟲にでもはれたのであらうオヤ十二時の鐘がなる、ひる桑をせばなるまいと思つてゐると、祖母は待ちかねて、よんだ大ざるへうんと詰めてひきずられる樣にして、桑を運ぶ。晝休みに文壇を讀んだ、「あゝ誌友會の記事をみて幾度羨嫉の涙を流したらう、私は身の低級がつくぐなげかれる、「桑をもぎナ」云はれて桑場へ又行つた。南風がひど〱吹きだしてきた、「明日はふりかナ」人は空を氣遣つてゐる、時はうつつて落かべからさしこむはすでに夕日であつた、風に鳴る籔竹の音、青田になく蛙の聲とが寂しく聲ゆるばかり、餘り頭痛がするので、湯から出てすぐ寢た、まだ八時前だつたけれど。

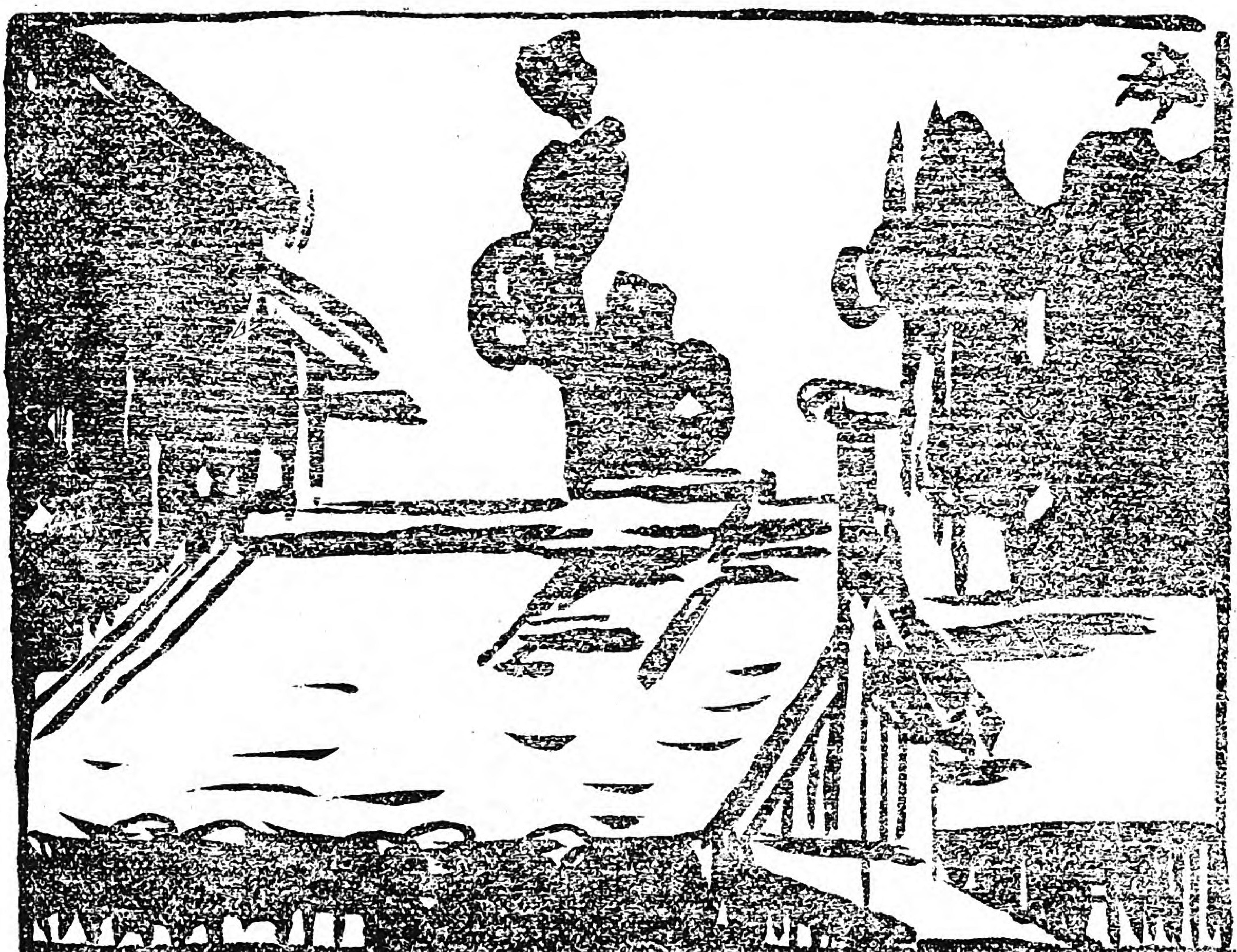
二日曇　鼻がつかへてのどが痛んで起きるのがつらかつたけれど、二里餘りの遠い學校に通ふ弟に、遲刻させてはならないと思ひ、重い頭を枕からはなした、御飯のにへた頃から、雲が晴れて天氣は一變した、今日も昨日の樣なことをくりかへす貸にいやでくならない、去年の今頃は都にいたのだつたが夕方ぽつくおちてきたつかれて歸つた弟に、桑運びをたのんで、私は炊事にとりかかつた、二三間上の雜貨店の小僧が手拭かぶつておしりはしよつて水汲みをしてゐた私を見て、大そう炊事場が忙しいようですなと云ふて笑つてゐつた。

三日晴天、まだ風がぬけきらないで、頭が重い、さらでだに倦怠、働くのがつらいのに。……

夕方模樣が變つてきたので、今歸つたばかりの弟を、桑伐りにやる、

いやな顔もせず、ハイと元氣よく答へて、かまとむしろとをもつてでて行つた、都に生れたなら……可哀想だ、然しあと一年である、いづれ卒業した曉は、行けるのだもの、働らいてをくれ川端で菜を洗ひながらぢつと後姿を見送つてゐた。

四日快晴。夜中に雨が降つたのか、地はぬれて樹々の青葉は涼しやう露を保つてゐる、それに光る日光――實に雨後の晨程心地よきはあるまい晝頃から盛んに老がでゝきた、それをひろつて新たにむしろへうつしてまぶしを立てる、桑をくれるこしりをとる、今日からは一層多忙だぞ。斯してゐる中に又老がでるので、それをひらふ桑くれる、一先これ迄として又桑もぎだ、日曜なので弟も手傳ふ、二人よるとすぐ都會の話し、そして殊更憧憬の思を高めてゐる、夕飯がすんだら老ひろいだよ祖母に云はれて、がつかりした、氣持で湯に入つてゐると、おそくなりましたつて、父母たちが歸つた、又うるさいおもひをするのかなと思ひつゝ、空の月をながめてゐると、姉ちやん私もつて妹が手拭もつてきた、上つてから父のかんをしたり、御飯をにたり――さはぐ弟妹を氣遣つたり二階では母と祖母とが老ひろいしてゐる、學校が蠶休みとなつたので、務めさきから歸つたのである。やつとかたついたので新聞を手にしながら、時計をみればはや十時。



わが家　　下谷　吾妻十佐子

五日晴天。朝から蠶ひろい、今日は皆上るので、いくら僅かな蠶でも上るときは忙がしい、父などはじゆばん一枚で働らいてゐられる、天氣が曇つてきてばかにむしく暑くなつてきたしやがんでひろつてゐると、顔から汗が玉になつてでる、その中に黃昏になつたので、私は炊事にとりかかつた、あゝ蠶も今日終つたが、あれを絲にこなすのが……

斯う云ふ記事、文章以外に特種の價値を持つてゐる、婦人の勞働を描いたものとして尊重したい（S）

○ある晩

東京　夕づき

家から持つて行つた手あぶり火鉢に乘せた鐵瓶は松風の音を立てゝゐる。

三疊の眞中につるされた五分

じんランプは、一人我者顔にするどい光を投げていろ〳〵の道具や人の影を、壁や障子に動かせながら寫してゐる。

「なにかお摘みなさいよ――」、伯母は花あられと最中とを乗せた菓子鉢を進めた。

「えゝほんとうにもう澤山なんですから」

「遠慮深いのね、――お稻さんもお食んなさいな」

「あらそんなに食べられやしないわ」稻さんは笑ひながら云ふ。

「いやだよ遠慮計りしてさ」伯母は盃を取り上げてグイと飲み干して又滿々と注いだ。向ふ側の藝者屋やから爪彈かなにかでいきな音〆が聞えて來る。

「今頃音がするやうぢやお茶引だね」、伯母は云つた。

「いやな婆さん人の悪い」、稻さんは云ふ私はだまつて聞いた。

「忍ぶ戀路はさてはかなさよ……」私は小聲で三味線について唄つた。

「涙でよごす白粉も……稻坊おどつて御覽」伯母は火鉢の緣をたゝきながら云つた。

「いやなこと」稻さんはツンと横を向いた。

「ねえ伯母さん家の家祝の時に幸さんおどつてね……」。

「あゝ彼の人中々巧いね」、

「えゝ道樂者だけあつて」、……伯母は又盃を手にした。表の格子戸によつて猫がしきりになく。

「ア赤が來た……赤やかんにんしておくれ、やき投すのぢやなかつたのだけれどいくら呼んでも來ないんだもの」、伯母はうらむやうに云ふ、猫の聲ははたと止んだ。

「およしよお婆さん」、稻さんは打消すやうに云つた。

「あゝもう九時よ稻さん歸りませう」、「えゝ」……表へ出た時「太田さんのお立退は此處で……」

「ハイ手前で」、伯母はあわてゝお膳を勝手へ下げた。

「醉若さんこれは水野君の書いた『審判』の一部に似てるね」「さうかね」「尤葉舟君のは淸といふ男が叔母にいためつけられるもの、これは二人の若い女がやけ出された伯母んとこへ行つて酒を呑むのを見たので、三味線や踊や「女子文壇」の島にありさうな人で無いだけが違ふ」「さうかね」（Z）

○おちむめ日記

近江鈴蘭

ポタリ、ポタリ幽かに地を打つ音、ポタリ、吁々又も梅の實が落ちる何といふ淋しい音……、物哀れな淋しい梅雨期の午後の四時半、夕ばれとでも云のか、雨は何時か止んで、雨らしくもないはそい〳〵そして、霧には長い、矢張り雨なのだらうが、降つてゐる、其處ら中黄いろ〳〵光つて見える、ちよい〳〵切れた雲の間から青空が見える、ポタリ又おちる暫くすると、向うの森あたりで雲がち切れる、ちら――と碧いのが見える、パタ、と私の肩を打つて又も梅の實が……雲が切れる……實が落ちる何か其處に意味が有りさうな、吁々もうずつかり雨はやんだ、此の晴間に誰か訪ずねて來て與れぬか知ら！今日で殆ど二週間計家に居つ切り、人間ばなれ世間ばなれ抔する心ではないのだけど、雨が降ると外出が億劫で……あゝ人に逢ひ度い、彼の人にも此の人にも……と逢ひ度い人は多くある、でも出かけるのは何か知ら嫌だ、出かけてまで逢ひたくない、此頃になると誰しもかうした氣合になるのか知ら？誰も來てくれない所を見ると……、いや〳〵梅雨なんか早く濟めば良いのに……かう思つてると足下にポトツと落ちて來た、コーンと下駄ではねると、一間計向うへとんで先きに落ちたのと三寸位の間をおいてならんだ、何故と云ふこともないが、そつと二個とも拾つて家内へ這入つた。

標梅は春を懐ふ女の嫁期をあやまたんことを恐れて泣くことです、今この君筐に盛るかはりに拾ひとつて何に入れたらう、桶？かめ？それとも口の中？　（T）

○日記の斷片

總子

戀愛の成立は結婚と云ふ具象的な事で現はせるものぢや決してない、私のいふ戀愛とはそれが異性にでも同性にでも、はた既婚者に對してで

もかまはず、只熱烈なる思慕の念、之れのみによるのだらうと思ふ。勿論崇拜とか欣慕とか云ふ思ひは餘程まぎれ易くもあるけれど戀愛てふものとは離れて居る戀愛の情は他の何物をも見ない、其人の缺點も美くしく言語態度のすべてが音樂のやうに繪のやうに心の底に染み入つて、濃い強い印象を與へる。そしてそれが友人との間にしろ、男子との間にしろ何の隔も打破つて感情は進む。其人と接し言葉を交すのが只慰みの一つとなつて他のすべては眼中にない、かうなる事の動機など實に微細なもので、その情は到底具體的に云ふ事は出來ない。客觀的には知る事が出來ない。が併しこの情の滿足を計るのは實に困難で全形的の結婚――家庭を造ると云ふ事は却てあさましい結果を來たす、結婚してそれで成立するやうな戀愛ならそりやほんとうの戀愛ぢやない、何物かに支配されたものだ。

戀愛の情はそれをどう成立しやうとかつて考へる餘地のないものだ、いはゞ盲目なんだと思ふ、私の戀の滿足は只自分の情を示せばよいのだ先方に傳へればよいのだ、そして向がそれを承認した爲に成立する、只それ丈の話である決して結婚がどうの、ホームがどうのと云ふ事はない

死と云ふものはこの相互の情が強く〳〵なつた時に出來る純粹の聖いものだ、ある意味に於ける勝利である、只老へねばならぬのは情死が必ずしも戀愛の目的ぢやない、死ぬ死なぬは其人々の境遇によるので情死者其ものに對しては深い同情と尊敬の念とをよせなければならぬのだ。

皆さん、これは『戀愛論』です、只議論として聞くだけです（S）

○午前

秀子

清水に濯いでサラサラになつた髮を後に垂れて机に向つた、よしや薄くとも、長く少しのよどみなき此の毛。

肩から下げたのを手に取つて、無心に弄んだ。

昨夜から讀みさしの含羞草をひらいた、……『美しかりし此園も今は寥れて――魂の去りにし屍――』幾度か繰り返し讀んだけれど、化石した樣な私の頭腦はサツパリこれを容れなんだ、繰り返し又三度四度

茶摘む男女の笑ひ聲話し聲がさかんに入り亂れて自分の耳に入るばかり、斷めて日向へ出た、向ふ畑の聲は益々はしやいで手に取るやう、誘はれるともなく庭に下りた、初夏午前九時の日影はしきりに赤い美女なでしこの上を照して居る。梅の實は葉かくれに未た青い、つい此間まで畑越しに町の方がよく見えたのに、何時の間にこんなになつたらう、麥の丈の延びたこと、何れもスツ〳〵と氣持よく素直に延びて黑穗一本見當らぬ。

再び机の前に坐つて含羞草の續きを讀んだ、やゝもすると言海などの御世話樣になる――私は思つた「原書が讀めたらなア」嗚呼如何にもして最う少し英語がして見度い、本棚から英語獨習書を引き出して見たけれど二三頁繰つた許りで又下に置いてしまふ。庭の花へは今蝶が來た私のところへは誰一人訪ひ來る友もない今日は馬鹿に時のたつのがのろい樣な氣がする、瑠鏡も面白からず古今集氣に喰はず、友でも訪問しやうかと緣に出て、先刻洗つた髮を無雜作に結んだ、合せ鏡をして櫛をさした。

茶摘みの人達は何時の間にか居なかつた。あたりが少し靜になつたかと思ふと、祖母樣の甲高い胸を刺し貫く樣な聲が聞える――私はもう出るのはいやになつた。

・頰杖ついて見るともなく見て居ると小さい青い梅が二つポタリ〳〵と地に落ちて、梢が音もなくかすかに動いた、今朝洗つて竿の中頃にかけた肌衣はだん〳〵北の方へ寄つて來る。

西洋苺が白い、あれが散つて白い苺がなつて、大きくなつて赤くなる私は心に何等希望はないけれど何となく、其の赤い苺を、早く見度くてたまらないやうな氣がする――其の時分になつたら自分自身もどうにかなる樣な氣もした。

雲は相變らず南から北へ飛ぶ、雨の降らないには驚いてしまふ、今年は桐の木が上へ大層延びて手をひろげた樣な若いみどり色の葉を澤山つけて居る。しかしこれも二三日たつたら半分になつてしまふんであらうと思へば人間なるものが如何にも心なき者の樣でならない、柏葉は人間なる名のものゝために青春の時を葬られてしまふんである、おゝ、私も血のもゆる時代を官立學校の寄宿舍に埋れて過してしまつたものを、身

を引きしめられる樣な風がサッと吹いて來た、洗つたばかりの髪はしきりに亂れる、私の心も亂れ初めんとして來た、家に居らんもうし、歩まんも愛し、一體私はどうすればよいと言ふんだらう？

ニユーホームにおはいり遊ばせ。（X）

○囚はれの心

東京　哀花

新橋際のクラブ洗粉の紅の色が、濃く水にうつつて、そこゝの旅館、料理家にも花電氣らしいのがともされた。時は今うすぐらいたそがれをぬけ出して華やかな夜に入つた。

六月の夜の、明るい廣い通りには、白い顏の女が幾人も通つた。皆、紅いなつかしい瞳をしてゐた。橋向うから救世軍の賑やかな樂の音がきこえて來る。

人の姿、樂の音、私は其等の華やかなものに交つて、獨り寂しい胸を抱いてゐるに忍びなかつた。暗い想ひを、包んだ胸をしつかり押へて急ぎ足に博品館の角を曲つて、河岸通りに出た。そしてホツト息をついた

月影が水にうつつて波のまにまに、ゆれてゐる。私は不圖亡き友の俤を思ひ浮べた。否思ひ浮べずにゐられなかつた。こんな靜かな月の清い夜、寂しい波のよする三浦三崎で、永久に見はてぬ夢の秘の人となつた友は幸であつた。

青春十八、暖い涙、燃ゆる思ひを抱いたまゝ逝つた友は多くの人に惜まれた。けれど私は羨ましかつた。

悲しい人の世も、冷めたい社會も、知らずに若く華やかに惜しまれて逝つた友はたしかに幸福なんだ。

少女、十八、死と手を握る…………あゝ、私もう逝くのよ、
生きたいわいつまでも生きたいわ、そしてあらゆる甘樂をし
盡して死にたい。

と幾度も噂いた友の涙は、こほつてゐなかつたのは。血か涙か、暖かければこそ、身の永遠も願ふのであらう。世を美しく、詩のやうに解してゐるであらうけれど、私の醒めた、冷めたい心に映る世は決して華やかではなかつた。むしろいつはり多い世であつた。

若かるべき青春を、華やかなるべき六月を、唯々暗い寂しい想ひのみ抱いて、苦しんでゐる私は！何物にかとらはれてゐるのだ。とらはれた女の心は眞に寂しい。

せめてもの慰藉は、亡き友の俤！現に、闇に、私の心を招いてゐるその俤のみ。

何物にか囚はれた私は、血も涙もないぬけがらだ。故なく生きてゐるのだ。招かるるがまゝに、誘はるるがまゝに、逝つてしまうのかも知らぬ。

日に日に、細つてゆく身をきづかつてゐる人に、私は冷やかな、笑を以て對してゐる。

あはれ人の子よ。冷と悲とより外に何物をも知らぬ女よ。
お前の世は悲しさと寂しさと、そして冷めたさとから生まれる。
表通りの賑やかな、樂の音は絕えないけれど、私の魂は、寂しい河岸に沿ふて、あてもなく唯ゆく。

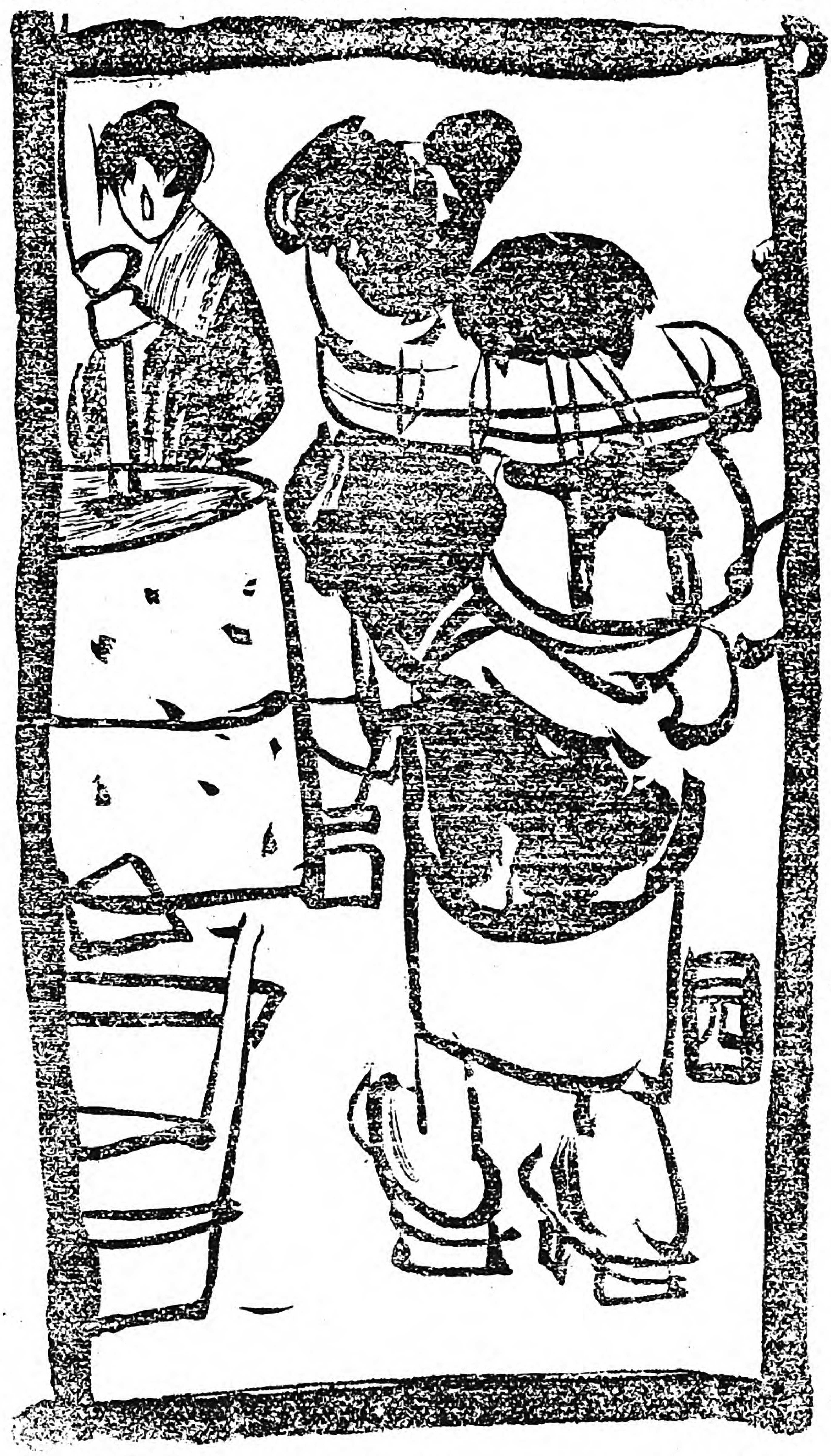
口でだけ囚へられてゐる〳〵と仰しやつても無駄です、私共にはプルとしか思へませぬ、主觀に立つ以上さう知らを切れるものではないでせう。（T）

○家出せし友を尋ねて

南千住　清子

見なれぬ聞きなれぬ停留所に注意しながら、教へられた場所で電車をすてた、何となく淋しい町だ、あゝもう家々には灯がともされてある、街の電燈は華やかだ、これから行こう、少しもわからない、唯何町の何家とだけ、いつぞや一寸聞きをぼへてる計りを便りに、それさへ居るものやらどうやら、雲をつかむやうな、あゝ何だか心細い、ほんとうにひどいわ、ひどいわ。此んな悲しい思させて、せめて私にだけなりと、一寸知らせて下されば、ほんとうにひどいわ、逢つたら思ふさま此の胸にあるだけ言つてやらねば、あゝ足が痛い、今朝から歩き通して疲れてしまつた、仲のよい友人は、兄弟より樂しみなもの、行くなら一人はやりませんよと、互に樂しきことも、悲しきことも、苦しみも、共に分け合

ひませう、親にさへ話せないことも、語り合つた仲で、片親ないどうしの倚さら情は深かつた、それだのに今度は一言もなく、私一人を殘して御出ですのほんとうにひどいわ、橋の手前から川岸通りに曲つた、此處は材木屋ばかり軒を並べて居る、夕暮の冷たい川風がさつと顔にかゝる材木小屋だの、店の通りはきれいに水が打つてある、見るから心持ちがよい、尋ねる家も此のあたりだと思はれる、向ひ合つた材木屋の店に小僧さんが二人立つて居た。あの少々伺ひますが、此の近所に若林さんと云ふ家がありませんかと云ふと、二人顔見合せて、知、ませんねつて氣のなささうな返事、まつたく失望してしまつた、一人が、若林、聞いたやうだなあ、此の先き聞いてでらんなさいと云ふ、少しの力を得て又歩き出した、日はまつたく暮れてしまつた、月が靜かに登つて大寺の間から澄み渡つた月が梢を通して地を照す、又一入悲しさが胸にせまる、何處で聞いて見よう、時間ばかり立つてしまつて、私のは七時半だ、今朝出たきりゆゑ九時までに歸らなければ、もう氣ばかりいらいらする、横丁から折よく出た髪結さんに聞いたら、此の奥にあると云ふ、疲れた足も忘れて、早速尋ねたら、まるい瓦斯燈に若林と記してあつた。御免下さいと言つて胸がをどる、障子に、大きな黑い影がさして、やがて我が友の顔があらはれた。まあと云つてもうはらはらと涙が落ちる、案外早く判つた、あなたもあんまりよ、ひどいわ、ひどいわ、これより言葉は出なかつた、



井戸端　　磯谷井上こと

胸につもる恨みを言つてやらうと考へて居りますと先達つものは涙ばかり、思ふ半分も言へない、いぢらしい姿の友は顔をおふて忍び泣き内に立ち、自分もどうしてよいかわからず、外で泣いたひどいわくの連發もうるさくなく友情も籠つておて好い文章です。醉茗）

○三日月夜

横濱　伊都子

花やかな夕榮も何時しか其影を收めて、野毛山の夕鐘は寂う川の面を渡つた、糸より細き月の光が青葉の間から淡い光を見せて居る。不圖自分の立てる傍にお豆腐が半丁清い皿の上に供へて有ので、あゝ三日月だ

なと頷いた。昔の人は何故に舊彼樣弊なのだらう、家内一同病氣にかゝりませぬ樣にと祈りながら、弓の樣な腰を佝曲て月に合掌して居たのをお隣の奥樣が御覽に成たら又必と御笑ひに成たであらう。

だが、昨日の淵は今日の瀬となるあすか川と云ふ如く果無きは人の運命、ましてお父樣は大酒家だし、此頃ではぶら〳〵して居られるので、祖母樣が御心配なさるのも無理はない、若もお父樣が歸らぬ旅路に行かれたなら、私共は如何なるであらう、住なれし此家を去つて田園生活に歸らねばなるまい。

さすれば彼の可懷しい師の君の御顏も拜せなくなるであらう。「伊都さんお支度出來まして」と纖細い腕に荷物をかゝえて、丸顏の色白い、二顆の眞珠を並べた樣な鮮な眼をぱつちり見張つて、薔薇の莟を合せた樣な唇から被仰る幸子さんの床しいお聲を聞く事も出來なくならう。學校へ通ふ道すがら、銀行の前にて會ふ色の淺黑き、褪せた半纏を着た、さも生存競爭に疲れた樣の人、春は百花の咲き匂ひ、夏は青葉の影涼しき公園にて、丹鳳の眼、臥蠶の眉、神々しき迄に美くしき容貌、漆の樣な黑髮をローマに、學生には似げ無き立派なお召に、男ましき車屋の掛聲と共に過る閑雅な令孃、山下町の角にて出會ふ、泥鰌髭をカイゼルか何かに捩上げて、金縁の鼻目鏡を掛け、會ふ度左手に持つて居るテッキを右手に持かへるくせのある、瀟にハイカツた務人風の若人、眺よき代官坂の上にて會ふピヤノの本を小脇に、セエラの服を裾高く、細き足を活潑に歩ませて行く金髮の少女、ラヽタ、スコッツの肖像に似て居る外國の老紳士はては電話交換へ通ふ女子、幾夏か幾冬か、雨の日も風の日も、朝な〳〵同じ處に同じ人を見て時間の遲速を知る標準として居た程に、何處の何樣と云はるゝ方やら知らねど、長の年月顏見合せて、表は眞面目であるけれど、心の內には會釋もして行きたき人々、之も何かの緣であらう其人々とも永遠の離別をしなければなるまい。

あゝ卒業迄には未二年ある、せめて其迄安かな日を送りたい、さすれば幾分かの助は出來るであらう。

何卒お父樣が病氣になりませんやうに、とそつと手を合せた、あたりを徘徊したが誰も居らぬのにホッと息をした。三日月は山の端に隱れてしまつた、納涼の人の尺八の音が對岸から幽かに響いて來た。

取越苦勞も斯う細かく描くと冗でないかもしれぬ。（Ｍ）

○たそがれの町

土佐　順子

スク〳〵とのび立つた白楊は聲もなく淀んでゐる濁水の面に靜かに軟い梢をうつしてゐた。夕日の名殘をうけて淡いさふらん色にぬれた空は灰色の低い家並を繞つて靜かに首垂れてゐる。豆腐屋の喇叭の音が暗いじめ〳〵した空氣の上を流れてきた。油濃い乾物を燒くムカ〳〵する匂と生醬油でいり付けてる樣な刺す樣な匂は、家々の軒に、モヤ〳〵と淀んでゐる。

褪めな袴の腰をたらした四十男の腰辨や、籍辨當を首にぶらさげた男空車を引いた草蛙のきれた男、ぐつたり眠つた子を脊負つて旅を抱へた素足のやつれた女、皆、ドロリとした、黃色い皮膚に、ぐつたりした瞳をすゑて、のろ〳〵と灰色の足跡を、殘して歩いてゆく。をどけ姿を、した廣告の樂隊が疲れきつた足を引きずつて、樂器も鳴らさず通り過ぎた。「あの、なんぞ、買うて、つかさらんかなあ」、訛のある調子で、かう云つて、家每、家每の廚下に立つて覗くに十二三の行商の子が來た。

北の山を越して來たのであらう、黑い股引に、破れた草鞋をくゝりつけて、紺の着物の裾を端折つて居る、脊中には黑い大きい包を脊負つてゐた、其眞ン中には黃がゝつた廣いさなだ紐をかけてゐた（「かもじく、しやぼんと、のみとり粉と、いりませんか、なあ」。二人は、かはる〴〵かう云つて、歩いてゐる、夕暮のざはついた心の人々は、「それどころぢやない」、かう云つた風に、よく聞く、人もなかつた。嗅ぎなれぬ、人の胸を知つて、おびえ安い犬はあはたゞしく、二人の足元に吠えついた。

「お前、どう？わいら、ふんとうに、物にならんわ」、丈の低い子は連れを見上げた。「そうや、こゝいら、しわんぼうの巢やらう、駄目の皮や、明日はうんと、儲けやうや。」大きい聲で、「あゝ、だが、わいら、困つたなアちつとも減らんで」。二人は話し合ひながらさつさと歩いた。

「ヤーイ、何だ、やもうとが來たぞ」往來の眞中で獨樂をまはしてゐた

一かたまりの子がかう云つて、振り返つた。と、ふと、一人の子が、よいと、足元に、獨樂をまはしころがした。

二人はけつたまゝ、さつさと行過ぎた。

「オイ、待て？ 野郎ッ、人の物をけりやがつて」、子供は、對手を得てドヤ〳〵と面白さうにわめきたてた。

二人の子供は、振り向きもせず、物馴れた足取りで、歩いて行つた。子供等は手持無沙汰な顔をしてぼんやり見送つてゐた。冷い夕暗の色は生温い南の風に送られて、次第、次第に、せまつてきた。

「どろり、ぐつたり、のろり、ずく〳〵、じめ〳〵、もや〳〵」、其あひま〳〵に「かう言つた」、「かう言つて」がちやんぽんに入れ交つて、土佐は麻生郡赤坂邊に樂隊が通つたり、豆腐屋の喇叭があつたり腰べんがしなれ切つてゐたなどはまことに以て意外である、嚴なる文藝の立場から言へばいろ〳〵理屈はあるけれど、私はあなた方にはまじめに「自己」をあらはして頂きたいとより外を望まぬ。おわかりになりますか、（S、S、S）

○一時間

静岡縣　壽賀

今までかしましかつたのが始業の鈴と共にぱつたり止んでひつそりと靜まりかへつた。

南の校舍から杉山さんのすき通つた聲がハツきり聞える、隣りの尋六は綴り方の樣だ鈴本さんの誠心な教授振が目に見える。

高一二女合せて十名たらず、本裁袷をせつせと縫つて居る、あまり手がかからぬので一週中の安樂時間だ。外に目をうつすと、今植附で白い手拭紅いたすきの里小女が三人五人打連れて、せはしさうに植えて居る夕方は今植えた葉末からもやさしい螢が飛び立つだらう。

ゆるやかな田植歌が涼しい心地よい初夏の風に傳つて來る、畔には春におくれたれんげが二つ三つ咲き殘つてゐる。

忙がしいからと言つて小供つれて來た生徒が三人ある皆男の子だ、四つばかりの一人はころ〳〵とねころんで居る六つばかりの子は姉さんの前にじつと坐つて居たが其の中にねれると大聲に獨り言ひ出した、皆が笑ふと恥しさうに姉さんの後にかくれる、ほんとに愛らしい今一人は三つばかりの子名は茂さんといつた室にはいるからよろ〳〵と歩き出したので靜かな裁縫室がいつになくにぎやかだつた、姉さんの箱ひつくりかへして五色の絲をごちや〳〵にしてしまふ指輪をねだる物指をたべる、なか〳〵忙しく働く姉さんは見向きもしないで誠心に縫つて居る、面白さうに遊んで居たけれども一時間はつゞかなかつた隣室で「ひぢが出た」（綴り方清書の時だつたらう）「二人、三人」といふ先生の聲が聞える頃姉さんの脊に負はれやうとしてはなれぬ。

「こつち……」と手を出すとニツコリ笑つて來る人ぎらいせぬ子は何て可愛いだらう、だつこして窓に立つとずぐ窓下になげしがゆら〳〵とゆれて居る、もえたちさうな紅が胸にしみ入る樣何がなしに嬉しい、ダアーリヤも矢車菊も咲いて居る、どれも見所はあるけれど……二三間先に青い草に血色の好い太つた足をなげ出して三十ばかりの女が鎌をといで居た、ふと見出すとあはてて立つて頭を下げる、こんな狹くるしい室にしばられて居るより……と自由な生活がうらやましくなる。チリン〳〵ワツと又かしましい天地に返つた。

「茴香の芽と心」に太田きし子さんが書いたのと違つて子供を抱いてやるところが面白かつた。（S）

○病める人に

安房　ひをどし

あの新綠色の森の中で、今日貴君の影を見ました、私。

自然の田園の色と病詩人の對照よ。

あゝM樣、絶えず向上せんとする、御心からは、病んで送る、今年の初夏は、物憂いで御座いませう。

屹と北の都の空をお見上げ遊ばした時、あつはあゝ御氣の毒なと泣きましたわ。

然しお考へ遊ばせ、今度の御いたつきは、上帝の命ではありますまいか？さわがしい都の巷に、パンの代に講壇に上る・人の口頭から何の獲

る所が御座いませう。自然に憧憬せよ、との天命と私は信じまする。
いたづらに、御歎きなさいますな。
朝に走つて、幼なき君と共に、目高とつた池に行つて御らん遊ばせ。古い〱合歡の木薄紅の露をもつて、蕣皆開いて君をまつてをります、夕は山窓にひじつきなさいまし瞑想的な鐘の音と、細い〱歌が聞えませう。
賢い都の處女よりも、無邪氣な田舍の少女を、歌つて下さいませ、山百合の野に彼等は待つてをりますものを、そうして清い詩を聞かせてと切に望みます、若々しい胸の溫みの消えない樣に、人の爲めいた手に歎かない樣に、田園を思つて下さいませ。
胡桃の木の上を、白い圓い、ふわ〱した雲が行きます、あゝ北の方へと――
君が思ひをのせてるぢやないでせうか、あの雲をとつておきたい、此の山の光りや、野の色を惜しむあまりに、まぶたが熱うなりました。
あゝ今日は稻蟲追ひでしたつけ。さらば。
これ位の慰めで生きられる病人なら幸福な人といつても差支ありませぬ。なぜかわかりますか。（K）

○日記から

衣香

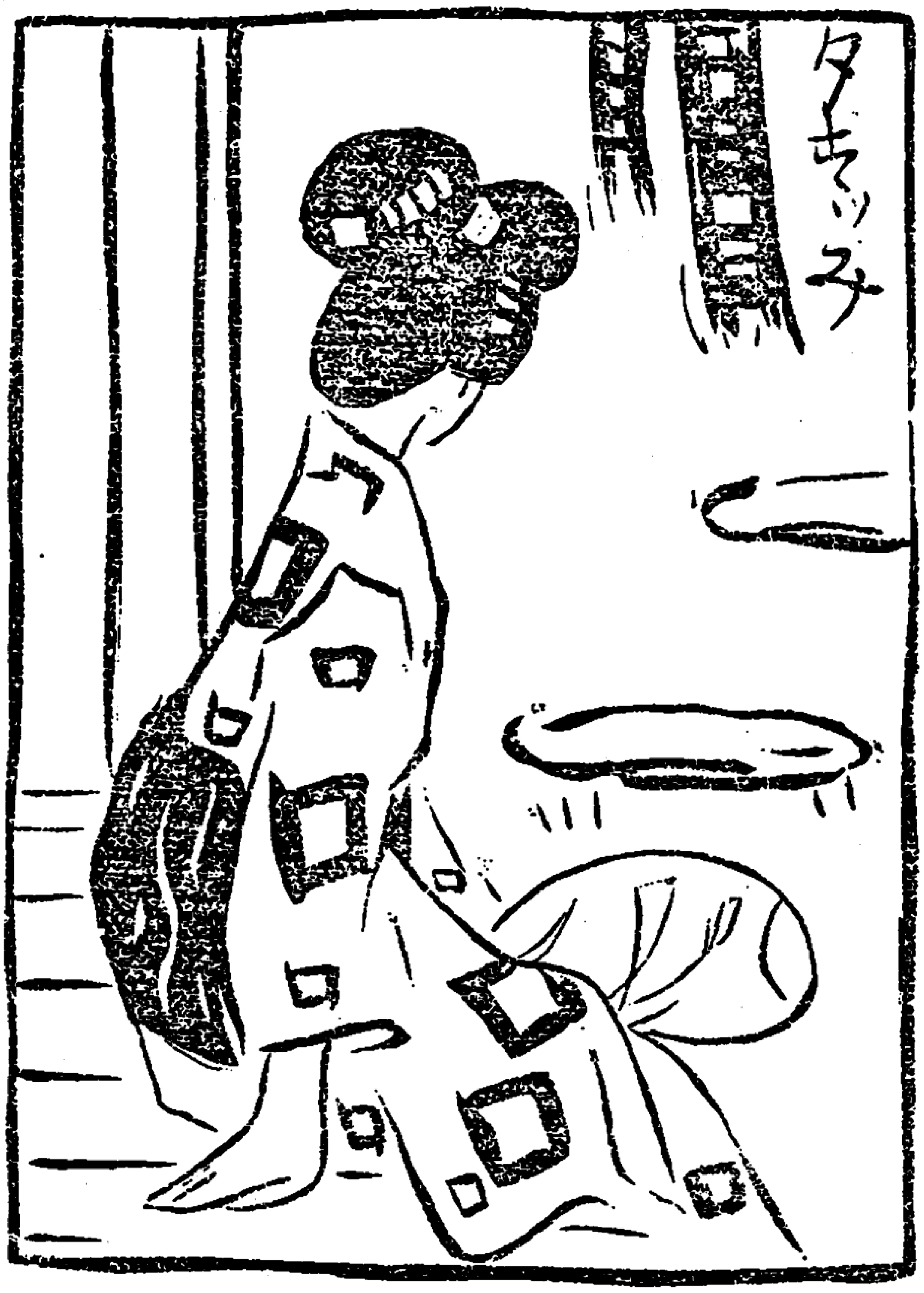
ああ、暑い暑い、朝から這那だもの日中はどうなる事かと、くさくさする。八疊で新聞廣げてると兄樣、オイ暇なら一寸帳場に坐つてて呉れつて云ふ。又散歩でせう兄樣たら何時も蟲の好い事計り云ふ。これだもの放心新聞なんか見てられやしない。表を學生が澤山通る。女學生が涼し相な浴衣に海老茶の袴をつけて派手なパラソルさしてるのを見ると何だか自分がお婆さんみたいで悟りすましてる氣の私も一寸悲觀し度なるホ、、女子文壇を拾ひ讀みしてると涙とか自覺とかつて字が無性にならべてある。私みたいに自分と云ふものを考へないものは却つて幸福なのか分らない。縱に華かに派手な商家に生れて……。
「若かれ！若かれ！若かれよ　若くして咲く花の如く……」ああ若くして咲く花の如く……ああ私はもう少し覺め度ない！もう少し……向ふから島田の人が來る見た樣だと思つたら、まあ美香さんだ。やあ仙場小町のお入りなんて兄樣頭から冷かし初める、光榮は。一ッ橋切つての好男子二郎君に這那事云はれちやホ、、美香さん中々默つてない、母樣の處に御挨拶に行くと「まあ何時みても綺麗におすなー」と恍惚と自失してらつしやる。流石の美香さん母樣の前には面赤くする。
派手なお召に白地に青磯で蝶大きく飛ばしてた呂の丸帶が馬鹿に意氣に見へる。私は這那美しい人を從妹に持つたのが嬉しい。女はすつきり不容貌ながらも垢拔けがしてほしい。美香さん東京に歸り度い〱つて云ふあら此間まで海を見ては詩的だお店へは歸り度くないつて云つてたのにと云ふと近頃詩的も少々飽が來ただつてホ、、「三越や電車がちらつくんだらうまるで虛榮の化物だな」と兄樣憎らしい事云ふ。餘り美香さんが云ふので私も歸り度なつた。兄樣よく心の變る女だつて云ふ。そうですとも其の日〱の風次第。用心なさいとんだ風向きになりますよつて云ふと。生意氣云つてら。兎に角、中島を淺草橫町を銀座だと思つておいで。今に電車も通るよ。なんて二人を吹き出させる。夕食すまして美香さんを京屋の角まで園と送つて歸りにお八重さん處に見舞に行く。酷く惡くて面會謝絶だつてほんとに吃驚した。其那とは知らなかつた。彼れから一度行かうと思つててつひ忙しくつて。眞に惡かつた。もう逢へないと思ふと泪が込み上げてボンヤリして了ふ。も一度會い度い。屹度好くなつて頂戴。祈つてます。
筒井筒の振り分け髮……友染の筒袖に黃な三尺ぶら下げてた八重さんを偲ぶ。
かなしいことも、嬉しいことも、面白いことも　すーすー、すー、と水の流れてゆくやうに流れてゆく處女時代の生活、詮索するがものでもない。（M）

○或る一日

上毛　九輪草

明日こそだれにもおこされず早くおきませうと思て寢たけれどつひ鐘

母さんにおこされて、あはてゝ床をはなれた。早速家内總係で桑くれをすまし朝食したのが、七時二十分、十五分間休んで網ぬきを初めた、取りながら見ればあちこちらに透蠶か糸をかけたのがあつた四眠おきてより七日間は家内の者少しも怠りなく熱心に飼育した効あつて少しも惡い蠶が一つも見えぬ、御母樣は發生以來第一の責任をおふて飼育又は桑の事まで一さい心配して働いたので勞れた樣子が私等に見えるけれど少しも休みなく今朝など早くよりおきて何くれとなく指圖して居る。網ぬきを半分過りした頃新村の作造さんが家内三人、手傳にきた夫婦の外に子供が二人子守がついてきた、昨日弟が學校歸りによつて頼んだので今日きてくれた。外に市村の從兄が兄妹で手傳にきてくれるし十時頃、松原のおかねさんが孫を連れてまあようあがりますと、少し腰をかゞめながらやつてきた。早くより雨が強く降つたから心配したけれど十時頃には雨が晴れ太陽は雨上りの庭を照らしてくれたのでうら取りのむしろを椽から投げるやら二階へあげかごを運ぶ音、桑場から桑の木を庭へ出す音種々に混雜してにぎやかだ、蠶室には幾臺もかごを出して透蠶を一疋づつ取り上げるので中々忙しい幾籠もある蠶がみな一所故目がまはる程働いた幸御天氣がよいから籠の周圍にぶら下るやら手のおくれた籠は御ぢいさんになつて住ごもりのやふに出て頭を高くふつてさわぐので早くひろひあげなければならない、餘り忙しいのでつい中食が十二時四十分、この日は御母と妹が御勝手係、四十分程晝休して又ひろひ始た二度目にはつまる籠が大そうあつて夕方には幾百枚のがわづか十五枚になつた、私と市村の八重さんは勝手に手傳兄や手傳の方々作男等は庭のむしろや網を片づけ姉や新村のおとらさんかねさん等はそれ〲蠶室の掃除で中々さわぎ夜は祝で田舍料理で澤山の品を出した、おめんに餅をこしらへて手傳の家へやつた、八時半にやう〱出來あがつたのでそれ〲おぜんにもつて座敷へ出してみなさんに坐つて戴いた。妹と弟が御酒つぎ役私等は勝手片づけて茶の間で食した、市村の八重さんに祝だからと無理に三四盃進めた、御すきでないのにあがつたものだから金時の火事見舞の様になつた、私も氣の毒になつたから早速床をのべて御休みなさいと進めて私は後片づけに働いた十一時までにはすつかりおへて手傳の方々が御歸りなつた八重さんと私で螢狩しながら御かね婆さんを送る約束したのが無駄になつた私きりで淋しい故弟に頼んで送らせた、八重さんの隣へ寢よッと思つていん居所の障子開けて入つた、祖父樣の寢息、八重さんの苦しさうな息使妹が何か寢言を云いさうになつた。しばらく椽に腰かけて十二日の月をながめて居ると螢が一疋とんできたのですぐ取つて紙につゝんで机の上におき、二分心のランプの前で弟の歸るまで文壇讀んで待つて居た二枚ばかり讀んだ頃口笛が聞えたから間もないと思つたらたちまち澤山の螢を紙につゝんで歸つてきた。早速螢かごに入れかへて椽にぶら下げて床についたのが十二時、弟が使に行つた家の話をしたけれど餘り勞れた故半頃話中に寢たので弟に姉さんゝ云はれてあツとさけんで又目をさまして話を聞いた。外はもう月の世界となつて下界を照らしてゐる。



夕涼み　麹町　石井せき子

田圃の方で蛙が一聲にがちやくとないて居るどこからきたか蚊がぶんと顔にあたつた。上簇の一日。

かう働くやうになつてはさぞ方々から引張凧となるでせう、金はうんと取れる、嫁入の口は見つかる…何といふめでたさであらう(S)

○紫の煙

岡山縣　靜枝

青い紫蘇の葉がずんく延んで櫻んぼが眞赤になつた頃、私等の村では野といはず里といはず新緑の間を、紫の煙が立ち罩めます。

紫の煙！私等は常に此香によつて初夏の眠から醒覺されます、都の諸孃は水色のリボンよ、パラソルよと、夏の粧ひ輕ろやかに、今日はレース明日はマーチと、心地よき社交に日もこれ足らぬ眞最中に、田舍の女子は此煙と汗を以て戰つて居りますよ。

蔦頃一望の麥が一揃に愛らしい青磁色の穂を出した頃から準備して置いた、緋の襷や新調した鋸鎌を出して、今日を晴と村では總出となつて下半身が美しいクリーム色となつた麥を苅りにかゝります。

「姉さんとこの稈は好う出來ましたなー」
「ほんまに、ぼつこい出來でしたなー」

こゝでは麥の實は副產物として取扱はれますからです、靜寂たる天地はしばし鎌の音人の聲に蘇生ります。

そして苅られたる麥は直ちに穂を落して稈を製造いたします、(製造とはこゝの特別語にて、卽ち稈を硫黃で燻すことです)かくして何町と何町もの麥稈は各々の家によつて製造されてしまひます。

試に都の孃さんよ、我岡山縣下を初夏の頃見舞ひ玉へ、朝といはず夕といはず、家ごとより起る紫の二酸化硫黃は今おのが、勉めを終へて、天つ空へ歸つて行きます、おゝ其香りよ、其色よ、充實した初夏の空氣は益々活動します、女子としいへば猫の如く思し召し玉ふ都の殿方よ！來りそして、みそなはせ玉へ、此勇ましき光景を、無理ならじ、二十年の其昔初めて眞田の生れてより、今日の短き日に神戸港における首位の輸出品となるとは。

生糸といひ、眞田といひ、げに尊き女子の誇ではありませんか、自覺を呼んで空想に走らんよりは、私は、健全なる農婦として、丁度あの美しい薇薔の根となつて、白蠟入りし國をば支へ、未來の女子を開放せむかな、おゝ又も香ります其の香よ！。

農婦の活動は聞いても心持よく感じます。(S)

○丘に立ちて

目黒　榎本文江子

後ろには若松の林がずつと並ぶ。赭い幹と黑い幹とが連つてひよろく聳えてゐる。女松の葉は蒼いが、男松の葉は際立つてどす黑く見える。松風のひびき無弦の琴を撫してゐるやうだ。私が立つてゐる前は、廣いく平原だ。淺芽がけぶつて青いシートを敷いた樣一面の綠だ。

雜木には若葉がついた。山の鳥も遠くから來て鳴いてゐる。

私は丘に立つていつも斯う思ふ。此の野や林や丘や――つひ此の間迄は切りさげの髮の赤い手柄をかけて、私達は草花を摘んでゐたとしきや思はれぬ其の、つひ此の間が最う四五年も過ぎてゐる。あの、紅、紫、白の花を摘んで、髮にかざして樂しんだ、私と極く仲善しの芳尾さんは、疾うにお嫁に行つて了つた。――きけばお近い内にお子樣が出來るさうな。

私はそれが情なくて、何故女が嫁がねばならないでせうか、私はいつも母樣から聽かされる『女の道』が何となく悲しく思ふ。

私は未だ若いたらうか。

此の間も芳尾さんは私に言つた。餘り若い内に嫁いではいけません。身も心も伸びる隙がない、と染々語られた。私も既に十九、今一度あの時分の心で、芳尾さんと此の野へ來て遊んで見たい、すみれの花も咲たらう、菜種も黃色な花を見せて來た。あゝあの時分――私は此處に來る毎にこんな事を思ふてゐると。知らず識らず淚の滲み出る事さへある。

一度初作に及第した方、今後の活動が何よりです。(S)

○初夏の夜に

みなみの女

九時のなるのを待ちかねて、温かい臥戸に横つたのは、幼い日のハッピーヅロウムとすぎさつた。

何うしてこう感じ易くなつたのであらう、廻りどうろうの様に我胸中をめぐる幾多のまぼろし、あゝ弱い心よと冷笑して、眠らうとすれど。幾度かくね返りして、とうとう髪をこはしてしまつたけれど。

隣りにおよつた御祖母様の御目さめぬ樣に、そつと蚊帳をくゞつて出た。私は再びさつきの文壇をくりかへした。樂しさうな誌友曾よ、華やかな都の君よ！げに幸ち多き人！何故自分は上京出來ないんだらう。なつかしい人にまみえる事を許されぬのだらうか。

兄樣が御歸省の度毎、今度は今度こそはと願つて居るものゝ、それは容易に實現されさうにもない。未だくにの高野山も、那智の瀧すらも知らない身に。でも熊野なんて大變だ。山ふみわけて……あの勝地を御存じない方は多からうと思はれる。

私は空想にのみ富むだ女、望む事ばかり多くて一つも實行されない。併し若し其一つが眞實となつて來春の樂しい集の一日に逢ふ時があつたら、何んなに嬉しいだらう。けれど矢つ張り今の樣な、華かな感情を好む熱い血潮がわきたつて居樣か――。もう今年限り十代を葬むつてしまふと共に、やがて、やがて嫁がねばならぬ身。春は逝く、若い殘り惜しいシーズンはすぎて行…。戀しらずに嫁く女よとさゝやかれるやうな氣もする。

私は、私はノートルダムのエスメラルダの樣な純なる。處女の愛を僞多い人の前に棒げるのはいやですもの。それに何故？と問ふ人があらば家人をやすめる爲に。高きに囚はれた女よ。解放をさけんで得ざる女の哀れさよ。再び人妻といふ囚はれた名の下に！。

日毎裁縫屋に通ふて若い女の、笑に興じて煩ひ知らぬ胸がしみじみとなつかしい。

Y先生は無邪氣な方だと信じて居る。此間迄毎日通つたヴワイオリンのY先生、私は此方と似ていらつしやる樣に思はれてならない。音樂家のくせにちつともハイカッタ所のない、頭もさつぱりした五分刈でいらした。それで居てひどい滑稽家のわるくちや、面白いと思つて伺つてゐる戲談の中から、人の諷刺やら、ニックホームやら隨分ひどいのが、飛び出すんです。けれど御心ではちつともそんな事を氣にかけていらつしやらない、一體に氣の大きな物事に拘泥しない方だつた。だから誰も惡口を云はれたつて、腹立てるものはない。みんなチヤミングせられて居るのです。

Y先生よ、御許し下さいますか、初めてゞすのに隨分ね。私は僞らない女ですから。

でも、此頃ぢや面白いY先生にも御目にかゝる折がなくつた。二月前に涙をのむで止めましたの。

母を失つた十歲の秋から、むづかしいヒステリックな祖母樣に育てられましたものを。今では弓をとる事も稀に、淋しい心を慰めてくれる人もなく、いえ自ら求める事をしないで暮して居ります。

あまり僞りすぎてゐる。（M）

○初夏の色

廣島縣　翠子

みどりの冠、みどりの衣、粧ひこらして立てる樹々の梢に初夏の空氣は漂ふた。太陽は强烈なる光りを山の頂きから麓から野へと流して、深い睡りから醒めたる物みなは、まぶしそうな眼を上げて活氣充ちたる面持ちに今日一日の誓ひをたてゝゐる、白い綿の樣な巨大の夏雲が、幾つもつながつた樣にかなたの山に呑まれて、みどりの空が次第次第にひろがりゆく、あゝ、かの夏雲の行くかなたの里にも我れと同じく物思ふ少女が、あいの香新らしい單衣の袂を胸に重ねて人なつこい瞳を上げて夏をむかへて居るではあるまいか。堪へ難い程ものなつかしい思ひに引かれて、陰鬱に繁茂つた樹々のうつろに身を入れた、身を入れた路の邊の

千草は足に絡まつて咽び音に……私の裾はぬれた、若い少女の胸に燃ゆる様な青葉若葉は、華やかな愁ひを帶びて首うなだれて居る。かれは其かみのはかなかりける戀物語を繰り返し繰りかへして幾多の人にさゝやいたであらうか。そを聞いて共に泣き得た人がそも幾人あるであらう？

美はしかりしかれが花の姿に思ひをよせて日に幾度となく訪づれた若い小鳥はげにかれが戀人であつたのだ。小鳥は面白き春の曲をかなでながらかれを訪づれかれを慰めかれに接吻して去るのが例であつた。一夜嵐に誘はれてかれが美しき姿は空しく地にかへつて醜き死骸となつた梢が憮然として雲の一方を指してたてるのみであつた、戀人の小鳥は此の淺猿しき姿を見て泣いた。そして再び此の梢に姿をみせなくなつた、地にかへつた花はやる瀬ない思ひを色に見せて再び梢を彩つた、が小鳥は早他に心を移したのか更に見むきもしなかつたのである。

目に見る事の出來ない程の微風は、一枚一枚柔らかい青葉の面を叩いて過ぎ、青葉はハラハラと泣いた、私も共に袖をしぼつた。

地球は稍々南に傾斜してゐる、今日歡樂の夢から醒めた、つちのものはこれより活動の境に入るべく太い息をつぎ、爛たる光體は奮闘の焰を吐いて瞰下してゐる、あゝ初夏の朝の色。

小鳥と梢との隙は下手なお伽噺のやうである、然うかと思つて、散文詩にでもあるやうな新しい文字が表はれて來る、要するに未だ頭腦が出來てゐないが、世界は新しい。（醉茗）

○小供の面影

多　都　子

何事にまれ罪なき小供の面影眼にうつりしまゝを。

○澄子さん、すゝ紅入メリンスの元祿袖五吋のとき色リボン眼前に浮ぶ色白な細面で秋の草のやう哀愁を含んだ子先達つてすごく學校から歸宅すると妙にふさいでご飯もろくに食べないので母樣が心配して尋ねたら「今まで私母樣の子だと思つてたらみんなが貰ひつ子だつていふのよ」と泣きじやくりながら告げたので母樣は何年の何月何日に產んだ話までまてとしやかに聞かしたら稍かに元氣になつた由ポチの首輪をいぢりつゝ「昔昔浦島は……」と無心の唱歌耳にする度三つの年から育ての親としる筈もないすみちやんがいとをしいお家は大工の頭梁、

○光子さん。色は少し淺黑いけれど丸顏のむつちりとした好きくする某官吏の子今朝遊びに來たので母が戯れに「光ちやん政雄のお嫁に來て頂戴な」といつたら其答が振つてる「あのねおばさん怒ちやいやよ私政雄さん不きりようだからだめおばさんのお嫁にだらなるけど」……障子の蔭で十一の弟が「お光の馬鹿野郎ッ」とさけんだので一目散。

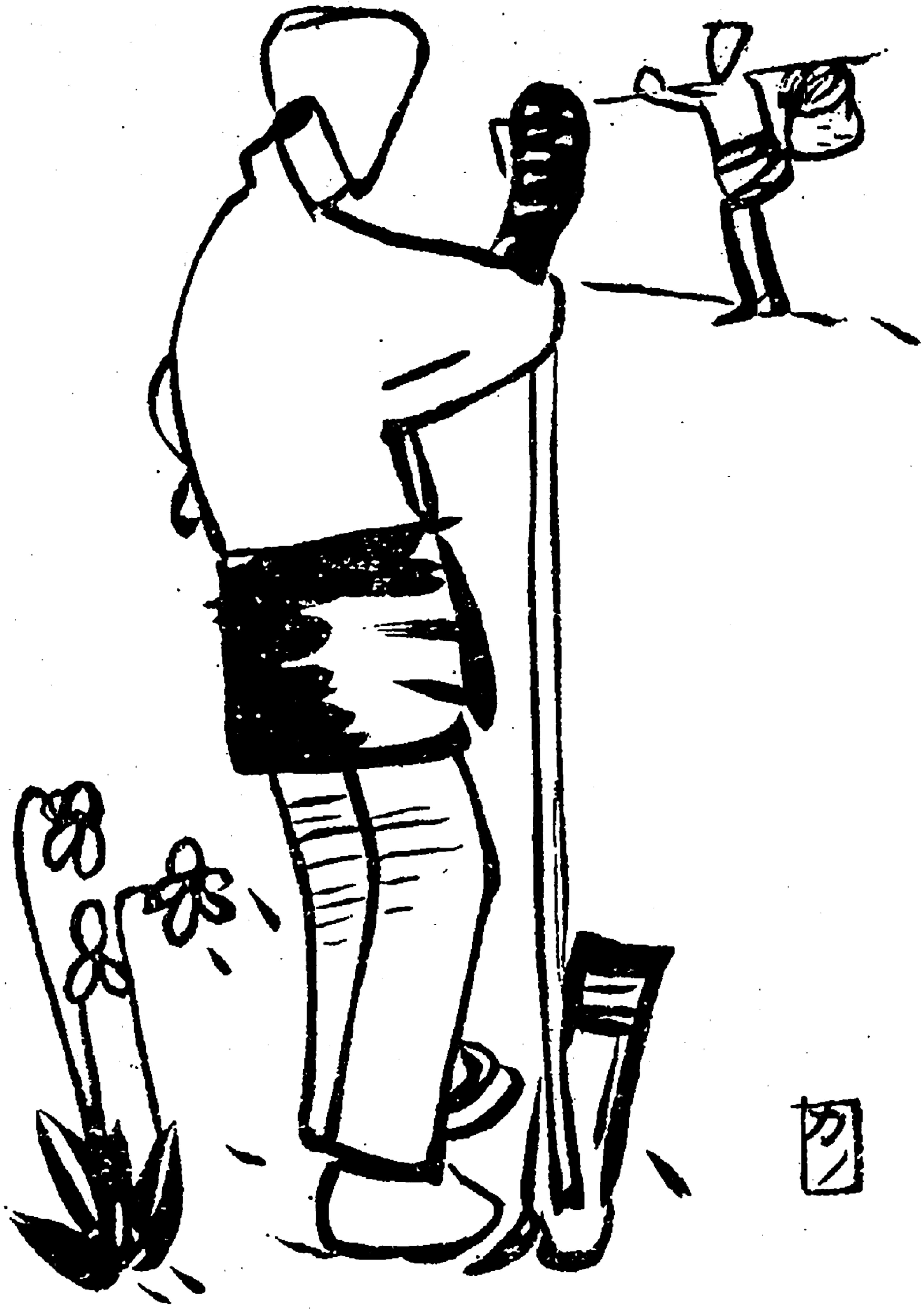
○辰次さん。親類中での腕白者生後間もなく父樣の吸ふたシガーが右のびんに落ちて八年後の今は氣の毒な程い疪友達に電氣燈なんて呼ばれても平氣の平左「はげのある子は今にえらい大將になれる」と母親が涙のんでの慰め言を眞に受けて「オイ勇ちやんははげないから大將になれんねと大威張

○弓ちやん、當地で有名な待合の秘藏つ子「大きくなつたら何になつて」と問へばにつこりと片えくぼさも得意げに「きまつてらアねあたいは藝者になるのよ學校にはいつてよく勉強しないとよい藝者になれないつて母さんがいつたからあたい來年からせつせと本を讀んでねえらいのになつてよいお客樣をたんと持つて母樣にお小使ひあげるのだわ」とませた口振り三つ四つから見樣見まねでもぞ肌ぬいでのお化粧上手には誰もアッと感心するさう。

○智惠ちやん。私を見つけると一丁もさきから飛んで來て袂にからまる人なつこい子或日「家に宿りにいらつしやい」といつたら赤い顏しながら「私ね時々おそそするからどこへも お宿りにやられないの」て泣き出しそうなので「ちやお便所背つていらつしやい」とからかつたら「だつて父樣や母さんや花子が今夜するとこなくて泣くでせう」と大心配。

○お金ちやんと秀雄さんは貧困な駄菓子やの姉弟兩親行商の留守居役何を口論してか秀雄さんは大聲を振りたてて「お金、お金は爆やだ頭の眞中にうなぎの蒲燒何てまがいんでせう」と放歌ずると又ワット大突擊……夕立がからりと晴れると二人連れだつ石段の下旦那樣きどりの秀ちや

んは聞いからじて「オイお金ッ飯を出せ」―今泣いた烏のお金ちやんいそ〳〵とお菜をきざんでるすゞ
ふ振りに私は時々お〈その宿替〈を演じる。
子供を研究するのも將來の賢母の役だらうが、こんなのでは逐つかぬ。そんなむづかしいことは別として。此文章は一寸書けてある（S）



農夫　　山口縣　福畑かの子

甲賀誌友會の記

鈴蘭

朝、日曜學校のすむのを待つて靜江樣愛樣等と三人で會場の飾り付けをする皆さま目ざましい働き振り、門の十字の下に、つるした女子文壇誌友會の貼紙に異様の眼を注いで行く人がある、それ等にも私等は愉快を叫ぶので有つた。

開會の定より、晴れた初夏の光線はグラスを透して入る、一人二人―三人と來る誌友は皆見知てゐる方許り、一時半頃に十人となつた郡内の方許りで他からは一人も―少々物足らぬ氣がした、文藝談をすると云つてらした人も、何だか女の方許だから恥づかしい―てお斷り、いづれもベールを取つて心から交りませうね、唯是れだけを開會辭に換へて、種々なお話が出る、ゾラの短篇物、洪水のお話をすると、皆樣、詩の朗讀、對話等を遊ばす、竹島さまの獨唱に一同恍惚となる何を云つてもかうした人の集りは、何となく全體の氣分が他とは違がふ、それから句合せをやつて見たら、こんなのが出來た、漁りする舟は湖上に月踏んで、初蝉の聲に逆らふ蛙哉、まだ有るけれどよしませう、其れから又誌友作家評や、いろ〳〵と話は泉のやうに湧く、お茶菓子を戴いてると、夕商ひの聲がぼつ〳〵聞える、名殘りをしかつたけど近々再び開く事を約して會を閉ぢた、一所に手をつないで閉會の歌を歌つた時は、云ふに云へぬ氣持ちがした。小數では有つたが、かうして睦まじく語り合ふことの出來たのを心から感謝した、本當に樂しい一日で有つた。（五月七日）



詩の言葉（七）

暑熱

一天晴れてそが下に
かゝる炎の野はあれど
物鬱として寂寥の
きはみを盡す折しもあれ
皺だむ象の一群よ
太しき脚の鈍光に
うまれの里の野を捨てゝ
大沙原を横に行く（ルコント、ド、クイル）

大畫熱、大炎天の砂漠を、象の群がゆ歩いて行く詩の一節である、炎熱を想ふに此れ程盛んなことはない、想像の境ひとしては話にもありさうだが、斯く具象的に表はして來ると感じが深い。

「夏」の帝の「眞晝時」は
大野が原に廣ごりて
白銀色の布引に

青天くだし天降しぬ
寂たるよもの光景かな
輝く虚空風絶えて
炎のこころもまどひたる
地の熟睡の靜心（同上）

夏の眞晝の天も地も熱し輝き切つた時には寂寞の恐怖がある、地は心しづかに熱した眠りに落ち、天は白銀の光を降らして、自然は眩惑と威嚇にあへいでゐる時、人間の心は何を思ふであらう。

草のいきれ
赤い花
まつしろに輝く野の小石
午後の空は眠つて
日光がしたゝる（露風）

赤い花、青い草、白い石と印象的に表現して、何等技巧を累はしてゐないやうな處に巧みがある

目がぐら〳〵する
日光が私の心を
力一ぱいに壓してゐる（同上）

これも右と同じ詩の一節である、何の技巧もないが感じたまゝを自然に表はしてある處が新しい。

華なき徑に石焦げて
野に鳥啼かず、蜂飛ばず
呻くは涸れし沼ちかく
死なむと喘ぐ雜草のみ（胡夷）

夏に燒かれた野の自然は、生きもの丶死なんとする苦痛に似たり大木の梢の葉さへ裏をかへして灰色に萎れてゐる

砂ぼてり——草のいきれ——
火藥のあとの煙り——燻る肉の匂ひ
屍
血
赭土の丘
夏のひるの光（柳虹）

其處へ兵士が來た、傷の痛に堪へかねて草の中へ倒れた、血の流れ白い煙、水は一滴もない　燒けた土、火藥のにほひ、蠅：「死の苦しみの歌」を歌つて居るといふので悽慘たる戰場の景熱が表現されてゐる。

いや蒸しに夏の夕は
風の呼吸暑さの淀を
練りかへすたゆらの淵や。
河岸にたつ材小屋のうちら
大鋸をひく鈍きひゞきは

疲れぬる惱みの齒がみ（有明）

木挽小屋に材木を挽く大鋸の響に、夏の心持を巧みに見出したもので、鋸の響などは一寸通例の人の氣のつかぬところで、また何處か暑熱の心持に通つてゐる。

夏の午後の日はカン〳〵と、境内の乾き切つた砂の廣場の上に照りつける、木立の緑を通して、赤や、オリーヴや、紫の女の洋傘が動いて見える（散文詩、花外）

此は淺草公園の夏の日の印象の一つであるあのやうな熱鬧な巷の夏の日の印象は、複雜した色と響と光とに充滿して、一々描寫するのは大へんである。散文詩ならばいくらか其描寫が出來る。パラソルの動いてゐるのは夏らしい光線を思はしめる。

私は砂を掘つて、だん〳〵手を入れて行くと、日の溫が殘つて居るのが指の先に感じられる。指が自然と、その溫の中に深く入つて行く――私は烈しい日光の直射して居る晝の光景を思ひ浮べやうとした。（散文詩葉舟）

暮れて間の無い夏の海邊、まだ何處となく晝間の火氣が其邊に漂つてゐるやうで、砂に手を入れてみると熱い、砂に指を入れて溫熱を感ずる官能的な心持は、これだけでも一つの詩歌的情緒が動いてゐる。

柔かき乳房もて頭を壓され
幼兒は怪しげなる何物をか感じたり
何時までも何時までもうるさく、なつかしくやるせなく
身をすりつけて女は呼吸す
その汗の臭の強さ、くるしさ、せつなさ
恐ろしき何やらむ背後にぞ居れ（白秋）

此は三歳の時の記憶を辿つて作つたもので夏の日に或る女に放尿させて貰つた其時見てゐる人が何かしら笑つた、自分は石竹の花が眼に泌むまで映つたと云ふのが一編の主意になつてゐる。三歳の時の記憶と云ふのは殆ど空想に近い、空想に近いが此記憶などは有りさうなことで、又甚だ面白い印象を殘したものだ。此作は『思ひ出』にある

狂亂の日に光吸ふ。（白秋）
日は血を吐く悶あか〳〵と。（同）
南國の熱病雲。（同）
空には赤子飛びみだれ。（同）
濡れ黃ばむヒステリーの夢。（同）
雲あかくもだゆる日。（同）
色赤き郵便函のみくるしげにひとり立ちたる。（同）
血紅色の日の光。（同）
泥舟の鉢の撫子。（同）
眩暈く水の面。（同）
小蒸汽船の灰ばめる鈍き唸や。（同）
日は爛れ、大地はあはれ柚色の熱黃疸の苦痛に吐息も得せず。（同）

以上は白秋氏の作中より、暑熱に關するものを一句づゝ拔いてみたので、氏の作殊に『邪宗門』の諸作には南國的の熱と光が充ち滿ちてゐるから『邪宗門』其ものが暑熱を代表した詩集と云つて好い。

夕日さながら繪の如く
岸の柳にうつろひて
汐みちくれば水禽の
影ほのかなり隅田川
茶舟を下す舟人の
聲遠近に聞えけり
水をながめてたゝずめば
深川あたり迷ふ夕雲（藤村）

『鮫人』の一節、之も夏の心持



朝立夕立

蘇生法師

▲すこし深い息をすると胸部に微痛を感ずるやうになつてから、大方は臥てゐる。これで熱が有つてこはん〱と來れば本物だけれど、肺病はもつと好男子にあるもの丶由、少々安心に候。天井から吊してある障子と襖が顔の上へ落ちて來さうで上向いては眼が明けずこの文は宙に紙を持つてゐて書くのである、若杉から電話で醉茗に斷つて貰つた通り今度は六號を止めるつもりだつたが、今日は氣分が好いから吉例に背くもどうかと思つて筆を執る原稿料をそれだけ多く貰ふからいい。

▲金田芳子君は「到底かなはぬ」と白旗を立てた。詩を選評してるとかいふ「くれなゐ」を見ると和歌が別席に出てゐる。風ぞ吹く靜まり又も吹出ぬ目が心の波立つる如、朝月の影踏み行かば霜柱くずるる音の身に泌みる野路私の鑑推がふり下されぬ前によし子君はすでに自殺してゐたのであつた。

▲「新文章」の顔ぶれを見ると「三階惣出皆狩り出した」と見える、百號紀念の失敗は充分取返せよう。寫眞を借りに來るだらうと思つてゐたら「今の詩人」ので懲まれて懲りたと見える、主筆は鋼いから話せない。

▲淡路の人であらう、匿名で鳴門蜜柑を贈つてくれた方がある、芳香無類、私はあれを喰べてからそこらの夏みかんが嫌になつた。序にいふが醉茗が一切のくだものを喰べないのは事實である、私が人が惡るくわざと喰はぬように書いたと思つた人もあるさうだが、奇蹟は詩人の上に在るのだからしようが無い。醉茗はもと刺身も口へ入れなんだが、此頃は進化して喰べるやうになつた、も一つ進化して「いちご」や「ばなな」や「ぶだう」やを味はしたいんだが。

▲雪嶺博士の令孃麻布第三に在り、早川の妹をつかまへてつうちやんつて、あなたでせうとよく言ふさうだ、ねいさんのやす子さんもやはり、「新文章」に來てゐる。

▲篠田富子が上京した、たぶんおめでたの爲である。いづれ本人より左文字で知人に通知する筈だ水野仙子さんも「上京」した。註に曰く前の上京は本との上京だが、あとの上京はあたり前の上京ではない。

▲「上京」かういふ、新語を使つて隱約のうちに事をつゝんでもなほ私は口が惡いと言はれなければならないだらうか、尾張の佐分ふみ子君寫眞を獻上して來てたんと惡口をおつしやいませと言添てある、物を貰つた時すらお禮の代りに惡るくちを言ふ男と私を思つてゐるのだらうか。草の門が正月に撮つた寫眞を見て、こりやはこせこの方が美人だとつい言つて退けて取上られはぐつたから、これからお世辭で丸めて何とかでこねる積りである、安價したつて元手の切れる心配も無し「美人」「別嬪」「艶麗」「窈窕」お望み次第頭の上にくつつけて上げよう。

▲「三枚重ねの孃さんが往來で小便とは成程田舍だ」と言つた先生、若し京都と大阪が君のいふ田舍の中に含まれてゐるとならば文句はないけれど、京大阪は都會である田舍ではないとおつしやるなら、御氣毒だがわれ〱田舍者の面目にかけても君の言を撤回させる。何故と言ひ玉へ、僕は往年三十日ほど大阪――醉茗白羊兩先生の故鄕に滯在したことがあるので、立派に Tachishoben の好きな京阪美人の「美點」を見てゐる。「花守日記」に一切を書かなかつたのは實際開いた口が塞がらなんだせいだ尤ありや超凡脫俗には相違無い。

▲乃木大將、加茂丸のサロンで、東郷デー（五月二十七日）に列席した某婦人に、しこ草の茂れる中に一本の花と咲いてるのはあなただといふ歌をかいてやつた爲に、はたからそれでは我々は皆醜草かと物議を起したさうだそれに先だつて二十日、上野で開いた女子文壇の誌友會で自分は別嬪の旗頭を若杉はま子だとしたので、そちこちから小言が來て弱つてる、めん倒臭いな、鍍金の孔雀、銀の麒麟、翠微薔薇垂鬢辰月、珠壓腰被隱稱身、一人のこらず美人にしておけ。

▲午窓檻を過ぐ尾巴何としてか過ぐることを得ざる、白羊先生、誰やらのお株を奪うて六づかしいことを言ふ「記」「紀」が何の事か「文選」をもんぜんとよむを知つてる者は讀者に十人とは有るまいと嘆じた人が何といふ嫂りやうだ、尋常高等小學校敎員の九字を正しく假名で書ける先生が少ないと同じに、たとへばむかうじま南殿をなでんと書き得る投書家が幾人有らう。

▲「うしろから馬車が來ました夫婦づれで」馬車の夫婦と言ふ國もあると見える先達は僕の方で雌馬の厩へ夜中推參に及んだ戀のやつこがあつた嬶あ來いとでも言つたかして。二匹で一二里ばかり山の中へ驅落して行つてゐたこれなら馬の夫婦だけれど。

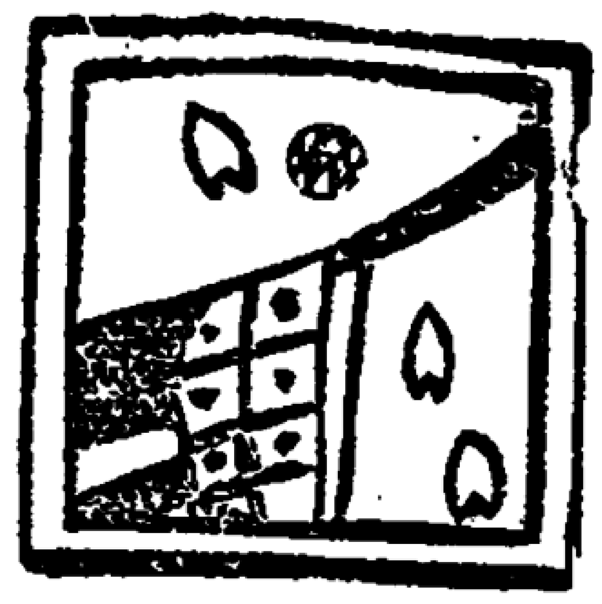
▲和歌の浦に泊つた晩、和歌山女學校出身だといふ下女に早速らぶつてしまつて「私して上げませう」と耳にせつせと否やさ大切さうに掃除してくれる其心もちといつたら君、僕はもう………君」作者は金田露花でも御亭主と仲のいゝことを書いたのよりは罪が無い。「新文章」の目次を見ると「揚子江畔の新婚生活」がある、齊丹の用意をしてから讀むことだ。

▲あなたには讀んで貰はなくても新婚の人は言ふだらう可愛がつてくれる方があるんだから御尤千萬である。この團子は甘いよと散々見せびらかしておしたぢのついた皿までしやぶらうとなさる御男氣はまことにりん／＼たるものあれど、こちの人一名やどの君との御むつごとはさうまでひとに聞かせたいものでせうか。それとも鏡花が言つた通りおのろけを聞いたから、頭痛がするつて、生理上そんな筈がないわと仰しやいますか。

▲「君の善爲劍は觸るゝもの皆斬るんだから物騷で困る」と醉茗から言つて來た、さうかも知れない。「こはい先生だこと」千家男爵の令孃もうはさしたといふし、どちらにして誤解だけれど、新夫の愛にとろんと溺け切つた美人が目鼻まで無くしてるのはあんまりでせう、少々は氣つけぐすりも差上なくちや………

▲英國の某雜誌に、日本人は生後一ヶ月にして名を與へられ、二歳第二の名を附せられ、十五で第三の名を附せらる。一定の職につく第四の名結婚の時第五の名を與へられ、死後に最後の名を與へられるとある。僕は生れた時「ねんねさん」だつた、それから「坊や」だつた「まる」となり「まあや」となり、「まあちやん」より轉じて「とねまる」「とらじ」となつた、「若旦那」たる時もあるが、結婚の名といふのは無い。死んだあとの名は醉茗がつけてくれる筈だ。序に云ふ、醉茗の名は「幸三郎」で且「又平」である多分一つは奥さんを貰つた時のであらう。

▲按摩が褌を引張る犬が喰はへる大津繪とは違ふ、夜暗い座敷から猫が白い褌を長く引いて來たので、家人がびつくりして端を捉へたら、中に鼠がむく／＼と動いてゐた。常陸は鼠が多いと見えて山田邦子が來た頃パンの屑をころ／＼轉がしては、蚊帳の圍をかけて歩くので、髮をかじられては大へんだと、ちつとも眠らなんだ、セツトランド島のパパリツトルには一匹の鼠も居ない、こんな處なら邦子さんもあの長い髮を庇ふ必要が無かつたらう。



俳句

内藤鳴雪選

○(天)
掛香の此臂天下より重し　越後　藤原泣黑子

○(地)
螢來て戀しき里となりにけり　播須賀　加藤楓子

○(人)
戀人のあらばと思ふ卯月かな　千葉縣　鶴岡一二三

秀逸

川渡る旅人共や青嵐　尾張　榊原竹雲
文殻を拾うて讀みぬ夏の月　福山　古城
酒積んで舟着く岸の若葉哉　尾張　加藤靜枝
駕舁の物知顔やほとゝぎす　深川　山田花子
新涼や葛の花咬む里が馬　淺草　露木あき子

虚言いふて晝寢を起す鸚鵡かな　大和　西田こよ
湯を出でし乙女姿や青簾　岡山市　桃のむら女
雫してゆらゆらく動く柳かな　王子町　高木姫百合

姫百合の根元に清き野川かな　根室　齋藤ふじ
此の一村の行くも歸るも花菖蒲　青山　高力かざし
砂山や二尺の松に蟬の聲　近江　植村春子
茫々と海一面の月夜哉　河内貞子
菊の香のたゞよふ庭や酒一壺　府下　小島美雪
蜩の鳴くや淋しき野雪隱　下野　高村たき子
親心螢とる子の行衛哉　本郷　城本美知子
若鮎を火に炙るとてあふぎけり　福山　松下二葉
梅漬や桶に一夜の紫蘇の水　越後　藤原鍋女
關東の山々晴れて幟かな　島根なつ子
椽先の月に振ふや蚤の衣　出雲　人の妻
此桶に涼しき鮎の眼かな　島根　百合子
苔の碑の芭蕉の句とて清水哉　宇都宮　松竹玉子
時鳥浪華訛の女かな　宇都宮　松井鹿韮子
大屋根の草六尺や夏の雨　小もゝ
田草とりしひるの女も浴衣着て　山城　木の花
しばらくは宿も定めずほとゝぎす　渡島　川原華子
山宿や溫泉をひく筧百合白し　伊勢　駒越くに子
色しろき馬上の君や夏の月　伊豆　鈴木けい子
紅椿誰が供養して墓の雨　神戸市　足立春子
くらき森に美男かづらや人知らず　和歌山　宇田すが子
入相の鐘のひゞきに萩や散る　根室　とき子
懷しう見上る堂や春の灯の　下關　木本蘭子
春雨に昔偲びし京の宿　神戸　森花愁孤
行春や野に暮殘る蝶の影　大垣　相馬きそ子

睦じき若き二人や夕涼　西多摩　足利じゆん
夏の月町出放れて遊びけり　尾張　野々垣靜子
流星のかなたにおちて風すゞし　佐賀　さゝ舟
旅にねて雨きく夜半の遠水雞　府下　佐久芳枝
高髷も涼しげに結ひて衣更へ　熊本縣　しらはぎ
夕月に照る白露の門田かな　三河　槌谷ともえ
金魚賣る聲急がしや夏の月　磐城　齋藤すみれ子
池の岸白百合咲きて金魚かな　尾張　銀波
鳩遊ぶ宮の木立や櫻ん坊　宇都宮　きく子
山に添ひて舟漕ぐ人や青葉影　伏見　阪芳子
涼しさや椽に動かす猫の耳　大阪　田野靜子
紫の小茄子涼し今朝の露　宮城　齋藤英蓉子
初夏の島がくれ行く白帆哉　新舞鶴　菅幸子
一人寢のおもき枕やほとゝぎす　丹波　大槻房枝
五月雨に濡れ〱聞きぬほとゝぎす　横須賀　藤村子
遠蛙其の儘夢に入りにけり　上毛　荒井よし子
物思ふ人もてらして春の月　渡島　宗原美津子
沖の島に渡る小舟や夕時雨　豐後　北山らく子
瀧殿や月照りそひて松の風　長崎市　永井主子
水亭や夜中に渡る蓮の風　名古屋　山田楓花
三日月や舟さしてきく時鳥　宮城　馥子
涼しさの少女の群や青葉影　美作　水田邦子
月出でゝ涼しき里となりにけり　關屋愛子
饅頭屋の釜の煙や鷄の聲　長岡市　星野小百合子
我戀は復も淋しき夢さめぬ　佐渡　美穗子

のぼりつめし比叡の山や風薫る　牛込　枯葉
夏木立七峰八峰續きけり　松本市　矢口貞子
我が庵は啼かずに過ぎよほとゝぎす　渡島　田山きよ子
日ざかりや衣桁の衣もねむさうな　廣島　美喜子
初旅や夢なき宿の箱まくら　廣島縣　後藤あや子
緋の袴嵯峨野の露濕りけり　筑前　岡村鈴子
昇る月窓に寢見んひとりかな　尾張　藤八重子
おばしまに月見る人や衣白し　廣島　翠子
秋雨や門に札して琴指南　東京府　竹村千枝子
岩の蔭涼しき杣の小家哉　安藝　竹之節子
青葉よき堤十里や風かをる　大阪市　小泉さだ子
短夜の鐘の恨みに戀もなし　牛込　西村しのぶ
涼しさや廣間を夏の風渡る　加賀　村田いと子
湯上りや素肌に君が繪帷子　長崎市　あやめ
涼風や厩に秀でし松一木　伊勢　向井光子
ほとゝぎすあかでかなしきあま戸哉　山梨　吉田邦枝
寅年の願札打つや夏木立　岐阜　萬の葉
夕べふる五月雨淋しつばくらめ　京都市　今露
短夜や八十の翁莞爾たり　淡路　内海千鳥
岩清水ぬゝ捨て飛し小百合哉　ゆうづき
ふねをよぶこゑもさえけり夜の秋　常陸　仲田百合子
嵯峨山や青葉茂みて雨煙る　美作　瑠璃
山雀にすり餌あたふる日永哉　越後國　山田溪蘭女
吾が戀の數計りさく百合の花　港の女
夕立や石の凹みに月の影　備中　野崎よしの



初作　編輯局選

○私の望（天）

白露女

三年前私がまだ古郷に居りました頃と、斯ふして都會へ勉強にまゐつて居る只今とは、殆自身でも別人かと思はれる程、性質がガラリと變つて仕舞ひました。第一着物の好みからして左樣で御座います。田舍に居りました時分は、ごくじみな色合もなるべくくすんだものが好きで、母が一寸でも派手な品を買つて參りますと、すねて、どうしても着ませんでした、所が今は其の反對だから、おかしゆう御座います。田舍で一人の友達もなく單調なまあ波風の立たない月日を送るのは若い青春の血の盛んに燃つゝある娘達には、とても我慢が出來かねる事だらうと存じます。私なぞも現に其の一人なので…… ……田舍は閑靜で空氣がよくつて景色がよくつて殊に秋なぞは木の葉がだん〳〵色付いて風もないのにハラ〳〵散つてくるなんとなく淋しい感じがする………

なんて若いくせに、病氣にかゝつた詩人めいたことをいつて得意がつたり喜んだりする娘さんは私は嫌ひ、出來るだけ花やかに出來るだけ美しく娘の時代は二度とは御座いませんもの、十分、自由に花に戯るゝ胡蝶のやうに遊んで置きたいと私は考へて居ります。私は三味線も習つてある誠もピアノも、バイオリンもやつて居ります、そしてどれも上手になりたい、だから一心に稽古を勵んで居ります、まあ只今の所では苦勞とか心配などゝいふ事は着物を母にねだる時、早く習つているものが上達するやうにとの願ひ位なものでまあ氣樂――の頃とでも申すのでせう、が時々私は妙な考へに沈みます、それはかうして一日一日と立つて行く月日は、私をどういふ運命の前につれて行くか、いつまで此の氣樂さが續くかといふ事で御座います。私も女と生れた上は早晩妻――とならなければなりません、母が勝手に定めて「お出」といへば「ハイ」といつて行かなければならぬ運命を持つて居ります、妻となつては、又母となつては、そう〳〵三味線にばかりかじりついて居るとも出來ませんでせう幸ひに同じ趣味の夫をもてばこれに上こした幸福は御座いませんが、世間から直ぐなんとかいはれねばなりません、私は心から音樂が好きで音樂の犠牲になりたい……とさへ思つて居りますが、只一人の娘に母が一生を音樂の犠牲になる事を、ゆるしてくれるかどうか、おぼつかないかぎりで御座います、私は或る方に此の事をお話したら「そんな事をいつていらしつても、いまに子供の口から出る音樂の方が、どんなに樂しみになるか知れませんよ」斯ういはれた、時、私は、かつて味はつた事のない一種のもの悲しさにとらへられました。

マア今から悲觀せずに一生懸命に三味線でも、バイオリンでもおやりなさい(評)

○午後二時（地）

近江なちぐさ

裏の家の又裏の、桑畑に桑つむ人の、美くしい唄聲が聞こえ出した。高く、ひくゝ、尾を長く引いて、恍惚と人をよわしめるやうな唄の節、透徹るやうな美くしい聲の主は、だれだらう。私も一しよに、歌つて見たい、やうな氣がする。つり込まれたのである。

縫ひ掛けた、ひとへの袖をおしやつて、うしろのかべにもたれ乍ら、ヂツト聞いた。

目のゆく限り雲一つない、瑠璃色の空に鳶がゆるう、輪をゑがいて居る。

蜻蛉が二疋、はいつて來て、そこな、あまだいの上で手をもみ〳〵あたま

を、つるりとなでた、と見るまに、ブンと出て行つた。井戸堀の壁が遠くにきこゆる。今まで音も無かつたお節句の、こひ、が急にがらくゝなり出した。

田舎のひるは静かだ。門通る人の下駄の音が妙にひゞく。ふと、きのふ、おつかひの帰り道大矢様に居た婆やさんに會うたので、八重子様をお伺ひしたら、先月お嫁入なさいました。とむぞうさに云ふたのを思ひ出した。

何とも云へぬ寂しさを感じる。つい、せんどさう、三月の末だつた、私のお伺ひしたのは。けれど何とも、おしやらなかつた。

早いもの、あのお方に初めて、女子文壇お借りしてから知らずくの間に、二つのお正月はすぎ去つた。私等のやうな者にでも、それぞれはよくお話し下さつた、おてゝろうれしさに、あゝもこうもと思ひく遂に、しんみりとお話し、した事もなかつた。美くしい人の、島田まげも、ついに見ることは出來なかつた。思へば、短かい、お交際であつた、けれど是もふしぎのお交りだつたと思ふ。

私にはお友達は無いのだ。幼な友だちの皆様は京に大阪、東京と、思ひくの、道について居られる。有つてない、私の友、厳格な母とふたりの私には、姉妹も友も無いのと同じ事である。

ほろくと涙が落ちた。何の涙？人をうらむ涙でもない、我が身の上を泣くのでもない、けれど……。なんとなく、落ちたのである。

裏の美くしい唄聲は、いつの間にやらやんで居たねむいやうな。金魚うりの聲さまさきの音や、ひゞきやみな、長閑に耳に入る。

すなほに女らしい姿を想はせる(評)



集ひ　新潟市　寒川元江

○初夏（人）

松山市　遠山公子

六月十一日。鉛色の雲垂れて、朝から蒸熱い日、今朝隣のヤカン様「明日から梅雨だ、五月蠅いこつた」と人事の如に、ど鳴つてゐらした。本當に明日から梅雨に入るのか知ら。

午前八時半。縞モスリンの着物に、赤い繻子の帯締めて、花屋で取つたアマリヽスに矢車持つて師の許に行く。二つ共初夏の好きな花の中の二つだ。

牛の頭の樣に縮つた黒い髪の五十にも間近い、イヤに光る羽織着た人が、キチヨンと御謠の方に陣取つて居た。生ぬるい瞳を浴せながら「お娘の前ぢや何も……」。嘘！嬉しいのだらう。私は常に思ひます、中年の人の妙に女の前で、世辭つたり、にやけたりする事の如何にも、嫌味な事を！

「風早の三保の浦和を、こぐ船の浦人さわぐ波路哉、是よ三保の松原に……」五度も六度も繰り返されたのに、一人に成ると直ぐ、エテ此んな人に通有の、妙な新聞讀の口調(?)に成つて了ふ、可笑しくて〱たまらなかつたけれど、其上よりも〱も、より以上噴飯せざるを得なかつたのは、御年七十六の師の若樣、お發音の度々に、齒の無い緩むだ口邊は、ブル〱と上下動、左右動、ですもの。――純きうぶなる青年の、胸に秘めたる初戀を、初めて戀人に囁いた時！唇、ふるふとは聞きましたけれど……。成る可く見ない樣に、大急で今日は行の中ハギに生けて歸る。

午前十時。緑もぞ濃きユーカリの、影おふ白堊の西洋館、此所で尊き神の御子達の、聲して神を讃美給ふ懷しき響の泉、泉の流れ汲みたさに道の廻りに心も止めず、此處會堂の御前に、立盡したる日も幾日ぞ、とは言へ、思切つて入る事も得せぬ私は、やはり神のみ幸に生くる事の出來難い身なのでせうか？

午後二階で裁縫する。黑潮の流れ流れて、段々と親潮に成り果てる樣に、朝の雲は、次第〱に春空に溶し去られて、梅雨間近い氣振りも見えぬ、初夏の景色となつた、まして簾越の其は、拙いけれど水彩畫と云ふよりも適當な言葉も知らぬ。淡綠の梨の梢も、濃い高杉のモリ〱も、白い物干臺のエプロンも、黃色い女學校の棟も、皆一樣に、小簾の輕く風に搖ぐ間に〱緩く、優しく、位置替へる樣の如何にも夏の心を思はしめ、澄み切つた青空に白く湧き出た雲の峰は、如何に、自然の偉大を知らしめる事でせう。

見つめて、ぼーと成つた私は、もう寢む度くて〱。

玉歩裕かに、自由な肌に、白妙の衣つけた、天津姫は、百合咲く野に立つ私を、ソツト肉色の薄衣にくるんで、行く手、はるけき大空の旅に連れ立ちました。五つの門を潜つた私は同時に、云ひ知れぬ貴い香と、さえ切つた、冬の月の如な音樂とが、泌み渡つて、我と我身の此世の物ではない心地して――。盡きぬ歡樂の小草は、摘めよと許りに咲き亂れて居りましたのに、心行く程摘みも得せぬに、西日射す上氣した頰は輕く秋に覆はれて、此處裁物臺上の醒めて儚い一瞬の夢と知りました。此んな淡い夢でさへ、「醒ざらましを」と願くなるにまして、「思ひつゝ寢れば人の見えつらむ」戀しき君の入りませし御夢は――。

午後六時。ゴーンゴ！ン鐘が鳴る、鐘が鳴る、ニコライの鐘が、あの立派な建物に、あの沈重な鐘がなるのに、何故人はあの教會を祝幸しないのでせうか？鐘がなる、鐘がなる。ゴーンゴーンと、暮れの哀愁を一人が占めて……。

此初作は餘程ひねてゐる、瓜の初ちぎり處ではない(評)

○隣室

わくらは子

私が駿河臺の某病院に入院してから今日で漸く三日三百餘に餘る病室は皆ふさがつて居る、私は病人つてこんなにある者かしらと驚ろいてしまつた。今朝御隣りの御室があいたと思つたら何時の間にやらKMの札がかゝつて居る。御室の主は丈のすらりと高い黑紋付の御羽織召した二十四五の一寸學生らしい御方である。一ッ橋……私の頭はこう叫んだ、何うやら高商らしい高商であつてほしいと私は思つた、一ッ橋……私には終生忘れられぬ所だ、兄は高商の生徒であつた、しかも名譽ある優等生あゝ思ふまい、兄の亡き今日、五月十九日何うやら同じ學校の生徒らしいKM樣を見ては、同じ上り藤の御紋を見ては、つとめて忘れやうとする事が一時にあらはれてお隣りの主がなつかしくてたまらない、二度…三度……私は通つた、正直に前を見ながらも私の心は、私の眼は始終隣室をはなれなかつた、看護婦も居ない、附添も居ないガラン……とした室の眞中に彼はあをに寢て居る、私の同情のすべては彼にそゝがれた、出來るなら看護してあげたい兄とも思ふ彼の君を、然しどうしても隣室

へ入つて行く勇氣はなかつた、私は前を通る度に妙に悲しくなつてうなだれるのであつた。
凡てのことを自分の身に引きくらべてみないと、承知が出來ないと云ふこと、それでなければ心をうごかさないと云ふこと、婦人の通弊であらう（評）

○別嬪さん

梨花

私が多分九つ位だつたと思ひます、田舎には一寸見る事の出來ないほどの美人が私の家へ出入するやうになりました。名を操さんといつて年は三十近いと思ひました、それは〳〵垢ぬけのした意氣な人、指の爪をいつ見ても一厘も延ばした事がなく、實に美しい人でした。

私は其人が何の爲に出入りするか知りませんでした、けれども今まであまり音樂を好まなかつた祖父が急に大好きになりまして二人の姉達にハンドオルガンを買にやつたり三味線やら月琴まで買つてやるやうになりました、そして三味と月琴は操さんが毎日のやうに來て教へますハンドオルガンは獨學びてブウ〳〵やつて居りました、しまひには踊りまで習ふやうになりました、ですから一村七十戸といふ片田舎でこんな騒ぎをして居るのですから評番はすぐに八方にひろがりました、私が小學校へ通ふ道すがら村の人に逢ふと「りかさんの御家へべつぴんさんが毎日來るさうですね三味線の先生ですか」と聞かれたものです、すると私はいつも知らない！と答へました、其癖誇り顔に、こんな事が三年ばかり續いて居ました、或る日操さんは東京へ行くといつて暇乞ひに來たきりぱつたり來なくなりました。

其頃からでした祖父の持病が急に重つてむづかしい事計りいつて家中の者を困らせたのは、

もう三味の音もしなくなりました、はしやいだ操さんの聲につれて踊つた姉達のうたも踊りも忘れてしまつた頃、祖父はとう〳〵此世を去りました、其夜離れの庭で何かしら大きな音がしました、皆驚いて父と兄は二つのピストルを用意して男に提燈持たして道へ行かうとした時、ふと祖母の居ないのに心づいて二聲三聲呼びますと返事もなくすつと出てまゐりました、そして、皆騒がずともいゝよおばあさんがしたのだからといかにも落ついた聲で申しました。

其夜は恐ろしく少しもねむれませんでした、翌朝早く離れへ行つて見ましたら、庭に大きな植木鉢が粉のやうに打ち破れてありました、それは操さんからのもらひものだといふ事を聞きました。

櫻の時と菊の時は必ず上京して價にかまはず氣に入つたものを買つて來た其等は今猶祖父の生存中を思はせます。

祖母はまだまめにひいばあちやん〳〵と四人の小供等になづかれて居ります。

私は年月を經るに從つて之等の理が解りそして痛切に思ふやうになつたのを悲しみます、べつぴんちやんが毎日の來るを誇りに思ふやうな無邪氣であつたので御座います。

途者に書いてあるが筋が少し分らない（評）

○若き日

名古屋市　登貴靜子

投稿‥投稿！雜誌を手にすると私の頭には直ぐ浮ぶ文字だ、堅く閉されし少女の胸は美しい秘密が渦をなしてゐる、その胸の扉は容易に打ち明けられるものじや無いけど、投稿！此の文字こそ初めて其扉の鍵だと私は何時も思ふ、そして能く筆の立つ方々羨まずには居られ無い。私だてうら若い十八の春を抱いて、少女と云ふ華やかな名の下に世を送る女ですもの、散り行く花の梢を眺めては、花の色は——の歌の心も思はれます、中秋の月冴ゆる夜は何やら言ひ知らぬ悲しさが身に染々と滲み渡る事も有ります、其度毎に廣い世の中には私と同じ思ひで此の春みタを物悲しき狀の夜を、思ひ惱みつ悲しみつ、お暮しなさる若い女も有るだらうと思ふ。這麼胸の中を聞いて頂くのは怎うしても同じ若い女に——で無きあつまりません、同じ女でも、母や姉は……姉と云つてももう二人の赤ちやんを抱いて、若き女の甘き蜜語などには耳を傾けてる暇は有

りませんからねえ、怎うしても若い女には若い女達が一番思ひやりの有る優さしい味方ですわ、悲しいこと嬉しいこと色々な事を思ふにつけ、其第一の味方たる皆様に聞いて頂き度い、あゝ矢張……と頷いて下さる方も有りましたら甚麽にか嬉しいでせう、私はつくづく投稿がして見度いと心は矢猛に逸ります、けど駄目です、人様がお書きなすつた偽らぬ若い聲を聞いては、まあ、私と同じに此の方もねえ、と吸ひ込まれる様に我が身を忘れて泣いたり笑つたり致します許りで、いざ自分の思ひを、と筆とれば十分の一、否え否え百分の一程も言得ない、のぢや無い書き得ないのです、何んて口惜し事だらう、私、御文才のお有りなさる方を羨まずには居られません。

女子文壇は多くの雜誌の中でも私のハートには一番強い印象（イムプレッション）を殘す若き友です。

正直に思つた通り書けてあるのが宜しい（評）

○五月雨

新潟　歌子

赤い牡丹模樣の襦袢の、縫ひさし絲をふつと切つた。手早くたゝんが机の下にしまひ込む。そして無意識に筆を取つた。御なつかしき潔樣五月雨が降らなかつたら。また長い御無沙汰するところでしたのよとこう書いたけど後を書く氣にもなれなかつた障子の外には細かいくく雨が降つて居る。朝から降つてゐるのだ小止みもなく降つてゐるのだ。部屋の障子を開けると、煙の樣なものがひしくくと入つてくる、あゝ嫌やだと思つてもゝなぜか障子をしめなかつた。私は白い霧の樣なものにむせる樣な思ひをして外を眺めてゐる。こうした雨は綠の柳にも煙つてゐるのだ。ぢつと見つめてゐると細いくく銀絲の樣な綠が、あやに亂れてあの濃き綠を織り出してゐる樣だ。陰氣々々々々あゝ私は叫んだ。私はこれに絲が近いのだ、矢張りお前をなつかしいのだと、心で叫んだ。やる瀨ない思ひがこの小さき胸頭にさゝへきれなくなつて、細い冷たい冷い絲になる。そして熱した頭の中をスイくくと通つては、この戶外に逃げ出てゐるのだ。あの雨の樣なあやになつてゐるんぢやないか。あゝ頭が重いふらくくするまたこんな事を考へてゐた。母樣が廊下をお通りなすつたのでやつと我に返つた。

○田舍の朝景色

山口　一枝

「登美さんもう起きてもよいだらう隣の清さんなんかは早や仕事に行きをるで」と母の聲に驚いて起き上り度たりない澁い目をこすりながら庭へ下りて見れば昨日は筆の樣であつた垣根の朝顏は、いつのまにか、紅紫、ふちとり、など色とりぐくに露のひぬまの艶なる姿に「お早う」と云はぬばかりにむかへてくれました。

心がすがくくしくなつたので重い庭下駄をひきずりながら朝の花野に逍遙ひ出ました綠濃き夏草の葉末に宿る露の白玉は射し出る朝日の征矢の光に照らされてきらくくと輝きはらくくと散るや美しきが袖にこぼるゝそが草の下分けて流れ行いさゝ川のほとりに姫百合のほのかに匂ひその優しき姿の水にうつる影いと涼やかに……向ふの小道には背に籠をおうて居る二人の草刈乙女の赤のたすきと白の手拭の姉樣冠とがくつきりとよく調和してゐる。

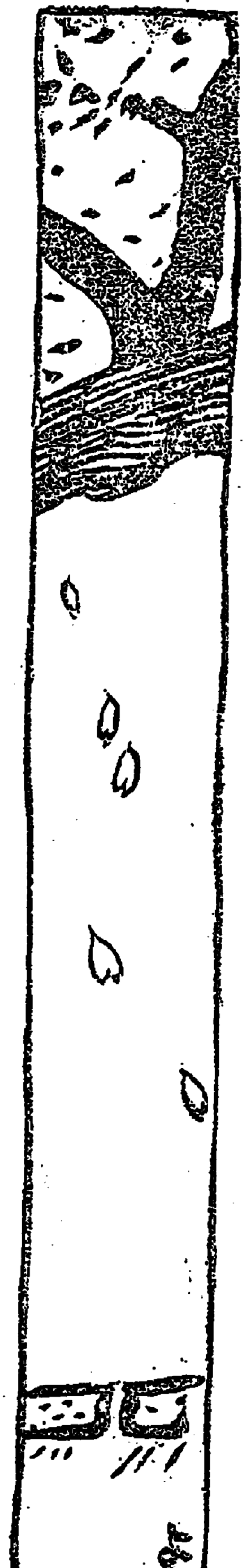
つくり上手に咲せたよりもいつそ野末の亂れ咲き。

と歌ふ二人の聲はいづくともなく吹く朝風に高く低く節面白う聞えてくをる笑つては唄ふ乙女等は其の細そりと雪の樣な足に水晶と輝く露碎きつゝ彼方の野べをさして……………吁！私が詩人であつたら此の麗しき山里の自然の景色を筆にまかして都の本誌友の姉樣へ語り誇らんものを。

初作募集

初作とは初めての投書と云ふ意味です、此欄は卽ち初めて投書なさる方の爲に設けてあるのですから、文章を書いて見やうと思ふ方には何より好い稽古の場所です、振つてお作りなさい、そこで遠慮なく投稿なさい記者は出來得る限り掲げます

誌友くらぶ



○交際

近江國甲賀郡水口町　細野鈴蘭

▲近江の誌友の皆様　お暇がお有りでしたらどうぞお遊びに居らして下さいまし、私は前から縣内の誌友の方々にお逢ひ申したいと、希って居りますのです若しお越し下さるのでしたら、御一報を。

○千葉縣君津郡八重原村法木作　高間歌子

▲鹿野山の麓より　おなつかしい姉様方、私は只一人の姉を亡くしてしまひました、便りに思ふ姉に別れた悲しさ、御同情ある誌友の皆様お玉章繪葉書を交換して下さいませぬか、さうしてこの憐れの子を慰さめて下さいませ。

○茨城縣　田村女

▲常陸の方に御相談　夜雨先生及び常陸の愛讀者の方々にお願ひ致します。私共没書連中の發起にて此度水戸で誌友會を開きたいと思ふのです。熱心な發起者は五六名あるのですけど。これではあまり淋しう御座いますわ。それかと申して井蛙なる私等の事ですから、とても盛大な振った事は出來ませんがね、御盡力下さる方がございませうか、時は初秋、萩咲く常磐パークが好いかと思ふのですが如何でせう、また夜雨先生には同國のゆかりを以て、御賛助下され度あつかましう御座いますが御願申升。甚だ恐れ入りますが御賛助の方は下名まで御一報下されたく尙くはしくは貴い誌上を拜借して御報告致します（西茨城郡北山内村　田村紫色女他發起人、久木野の花、かね子、林子、）

○岩代北會津郡若松市上二ノ町二　鈴木歌子

▲會津より　今度始めまして諸令孃貴婦人御方々様に御美しき御交際を御願致します今では唯母と兄と妹との四人丈けですが兄上は美術蒔繪を業なむで居ります私は今高等女學校に出て居ります尙近い内には福島の學校へ入學致して然る後は先女教師の見込です併女教師は私餘り好みませんのよです けれど母上が熱心ですから私は其の心掛で居ります併前御話致通福島の學校へ行き後は女教師と申様に校内に身を投ずればそれ切り他國を見物致す事が出來ませんものと思ひまして貴孃方様に御交際を御願致すものです會津は山中だと申ますけれ共なかなく名勝も御座いますから何卒繪葉書を御送り下さい直に會津百景の繪葉書を御送りしますから又繪葉書計ではありません色々の小說もありますから何卒願ひます繪葉書は必名勝のですよ。

○埼玉縣入間郡川越町相生町　高森操

▲川越より　田舍に潑して暮らしてゐるものです、寫眞又は繪ハガキの交換を一時的でなく皆樣に望みます。

○府下大崎村字居木橋二一二　向山靜江

▲處女になる　私は此間まで子供でした、少女の雜誌ばかり見てゐましたが、もう處女になりましたから皆樣とも御交際がしたくなりました私は奇拔な手紙が最も好きです。

○福島縣伊達郡富田林大字西福澤西作　高橋てる

▲山里より　妾は山里に住む無學なものです、手紙や繪はがきの交換をねがひます、賊に景色の好い處です、皆樣もお遊びに入らつしやい。

○

芝區愛宕下町四ノ二十一
高橋甚五郎方
佐藤つた子

△戀しき　廣瀨河畔をあとに再び鳥がなく東の都の人とはなりました、みなさん何卒おわすれなくよき方におみちびき下さいませ。

○

長崎市井樋の口一丁目
水上幸子

△昨年卒業　私は當地女學校を昨年卒業致しました者です文壇は昨年から非常に愛讀してをります、しかし投書ははじめです御文才ある諸嬢よ願くば御交通のほどレター御送りの方にはきつと御返事致します何卒ね、

○

德島縣海部郡上木頭村
竹井つる子

△鑛物岩石化石標本　誌友の姉様方の御所に珍らしい鑛物、岩石、化石、がありますなれば御送りください御禮には當地産の何かの標本でいたします、標本は小さいのは折角でも都合が悪ふ御座いますから、なるたけ大きいのを方形にして御願ひ申ます、又末永く御交際を願ひます

○

淡路洲本町幸町三宅醫院內
國分光枝

△短冊　青葉若葉のかげの慕しき今日此頃諸姉様には御變りもなくつて……それからみなさまの中に短冊に趣味を御もちの方々は何卒和歌書いて御交換下さいませ御願ひいたします。

○

神田今川小路二ノ十七米屋方
縣子

△東京市內の方　皆さまレーターの御交際を願ひます繪葉書書物の御交換も願ひます

下野宇都宮市三條町九番地
佐藤方　青葉の里

△手紙が樂しみ　誌友の諸姉様、だいぶ、お暑くなりましたのね、お變りはなくつて？、私ね、こんな山の中に居て、淋しくてしようがないのよ毎日樂しみは、お手紙讀むのと、出すことばかりですの、翠綠したゝる青葉の山、なんて言つたつて、明けても暮れても鼻の先へぶらついてちや、呆れてしまいますわ、何卒皆様！この不束な私を哀れと思召したら御文通下さいませなお願よ、

○

九州肥前西松浦郡大山村大山
尋常高等小學校內
福山いち子

△九州北端より　私は九州の北端に寂しく月日を送り居る不束なる者ですから、諸兄姉様等宜しく御敎導を願ひます、又諸兄姉様等美しき繪葉書及び懷かしき御玉章御惠み下さい御返事は致します。

○

京都府新舞鶴町敎津洲通り
貸本屋內　吉村艷鶴女

△お寫眞　お惠み深き本誌友の諸姉様へ願はくば御自身のお寫眞を贈つて下さいな（寫し日お年等裏に御書添へあれば一層よろこばしく思ひ升）其の代り喜劇悲劇繪葉書（一組六枚各說明付）己が罪、樂しき旅、金色夜叉、魔風戀風、嫁と姑、肉彈、求婚の失敗、血の涙、不如歸、孝女の德、琵琶歌、緣むすび、右十二組の內お好みの一組はお送り申上ます。

○

大阪府下泉南郡大津村
若林ゑ

△泉南より　誌友の諸姉様、私も女子文壇愛讀者の一人ですが、どうか淋しい者と御思召して永久に御交際下さいまし、今は泉南高等女學校に通つて居るのですが、田舍の事ですから、何の樂しみもなくたゞ女子文壇を此上ない樂として居るのです、この上もない親友として居るのです。御情のある諸姉様方どうか御文の交換を願いたう存じます。

○

名古屋市西區長島町四丁目
稻田醫院內　岡田佐賀子

△感じて　私は或る學校を卒業後草深の古郷に歸つて居りましたが昨年十一月兄が亡くなつてより都會へ出て只今にては醫家の看護婦をして居りますが本年二月より本號を取りて讀みましたら餘り皆様の御熱心に感心して私しも之より及ばずながら誌友の一人として投書する心組です何卒皆様以後御交際の程御願ひ申します

○

東京市日本橋區堀江町三ノ二
田中方　馬場立枝

△文學御好みの　御姉上様松の緣の行末長く御玉章の御交換を御願申します。

○

東京市本鄉區元町二丁目
六十五番地佐藤代五郞方
山田芳子

△名所繪はがき　妾は一月此方國々の繪葉書を集めて居ります何卒諸姉君の內で其地の繪はがき等を送つて下さい御禮には北海道の繪はがき東京名所繪葉書等を御送り致します又何卒御交

際を!!

○　徳島縣美馬郡半田
逢坂登亘子

△樂譜　箏曲小楠公、小督、熊野の内何れかをお持ちならば私の箏曲鈴木皷村氏 若秋風の曲と交換下さいませんか御一報下さいますれば 先に御送付致します。

○　京都市東洞院二條下橋本照方
佐々木　富貴子

△京都にて　三十四銀行支店内の英清子樣御近所でおなつかしいわ 私も本誌の愛讀者でしかも同じ事務員よ以後誌上にて交際して頂戴な 又誌上の姉上樣方何卒宜しく御交際を願ひます

○　加賀鶴來町本町
村　山　孝　子

△繪　諸姉樣方よ雜誌の口繪の不用のがありましたら御惠み 被下御禮には繪はがきを進呈しますよ尚永久に繪はがきの交換を御願します

○　信濃東筑摩郡廣丘村
三　村　り　ゑ　子

△私は廣漠たる桔梗ケ原　の一隅に悅樂も希望もない暗い淋しいくライフを送 る者で御座います 誌友の諸姉樣よ御玉章を 御惠下さいませんか寂しい心に熱烈なる 同情慰安の御玉章如何ばかりうれしく思で御座いませう 拙ない筆つたない文で御ざいますが吃度く御返事致ます、

○　奈良市三條通り佐野英三方
ふ　さ　子

△居なく都より　御なつかしき誌友の皆々樣妾は南都の三笠山下に淋しく月日を送る者ですから何卒永久に繪葉書やレター の御交際を願ひます、

○　東京下谷區二長町五十二番地
飯島一郎方　古　田　露　子

△出京　京都に居りまして六月號の當欄で本誌愛讀者の皆々樣へ繪葉書の御交換をお願ひ いたしましたが或事情の爲突然上京致しました 樣な次第、愛讀者の皆樣よりお送り下 されました繪葉書を京都の宅から廻送して呉れましたから、夫れぐ御返事を差上ました つもりで居りますが萬一にもお送り下さいまして 御返事の差上げない方がありましたら、 何卒現住所へ一葉の端書でも……………

○　岡山縣久米郡福渡村大字川口
中　原　幾　子

△樂器　皆さんの内にヴワイオリンの不用のお方は、 縣立高等女學校の敎科書と御交換下さいませんか、 敎科書の方は讀本と英語とか其名をお記し下さいます樣になるたけ早く 私に直接御返事下さいませおねがひいたします。

○　廣島縣御調郡久井村大原內
紅　　涙

△始めて　誌上の御姉樣方御機嫌よう御座いませんの私は始めて此欄に投書致しますの 私は小學校時代から本誌を愛讀し て居ますが其の間の本誌の進歩は著しいですねそれと 共に私の身の上にもずい分ひさんな歷史を 繰りかへしましたあとみかへせば涙ばかりです今はたゞ本誌を 唯一の友とし心の慰めとして居ます、 御姉樣の中でお暇の節には御手紙下さいお願ひしますよ 皆樣さらば

○　福岡市
月　見　草

△建部樣　大和のなでしこ樣本誌でもよろしく住吉村の建部長久子樣私は昨年の 今頃東中洲の井上夏子樣を御たづねしたもので御座います、あの節はずいぶんしつれいいたしました これからあらためて不束な者ですが、 妹としてお導き下さいませ、

○　鳥取市西町三三五
中　村　八　重　子

△誌上の諸孃樣　御聞き下さいませ、 私は朝の八時から晩の六時まで職務に追れて好な 讀書もするひまがありません、 けれ共六時から明朝八時が全く自分の體なのですからやうやく 其の間に讀書する位な事ですの皆樣不束者です が何卒御交際下さいませそれから備中の小見山春子樣どうしてか貴孃が懷しうございます 御住所を御知らせ下さいませ。

○　三河足助町石橋
槌　谷　と　も　ゑ

△本縣　の名古屋の瀧本逸子樣、 發貴靜子樣、鈴木樣、 豐橋の月鹽子樣。 尾張の榊原けい子樣佐分華影樣、 綠葉樣三河の村林きよ子樣本縣の愛讀者諸姉樣不束な田舍 物ですがお交り下さいませ繪葉書手紙の御交換下さいな おまち申して居ります。

○　東京四谷にて村木はな事元の
金　田　代　志

▲上京．皆樣！私は今度四谷の某家にて奉公する身となりましたから御用事や何かは本欄で御ねがひ申上ます出京のさい御見送り下さいました藤枝さん、文さん花さん其の他の方々に厚く御禮申上ます、

○　米澤市免許町一三〇八　佐藤秋湖

▲繪筆に親しませ給ふなつかしき諸姉樣よ一片の繪葉書をお惠み下さいませ拙きものなれど必ずお返し申します親しき御交際を

○　宮崎縣宮崎郡大淀村太田　加賀城豐吉方　さくら子

▲日向より　誌友の御姉君樣よ私は山里に住む小學校を卒業した許りの殘學無智の田舍ですが何卒妹と御思召し御交際下さいませ

○　奈良縣高市郡高取町觀覺寺丁　山田磯子

▲和歌俳句　わたくしは和歌俳句等が好きで御座いますから各地の名所か風俗の繪ハガキに、和歌一首か俳句一句かと記して送つて下されませ、御禮には妾の持つてゐます、スタンプ付の大和名所繪ハガキに和歌か俳句を記して御送り致しますから、御送り下さいます姉樣は通信記入欄に文を書かずにただ、和歌なら和歌俳句ならば俳句だけを一句だけきれいに書いてお願ひ申します。

○　朝鮮黃海道汗浦鐵道官舍第五號ノ二　不二山靜子

▲淋しい朝鮮の田舍も綠が深かふなりました私は毎日凉しい、木影で女子文壇を讀みますのが何より樂みですの、誌友の皆樣どうぞ繪葉書の交換を御願いたします御返事はきつといたします。

○　府下王子町上十條一五三二　高木姬百合

▲私は東京の片ほとり丶に住む不束者ですが御交際下さいましな百合香樣前號で御なさけ厚い御便り有難う御座いました今後ます〳〵御振ひ遊ばせ

○　茨城縣新治郡霞浦湖北下大津村平川　岡田つゆ子

▲お仲間入り　誌友の皆々樣よ不束な妾は本年高女三年生です先月から新しい本誌愛讀者となりました以後はよろしく御玉章寫眞の御交換を願ひます。

記者より

○文藝問答　記者樣私大贊成是非お願ひ致しますわ、皆樣ぜひ御贊成して頂戴な。（東京若栄）○（記者曰、此外五名の方から文藝問答の贊成が來ました、併し記者はまだ多くの贊成者がないと設けません、なほ多數の讀者に伺ひます、設ける以上は記者からも質問に就いて注文がありますが、兎に角なほ外にも贊成者の有無を確めたいと思ひます）。○六月十九日の暴風雨に就いて町田靜江、田代伊智、原田琴子、くちなし、諸君と外三人の方からお見舞下さいまして有りがたう、幸ひ本社は異狀ございませんでした（記者）○井上さだ子。淡路、七重女、美作、草苺の花、友子。小見山春子。沼倉たか。環の花。植村廣子。の諸君の御通信は拜見しました、仰せの事は其通りでよろしい（記者）○群馬林文子さんに、お尋ねの事は大抵其方だらうと思ひます（記者）○金澤文子さんに。「即興詩人」は日本橋區春陽堂發行、定價一冊金六拾錢、「上下二冊で完結（記者）○湯江の市街（七夕の景、「小川篤香寄）。青森の市街。川俣の市街の繪はがきを送つて下さつた方に御禮申ます（記者）

書籍交換

○　靜岡縣盤田郡佐久間村中部　早川邦子

▲持つて居る書（小說）少女思出の記。新學士。白菊。女學世界マダム振り。世渡り上手。△讀みたい書、やどり木、乙女の秘密日記、筆子。夏子。御送り下されし方にはおのぞみの品を必ず御送り致します

○　茨城縣稻敷郡馴柴村　鈴木きよ子

愛讀者諸孃樣明治四十三年八月十日第三增刊地方の婦人御持ちの方がございましたら御めぐみ下さいきつと返禮いたします。

○　神奈川縣足柄下郡小田原町萬年四　井上都美子

皆樣の內「己が罪やどり木、女の望」をお持の御方少し御貸下さい御禮には當地名所繪はがき數十枚そへて御かへし申ます

○　滋賀縣甲賀郡貴生川村蟲生野　井上やゑ子

手元に紅葉集第四卷、不如歸、思出の記、鶉籠、東海道膝栗毛上編、杜子美詩集評釋、白樂天詩集、

評釋、舊新約全書、新約全書、英文新約全書、男女學生健康法、薙刀體操法、經濟要鑑が御座いますから御望みの方は往復はがきにて至急お申し越し下さい。

○　宮城縣伊具郡丸森町山崎一三七
小野貞子

△讀みたき書物　寄生木　いたづら小僧日記
▲持つて居る書物愛の書簡、肉彈、夢二畫集花の卷春の卷、一葉全集、其他いろ〳〵の本がありますから相當の書物と御交換下さい御交換下さる方はハガキで御一報を願ひます

○　京橋區つきぢ一七
横山耶摩

一、諺紫田舍源氏、萬葉、平家、帝國文庫第廿三、文學全書一、及八編
右之内三種以上御送附の方へ
(一)黑色絹シホン製淑女用夏手袋、一組、夏期用筒袖に付レース一組、及び六月のホトヽギス
(二)白色金通平打紐金具止帶しめ箱入一組、同レース五月の中央公論等を呈す
特に田舍源氏御持ちの方は一冊にても御相談願ひ度し其外詩集英文書所持致候へはそれらにて御禮いたすべくとにかくも一應御紹介を願ひます。

○　鳥取縣八橋町字八橋町
藤田せつ

毎度御ねがひいたしまして申かねますが諸姉君の許に左の諸雜誌御所持でしたらば御送り下さいませ私は四月號に出している書籍のほか新書籍も澤山にありますゆゑ古い雜誌も澤山あります何卒〳〵御交換なり御交讀を御願ひいたします。
讀みたき雜誌、
四十四年度　婦人世界五、六、七、月號
四十三年度　女子文壇、全部
同　年度　ムラサキ、全部
四十三年度　女學世界、九、十、月號
四十四年度　女子文壇、一、三、月號
婦人畫報皇族畫報、何年何月號にても宜し
何卒御願ひいたします私所持の書籍はかずしれぬほどありますので別に列記いたしませんあしからず。

○　東京市神田區豐島町六大竹方
川口繁子

昨年發行の雜誌白樺第一巻一號より七號までのうちにて御不用の分あらば「歌舞伎叢書」自然と人生復讎上下(廣津柳浪)日光(田山花袋)天草一揆上下天下茶屋(塚原澁柿)等と御交換願ひたし御望の御方は直接御手紙を下さい
雜誌口繪を御送り下された御方には相當の御禮致します

○　備前赤磐郡豐田村
我澤竹子

誌友の諸姉樣やどり木及女學生お持ちの方は何卒お貸しなすつて下さいお禮には陸軍士官學校の繪はがきを一組差上ますわ。

○　近江甲賀郡龍池村
木邑方　操子

△讀みたい書。晶子先生の(みだれ髮)(舞姬)及都會の婦人、本誌昨年の星ケ岡誌友會記事のある號
▲持つてる書。美人草、文壇の光立田姬、短篇小說、若き婦人、地方の婦人、其他姉の讀みさしですが、第四年拾號よりの本誌右御交換を願ふ。

○　神戸市兵庫下澤通四丁目
百拾四番屋敷
浦上百合香

△讀みたき物　本誌四十二年九、十、十二月號
四十三年三、七、八、九、十一月號

娘時代原稿募集

娘時代の純白な心に映る世間の色、紅や紫や緑や、映るが儘に書いたものが欲しいのです。自由自在な感想文、囚はれざる告白文は勿論、藝術的の文章、小說、詩歌、課題及び圖畫の中で御自分の得意なものに全力を擧げて見て下さい、締切までには未だ一ケ月ありますから、能く考へて佳作を投稿して下さい、詳しいことは別項の廣告欄にありますから參照して下さい。

八月一日　編輯局

▲持つて居る書物　文章世界趣味ホト、ギス數冊

○

下野國安蘇郡田沼町多田龜山様方ヴヰナス會内

望月マートル

▲私は初めて皆様にお目に懸ります　何卒高潔なお交際と共に美しい繪はがき(風景。草花。小女等)の御交換を下さいまし(凡て高尚な而も現代的なのを望みます)——お手紙は日本文。英文。佛文(餘り六ヶ敷いのでは駄目ですけれど)の三種内に限ります尙は皆様の お内でハヴロック、エリス先生のサイコロジー、オブレッド、並にエドワアード、エス、スティブンソン先生のザイングリッシ、カストムス、マンナース、アンドエティクット、 をお持ちになつてゐらつしやつて目下御不用のお方が御ざいましたら私におゆづり下さいませぬか但し成るべく汚れ ないのが欲しいのです——一寸御一報を………

○

羽後國横手町上島崎町
松田房吉様方　藤　しま子

▲持て居る讀み物は色 々ありますけれども其内(寄生木)(一葉全集)(人の母)(寒潮)(己が罪全部) 其外當地の繪はがき二十五枚と妾の 寫眞六枚ありますから左の書物と交換を乞ひます

△讀みたい物は(言海)(紅葉全集)(和歌入門)(俳句入門)日露戰爭紀念切手古物にても宜しいから御送り下さい。

○

常陸國眞壁郡下館郵便局區内蒔田
宮　賀　和　盤　子

お懐かしい誌友の皆様 よ妾編物や家庭小説大好き よ皆様の内に(金色夜叉)(乳姉妹)(魔風戀風)(己が罪)(歌集纖衣)(紅葉全集)(稲田市作)(馬鹿野耶) 其外いろ〳〵の小說や美しいエハガキお持ちの方はお送り遊ばして 頂だい妾お禮には(金色夜叉の詩)(女夫波の詩)やいろ〳〵の編物花形シホリ、 可愛いく〳〵カードを送りしてよ尙ハモニーカと絹ハンカチーフお送り下さいました方には お恥かしいけど寫眞をお送りしますわ、 妾女子でないお方でもお情けの深い方ならいといませんわ

個人消息

○山梔子様(金澤)若しや貴孃は白日社(詩歌)の社友の方の山梔子様ではありませんか。 大變なつかしう御座います、 私も第一號からの社友で御座います、 女性の少ない社友の內ことに同じ女子文壇誌友と聞いては一 入みなつかしさにたへません。(豐後　散る花子)

○京都　要司村様大阪畋野様昨年 は失禮致しました先日歸國致しました のでちよと御挨拶まで今年九月頃までは神戸に 居りますから御暇の折が御座いましたらお遊びにお出で下さいませ。(兵庫下澤通四一一四浦上百合香)

追加

○

神戸市
足　立　春　子

○宮城縣の安部可祝様　　先達は折角御相談を受けながら御力にもなりませんで御氣の毒でした。 聞く所に依れば當地の長田秋濤さんが市役所や會社に交渉して 安全な口入屋を日中にお開きになるとかですから、その時には御出紳になるやうにいたしましやう。

○伯耆の花子様、　仰の通り私は角盤女子部卒業です。事情あつて退社 いたしましてからは田舍にすつこんで 居ました。 御住所御聞かせ下さい。 御返事差上げます。

○

越後乙局區內
井　上　貞　子

○百合　珍らしい、百合を御持ちの御方は、御ゆづり下さい。 決して御不 快を買ふやうの、事は致しませぬ。

○

京都市不明門鍵屋町北
吉田眞藏方
不　二　枝

△讀みたい書物。言海。一葉全集。最新家計簿記

△持つてゐる書物。 肉彈、 再來田舍一休。 琵琶歌中ノ巻。 文藝倶樂部。 繪葉書

○

伊勢桑名郡古美村
瀨　木　矢　枝　子

▲皆様　私は永らく此欄には 遠ざかつて居ました、 其は何故か?眞實誠意で 交際して下さる方はないんですもの、 只無暗に 交際〳〵と仰るけれど其はほんの一時 なんです、 それに男子の方が多くつて困ります、 其も立派に 本名がかいてあればいゝけれど 女名で人を僞るんですから再び私は交際を求めますが 若し形式の交際とみとめた方は御返事差上ない 諸孃よ私と同感の人はどし〳〵交際を 求めて下さいそして心身の快樂、 學術の養成を交換致しませふ、(但男子の方はお斷り)

雑報

盛夏

八月は夏の盛りです、太陽の威赫する時です暑中休暇が來て、凡ての活動が息休めをする時です。

避暑と旅行とのシーズン、海邊と山岳とへ人間が尋ねて行く時、夏は人と自然との親む時です。

曝書、卽ち書物の土用干や、また夏書と云つて昔は盛夏の頃、涼しい場所に籠つていろんな書物を淨寫したものです。夏だからとても無意味に遊惰に暮すのは却つて暑く、苦しいものです、何か面白いことをしてゐれば暑さを忘れます、夏書などは宜いことでせう。

婦人と旅行

此月は新聞雑誌が競ふて旅行のことを書きます、婦人も亦旅行の興味を惹起されるでせう、旅行は必ずしも男性的のものと限りません、婦人も旅行をして世間を見るのは結構なことです温泉宿や、海水浴場の一個所にばかり長く滞在するより、時日は短くても異つた地を歴遊する方が爲になります。そして旅行は出來る丈け平民的に簡易にする方が意味があります。始終、人の力と、金の力で旅行するのは必ずしも旅行の眞の味ひではないと思ひます。男子とは違つて婦人の旅行には種々の困難が伴ふやうですが一語で云ふとたいさうになるからでせう、旅行にさうになるのは外見を張るからでせう、旅行には一切の虛榮を禁止せねばいけません、或は不自由と苦痛とが伴ふかも知れませんが、其代りに得る處は多いのです。

涼味と古今

古	今
ところてん	アイスクリーム
屋形船	ヨット
水からくり	噴水
箱庭	花壇
冷し瓜	サイダー
掛香	匂ひ袋
河原の涼み床	橋上の氷店
物干臺	バルコニー
あみ笠	麥藁帽子
山行者	婦人登山
瀧あび	海水浴
水盤	氷の柱
軒提灯	イルミネーション
はつたい	コヽア
竹夫人	煽風器
麥藁笛	ハモニカ
打水	水道
藥玉	釣しのぶ
あせとり	あみシャツ
紙帳	絽蚊帳
日傘	パラソル

紀行文

夏は涼しい書物を讀むに限りますが、別に書物に涼しい書物と云つてない、只紀行文とか、自然を描寫したものとかは、殊に夏の讀物のやうな氣がします、自分は皆さんに暑中の讀物として第一に紀行文をおすゝめします。

自分の狹い經驗で二三の紀行文の面白いものを擧げてみると、德川時代のものでは橘南溪の「東遊記」「西遊記」、芭蕉の「奥の細道」を初め小さいものは無數にあります、有名な文學者の書いたものなら大抵一味の感興があります。それから紀行文とは違ひますが、諸國の名所圖繪と稱するものは、其繪に、見るものとしての價値ゝ興味が充分にあるのです、有名な「東海道名所圖繪を初めとして、江戶、京洛、攝津、大和、和泉、河內、紀伊、播摩嚴島などの名所圖繪は凡て面白いと思ひます、名所繪はがきの寫眞に現はれたものとは全く違つた趣味、もつと藝術的な香が其等の舊い名所圖繪に存してゐます。

明治の紀行では山岳を愛する小島烏水氏の日本アルプス第一卷、第二卷、「不二山」、「雲表」など幾度讀んでも興味の薄るゝと云ふことがない田山花袋。大町桂月。吉江孤雁諸氏の紀行文もおもしろい。少し以前のものでは紅葉氏、露伴氏の紀行文にも一種の力が籠つてゐます。

只さへ見聞の狹い婦人方は、よし實地の旅行をせぬまでも、夏は紀行文でも愛讀なさるが宜いでせう。

△高臺へ上つて落日、夕月の天象を見ること夜は星あり、風あり。

△草花の灌水すること、八月は草花の時節ですから、之を養ふのに興味がある。

編輯通信

▲「新文章」の好評　増刊「新文章」は本誌獨特の精彩があるので、發行早々非常の好評を以て迎へられました。もはや殘部は極く僅少ですから愛讀の思召ある方は、至急本社へ直接御注文あるが宜しいでせう。

▲本欄への投稿　創作欄への投稿の外、本欄向きの原稿も絶えず募集してゐます、若き婦人方の感想文、告白文、日記文、紀行文、或は面白き滑稽文、地方名流人士の談話、地方特種の風俗、婦人界に對する意見など随意に投稿して下さい、掲載したものは凡て報酬を呈します

▲九月號の本誌　本月は暑い時ですからなるべく肩の張らぬ面白い書物と涼しい讀物とを集めました、九月號は盛夏も過ぎて稍朝夕新秋を覺える時です、此際本欄の記事は更に精選したる興味あるものを掲げます、二三の重要なる記事もあります、内容は今暫く申上ませんが、發行の日を待つて了知せられたい。

（次號）木版口繪　太田三郎先生筆

○女子文壇定期號投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は斷じて受付ず)に送ること▲小説と、詩は振假名をつけること▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以内▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る、長さは二十四字詰二百行内外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は毎月十五日到着を以て厳に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小説と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以内の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▼女子文壇定價早見表

毎月一日發刊、年四回增刊

冊數	定價前金	郵税	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹年分）	一圓六十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢
定期及增刊號とも	定價前金	郵税	合計
增刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓二十二錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓二十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾二錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて拂込の時は必ず右誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと。用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增たること。（收入印紙謝絶）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

壹等	一頁參拾圓	半頁廿四字三十二行
貳等	一頁貳拾五圓	半頁十三圓
參等	一頁貳拾參圓	一行四拾錢（注行五號字二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年七月二十五日印刷納本
明治四十四年八月一日七年第十號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社

發行所　女子文壇社
東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話京橋六〇七番
振替貯金口座壹七貳九番

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂、其外全國書店、

（明治三十七年十二月十七日

婦人の夏養生

▲暑さが進んで來ると誰れしも氣分が重々しく、食事もまづく、果物や氷などばかり食べて居たい樣な氣になる、而して不知不識、御飯の數を減らして、果物の方を多く食べる、これは夏分は凡て身體の五臟が其活動の力を緩め、冬の樣に働きませんので、自然斯かる狀態になるのでありますが、此場合に於ては調中催食の効を有つて居る處の中將湯を御召しになれば、惡心も止み、食慾も增進し健康は保全されます

▲婦人は殊に冬は足の裏が冷えて、夏になつてから燃える樣に熱くなるものです、之は心臟の惡い人又は身體が弱く出來て居る人抔にもあるが、子宮に故障のある人に殊に多い、つまり之は血液の循環が調はぬ爲めでありますが、婦人は男子と違つて骨盤內で澤山の血を藏して居るから、子宮に故障ある時は足の裏などまで思ふ樣に新鮮な血が送られません、それで足の裏に靜脈の返へり來るべき血が停止して彼の樣にほとるのですが、之を放置すれば彼の恐るべき子宮病血の道等に變ずるのですから、順血補心の効ある中將湯を御召しになれば血液の循環は好くなつて、斯の如き容態は自然消滅します

▲御婦人は十人寄れば、七八人まで頭痛して困ると仰しやいますが、頭痛の起る原因は色々あるけれども、婦人病の殆ど總てが、頭痛の原因となるといふ事はどの御醫者さんも申します、併し多くの婦人は頭痛のするのは單に時候の爲めだといつて顳顬に、頭痛膏だの梅干の皮など貼つてそれですぐ治ると思ふ人もある樣ですが、なるほど婦人は時候の變りによく頭痛するものであるが、もう少し深く立ち入りて婦人病に罹つて居るのでないかと穿鑿ずる人が少ないのは誠に遺憾である、上述の如く常に頭痛がして困るといふ人は、多くの場合に、婦人病にかゝつて居るのであるから、重態に陷らぬ內に早く中將湯を服用するが肝要である

▲婦人病の兆候に就ては、一概にいへないけれども、頭痛眩暈から初まり、次で月經で變調を來し、時期が一定せず又其量に多少が出來たりそれから少し熱心に針仕事や洗濯でもすると、脊が凝つたり腰足が痛んだり、耳が鳴つたり、顏がほてつたりする、これが進むと下腹が重々しく膨張つたり、又時々球の樣な塊が胸先へ差込み、遂には白帶といつて白いねばくした、而かも惡い臭ひのする膿の樣なものが下りる、この白帶は醫學上の言葉でいへば、酸性を帶びて居つて其猛烈なる力は交接の際男子より來る精蟲を殺すから、斷然子供が出來ないのである、其他惡阻は婦人の持前などゝ考へる方がある樣であるが、營養分を攝る事が出來ない爲めに身體が甚だ衰弱する最後にヒステリーの事をいつて置くが、之は昔の人は血の道といつて血行から來る處の一種の婦人の神經病であるが、頭が重く氣が鬱ぎ些細の事に氣を痛め、過去の事をいつまでも心配したり取越苦勞をする婦人などは、このヒステリーに罹つて居るのである、これでざつと婦人病の兆候を說明致しましたが、之に對する自宅治療法として最も完全なるものは中將湯です、中將湯の効驗の宜しき事は世人は旣に御承知の事ですから改めて申しません

本舖は東京日本橋區通四丁目津村順天堂（取次店全國到處在）定價三週間分一圓六十錢二週間分一圓十錢一週間分六十錢四日分卅五錢二日分廿錢